

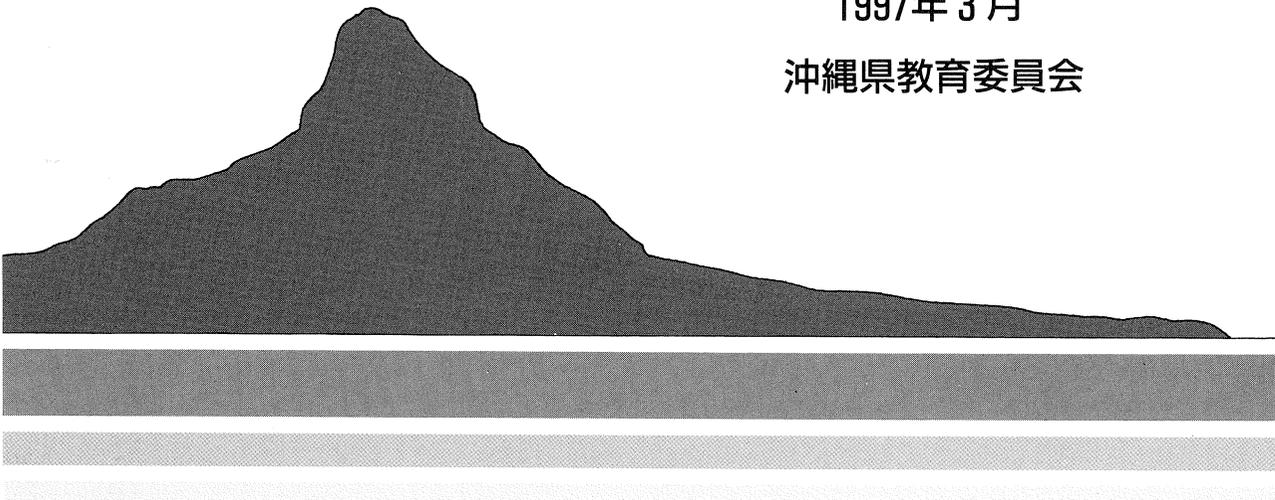
沖縄県文化財調査報告書 第130集

伊江島

具志原貝塚発掘調査報告

1997年3月

沖縄県教育委員会



序 文

本報告書は、伊江村川平の県道拡幅工事に伴う埋蔵文化財「具志原貝塚」の緊急発掘調査の内容を記録したものであります。

伊江村は本部新港から30分の船旅で行ける島で、以前から観光などで訪れる客が多く、道路建設などの交通網の整備が進んでおります。今回の工事もその一環として計画され、周知の埋蔵文化財包蔵地であることから、その取り扱いについて協議・調整を進めてきました。当該道路が伊江港から集落に至る主要幹線になっており、やむを得ず記録保存の措置をとることになった次第であります。

調査区の西側には国指定史跡の「具志原貝塚」があり、同遺跡の連続と見なすことができます。同遺跡は、沖縄で初めて弥生土器が発見された遺跡として著名であり、その後の調査においても免田式土器と呼ばれる弥生土器やガラス製小玉などが出土し、九州地域との文化的交流が盛んに行われていたことがわかっています。また、同遺跡の下層からは縄文時代前期の条痕文土器や室川下層式土器が見つかり、この地において約5000年前から連続と人々の生活が営まれていたことが判明しました。

今回の発掘調査は道路拡幅区域の限られた範囲ではありましたが遺物の出土量や内容が豊富で、土器では伊江島で初めての仲泊式土器や前述した室川下層式土器が出土しました。また、沖縄貝塚時代後期を代表する「尖底の深鉢形土器」と「くびれ平底の甕形土器」が地点を別にして出土しました。他には移入された弥生土器も数多く見つかっています。土器以外には石斧やたたき石などの石器類、スイジガイ製利器などの貝製品が出土しました。このように、今回の調査によって、沖縄先史時代の生活や社会の様相並びに文化的系譜を究明するうえで、貴重な資料が得られました。

調査に当たっては伊江村教育委員会の多大な協力をいただきました。記して感謝申し上げます。次第であります。

本報告書が歴史学習の教材及び学術研究など、多方面に活用されることを期待します。

平成9年3月

沖縄県教育委員会

教育長 仲里 長和

例 言

1. 本報告書は平成7年度(1995)に実施した伊江島具志原貝塚発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 調査は県道拡幅工事に係る緊急発掘調査で、沖縄県土木部からの分任を受けて、沖縄県教育委員会が実施した。
3. 発掘調査に際し、沖縄県立図書館・伊江村教育委員会・〔有〕宮城組の協力を得た。
4. 発掘調査及び資料整理にあたり、次の方々の指導・助言をいただいた。記して謝意を表する次第である。

高宮 廣衛氏・上村 俊雄氏・本田 道輝氏
新東 晃一氏・出口 浩氏・長野 真一氏
5. 獣骨・貝類・石質の同定は下記の方々による。記して謝意を表する次第である。なお、松井・黒住両氏からは玉稿を賜った。

獣骨 松井 章氏(奈良国立文化財研究所)
貝類 黒住 耐二氏(千葉県立中央博物館)
石質 神谷 厚昭氏(沖縄県立博物館)
6. 当山 昌直氏から玉稿を賜った。記して感謝申しあげる次第である。
7. 本書に掲載した国土基本図・地形図は、国土地理院発行のものを複製した。
8. 本書の執筆者は第1章第2節に示したとおりである。
9. 出土した資料については、すべて沖縄県教育庁文化課の資料室に保管している。

目 次

序 文
例 言

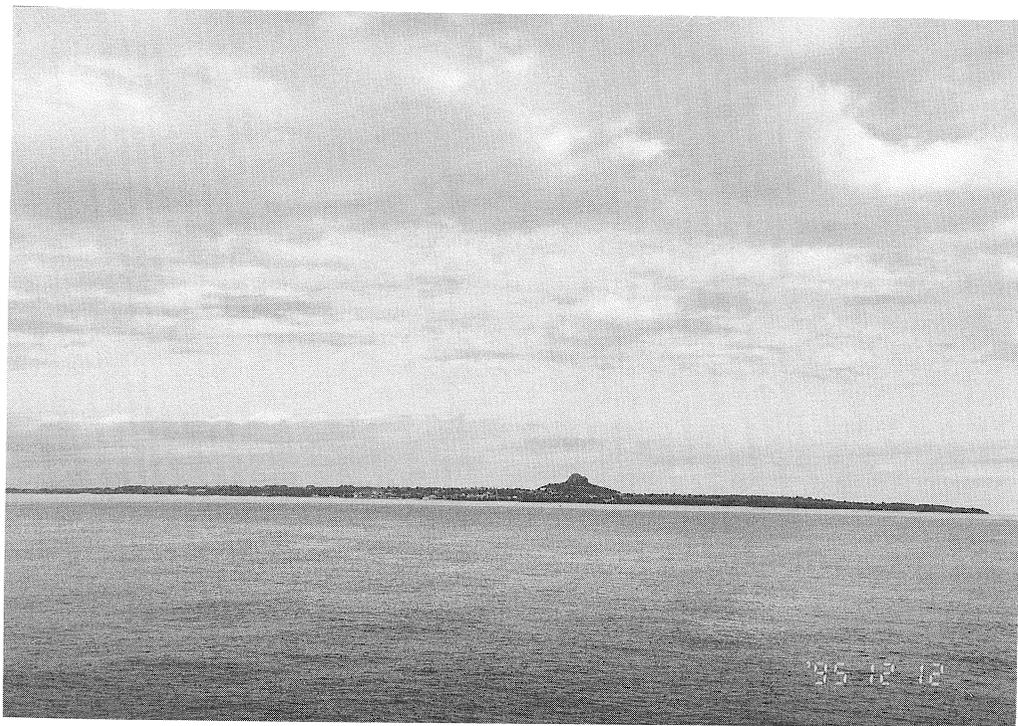
第1章 調査に至る経緯	15
第1節 調査に至る経緯	
第2節 調査の組織及び成果の記録	
第2章 遺跡の環境	17
第1節 地理的環境	
第2節 歴史的環境	
第3章 調査の概要	19
第4章 調査の内容	23
第1節 層序と遺構	
第2節 出土遺物	
1. 貝 製 品	
2. 骨 製 品	
3. 石 器	
4. 土 器	
第5章 収 束	121
附篇1 具志原貝塚出土の動物遺存体	159
附篇2 具志原貝塚から出土したリュウキュウヤマガメについて	189
附篇3 沖縄県伊江村具志原貝塚出土の貝類遺存体	195

報告書抄録

ふりがな	いえじまぐしばるかいづか はっくつちようさほうこく
書名	伊江島具志原貝塚発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	沖縄県文化財調査報告書
シリーズ番号	第130集
編著者名	岸本義彦・安里嗣淳・松井 章・当山昌直・黒住耐二・比嘉優子・当銘由嗣
編集機関	沖縄県教育委員会
所在地	〒900 沖縄県那覇市泉崎1-2-2 TEL 098-866-2731
発行年月日	1997年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いえじま 伊江島 ぐしばるかいづか 具志原貝塚	おきなわけん 沖縄県 くにがみぐん 国頭郡 いえそん 伊江村 あざかわひら 字川平 こあざぐしばる 小字具志原					1995.10.18 ~1995.12.26	600 m ²	県道改修工事に伴う緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
伊江島 具志原貝塚	貝塚	沖縄新石器時代前Ⅱ期(縄文前期) 沖縄新石器時代後Ⅱ期(弥生中期)	土壌 焼土遺構	室川下層式土器 仲泊式土器 具志原式土器 弥生土器 石斧 たたき石 すり石 スイジガイ製利器	地点を別にして、尖底土器主体と平底主体の箇所がある。 搬入された弥生中期の土器がわりと出土し、彼我の交易がうかがえる。



図版1 伊江島遠景



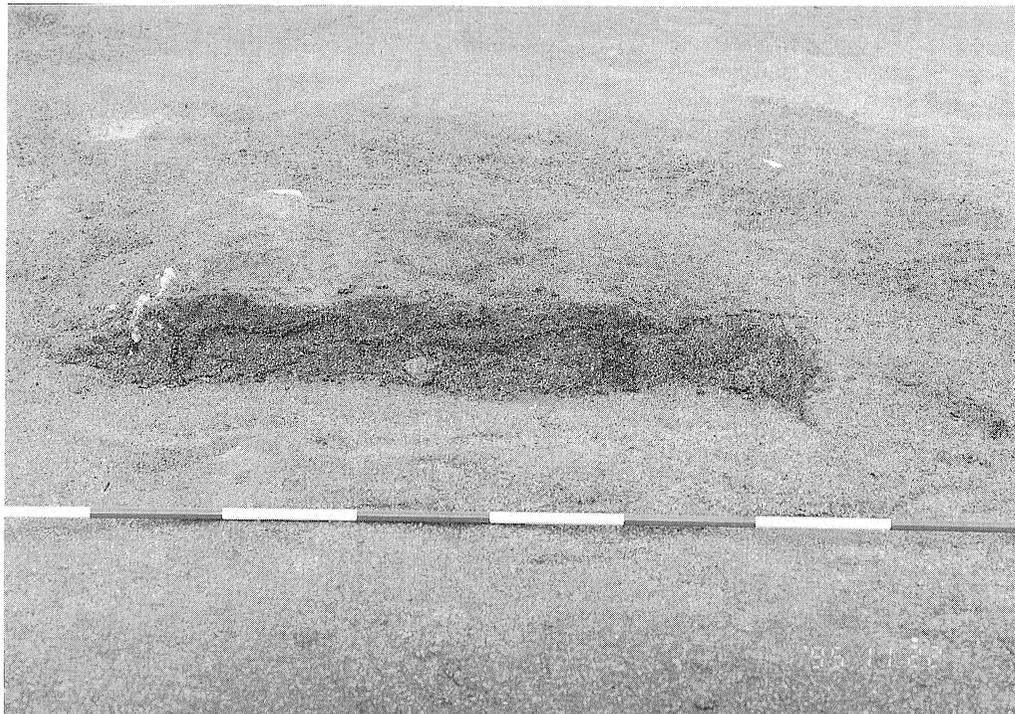
図版 2 発掘調査前の表土剥ぎ



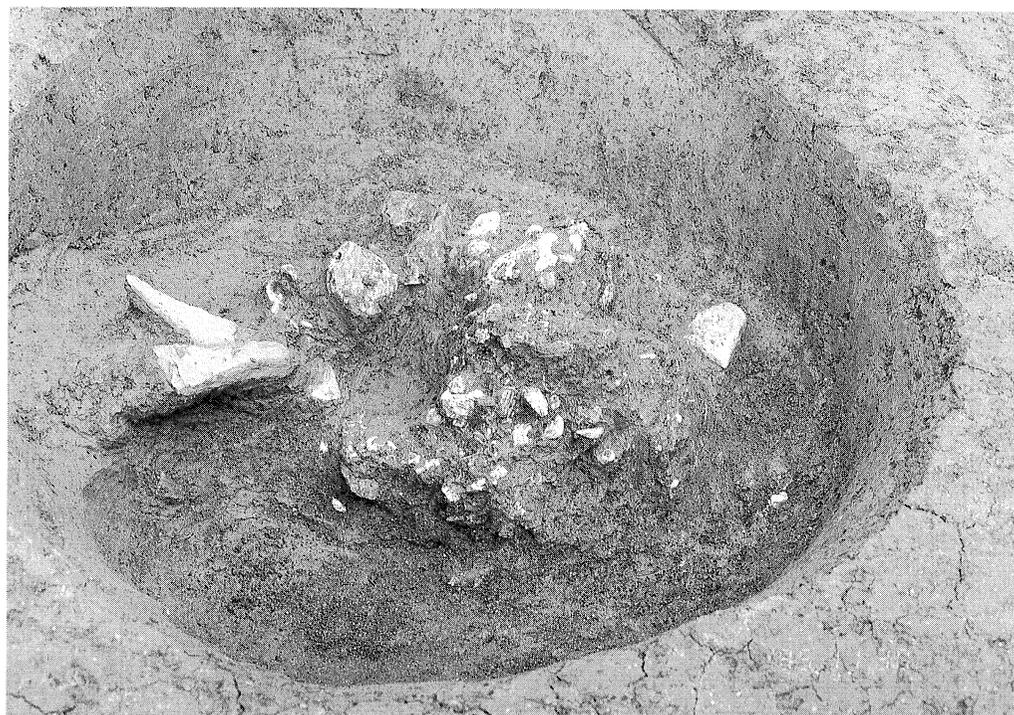
図版 3 発掘状況



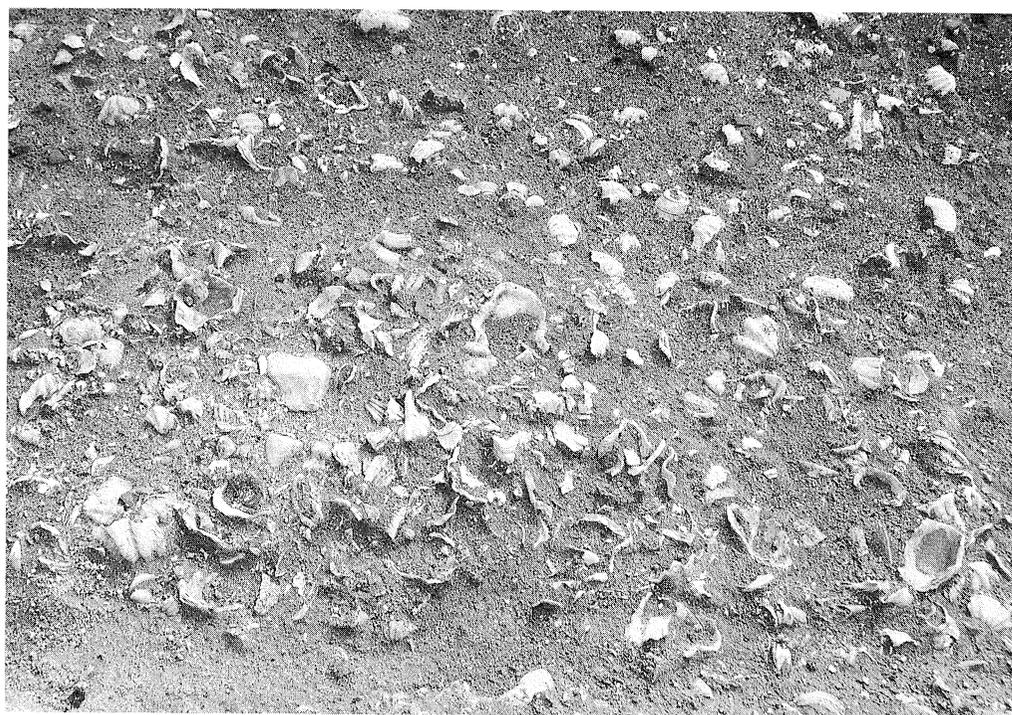
図版 4 発掘状況



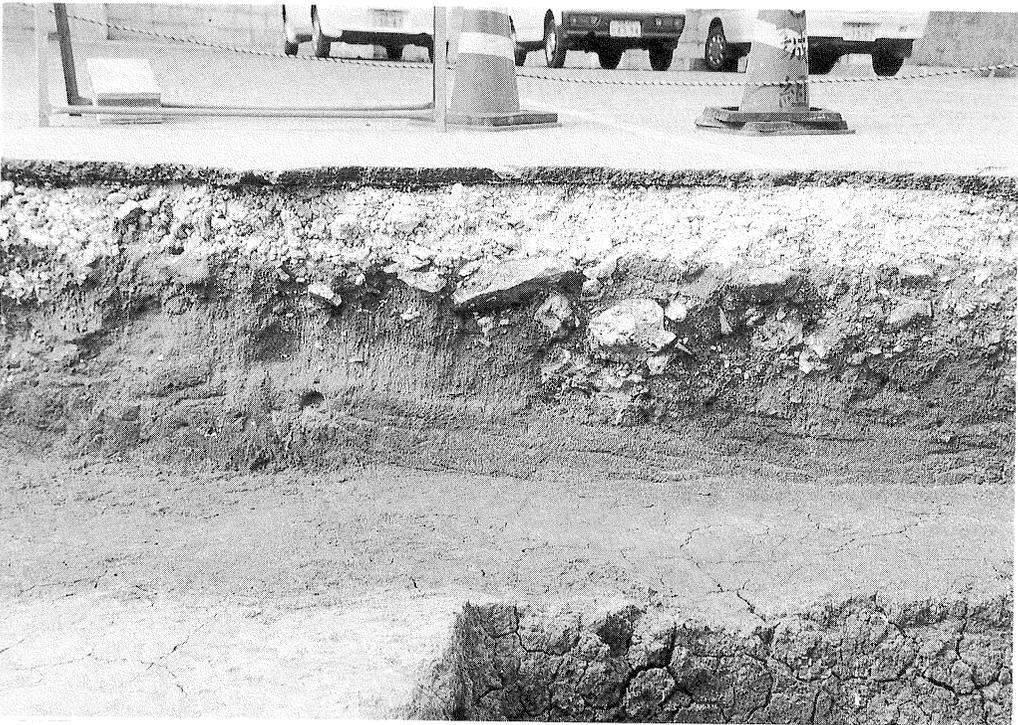
図版5 焼土遺構



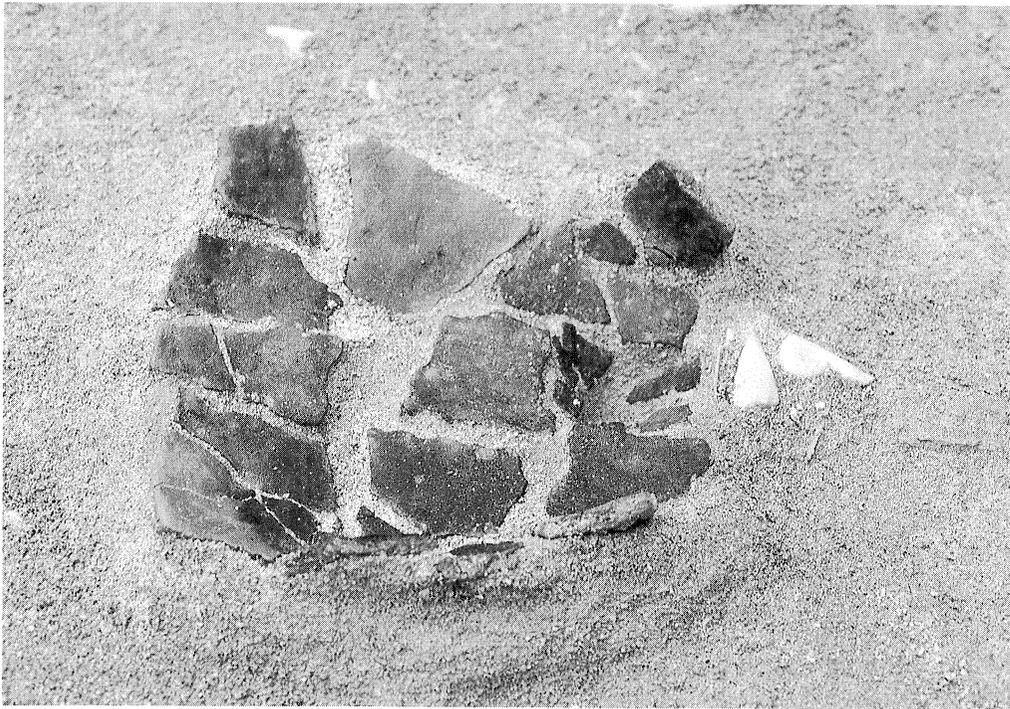
図版 6 地山に掘り込まれた土坑



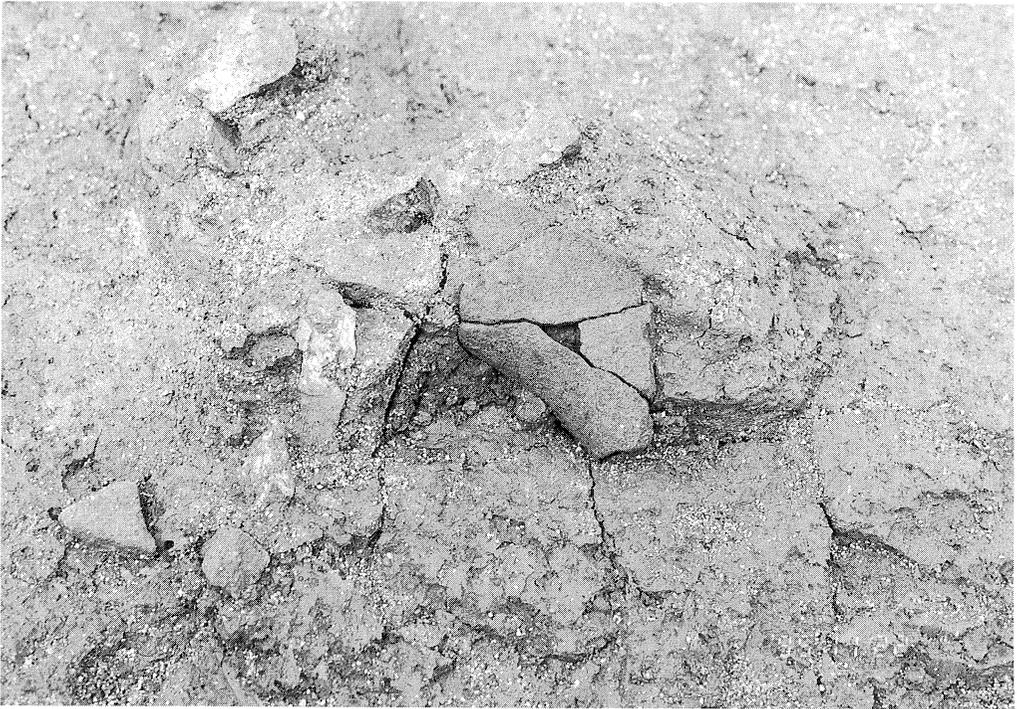
図版7 北区で検出された貝類



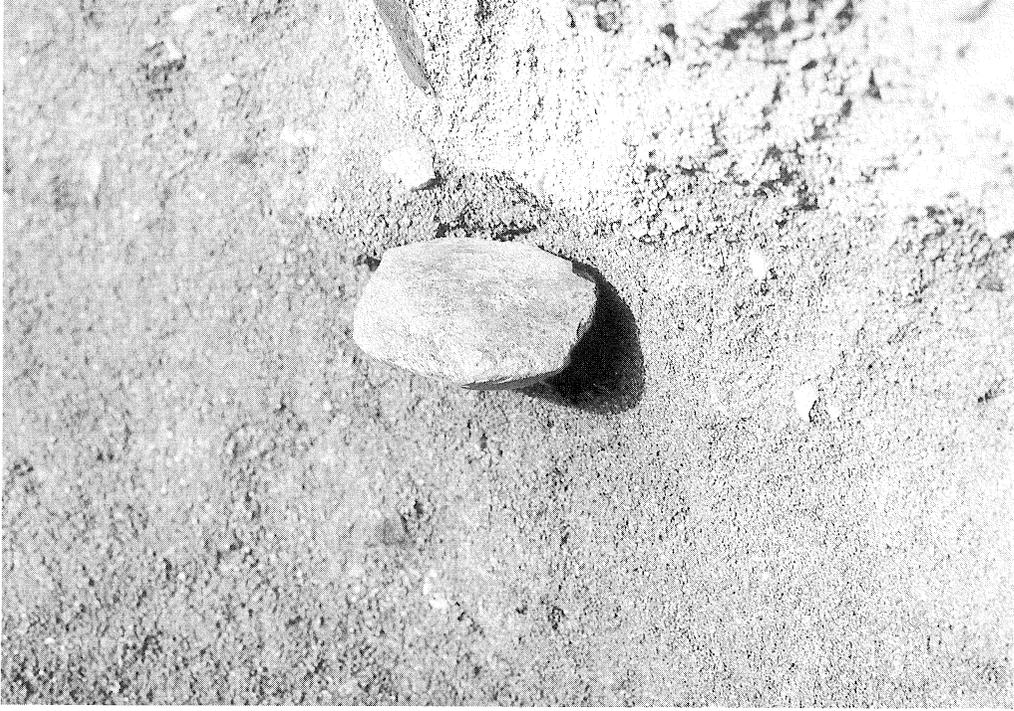
図版 8 南区の西壁面



図版9 一括出土土器と実測状況



図版10 土器の出土状況



図版11 石器の出土状況（上：石斧 下：たたき石）



図版12 上：完掘後のトレンチ 下：工事終了後の遺跡地



図版13 現地説明会と体験学習



図版14 雨天時の遺物洗浄、調査スタッフ

第1章 調査に至る経緯

第1節 調査に至る経緯

具志原貝塚は1957年多和田真淳氏によって発見された遺跡である。伊江島のほぼ中央の南海岸（川平区具志原）にあり、1963年には琉球大学の友寄英一郎氏によって発掘調査が行われ、沖縄で初めて移入弥生土器（山ノ口式土器）が発見された遺跡として著名である。1984年には伊江村教育委員会が、さらに1985年に沖縄県教育委員会が発掘調査を実施し、免田式土器を始め多くの弥生土器や多岐にわたる貝製品など多大な成果が得られた。また、最下層から縄文前期の条痕文土器が出土し、沖縄でも稀な複合遺跡であることが判明した。それらの事を重視した文化庁は沖縄の先史時代文化を解明するうえで欠くことのできない遺跡であるということにより1988年に文化財（史跡）として国指定し、現状のまま保存されることになった。

今回の調査対象地は、国指定史跡の東側を通っている県道部分の拡幅工事に係る範囲で、図2に示したように、東西8m、南北75mを沖縄県土木部からの分任を受けて、1995年に発掘調査を実施することになった。

参考文献

- 友寄英一郎 「伊江島具志原貝塚調査概報」『琉球大学法文学部紀要』
社会篇第12号 1968
- 高宮 廣衛
- 友寄英一郎 「沖縄出土の弥生式土器」『琉球大学法文学部紀要』
社会篇第14号 1970
- 安里 嗣淳 「伊江島具志原貝塚の概要」『沖縄県文化財調査報告書第61集』
- 岸本 義彦 沖縄県教育委員会 1985. 2
- 盛本 勲

第2節 調査の組織及び成果の記録

1. 調査の組織

調査主体	沖縄県教育委員会
調査責任者	仲里 長和（沖縄県教育委員会教育長）
調査総括	西平 守勝（沖縄県教育庁文化課課長、1995年度） 大城 将保（同 上 課長、1996年度） 大城 慧（同 上 埋蔵文化財係長）
調査事務	比屋根正治（同 上 主幹兼管理係長） 新垣 和子（同 上 管理係主査、1995年度） 高宮 とり（同 上 調査嘱託員） 渡邊 尚子（同 上 調査嘱託員）

調査指導 高宮 廣衛 (沖縄国際大学文学部教授・考古学)
 上村 俊雄 (鹿児島大学法文学部教授・考古学)

調査員 安里 嗣淳 (沖縄県立図書館史料編集室主幹)
 岸本 義彦 (沖縄県立図書館史料編集室主任専門員)

調査協力 玉木 敬 (沖縄県立図書館館長)
 新城 晃 (伊江村教育委員会教育長)

伊江村教育委員会事務局

棚原 信男・新島 一郎・新川 純一・古堅 明美
 宮城 弘和・東江 民雄・古堅 勝枝
 新里 貴之 (沖縄国際大学考古学研究室研究生)
 宮城 弘樹 (同 上 専攻生)

調査作業員 下門 信子・島袋 信子・知念カズ子・荻堂 トヨ
 並里ヒデ子・上間美佐子・下門チエ子・下門 安子
 具志川廣美・名嘉山恵子・知念 純子

2. 成果の記録

出土遺物の洗浄・注記・分類・接合・復元・実測・製図・写真撮影等は下記のメンバーで行った。

大城 勝江・城間千鶴子・比嘉 優子・仲村 恒子・西銘パトロシニア
 津波古好子・当山 慶子・照屋 利子・上原 園子・仲宗根三枝子
 浜元 春江・外間 瞳・稲垣 千明・玉城恵美利・金城 薫
 金城 和也・高宮 藍・知花 賢治・長田 剛

報告書の執筆分担は下記のとおりである。なお、編集は岸本が行った。

第1章 岸本義彦	附篇1 松井 章
第2章 岸本義彦	附篇2 当山 昌直
第3章 岸本義彦	附篇3 黒住 耐二
第4章	
第1節 岸本 義彦	
第2節1 比嘉 優子	
第2節2 比嘉 優子	
第2節3 岸本 義彦	
第2節4 岸本 義彦・當銘 由嗣	
第5章 安里 嗣淳・岸本 義彦	

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

沖縄本島の北部、本部半島の西方約10kmの洋上に浮かぶ島が伊江島である。島のほぼ中央にはチャートの岩山が突き出て、その廻りは低平な琉球石灰岩台地から成るこの島は、独特な風貌を備えている。岩山は「伊江島タッチュー」の愛称で親しまれ、島のシンボリックな存在となっている。その頂に立つと、パノラマが360度展開し、島内はもとより北には伊是名・伊平屋島、北部の連山が望め、東南には本部半島さらに中南部の丘陵が望見できる。また、天気の良い日には遙か粟国・渡名喜島まで眺望することができる。

島の南側は砂丘が発達し、前面の海はサンゴ礁が取り巻いている。その浅海には魚介類が豊富で貝塚人もその恩恵を受けていたことであろう。北側海岸は岩礁地帯になっており、サンゴ礁もなく、いきなり深海になっている。このような地形的要因から、伊江島の遺跡は南海岸部に集中している。ただ、旧石器時代の遺跡は北海岸と中央部の洞穴で確認されている。

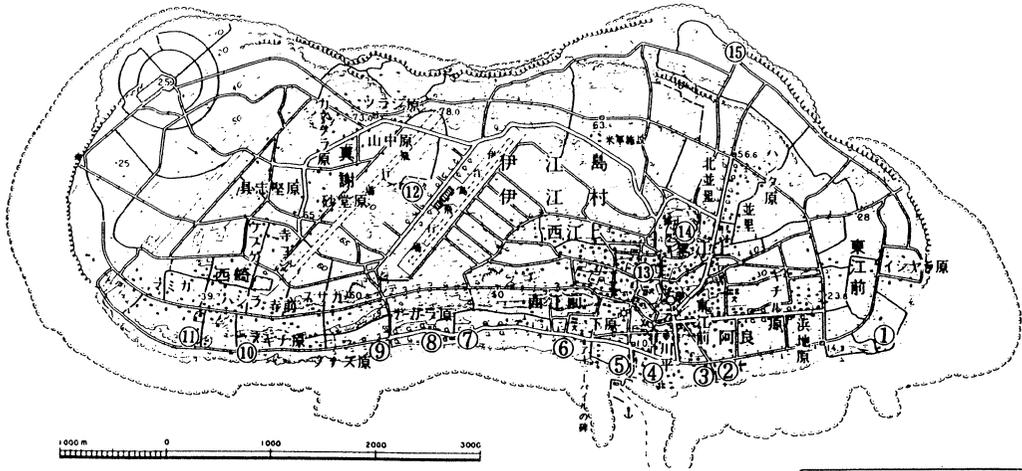
第2節 歴史的環境

日本における初の旧石器時代遺跡の発見は伊江島の『カダ原洞穴』である。1936年、徳永重康博士の調査によって鹿骨製品と石器が採集されている。当時、日本では旧石器時代遺跡が確認されてなく、その成果については考古学界も関心を示さなかった。

伊江島で確認されている貝塚時代の最古のものは、縄文時代前期に位置づけられている条痕文土器で、1981年の具志原貝塚発掘調査で出土している。沖縄ではそれ以前の土器として爪形文土器（ヤブチ式土器・渡具知東原式土器）が知られており、伊江島でも近い将来発見されると思われる。

条痕文土器に後続する土器は未見であったが、今回の調査で仲泊式土器が出土し、その後の伊波式・萩堂式土器（縄文後期に位置づけられる）との間を埋める資料として貴重な発見となった。伊波・萩堂式土器を主体とする遺跡として島の東端に位置する浜崎貝塚があり、現在は県指定史跡として保存されている。沖縄貝塚時代後期（高宮廣衛氏の暫定編年の後Ⅰ期～後Ⅳ期）の遺跡は伊江島の南海岸砂丘地に集中していることは前項でも述べたが、図1に示したように、東側から浜崎貝塚・阿良貝塚・具志原貝塚・アッチ浜貝塚・ナガラ原東貝塚・ナガラ原西貝塚・フナズ遺跡・西崎遺跡・ハシラ遺跡と続いている。次のグスク時代（中・近世）に属する遺跡は内陸部にあり、伊江グスク（城山）・西江上遺跡などが知られている。

以上のように、伊江島は小島であるにもかかわらず、遺跡の数・種類ともに豊富で、生活を営むうえでの環境が抜群であったことがうかがえる。現在も5,000名余の人々が暮らしており本部新港からフェリーで30分ということもあって、離島の感じがしない。



- ① 浜崎貝塚
- ② 阿良貝塚
- ③ 阿良第2遺跡
- ④ 具志原第2貝塚
- ⑤ 具志原貝塚
- ⑥ アッチ浜貝塚
- ⑦ ナガラ原東貝塚
- ⑧ ナガラ原西貝塚
- ⑨ フナズ遺跡
- ⑩ 西崎遺跡
- ⑪ ハシラ遺跡
- ⑫ ゴヘズ洞穴遺跡
- ⑬ 西江上遺跡
- ⑭ 伊江グスク
- ⑮ カダ原洞穴遺跡

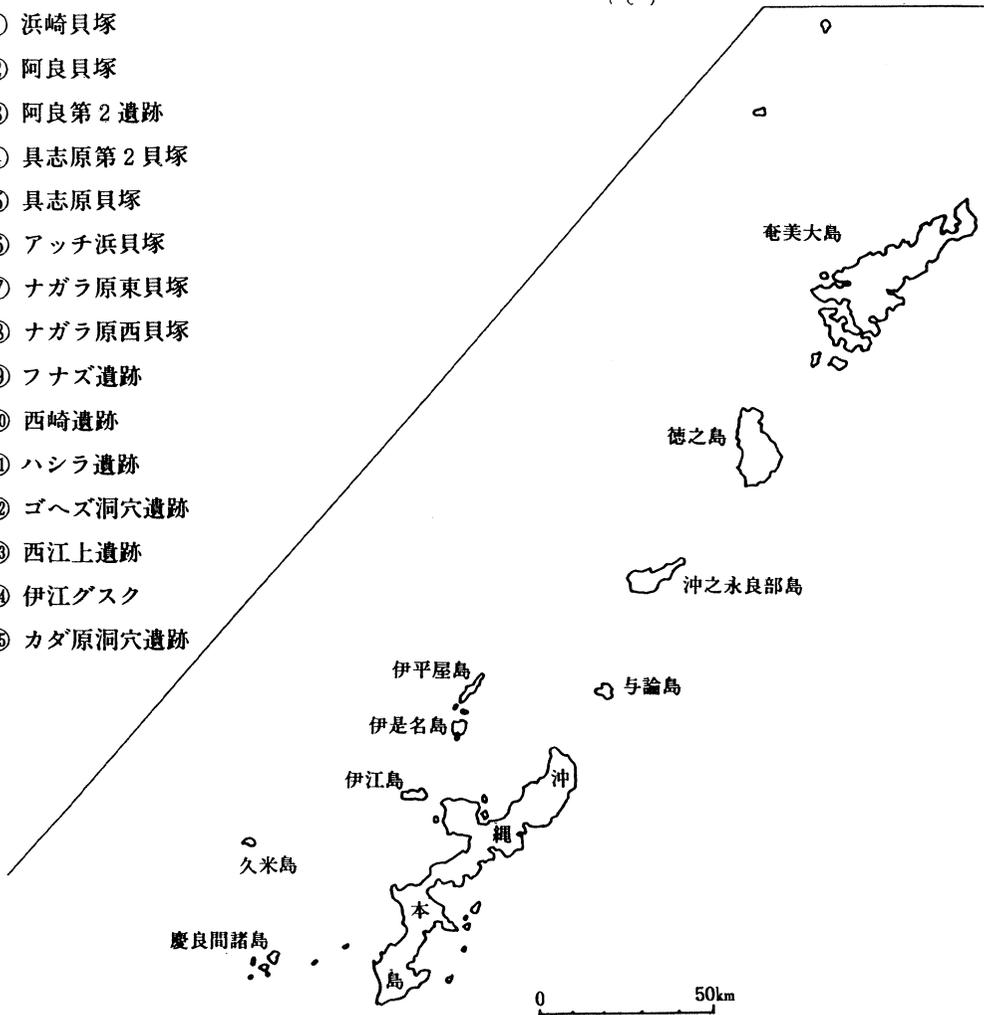


図1 伊江島の位置と遺跡分布

第3章 調査の概要

県道改良工事に係る具志原貝塚の発掘調査は、工事の主体者である沖縄県土木部北部土木事務所と協議・調整を重ねた結果、1995年10月23日から2か月間の予定で調査を実施することになった。

10月23日に伊江島に渡り、早速伊江村教育委員会の文化財担当者、北部土木事務所の担当者を交えて現場調整を行う。調査地が交通量の多い現道部分であることから、安全対策のための信号機、バリケード、立て看板設置及びアスファルト・コーラルの除去作業は工事側で実施し、その後に発掘作業員を投入して調査を行うこととした。翌24日の朝から前述の一連の作業を実施した。発掘予定地の中央付近に建物の基礎部分が残っており、それを取り除くと赤土（琉球石灰岩の風化土）が露呈し、かなり攪乱を受けている状況である。遺跡は赤土の上部を覆った砂丘に形成されている。当該地区は具志原貝塚の東端に位置し、さらに大戦後の砂採工事や道路工事などによって破壊され、保存状態は決して良くないが、遺物包含層が30～40cmの厚さで残っているのが確認された。

10月25日から発掘作業を開始する。前日にバックホーを用いて表土を除去したが、その取り残しの土砂をかたづけする。その中からわりと土器や石器、貝殻などが出土し、表土層扱いで採集する。並行してグリッド設定を行う。調査区に沿う形で2m四方を単位とした方眼を組み、南西隅の交点をグリッドナンバーの指示点とし、南北ラインをアルファベット、東西ラインを算用数字で表す。各グリッドのナンバーはA-1、B-2等と表記した。

あらかじめ土砂の片付けが終わり、グリッド毎の調査を行う。トレンチ北側から掘り始め、未攪乱の包含層上面まで掘り下げる。随時発掘状況の写真撮影も行う。発掘区を漸次南側に拡張する。トレンチ全体の1層（攪乱層）を掘りあげた後、プライマリーな遺物包含層の発掘を開始する。中央部が地山まで大きく攪乱されていることより、20ライン以北を北区、南側を南区として調査区を設定した。発掘は南区から始め、2層、3層を掘り下げる。2層は暗褐色砂層で層厚は20cm前後と薄い。乳房状尖底の在土器を主体に搬入された弥生土器、さらに弥生土器を模倣した土器などがある。石器は少ないが、石斧・たたき石・すり石などが出土、他には食料残滓としての貝殻、イノシシの骨、魚骨などもわりと多い。3層は茶褐色砂層で層厚は10～20cmと薄い。出土遺物の組成は2層と同様である。4層は赤褐色を呈する混砂土層で、地山への移行層である。遺構として焼土がブロック状に5か所で検出された。H-12グリッドにおいて、地山を掘り込むかたちで直径70cmの土壌が検出され、その中から仲泊式土器、石材、チャート片、貝殻などが出土した。

北区は1層の黒褐色砂層を発掘。層厚は10cm前後と薄く、遺物も多くない。その下部に貝を多量に含んだ包含層が露呈し、南区の3層と状況が異なることより3b層として扱った。該層の土器はほとんど「くびれ平底」の甕形で、南区の「尖底」主体土器とは状況が異なっている。

地山への移行層から尖底と弥生土器の底部が出土していることより、北区は南区に後続する時期として把握することができる。

南区の調査が完了した時点で、さらに南側の道路敷きを発掘した。仮設道路を造るために表土で南区を埋め戻し、発掘区の廻りにバリケードを設置した後に調査を開始した。当該区も攪乱が著しく、東側は道路敷きからいきなり地山の赤土になっている。西側に包含層が確認でき土器や貝殻等が出土した。土器は南区同様に尖底が主体をなしている。

トレンチ西壁面の実測及び地形測量を実施し、完掘状況を写真撮影して今回の発掘調査を終了した。道路の片側については遺跡の残りが悪いことにより、工事の際に立ち合い調査をすることで調整した。

なお、調査後半に伊江中学校の生徒達の見学会が授業の一環として行われた。短い時間ではあったが実際に発掘調査も体験し、生きた歴史教材としての貝塚に触れることができたのは貴重な経験となり、子供たちが自分の島の歴史に少なからず関心を示したことは有意義なことであったと考える。さらに、調査期間中に「具志原貝塚通信」(発掘調査ニュース)を発行し、島の人たちに発掘調査のことを知っていただくと同時に、埋蔵文化財の普及啓発に多少役立てたことは意義あるものであった。

雨天の日が多く、発掘作業が思うように捗らなかったが、当初予定の2か月間で調査を終了することができた。事故も無く無事に終えることができたのは何よりであった。



図2 具志原貝塚の位置と周辺地形

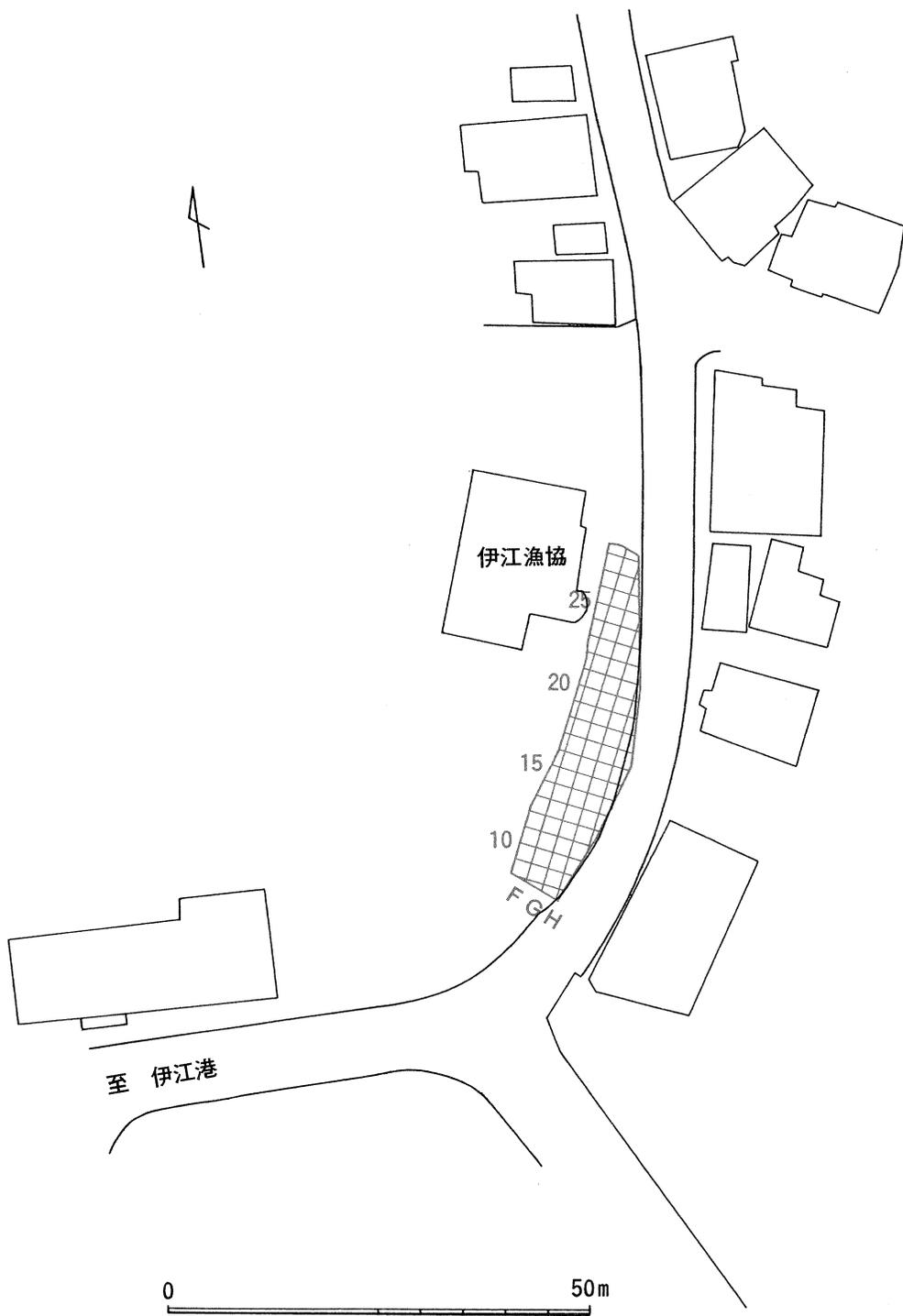


図3 グリッド設定

第4章 調査の内容

第1節 層序と遺構

1. 層序

今回の調査によって確認された層序は、調査区によって相違があるため、区毎に述べることにする。なお、隣接する国指定史跡地域より1.5mほど地盤が下がっており、道路工事等により掘削されたとのことで、そのことを考慮したうえで述べる。

南区の層序（図4参照）

調査区が道路敷きであることから、両区とも数cmのアスファルトと数10cmの路盤材（コーラル）が敷き詰められている。そのために客土扱いということで、層序としてはみなさない。

基本的には地山も含めて5枚の層序が確認できた。以下にその特徴等を簡記する。

- 1層－黒褐色の砂層で、諸種の工事により攪乱を受けている。層厚は一定してなく、平均して20cmと薄い。土器や貝類をわりと含み、ガラス片や鉄釘などの後代遺物も混在している。
- 2層－黄褐色を呈する砂層で、プライマリーな遺物包含層である。層厚は20～30cmあり、尖底の深鉢形土器を主体に弥生土器もわりと多い。石器や貝類・獣魚骨なども相対的に多い。
- 3層－茶褐色を呈する混土砂層である。層厚は20cm前後と薄く、土器などの遺物を含むが、量的には少ない。下部において焼土遺構が数基検出され、当時の地表面であることがうかがえる。
- 4層－赤褐色を呈する混砂土層で、地山への移行層と考えられる。層厚は15cmと薄く、遺物も比較的少ない。特筆すべきものとして、縄文前期に属する室川下層式土器が出土した。
- 5層－赤土（琉球石灰岩の風化土）の地山である。H-12グリッドで地山を掘り込む形で直径70cm、深さ40cmの土壙が検出され、埋土中から伊江島において初の仲泊式土器が得られた。また、チャートの欠片や石材、貝類等も出土している。周辺にこの時期（前IV期）の遺跡が存在していた可能性がある。

北区の層序（図4参照）

当該区は地山を含めて4枚の層序が確認され、南区の2層に相当する層は欠落している。

- 1層－黒褐色を呈する砂層で、南区と同様に工事等で攪乱されている。層厚は厚いところで40cmもあり、土器や貝類などをわりと多く含んでいる。後代遺物のガラス片やコンクリート片なども混在している。

- 3 b層—プライマリーな遺物包含層で、貝類を多量に含む混貝砂層である。層厚は20cm前後と薄い、土器などの包含量が多い。土器はくびれ平底の甕形が主体をなし、南区の土器の種類とは異なっている。20ライン以西では欠落している。
- 4 層—赤褐色を呈する混砂土層で、地山への移行層と考えられる。層厚は10cmと薄く、遺物も少ないが、尖底土器と弥生土器の底部（壺形土器）が出土していることより、3 b層の時期確定のメルクマールになる資料と思われる。
- 5 層—赤土（琉球石灰岩の風化土）の地山である。一部には基盤の琉球石灰岩の露頭がみられる。

2. 遺 構

今回の調査で検出された遺構は土壙（1基）と焼土（4基）のみである。以下、それらの遺構について簡単に述べる。

土 壙

H-12グリッドの地山に掘り込まれた形で検出された。図5に示したように、直径90cmのほぼ円形をなすプランで、地山面から40cmの深さで掘り込まれている。土壙内から仲泊式土器の口縁部1点と石材（片状砂岩）2点、チャートの欠片、チョウセンサザエを主体とした貝類が出土した。仲泊式土器は高宮廣衛氏の暫定編年前IV期前半（縄文後期初頭）に位置づけられるもので、伊江島では初めての出土例である。そのことより、当該土壙はその時期の遺構であることが判り、周辺部に遺跡が存在している可能性がある。

焼 土

南区の3層面下部においてブロック状に4基検出された。図5に示したように、いずれもプランが不定形で、層厚も5～10cmと薄い。砂が焼けて赤くなっており、灰と木炭片を含む他は何ら施設を伴ってないことから、焚き火の跡と考えられる。

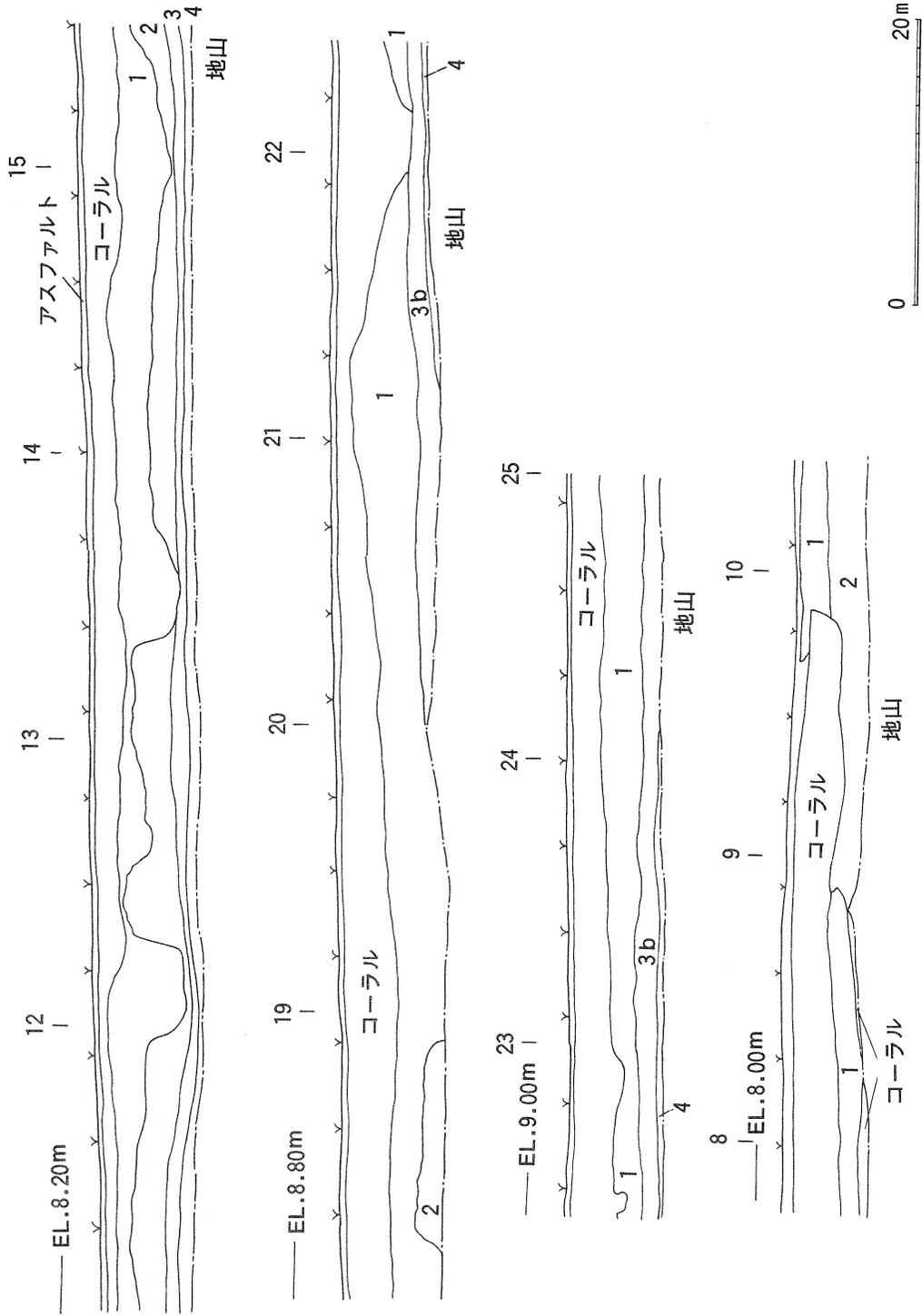
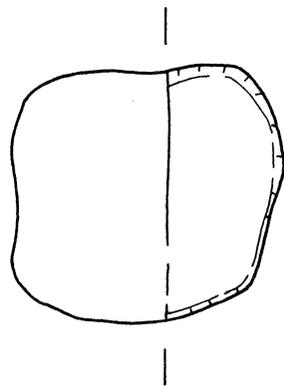
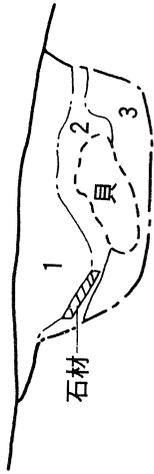


図4 土層壁面 (Dライン西壁)

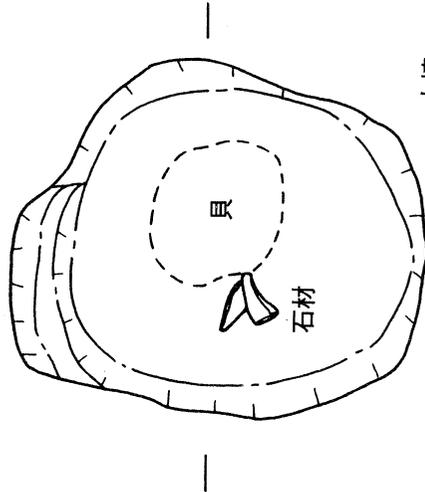
EL. 8.00m



EL. 8.00m



烧土遺構



土壇



图 5 烧土遺構と土壇

第2節 出土遺物

今回の調査で得られた遺物は、食糧残滓を主とした自然遺物と石器などの人工遺物に大別できる。自然遺物については項を別にして述べることにし、ここでは人工遺物の貝製品・骨製品・石器・土器について簡記する。

1. 貝製品

貝製品は、南区で37点、北区で66点、表採資料7点の計110点が得られている。これらは、概して装飾品と実用品に大別できるが、地区別に製品種等の差異はほとんど認められず、ほぼ同様な様相を示す。南区の装飾品としては、貝輪、玉類等があり、実用品として貝製漁網錘、スイジガイ製利器、螺蓋製敲打器、貝刃等が見られる。北区の装飾品としては、貝輪、ヤコウガイ製垂飾品等があり、実用品には貝製漁網錘、ヤコウガイ製匙状製品、螺蓋製敲打器等がある。表採資料には、貝輪、玉類、貝製漁網錘、螺蓋製敲打器等がある。

(1) 貝輪

素材として使用されている貝はオオベッコウガサ、オオツタノハ、ゴホウラ、シロナルトボラの計4種がある。

a. オオベッコウガサ製

オオベッコウガサの背面部を敲打により除去した後、孔の周縁を軽微な敲打調整のみによって仕上げている。このように、研磨工程を行っていないことから、製作途上品であろう。孔の平面形は卵形状をなす。図6の1(図版15)表面採集、長さ7.4cm、幅6.3cm、重量15g、孔径：縦径5.3cm、横径4.6cm。

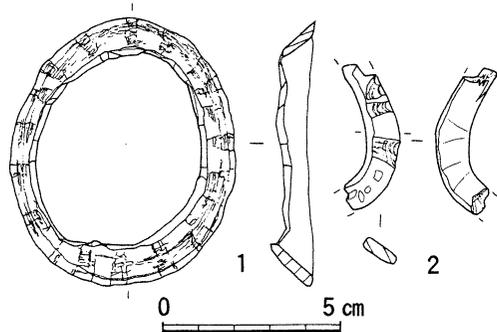


図6 貝輪実測図・1
(オオベッコウガサ製、オオツタノハ製)

図6

b. オオツタノハ製

オオツタノハの背面部を除去し、表面及び孔の周縁を研磨により仕上げているものである。1点のみの出土である。表面の研磨は素材の放射肋部を削り、肋間の窪みを残した状態で施されている。窪みに見られる自然面の小豆色を縫うように白色の研磨面が配置され、色のコントラストが大変美しい。図6の2(図版15) E-12グリッド：Ⅲ層出土、長さ4cm、幅1.9cm、重量4g。

c. ゴホウラ製

ゴホウラを素材とした貝輪である。総数9点が得られているが、いずれも製作途上品もしくは製作途上における破損品である。概ね、これらは素材の利用部位によって腹面利用型と背面利用型の2タイプがあるが、当該貝塚では腹面利用型が主体をなし、背面利用型は僅かである。

ゴホウラ製貝輪一覧

(単位: cm/g)

グリッド	層位	縦長	横長	孔径	縦/横	重量	観察事項	挿図番号 図版番号
G-13	1	14.2	7.1		4.3/4.7	240	腹面部を使用したもので、背面部全体を打割、除去している。腹面は敲打により粗孔を穿っている。更に背面の一部には研磨痕を認めるものの、制作途上において廃棄されたものと思われる。	図7の1 図版15
F-19	1	7.8	5.5		—	59	腹面部を使用。背面部全体を除去し縁部を敲打により整形、更に腹面に敲打による粗孔を穿つものである。腹面部の水管溝側が残存する破片で、制作途上において破損、廃棄されたものと思われる。	図7の2 図版15
G-21	3	7.3	6.0		—	35	腹面部を使用したもので、背面部全体を打割、更に敲打調整により縁部を整形、腹面に敲打により粗孔を穿つものである。腹面部の螺塔側が残存する破片で、制作途上において破損、廃棄されたものと思われる。	図7の3 図版15
G-23	3	15	10		69.0/80.8	480	背面部を使用したもので螺塔付近の外唇部及び背面頂部を打割により除去し、粗孔を穿つものである。制作途上品と思われる。	図7の4 図版15

d. シロナルトボラ製

シロナルトボラの殻口部近くの縦張筋にそって輪切りにしたものである。打ち欠きにより素材取得後、縁部は研磨により比較的丁寧に仕上げているが、殻表及び殻内は素材面を残したままである。図8の2(図版15) H-21グリッド: 3b出土、長さ7.8cm、幅3.3cm、重量15mg。同様な製品が本貝塚の1984年確認二次調査でも検出されている。(安里編1985) 図8の3。図8の1(図版15)はシロナルトボラの殻口部を割り取り縁部を敲打調整のみに終始し、研磨工程が見られないことから、製作途上品と思われる。表採資料、長さ12.2cm、幅8.7cm、重量180g、孔径: 縦径6.8cm、横径4.5cm。

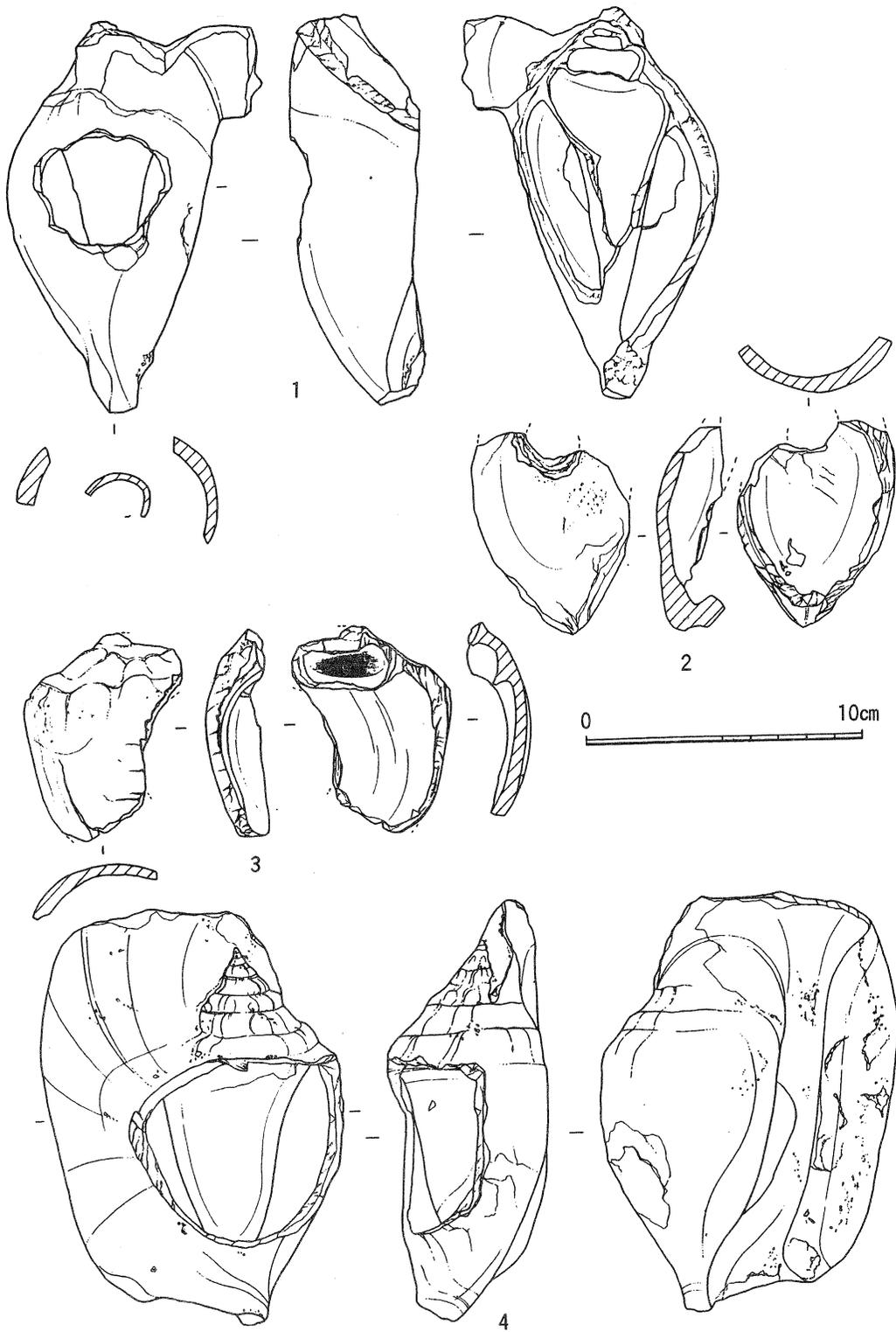


図7 貝輪実測図・2 (ゴホウラ製)

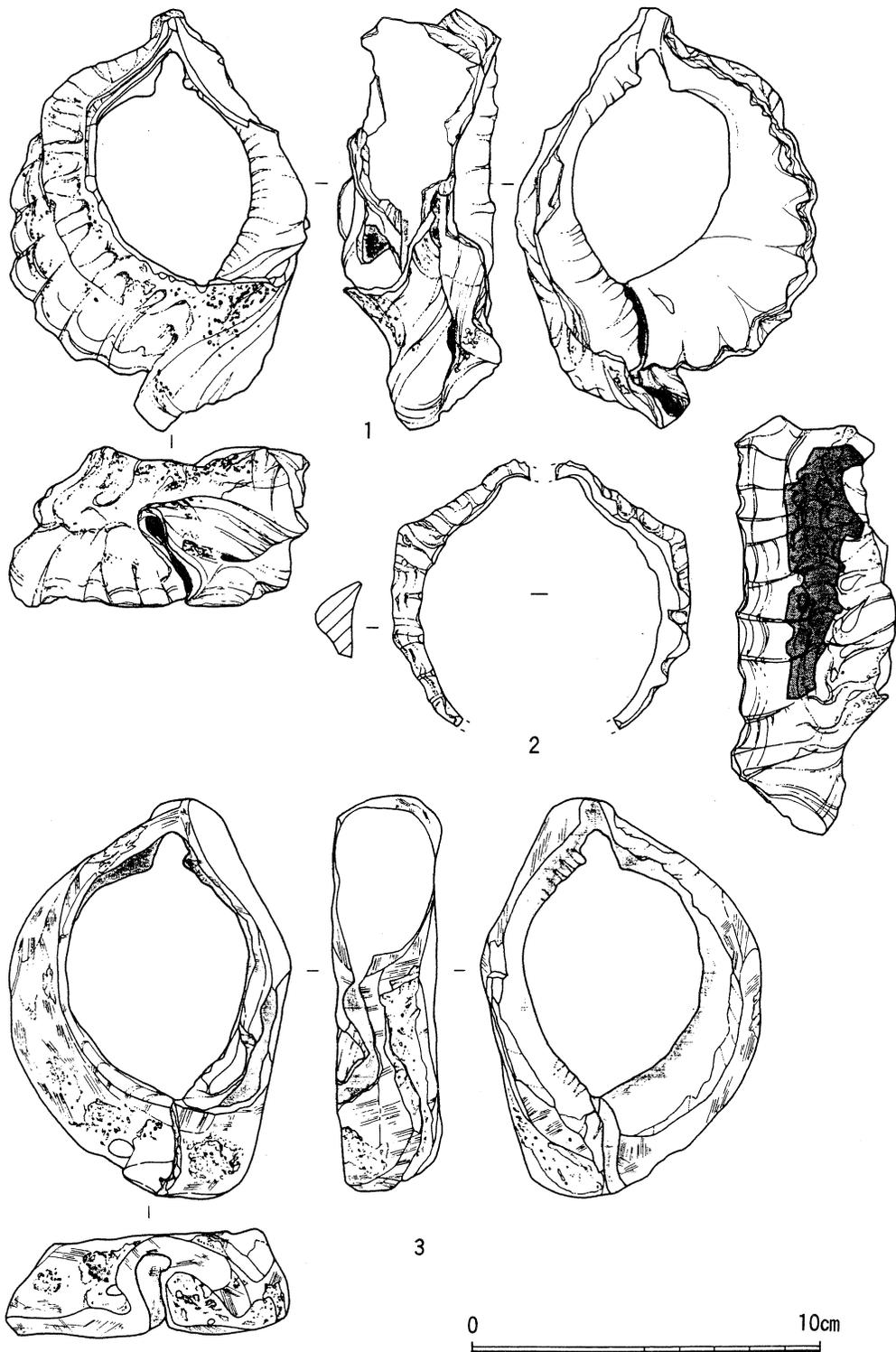


図8 貝輪実測図・3 (シロナルトボラ製)

(2) イモガイ科製品

イモガイ科の殻頂部に近い体層部に横位の溝を施して割り取っているものである。溝の断面観察等からして、擦り切り技法によるものと推される。同様な技法によると思われる資料が具志川村北原貝塚、大原貝塚、宜野湾市宇地泊兼久原遺跡等においても出土している。図9の1 (図版16)、D-13グリッド：2層出土、長さ8.6cm、幅4.6cm、重量70g。図9の2 (図版16)、D-13グリッド：2層出土、長さ6.3cm、幅3.2cm、重量20g。図9の3 (図版16)、D-13グリッド：2層出土、長さ6cm、幅1.3cm、重量10g。

(3) 玉

マガキガイ製のみが5点得られている。いずれも敲打により螺塔部と体層部の中軸部分を除去し粗孔を穿ったものである。研磨工程は行われず、製作途上品と思われる。図9の4 (図版16) H-17グリッド：4層出土、長さ2.3cm、幅2.5cm、孔径：縦径0.7cm、横径0.6cm、重量10g。図9の5 (図版16) G-14グリッド：4層出土、長さ2.4cm、幅2.2cm、孔径：縦径0.8cm、横径：0.8cm、重量5g。図9の6 (図版16) E-15グリッド：3層出土、長さ2.3cm、幅2.3cm、孔径：縦径0.8cm、横径0.8cm、重量5g。図9の7 (図版16) D-11グリッド：2層出土、長さ2.4cm、幅2.3cm、孔径：縦径0.8cm、横径0.5cm、重量0.9g。図9の8 (図版16) 表採資料、長さ2.3cm、幅2.4cm、孔径：縦径0.5cm、横径0.5cm、重量7g。

(4) ヤコウガイ製有孔製品

破片のため、その全体形については判然としないが、ヤコウガイの体層部を切り取り、内外面とも真珠層に達するほど研磨加工し、1～2mm前後の小孔を2箇所穿った製品である。図9の9 (図版16) G-20グリッド：1層出土、長さ3.1cm、幅3.5cm、孔径：縦径1.5mm、横径2mm、重量2.8g。

(5) ラクダガイ製品

ラクダガイの腹面部を利用した製品である。素材の体層部により取得後、縁辺部を敲打調整に終始しているのみで、研磨工程は施されていない。このようなことから、その用途等については判然としない。

類品としては、勝連町平敷屋トウバル遺跡で出土しているが貝皿として報告されている。(鳥袋編1995)。図9の10 (図版16) 表採資料である、長さ14.7cm、幅7.5cm、重量250g。

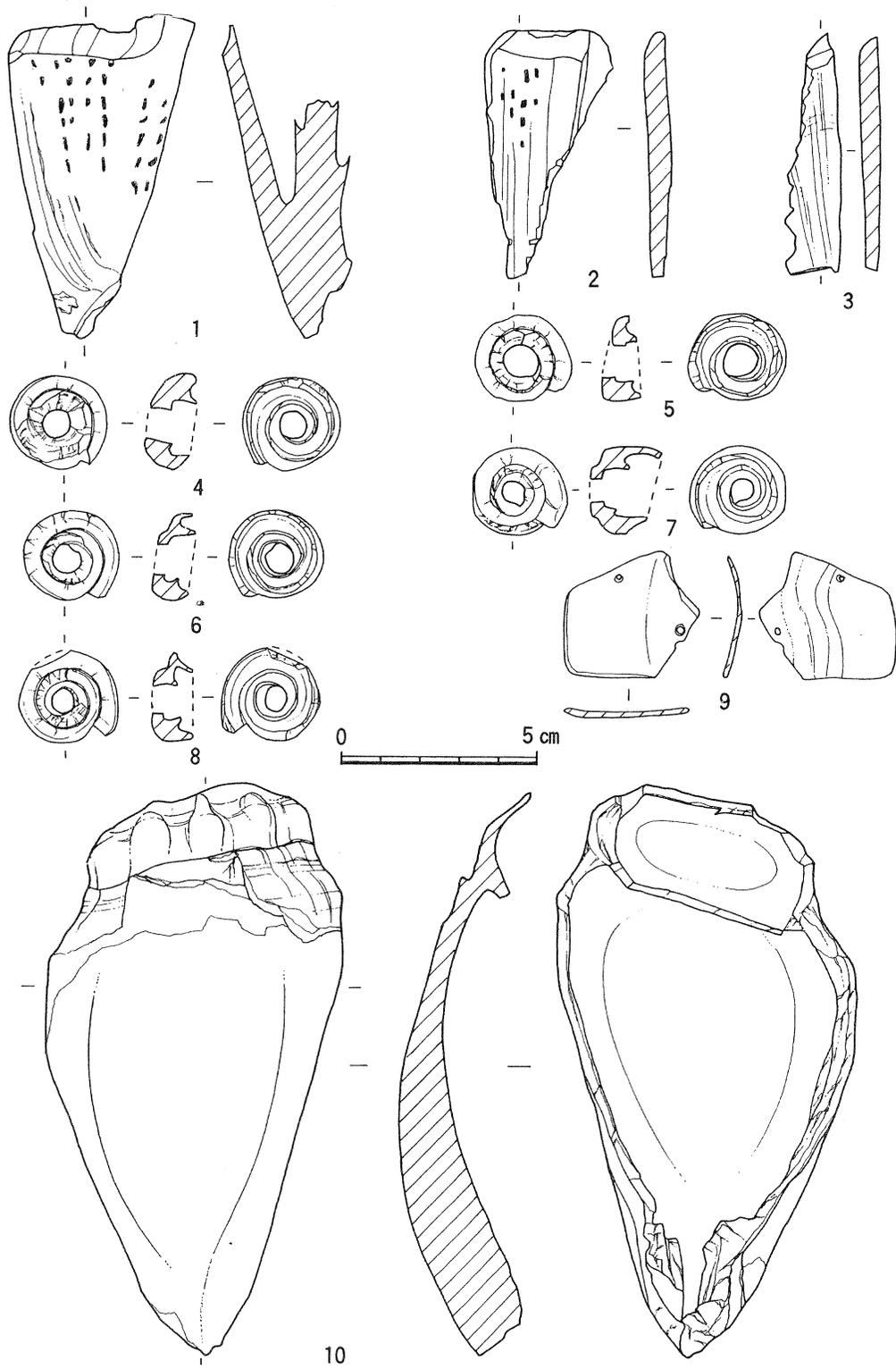


図9 イモガイ科製品、玉（マガキガイ製）、ヤコウガイ製有孔製品、ラクダガイ製品実測図

(6) 貝製漁網錘

二枚貝の殻頂部、もしくはその周辺部に粗孔を穿ったものである。穿孔は、そのほとんどが殻の内側から外側に向けて敲打により穿たれている。

出土総数は南区で18点、北区で54点の計72点がある。うち、完形品は57点で、他は破損品である。

貝種別に見ると、南区では計5種があるが内訳は、ソメワケグリ製1点、リュウキュウマスオ製1点、リュウキュウサルボウ製3点、メンガイ製6点、シラナミ製7点である。また、北区では計7種があり、ソメワケグリ製11点、リュウキュウサルボウ製3点、メンガイ製23点、シラナミ製14点、ヒメジャコ製1点、シレナシジミ製1点、ウチワガイ製1点となる。

貝製漁網錘一覧

(単位：cm/g)

グリット	層位	貝種	L/R	殻長	殻幅	重	孔径：縦/横	挿図番号	図版番号
H-13	IV	ソメワケグリ	R	3.6	3.5	9	0.92/0.93	図10の5	図版17
D-11	II	リュウキュウマスオ	L	4.5	7.2	17.8	1.16/0.87	図10の6	図版17
E-13	I	リュウキュウサルボウ	R	4.3	7.6	63.1	1.65/1.08	図11の2	図版17
E-12	I	リュウキュウサルボウ	R	3	4.6	11.8	0.41/0.32	図11の1	図版17
F-15	I	リュウキュウサルボウ	R	3.5	5.3	12.4	0.90/0.65	図11の3	図版17
D-8	I	メンガイ	L	4	3.8		0.85/0.77		
F-12	I	メンガイ	L	5	4.1	25.1	1.05/1.33		
F-19	I	メンガイ	L	5			1.51/1.76		
G-13	I	メンガイ	L	4.8	4	7.1	2.38/1.83	図11の6	図版17
G-18	I	メンガイ	L	5.2	4.7	12.8	1.62/2.22	図11の4	図版17
G-18	I	メンガイ	L	5.7	4.7	17.6	1.44/1.17	図11の5	図版17
F-19	III b	シラナミ	L	5.7					
D-11	II	シラナミ	R		5.2		2.05/-		
E-14	I	シラナミ	L	6.8	10.2	81.7	0.9/0.9	図10の2	図版17
E-15	I	シラナミ	R	8.5	13.8	190.5	3.60/2.15	図10の4	図版17
G-19	I	シラナミ	R	7.3	12.3	180	1.76/1.83	図10の3	図版17
G-13	I	シラナミ	L		9.6		4.48/-		
E-12	I	シラナミ	R		9.3		4.65/-		

貝製漁網錘一覽

(単位: cm/g)

グリット	層位	貝種	L/R	殻長	殻幅	重量	孔径: 縦/横	挿図番号	図版番号
F-21	Ⅲ b	ソメワケグリ	R	2.8	2.9	3.9	0.89/0.75	図11の7	図版17
F-22	Ⅲ b	ソメワケグリ	L	3.2	3.4	5.2	1.48/1.50		
F-23	Ⅲ b	ソメワケグリ	L	3.2	3.6	6.2	1.05/1.03		
F-22	Ⅲ b	ソメワケグリ	R	3.6	3.6	7.5	1.10/0.99		
G-21	Ⅲ b	ソメワケグリ	L	2.4	2.6	2.3	0.90/1.23		
G-23	Ⅲ b	ソメワケグリ	L	3.1	3.3	4.3	1.44/1.21		
G-25	Ⅲ b	ソメワケグリ	L	3.6	3.6	6.4	1.59/0.88		
G-25	Ⅲ b	ソメワケグリ	R	3.7	3.6	7.3	0.71/0.82	図11の9	図版17
G-25	Ⅲ b	ソメワケグリ	L	3.8	4	11.3	0.71/0.90	図11の8	図版17
F-20	I	ソメワケグリ	R	3.6	3.6	8.6	1.32/0.89		
F-21	Ⅲ b	リュキュウサルボウ	L	3.3	5.3	24	0.63/0.67	図11の10	図版17
F-24	Ⅲ b	リュキュウサルボウ	R	3	5.2	5.7	0.78/0.65	図11の11	図版17
G-22	Ⅲ b	リュキュウサルボウ	L	5.2	8.5	63.7	1.18/1.67	図11の12	図版17
E-22	Ⅲ b	メンガイ	L	5.7	4.8	18.1	1.40/1.62	図11の15	図版17
F-20	Ⅲ b	メンガイ	L	5.1	4.3	10.1	0.81/1.1	図11の14	図版17
F-22	Ⅲ b	メンガイ	L	4.6	4.3	10	1.36/1.63	図11の13	図版17
F-23	Ⅲ b	メンガイ	L	6.4	5.8	35.3	2.07/2.07		
F-25	Ⅲ b	メンガイ	L	6	5.5	26.2	2.01/2.64		
G-20	Ⅲ b	メンガイ	L	4.9	4.8	10.2	0.99/1.15		
G-20	Ⅲ b	メンガイ	L	1.24	4.2	6.8	1.38/1.24		
G-20	Ⅲ b	メンガイ	L	6.3	6.8	26.7	1.62/2.25		
G-20	Ⅲ b	メンガイ	L		4.2		1.84/-		
G-21	Ⅲ b	メンガイ	L	4.2	4	6.6	1.01/6.6		
G-21	Ⅲ b	メンガイ	L	7	6.6	34.8	2.48/1.72		
G-23	Ⅲ b	メンガイ	L	5	4.5	10.5	0.76/0.96		
H-20	Ⅲ b	メンガイ	L	5	4.2	8.2	1.12/1.45		
G-20	I	メンガイ	L	5.4	5.8	17.8	1.27/1.98		
F-20	IV	シラナミ	L	4.5	6	24.9	1.18/1.76		
F-23	IV	シラナミ	R	3.3	5.1	7.3	0.6/1.13	図11の17	図版17
G-23	Ⅲ b	シラナミ	L	7.7	10	99.4	1.95/2.35		
F-22	Ⅲ b	シラナミ	L	6.7	9.9	65.6	0.4/0.7		
G-23	Ⅲ b	シラナミ	L	3	4.9	8.8	0.8/1.1	図11の18	図版17
G-20	Ⅲ b	シラナミ	R	3	4.9	8.8	0.8/1.1		
G-21	Ⅲ b	シラナミ	L		4.9		-/1.97		
F-20	IV	ヒメジャコ	L	4.7	6.1	26	1.17/1.78	図11の16	図版17
F-22	Ⅲ b	シレナシジミ	L	5.7	6.8	243	1.28/1.37	図11の20	図版17
G-23	Ⅲ b	ウチワガイ	L	2.8	2.9	3	0.86/0.94	図11の19	図版17
表面採集		メンガイ	L	5.8	5.5	16.7	1.87/2.03		
表面採集		メンガイ	L	6.8	5.8	28.6	1.01/0.84		
表面採集		メンガイ	L	4.7	4.6	8.8	0.85/1.06		
表面採集		メンガイ	L	6.8	5.4	29.4	0.87/1.02		
表面採集		メンガイ	L	4.8	4.2	9.3	1.40/1.51		
表面採集		メンガイ	L	6.2	4.6	12.3	1.11/1.06		
表面採集		メンガイ	L	8.1	6.5	52.5	1.18/1.09		
表面採集		メンガイ	R	5.5			1.10/1.13		
表面採集		メンガイ	L	5.1			0.80/0.78		
表面採集		シラナミ	R	8.1	14.9	186	2.85/3.98		
表面採集		シラナミ	R	8	13.6	172	2.54/2.17		
表面採集		シラナミ	R	7.6	14.7	184	2.66/1.60		
表面採集		シラナミ	L	7.3	16.2	265	1/0.7		
表面採集		シラナミ	L	11.4	20.7	590	2.91/2.05		
表面採集		シラナミ	L		14.1		-/4.24		
表面採集		シラナミ	R		9.9				
表面採集		ソメワケグリ	R	3.8	3.7	8.7	1.11/1.46		

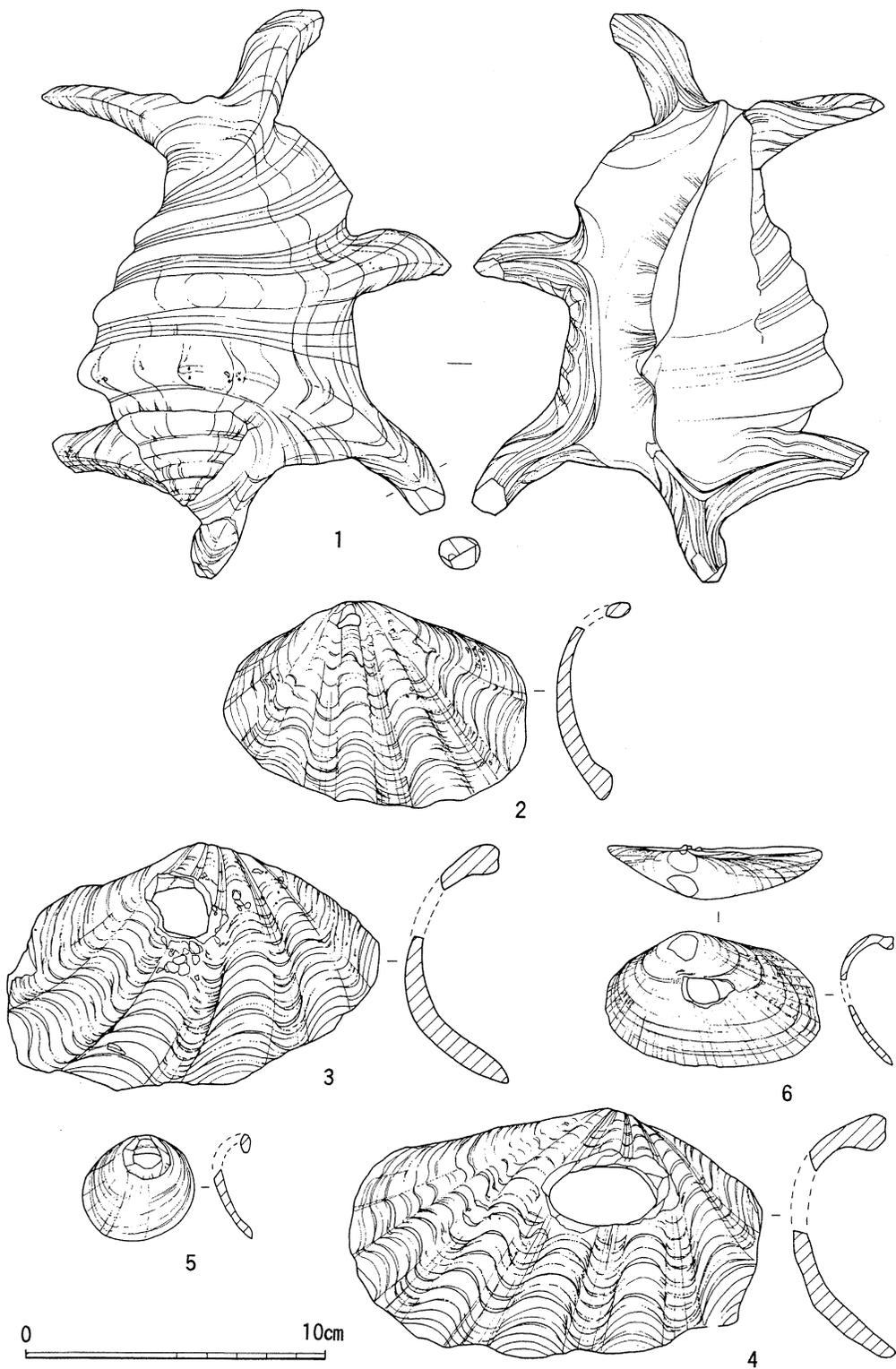


図10 スイジガイ製利器、貝製漁網錘実測図



图11 貝製漁網錘実測図

(7) スイジガイ製利器

スイジガイの突起（管状棘）の先端部をノミ状に研磨したものである。研磨は外唇側の殻頂から最初の突起の1本にだけ見られ、殻表側と殻内側から研ぎ出し附刃されている。図10の1（図版16）F-14グリッド：1層出土：長さ19.8cm、幅13.8cm、重量450g。

(8) ヤコウガイ製匙状製品

ヤコウガイの体層部を利用して、加工した容器である。計3点の出土があるが、いずれも柄部あるいは身部のみの破損品である。

図12の1（図版18）は、柄部のみ資料である。2点とも器表面および両側面を入念な研磨によって仕上げており、その造りは比較的丁寧である。上端部に孔もしくは抉りの一端とみられる半環状部が見られるが、上端が破損しているため、いずれかは不明。G-22：Ⅲb層出土、長さ7.26cm、幅5.76cm、重量52g。図12の2（図版18）は、縁部を敲打仕上げに終始したもので、研磨工程を行っていないことから製作途上品と見られる。F-22：Ⅳ層出土、長さ7.1cm、幅4.14cm、重量22g。

図12の3（図版18）は、身部のみの資料である。殻表の結節部を除去し、軽微な研磨を施しているものの、縁部を含む大部分が破損しているため詳細は不明。F-22：Ⅲb層出土、長さ

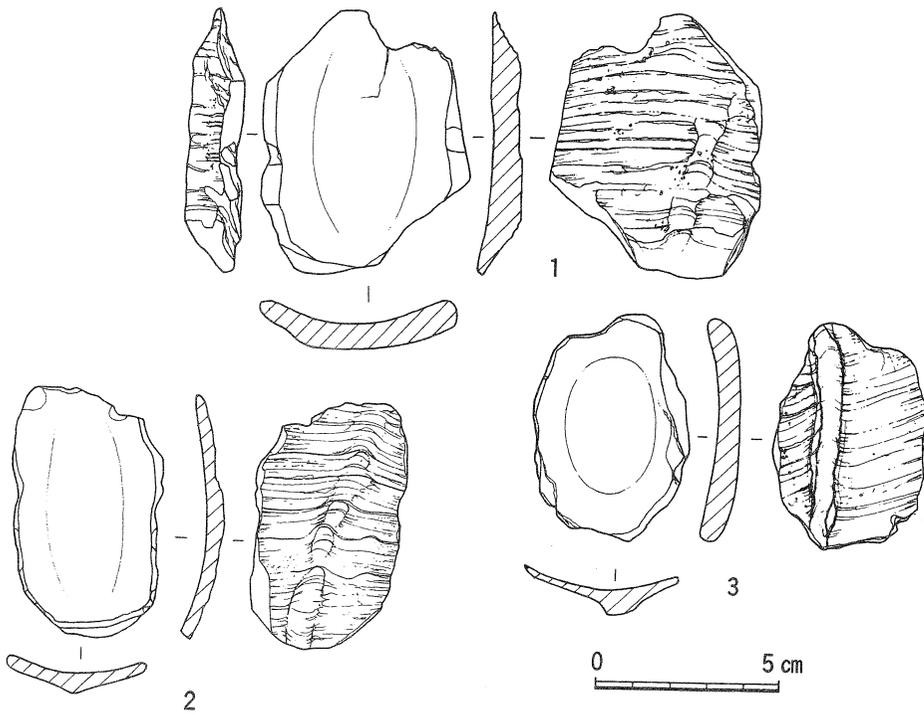


図12 ヤコウガイ製匙状製品実測図

6.32cm、幅4.2cm、重量24g。

(9) 螺蓋製敲打器

ヤコウガイの蓋を素材とし、その縁辺薄部に剝離痕が見られる製品である。当該製品は、これまで多種多様な機能、用途が推定され、名称もそれに伴い、数多く与えられてきた。

これらは、大別して素材の縁辺薄部に見られる剝離痕が利器としての意図的な付刃であるとの考えと（國分1973、新田1976、安里1986）、剝離痕は使用に拠る使用結果の所産と見た敲打器としての考えとに分かれている（白木原1973、弥栄他1985、島他1986、岸本編1986、長野他1988、盛本編1989）。さらに両者を兼ね備えた、多目的使用が可能であるとする考え方もある。

（三島1982、1988）。筆者は基本的に敲打器としての考え方に立脚するものであるが、具志川村北原貝塚出土の当該製品の素材のサイズにバラツキが見られたうえ、小型素材については敲打器と捉えるにはあまりにも貧弱であることから、他の機能・用途、すなわち当て具を推したことがある（比嘉1995）。

なお、これらの分類については具志川村清水貝塚（盛本1989）に準拠し剝離痕の範囲と位置によって、Ⅰ～Ⅴ類に分類した。

Ⅰ類—ほとんどが素材の原形をとどめ、上下端もしくは左右端に1～2回の打撃による剝離痕がみられるものである。

Ⅱ類—剝離痕が周縁の3分の1程度におよぶものである。

Ⅲ類—Ⅱ類よりさらに使用の度合が進行し、上端周縁を残す程度で、ほとんどの部分に剝離痕がおよんでいる。

螺蓋製敲打器観察一覧

(単位: cm/g)

グリット	層	長さ	幅	重量	分類	観察事項	挿図番号	図版番号
F-12	4	3.5	7.7	55	不明	破損が著しく詳細は不明。	図13の1	図版17
E-14	3	—	—	—	不明	破損が著しく詳細は不明。	図13の2	図版17
F-18	1	—	—	—	不明	破損が著しく詳細は不明。	図13の3	図版17
F-20	3b	77.3	71.8	190	Ⅳ	螺蓋縁辺部の縦割れや、剝離の大きさ等から使用時の衝撃の大きさが伺える。	図13の4	図版17
F-20	3b	49.3	67.1	90	Ⅳ	肥厚する縁辺部のみを残し剝離が及んでいる。	図13の5	図版17
G-21	3b	64.8	70.7	130	Ⅴ	螺蓋の縁辺薄部に剝離痕と肥厚部に敲打痕が見られる。	図13の6	図版17
表面採集		76.3	82.8	180	Ⅲ	螺蓋の縁辺薄部に連続した剝離痕が認められる。	図13の7	図版17
表面採集		72.1	80.2	160	Ⅲ	螺蓋の縁辺薄部に連続した剝離痕が認められる。	図13の8	図版17

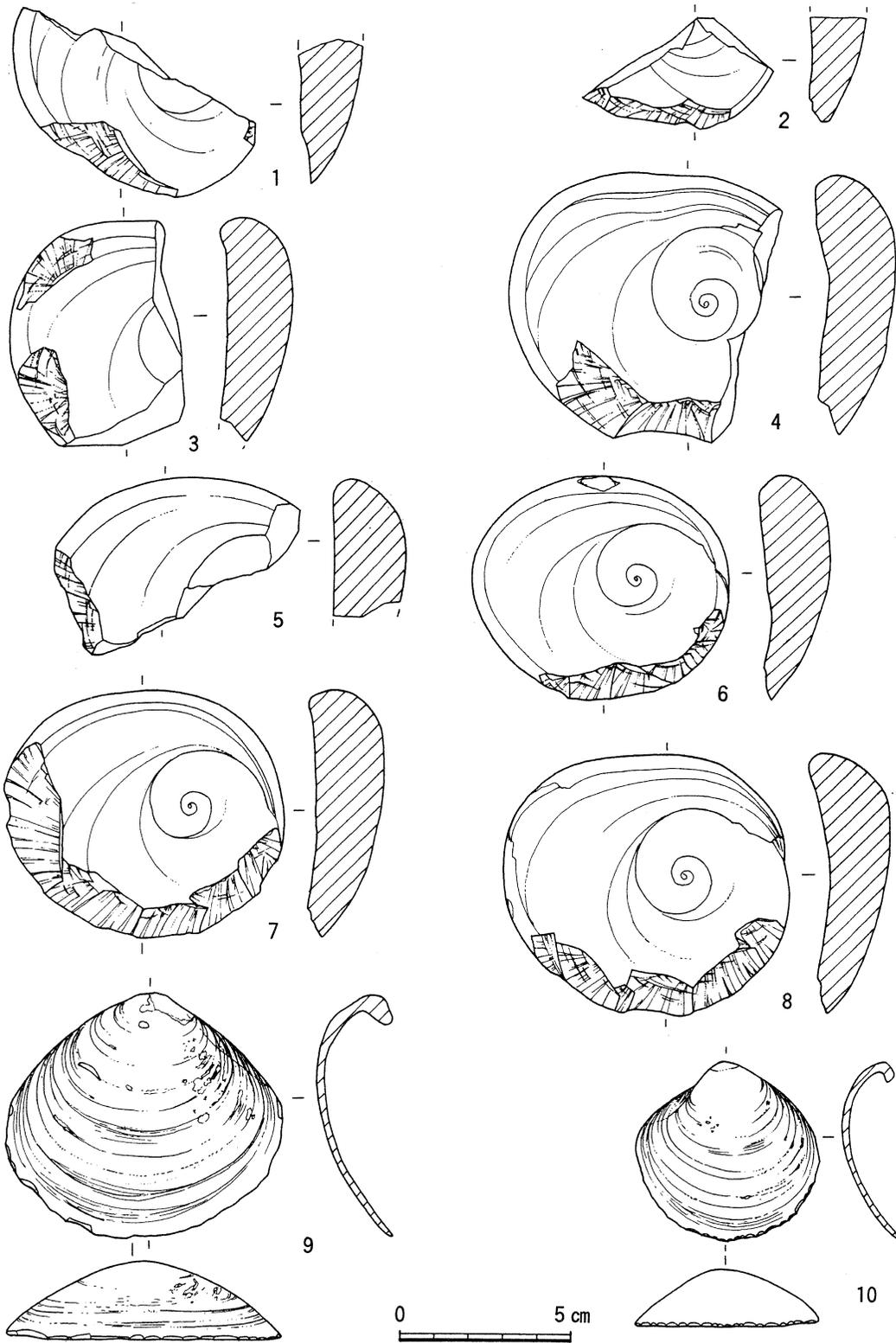


図13 螺蓋製敲打器、貝刃（シレナジミ製）実測図

IV類—使用の際の打撃が強かったと思われ、下端部が大きく破損したり、縦割れが生じたりしているものである。使用面も鋭さを欠き、鈍くなる。形状も楕円形状を呈するなど原形をとどめていないものも少なくない。

V類—素材内面の使用痕は、II、III、IV類に属するものであるが、外面にも敲打痕が認められるものである。

(10) 貝刃

二枚貝を素材とし、その復縁に押圧剝離を施すものである。本貝塚ではシレナシジミ製が2点得られ、いずれも復縁の全周に連続した押圧剝離がみられる。

図13の9 (図版18) D-12グリッド：4層出土、長さ7cm、幅8cm、重量45g。図13の10 (図版18) E-13グリッド：1層出土、長さ5cm、幅5.1cm、重量15g。

2. 骨製品

(1) 骨針

イノシシの腓骨を素材とした骨針が2点得られている。両者とも、尖部のみ破片資料であるが、素材の特徴を生かし、主に先端部を研磨し仕上げている。同様な製品が本貝塚の1984年の確認調査でも検出されている。

(安里1985) 図14の1 (図版18) F-12グリッド：3層出土、長さ2cm、幅6mm、重量400mg。図14の2 (図版18) F-13グリッド：4層出土、長さ2.2cm、幅4mm、重量300mg。

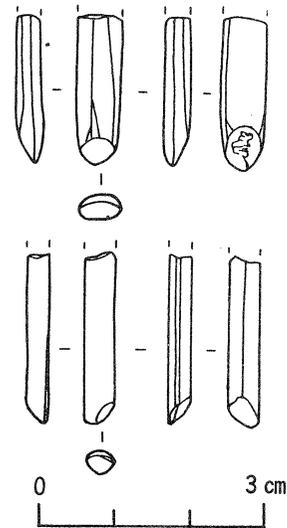


図14 骨製品実測図

参考文献

1. 安里嗣淳編、「伊江島具志原貝塚の概要」 沖縄県教育委員会 1985年
2. 岸本義彦編、「具志堅貝塚発掘調査報告」 本部町文化財調査報告書第3集
本部町教育委員会1986年3月
3. 当真嗣一編、「大原—久米島大原貝塚群発掘調査報告」 沖縄県教育委員会1980年3月
4. 高宮廣衛編、「宜野湾市宇地泊兼久原遺跡発掘調査報告」 冲国大考古第10号
沖縄国際大学文学部考古学研究室1989年
5. 盛本 勲編、「清水貝塚発掘調査報告書」 具志川村文化財調査報告書第1集
具志川村教育委員会1989年3月
6. ———、「北原貝塚発掘調査報告書」 沖縄県文化財調査報告書第123集
沖縄県教育委員会 1995年3月

3. 石 器

今回の調査によって得られた石器は、この時期の遺跡としては比較的多く、破片を含めて38点ある。種類が判別できたものは石斧・たたき石・すり石・砥石の4器種で、他に円盤形石器が1点ある。これらのなかではたたき石が24点と群をぬいている。ただ、その中にはすり石としての機能も兼備しているものがある。

出土区別の出土状況は表1に示したとおりで、時期が古くなる南区で多く出土していることがうかがえる。表面採集資料が比較的多いことから、ここでは器種別に述べることにする。

表1 石器の種類と出土区の相関

	表面採集品	南 区	北 区	計
石 斧		3	1	4
た た き 石	9	9	6	24
す り 石	2		2	4
砥 石	2	2	1	5
円 盤 形 石 器		1		1
計	13	15	10	38

以下、これらの石器の特徴や石質、法量等を観察表にまとめたが、たたき石については形態などにより分類を試みた。

石斧はこの時期になると減少する傾向にあり、今回の調査でも4点と少ない。いずれも破片であるが、図15の1に示したものは重厚な作りで、この時期によくみられる石斧とは様相を異にしている。どちらかといえば、前V期にみられる石斧に類似している。同図2はわりと偏平な作りで、いわゆる石斧としての機能は有さず、ナイフのような利用が考えられる。

たたき石は形態や使用部位・大きさなどの特徴により、下記の3類に分類した。

A類——手頃な河原石を用い、表裏面及び両側辺部、上下端部のいわゆる六面使用のもので、すり石としての機能も兼用しているものが多い。(図16の1～5)

B類——わりと重厚な石を何ら加工を施さずに利用しており、下端部の一面のみを使用しているものである。他の遺跡では見られないチャート製のものもあるのは伊江島ならではの特徴である。(図17の1～5、図18の1～6)

C類——A類・B類以外の特徴を有するもので、量的に少ないことから本類に包括した。(図19の1～6)

すり石は4点と少なく、いずれも小破片であるが、磨面を有していることより、すり石と判断した。

砥石は5点得られ、ほとんど細粒砂岩（ニービ）を用いている。この石は伊江島に産しないことより、他所からの持ち込みであることがうかがえる。具志原貝塚人の行動範囲を知る手掛かりになると思われる。

円盤形石器は1点得られた。図15の5に示したもので、河原石の剥片を用いている。表面は自然面、裏面は割面になっている。周辺部、特に下端部の打剝が著しく、物を叩き切るか叩き潰すような利用方法が考えられる。

出土した石器の種類と石質の相関関係を表2に示した。破片も含めて総数38点が得られ、器種は石斧・たたき石・すり石・砥石・円盤形石器の5種類が認められた。内訳はたたき石が24点と最も多く（但し、すり石の機能を兼用しているものもここに含めた）、次いで砥石が5点石斧とすり石がそれぞれ4点、円盤形石器が1点となっている。

石質は緑色片岩をはじめ9種類が確認された。うち伊江島に産する岩石はチャートと石灰岩サンゴの3種類で、他の6種類（緑色片岩・石英斑岩・礫岩・硬砂岩・細粒砂岩・粘板岩）は島外からの持ち込みである。その産地は伊江島に近い本部本島や大宜味、国頭村の西海岸あたりの可能性がある。このことは当時の行動（交易）範囲などを知る手がかりとなる貴重な資料であることがうかがえる。

表2 具志原貝塚出土石器の器種と石質の相関

	石 斧	たたき石	すり石	砥 石	円盤形石器	計
緑 色 片 岩	3	2	1			6
石 英 斑 岩			1			1
礫 岩			1			1
硬 砂 岩		15	1	1	1	18
細 粒 砂 岩				4		4
粘 板 岩	1					1
石 灰 岩		1				1
チャ ー ト		5				5
サ ン ゴ		1				1
合 計	4	24	4	5	1	38

さて、器種と石質の関係についてみると、石斧は硬度と粘りのある緑色片岩が主に用いられている。このことは時期、地域を問わず同様の傾向があり、経験等からこの石が石斧に適していることを知っていたようである。たたき石は砂岩が15点と圧倒的であり、適度な硬度と粘りのある石を選択している。他の遺跡ではほとんど知られていないチャート製があるが、それは伊江島に豊富にあるチャートを利用しているだけのことで、チャートは硬度があるわりには脆く、たたき石には適していないと思われる。チャートは石鏃やナイフなどの利器に向いているが、この種の石器は今回の調査では得られなかった。すり石は物をすり潰すための道具であり軟質の石は不適であることから、硬度のある石をうまく利用している。砥石はほとんど細粒砂岩（ニービ）を用いており、石の特質を最大限に生かしている。

このように、当時の人びとは石器の種類に適した岩石を経験的に知っていたようで、島内に産しないものは島外から持ち込んで使用していたことがうかがえる。岩石の産地同定を行うことによって行動範囲が把握できるものと思われる。

石器観察表 (石斧)

挿図番号 図版番号	出土区 グリッド 層位	法 量	長さ (cm)	石質	観 察 事 項
			幅 (cm)		
図15の1 図版19	南区 D-12 2層		7.8 6.5 2.7 190	緑色片岩	わりと重厚な石斧の刃部片である。全面とも入念な研磨を施し、刃面は特に丁寧である。側辺部はほぼ平坦に磨かれ、いくぶん定角になっている。基部上端および右側辺部は大きく欠損しているが、残存部の状況から両刃の縦斧であることがうかがえる。刃先は使用時の衝撃により、かなり潰れている。
図15の2 図版19	南区 F-18 2層		3.2 5.0 0.5 15	粘板岩	板状に剝離しやすい岩石を用いており、かなり偏平なつくりの石斧である。研磨は刃面のみ施し、表裏面は剝離面のままである。側辺部は打剝調整を施しているのみである。基部のほとんどと左側辺部が欠損しており、元の大きさや形は判然としない。刃は両刃になっているが、厚さから本来の石斧としての機能は有してなく、ナイフのような用途を持っていたと考えられる。
図15の3 図版19	北区 G-24 3b層		5.6 5.4 1.8 105	緑色片岩	刃部が若干バチ形に開く石斧である。研磨は表裏面および刃面とも施すが、両側辺部は打剝調整に留めている。両側辺のほぼ中央に付柄の際のストッパーとなるノッチがみられる。基部上方で横折れし、基端部を欠いている。刃先は使用時の衝撃により大きく潰れている。
図15の4 図版19	南区 D-12 2層		3.6 4.6 2.5 60	緑色片岩	基部上方の破片である。わりと厚手で、側片部の傾きからバチ形に開く石斧になると思われる。表裏面とも入念な研磨を施すが、両側片部は敲打調整によって仕上げられている。基端部は著しく潰れているが、使用の際の打撃によるものと考えられる。

石器観察表（たたき石） 1

挿図番号 図版番号	出土区 グリッド 層位	法 量	長さ (cm)	石質	観 察 事 項
			幅 (cm)		
図16の1 図版20	南区 E-11 2層		13.8 10.0 5.7 1290	硬砂岩	比較的大きな河原石を用いている。表裏面および両側辺、上下端に敲打痕がみられる六面使用のたたき石である。表裏面には磨面も認められ、すり石としての機能も兼用していたようである。A類に所属する。
図16の2 図版20	南区 D-11 2層		10.0 8.5 5.0 780	硬砂岩	手頃な河原石を用いている。六面を使用したもので、両側辺と上下端は使用頻度が高く、かなり潰れている。それに対して、表裏面の使用は軽微で若干窪んでいるにすぎない。表裏面には磨面が認められ、すり石としても使用されている。A類に所属する。
図16の3 図版20	表面採集 資料		10.9 8.8 5.0 880	硬砂岩	大きさ、形状とも上記2とほぼ同様である。両側辺はかなり使われており、窪んだ状態になっている。上下端もわりと使用頻度が高い。表裏面には磨面が認められすり石としての用途も兼ね備えている。A類に所属する。
図16の4 図版20	表面採集 資料		7.7 8.0 5.5 510	硬砂岩	上端部を欠いているが、他の部分の使用状況から推してA類に含めた。わりと小型の河原石を用いている。裏面には使用の際の衝撃による剥離が2カ所に認められる。表裏面には磨面もみられ、すり石としても使われている。
図16の5 図版20	南区 D-9 2層		7.8 5.5 3.7 290	石灰岩 (古生代)	わりと小型の石を用いている。上下端の使用頻度が高く、著しく潰れている。表裏面と両側辺には若干の敲打痕が認められる。古生代の石灰岩を利用した石器はほとんどなく、硬さのわりには脆いという石の性質がその要因と思われていた。今回の事例はその点で重要である。A類に所属する。
図17の1 図版21	南区 D-10 2層		9.8 11.2 8.8 1390	硬砂岩	比較的大きな河原石を用いている。上端部がかなり厚みを持ち、その縁辺部を使用部位として利用している。下端部も使用による敲打痕が著しくみられる。B類に所属する。
図17の2 図版21	南区 D-10 2層		4.1 7.0 3.5 130	チャート	小型のチャート礫を用いている。チャートを利用したハンマーは他遺跡では例がないが、伊江島ではチャートが容易に採れることより、たたき石として利用されたことが考えられる。下端部と側辺部に敲打痕が認められる。B類に属する。
図17の3 図版21	表面採集 資料		12.1 13.2 5.8 1310	緑色片岩	わりと大きな河原石を用いている。周辺部をフルに活用しており、使用の際の潰れが著しい。緑色片岩は伊江島に産しないことより、島外からの持ち込みであることがうかがえる。B類に所属する。

石器観察表（たたき石） 2

挿図番号 図版番号	出土区 グリッド 層位	法 量	長さ (cm)	石質	観察事項
			幅 (cm)		
図17の4 図版21	南区 D-11 2層		11.2 15.5 6.2 1395	硬砂岩	自然の河原石を何ら加工を施さずに利用している。下端部は使用の際の衝撃により大きく剥離している。右側辺部の裏側には一部磨面が認められ、すり石としても使われていたようである。B類に所属する。
図17の5 図版21	表面採集 資料		8.2 12.7 5.6 890	緑色片色	上記資料と同様に手頃な河原石をそのまま用いている。下端部と左側辺部が使用部位になっており、敲打痕が認められる。片手で扱うには格好の大きさである。B類に所属する。
図18の1 図版22	表面採集 資料		8.5 13.2 7.0 1050	硬砂岩	手頃な河原石をそのまま利用している。下端部と上端の一部および表面の中央部に敲打による潰れがみられ、下端部の使用頻度が高い。左側辺部は強い衝撃により大きく剥離している。B類に所属する。
図18の2 図版22	北区 H-20 1層		6.0 6.0 4.2 170	硬砂岩	小破片のため全体形はうかがえないが、側辺部に敲打痕が認められることより、B類に含めた。表面に磨面を有することから、すり石としての機能も具備していたことが考えられる。
図18の3 図版22	表面採集 資料		12.2 13.7 8.3 1900	チャート	かなり重量のある石を用いている。下端部のみ使用され、敲打による潰れが著しい。チャートをハンマーとして利用するのは伊江島ならでのことである。B類の典型的な資料である。
図18の4 図版22	表面採集 資料		8.1 16.2 6.1 720	硬砂岩	破片であり、本来はかなり大型で重厚なたたき石であったことがうかがえる。下端部のみ敲打痕が認められることより、B類に含めた。
図18の5 図版22	表面採集 資料		12.8 8.8 8.2 1385	チャート	右側辺部を大きく欠失しているが、本来は大型で重厚なたたき石であったことが想定できる。下端部のみが使用部位となり、敲打による潰れが著しい。B類に所属する。
図18の6 図版22	南区 F-18 3層		8.7 19.6 4.6 860	硬砂岩	破片のため全体形をうかがうことはできない。下端部に敲打痕を有することよりB類に含めた。表面には磨面が認められ、すり石としても使われていたようである。

石器観察表 (たたき石) 3

挿図番号 図版番号	出土区 グリッド 層位	法 量	長さ (cm)	石質	観 察 事 項
			幅 (cm)		
図19の1 図版23	南区 F-19 1層		7.8 6.5 3.5 250	硬砂岩	わりと小型の河原石をそのまま利用している。上下端および両側辺部に敲打痕が認められる。下端部は他に比べて使用頻度が高く、かなり潰れている。使用部位はA類に共通する点があるが、小型であることからC類に含めた。
図19の2 図版23	南区 F-12 1層		5.8 4.8 2.8 110	硬砂岩	上記の資料以上に小型の河原石を用いている。上下端部および両側辺部に使用の際の敲打痕が認められる。C類に所属する。
図19の3 図版23	北区 G-21 3b層		9.0 6.2 5.1 400	チャート	手頃な河原石をそのまま利用しているが、表面の風化が著しく、白く変色し脆くなっている。上端部と下端部が使用されており、敲打による潰れが著しい。C類に所属する。
図19の4 図版23	北区 G-21 3b層		9.5 4.7 1.6 140	硬砂岩	わりと偏平な小判形の石を用いている。両側辺部の使用頻度が高く、左側辺部はノッチ状になっている。裏面の中央部も使われており、若干の窪みを有する。C類に所属する。
図19の5 図版23	南区 D-11 4層		18.8 4.3 4.3 610	硬砂岩	棒状の河原石を利用している。基部上方を握って使用したと考えられ、下端部と基部中央付近に敲打痕が認められる。この種のたたき石は他にあまり例をみないが素材のもつ形状をうまく活用したことがうかがえる。C類に所属する。
図19の6 図版23	表面採集 資料		7.8 7.7 3.0 170	サンゴ	ほぼ円形の偏平なサンゴ石をそのまま用いている。表面の中央部に浅い窪みが認められ、下端部にも敲打痕を有する。軟質のサンゴ石をたたき石として用いる例はあまりなく、その対象物が何であったのか考えさせる資料である。C類に所属する。

石器観察表（すり石・砥石）

挿図番号 図版番号	出土区 グリッド 層位	法 量	長さ(cm)	石 質	観 察 事 項
			幅 (cm)		
図20の1 図版24	北 区 G-23 3 b層		13.4 17.0 8.6 2240	チャート	大型で重厚な石を利用している。表面が水磨を受けて滑らかになっていることより、海岸部にあった石を使用したことがうかがえる。下端部に敲打痕を有する地、磨面も認められることより、すり石としても使われていたようである。
図20の2 図版24	表面採集 資 料		9.7 8.8 8.0 790	緑色片岩	すり石の破片で、本来はかなり大型の標品であったことがうかがえる。側辺部の峻の部分に磨面が認められ、その部位を利用していたことがわかる。伊江島に産しない緑色片岩であり、貝塚人の行動範囲を知るうえで貴重な資料である。
図20の3 図版24	南 区 H-12 4 層		9.1 6.8 1.8 115	細粒砂岩	小破片のため全体形をうかがうことはできない。表面がかなり磨かれていることや若干の凹面になっていることより、砥石の範疇に含めた。
図20の4 図版24	表面採集 資 料		8.3 6.5 1.2 110	細粒砂岩	本標品も小破片のため本来の形はうかがえないが、かなり偏平になっており、表裏面ともフルに活用されたことがわかる。
図20の5 図版24	表面採集 資 料		9.4 9.3 3.5 580	細粒砂岩	破片のため全体形をうかがうことはできない。表面の風化も著しく、磨面が確認できないが、表面が凹面になっていることより、砥石として扱った。
図20の6 図版24	北 区 G-20 3 b層		8.2 12.4 1.1 190	硬 砂 岩	目の粗い砂岩を用いている。破損がひどく、本来の大きさや形状は判然としない。表面に磨面が認められることや、凹面になっていることから砥石として扱った。

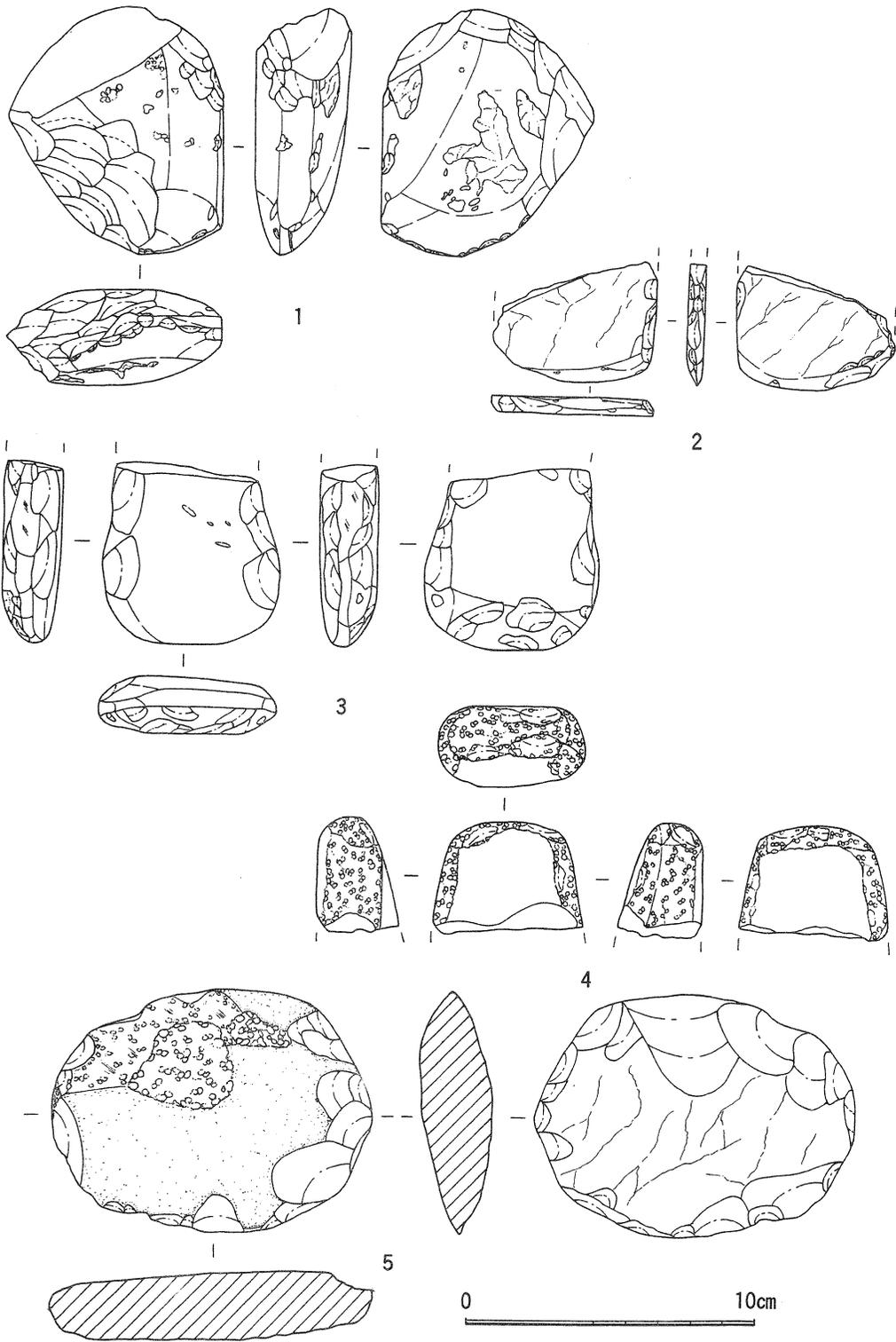


图15 石斧（1~4）、円盤形石器（5）

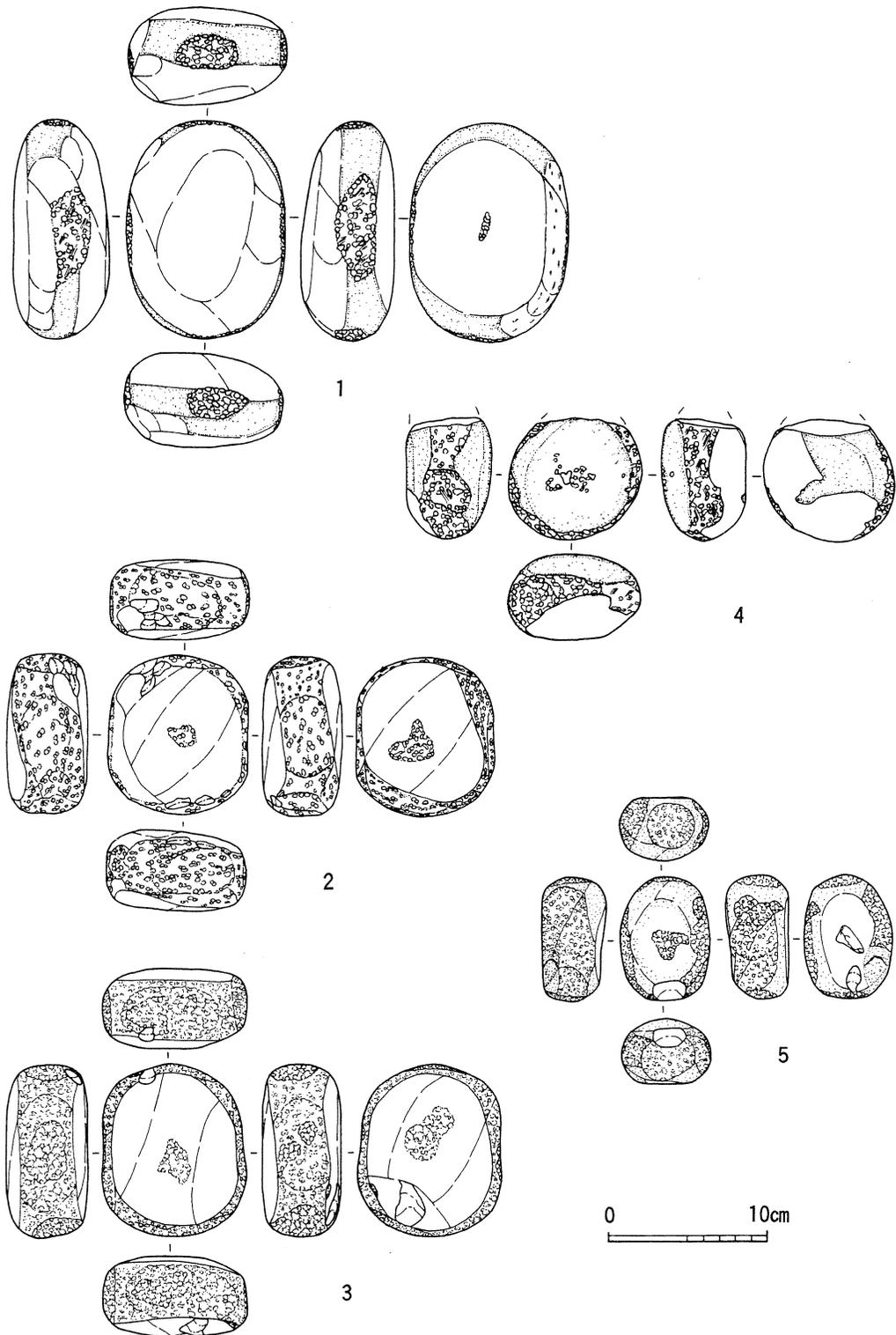


図16 たたぎ石 (A類)

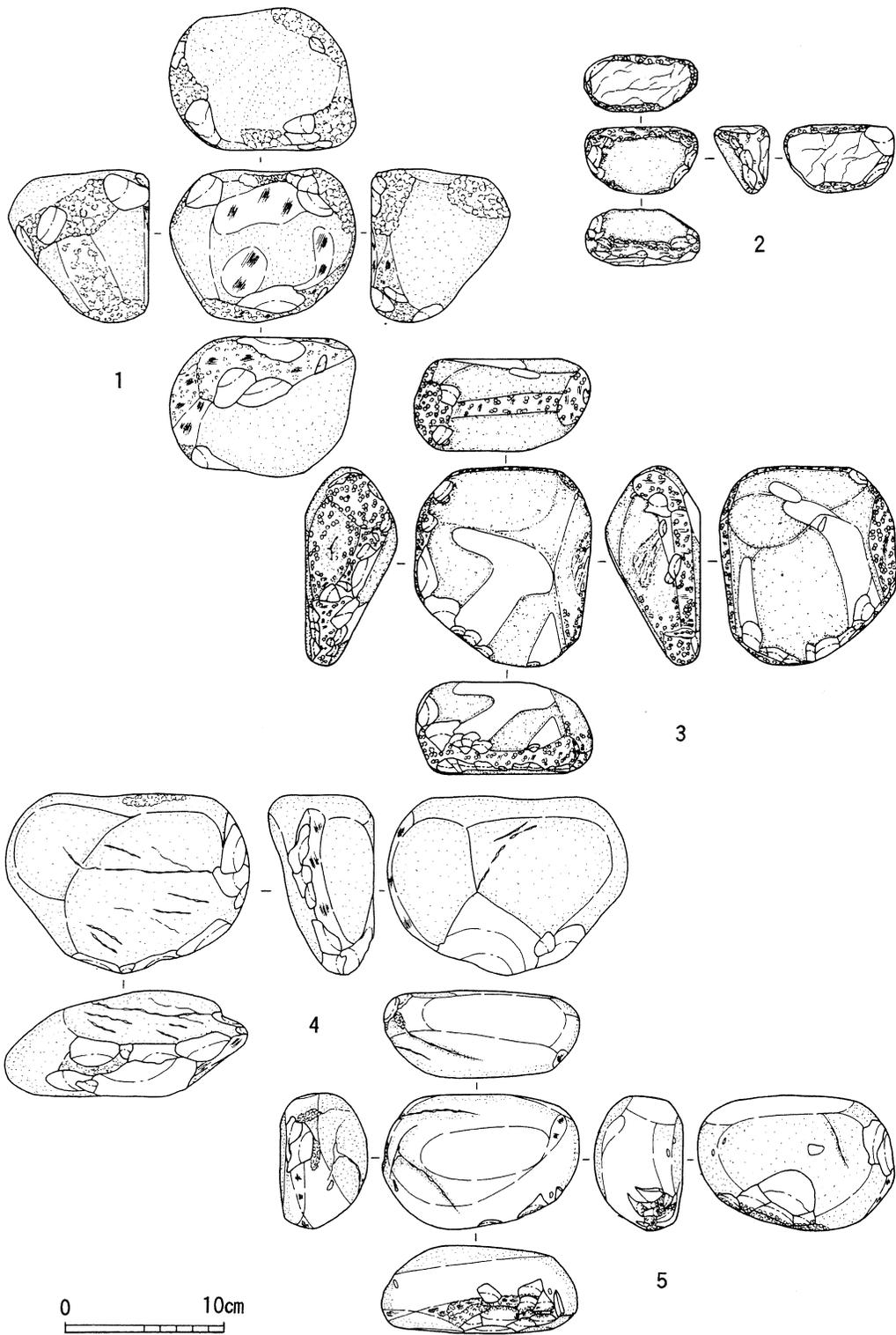


図17 たたき石 (B類)

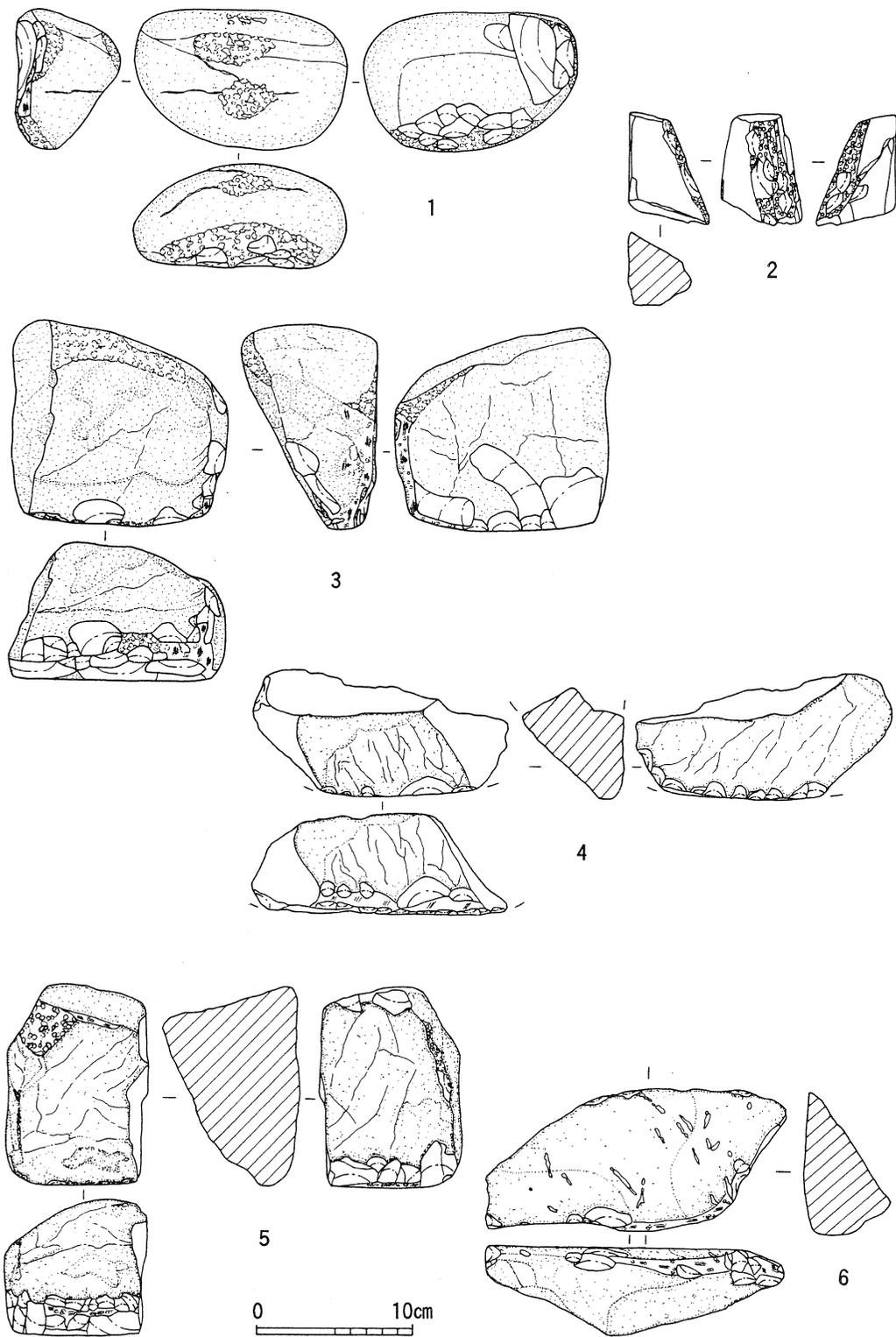


図18 たたき石 (B類)

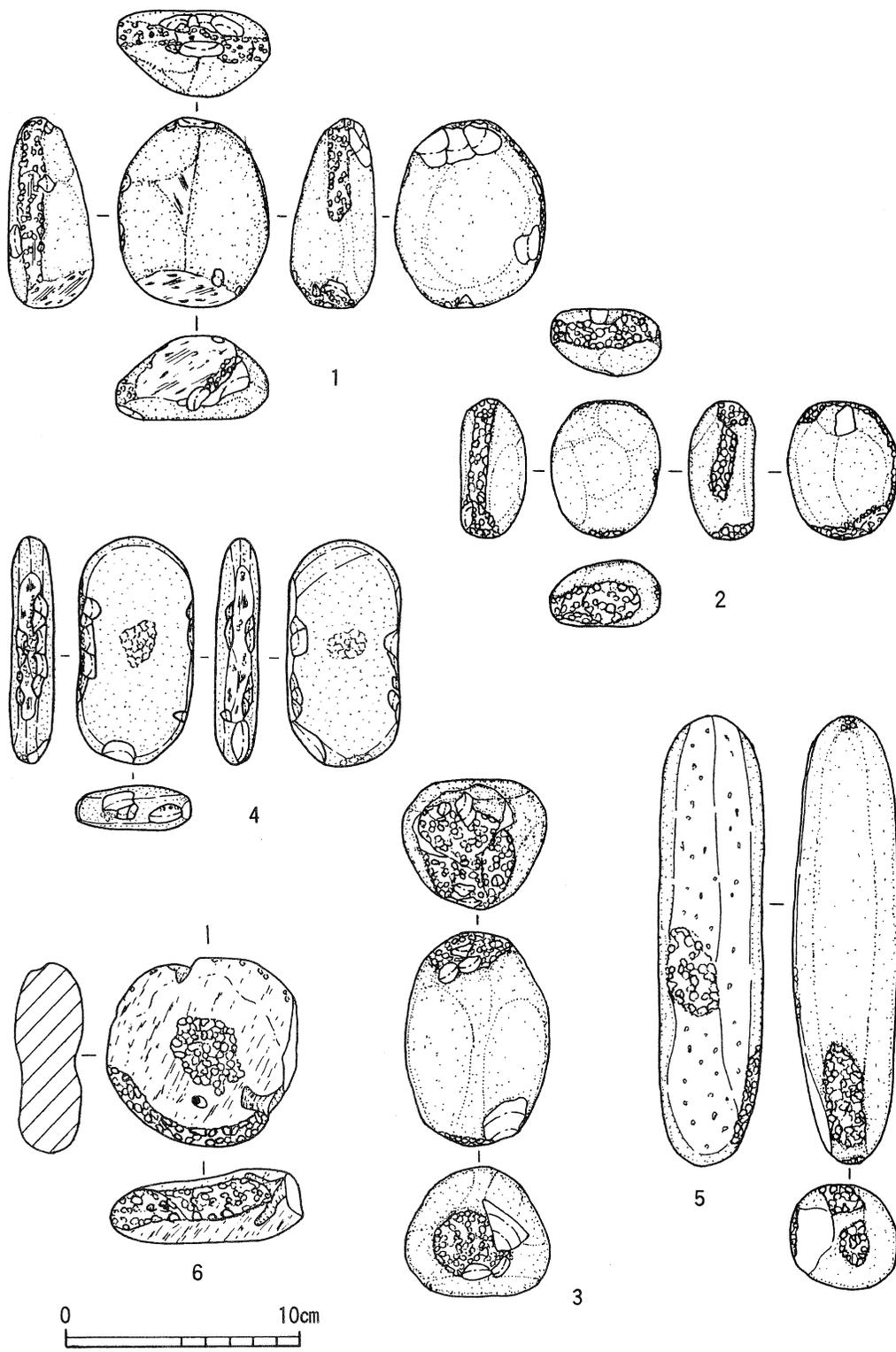


図19 たたぎ石 (C類)

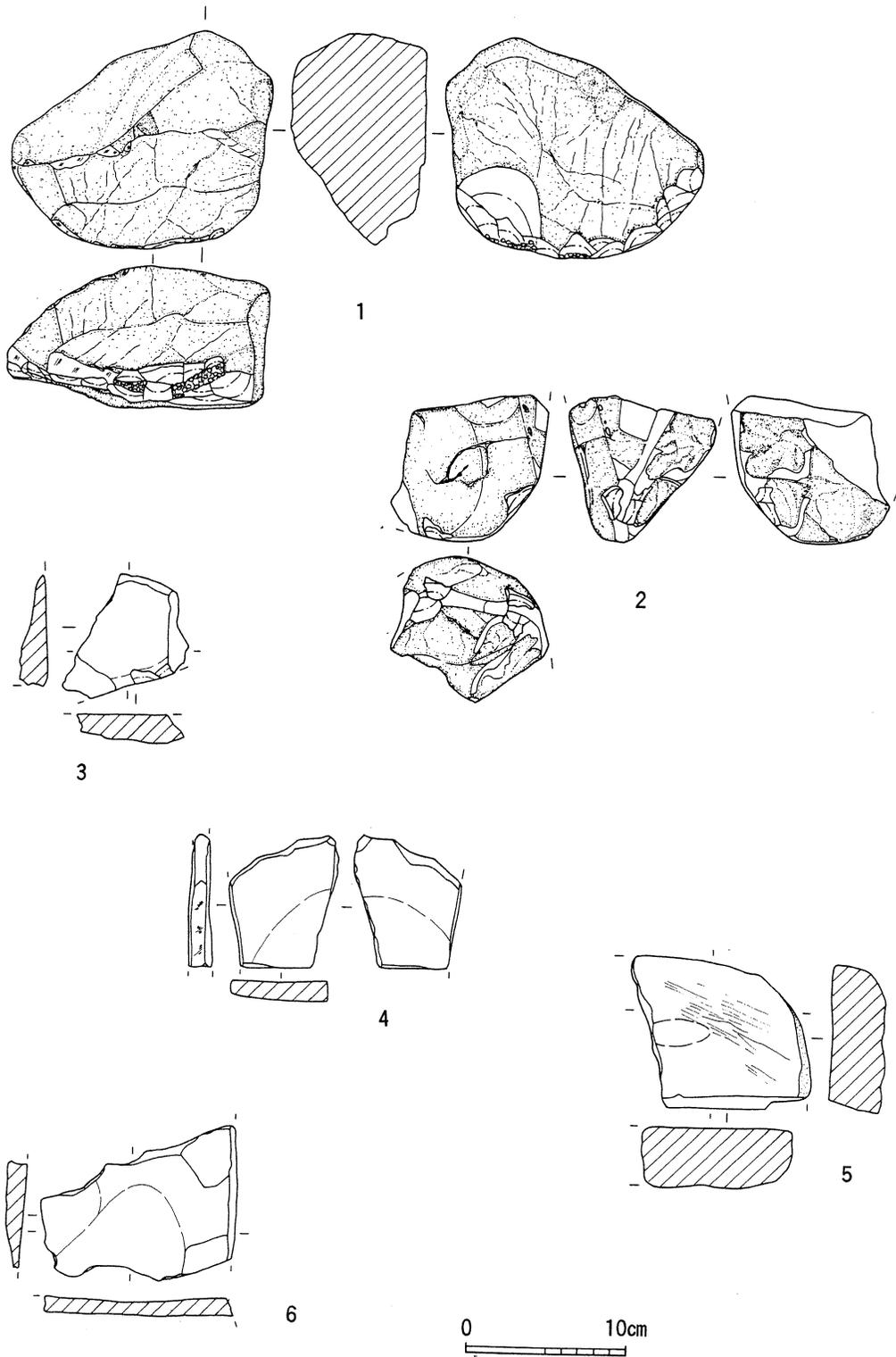


図20 すり石 (1・2)、砥石 (3~6)

4. 土 器

今回の調査で得られた土器は、出土区によって器形などの特徴が異なり、特に沖縄編年後期（高宮暫定編年の後期）の土器は時期差があると考えられることから、ここでは区別に述べることにする。区は1から19ラインまでを南区、20ライン以降を北区として扱う。

南区の土器

ここで扱う土器は、19ライン以南のグリッドから出土したものである。その大半は沖縄編年後期に属するものであるが、交易によって持ちこまれた弥生土器や奄美諸島で見られる土器もわりと得られた。また、土壌からは沖縄編年前期（前Ⅳ期）の仲泊式土器が出土し、下層から前Ⅱ期のや室川下層式土器が若干得られた。

なお、後期土器の分類については、後述する北区の土器の分類基準を用いた。

(1) 前期土器

縄文期に属する土器が最下層から若干得られた。型式が判明できたものは、前Ⅱ期（縄文前期）に位置づけられる室川下層式土器と前Ⅳ期前半（縄文後期前半）に所属する仲泊式土器の2タイプである。特に、仲泊式土器は伊江島では初めての出土例であり、同島における土器編年の空白部を埋める貴重な資料である。以下、これらの土器について簡記する。

室川下層式土器

図21に示したもので、3点出土している。いずれも小破片で、全体形をうかがうことはできないが、これまでの資料から尖底の深鉢形になると考えられる。

1は口縁部資料で、口唇部と口縁上端に斜位の刻文を施している。口唇は平坦に成形され、ほぼ直口口縁になると思われる。黒褐色を呈し、粗粒石英を多く含んでいる。H-18グリッドの4層から出土したものである。

2も口縁部資料で、口縁部に左下がりの刻文を施している。口唇は丸みを帯び、若干内傾する器形になる。器面の保持は悪く、混和材が器表面に露出している。表面は茶褐色、裏面は黒褐色を呈し、粗粒石英を多量含んでいる。E-11グリッドの4層から出土したものである。

3は胴部資料で、表面に斜位の刻文と沈線文を施している。器面はかなり荒れており、混和材が器表面に露出している。黒褐色を呈し、粗粒石英等を多量に含んでいる。F-18グリッドの4層から出土したものである。

仲泊式土器・その他の前期土器

図22に示したもので、口縁部資料7点と胴部資料が3点得られた。

1はH-12グリッドで検出された土壌内から出土したものである。推算口径は17cmを測り、

口縁は仲泊式土器特有の肥厚帯をなし、そこに貝殻腹縁による刻文を施している。肥厚帯下には鋸歯状の沈線文がみられる。淡い褐色を呈し、砂粒をわりと含んでいる。

2～4は口縁部の小破片で、全体形をうかがうことはできないが、文様などの特徴から仲泊式土器になるものと考えられる。いずれも口縁が肥厚をなし、そこに貝殻腹縁による刻文を施し、肥厚帯下には斜沈線を施文している。2・3は茶褐色、4は黒褐色を呈し、いずれも微砂粒を含んでいる。いずれも4層から出土したものである。

5はかなりの細片であるが、口縁に貼付している凸帯や刻文の状況から面縄前庭式土器になると思われる。胎土や色調などは2～4に類似している。H-12の4層出土。

6は縦位に凸帯を貼付するもので、型式は判然としないが、胎土などの特徴から本類に含めた。H-12の4層から出土したものである。

7は口縁破片で、若干内湾する器形をなす。口縁に縦位に沈線を施しており、型式は判然としないが、胎土などの特徴はこの時期のものであることから本類に含めた。G-14の4層から出土したものである。

9は肥厚帯が欠失しているが、斜沈線を施していることや胎土・色調などの特徴より仲泊式土器に属するものと考えられる。H-12の4層から出土したものである。

8・10は胴部片で、いずれも斜沈線を施しており、仲泊式土器の範疇に入るものと思われる前者はH-12の4層、後者はE-15の4層から出土したものである。

11～13は底部の小破片であるが、胎土や色調などの特徴より前期に属するものであることがうかがえる。11はG-13の4層、12・13はH-12の4層から出土したものである。

(2) 後期土器

今回の調査においては、沖縄後期に属する土器が最も多く得られた。南区の特徴は、尖底の深鉢形土器が主体をなしていることである。後述する北区が、くびれ平底の甕形土器を主流としていることは大きな相違がみられる。このことは、これまでの調査研究から、時期差があるものと考えられており、尖底がくびれ平底に先行するようである。

出土土器の特徴的なものを図23から図36に示した。以下、これらの土器について簡記するが分類基準は北区のそれに準ずることとする。

〔有文土器〕

有文土器は出土量が少ないうえ、いずれも小破片で、器形等がわかるものは僅かである。そのため、文様形態により分類を行い、沈文主体のものを第1群、浮文主体のものを第2群として扱った。

第1群に属するものを図23の1～13に示した。

1と2は壺形になると考えられるもので、前者は推算口径が5cmを測り、頸部に幅広の沈

線文を施している。口唇は平坦に成形され、わりと幅がある。器面はナデ調整を行い、器壁は7mmと厚手である。茶褐色を呈し、砂粒を含んでいる。D-7グリッドの1層出土。後者も頸部に幅広沈線文を施している。口唇は舌状に成形され、器面はナデ調整を行っている。茶褐色を呈し、微砂粒を若干含んでいる。F-19グリッドの1層出土。

3・4は傾きから深鉢形になるものと思われ、いずれも口縁に幅広の沈線文と、口唇部に刻文を施している。前者はナデ調整を行い、黒褐色を呈し、砂粒を若干含んでいる。E-19グリッドの1層出土。後者もナデ調整を施し、橙褐色を呈し、微砂粒を含む。D-12グリッドの2層出土。

5は胴部の小破片で、幅広沈線文を施している。器面はナデ調整を行い、暗褐色を呈し、砂粒を多く含んでいる。G-13グリッドの1層出土。

6は小型の深鉢形になるもので、推算口径は5.2cmを測る。口唇部に刻文を施し、口縁部には幅広沈線文と刻文を施している。器面はナデ調整を行い、茶褐色を呈し、砂粒を若干含んでいる。D-8グリッドの2層出土。

7・8は深鉢形になるもので、いずれも口唇部と口縁部に刻文を施している。前者は口縁上端に粘土紐を貼り付け、口唇を幅広く成形している。施文具は半裁竹管状のもので、文様は弧状をなし、口唇と口縁の施文方向が逆になっている。暗褐色を呈し、微砂粒を含む。G-18グリッドの1層出土。後者は幅の異なる刻文を横位に2条みられる。器面は丁寧なナデ調整を施している。茶褐色を呈し、微砂粒をわずかに含んでいる。F-19グリッドの1層出土。

9~13は口唇部のみに刻文を施すグループである。9は口縁が外反する器形をなし、器面はナデ調整を行っている。黒褐色を呈し、砂粒をわりと多く含む。D-8グリッドの2層出土。10は口唇を幅広く成形したもので、器面はナデ調整を施している。黒褐色を呈し、微砂粒を含んでいる。D-7グリッドの1層出土。11は口唇を舌状に成形し、そこにラフな刻文がみられる。ナデ調整を行い、暗褐色を呈し、砂粒を多く含む。G-18グリッドの1層出土。12~13は口唇を平坦に成形し、そこに半裁竹管状の工具による刻文がみられる。いずれも小片で器形等は判然としない。前者がE-8グリッドの1層、後者はG-18グリッドの1層出土。

第2群に属するものを図23の13と図24に示した。

図23の13は口縁に微弱な凸帯をつまみ出して造りだしている。凸帯上には刻文を施し、口縁上端を折り曲げて幅広く成形している。器面はナデ調整を行い、茶褐色を呈し、砂粒を若干含んでいる。I-19グリッドの1層出土。

図24の1は口縁が外反する甕形をなすもので、口縁付近に波状の凸帯を貼付している。口唇部と凸帯下には不規則な沈線文を施している。入念なナデ調整を行い、裏面には横位の擦痕が消えきらず残っている。暗褐色を呈し、砂粒をわりと含んでいる。F-19グリッドの1層出土。

2は一部欠損しているが、口縁上端に凸帯を貼付し、口唇を幅広く成形している。口唇部には刻文を施し、ナデ調整を行っている。茶褐色を呈し、微砂粒を若干含んでいる。G-19グリッ

下の1層出土。

3～8は胴部片で、いずれも凸帯を貼付している。3・4・6・7は凸帯のみに刻文を施し、5は凸帯とその上方に刻文を施している。8は他の資料と凸帯の形状が異なり、縦位に貼付している。凸帯に刻文に施し、器面には沈線文を描いている。すべてナデ調整を行い、器色は3・5・8が茶褐色、4・6・7は暗褐色を呈する。胎土には砂粒を含んでいる。3・8がE-19グリッドの1層、4・6はG-18グリッドの1層、5はF-19グリッドの1層、7がD-11グリッドの3層出土である。

9は深鉢形になるものと思われ、無文の凸帯を横位に貼付している。器面はナデ調整を施し、茶褐色を呈する。砂粒を多く含み、焼成はやや良い。D-11グリッドの2層出土。

10は口縁がわずかに内湾する深鉢形になるもので、いわゆる鞍状凸帯を貼付している。ナデ調整を行い、淡褐色を呈し、微砂粒を若干含んでいる。G-13グリッドの1層出土。

11は胴部片で、断面三角形のわりと大きな凸帯を貼付している。他に文様はみられず、器面はナデ調整を施している。暗褐色を呈し、砂粒を比較的多く含んでいる。E-11グリッドの2層出土。

12は口縁部の小破片で、斜めに凸帯を貼付している。ナデ調整を行い、茶褐色を呈し、微砂粒を若干含んでいる。D-8グリッドの2層出土。

〔無文土器〕

今回の調査で得られた資料はそのほとんどが小破片で、全体形のうかがえるものは少ない。そのため、口唇部の形状や傾きなどの特徴から分類を試み、基本的には北区分類基準に準じた。器形では甕形と深鉢形をなすものが圧倒的で、明確に壺形をなす資料は確認できない。

分類は口唇部の形状により下記の2類に大別し、さらに口縁の傾きで細別した。

A類——口唇部を平坦に成形し、内外端に稜を有するもの。口唇を幅広くしたものがわりと多く見受けられる。

a種——口縁部が外反するもので、ほとんどが甕形をなす。

b種——口縁部が直口もしくは内湾するもので、ほとんどが深鉢形をなす。

B類——口唇部が丸みを帯びたり、舌状に成形するもの。

a種——口縁部が外反するもので、ほとんどが甕形をなす。

b種——口縁部が直口もしくは内湾するもので、ほとんどが深鉢形をなす。

A類a種に属するものを図25と図26に示した。

図25の1は唯一口径が求められたもので、21.6cmを測る。口唇部はいくぶん外側に張り出すように成形され、幅広くなっている。器面は表裏面とも丁寧なナデ調整を施している。器壁は8mmと比較的厚く、灰褐色を呈し、砂粒を若干含んでいる。F-13の1層出土。

他の資料をみると、器壁に比べて口唇部を幅広く成形しているもの（図25の4・7・8、図

26の1・4・7～9)、器壁がわりと厚いもの(図25の3・5、図26の1・2・4・6)などの特徴がある。ほとんどがナデ調整を施しているが、一部に整形時の指圧痕が残っているものがある。器色は茶褐色を呈するものは図26の8と9のみで、他は暗褐色を呈している。胎土中に砂粒を混入するものが多いが、図25の2は角セン石などの鉱物を多量含み、いわゆる浜屋原C類土器に類似している。また、これらの鉱物を含む粘土は伊江島に産しないことより、島外からの持ち込みであることがうかがえる。出土層位は1層(図25の1～3・10、図26の3・5・8・9)、2層(図25の5・7、図26の1・7)、3層(図25の4・6、図26の2・4・6)となっている。

A類b種に属するものを図27と図28に示した。

いずれも小破片で、口径が求められる資料は得られなかった。これらの土器の特徴を概観すると、器壁の厚さのわりに口唇部を幅広く成形しているものはa種に比べて少ない(図28の1・2・4)。器壁が比較的厚いもの(図27の7、図28の1・3・10)、色調は茶褐色を呈するものは図27の1・7・8、図28の1・3・8で、他は暗褐色ないし黒褐色を呈している。混和材はa種と同様に砂粒が多いが、図27の2と6は前述した浜屋原C類土器に類似した鉱物を含んでいる。ほとんどがナデ調整を施すが、整形時の指圧痕が消えきらず残っているものがある。出土層位は1層(図27の1～6・8・9、図28の1・3・8・10)、2層(図27の7・10～12、図28の2・5・7)、3層(図28の4・6・9)となっている。

B類a種に属する特徴的な資料を図29と図30および図33の1に示した。

図33の1はわりと大型の破片で、口縁が外反する甕形になると考えられる。推算口径は23cmを測り、器面はナデ調整を施すが、徹底してなく、積み痕が確認できる。器壁は9mmと比較的厚く、灰褐色を呈し、砂粒を若干含む。F-13の3層出土。

他の資料はいずれも小破片で、全体形はもとより、口径を求めることもできない。口縁の傾きがほとんどが甕形になると思われる。これらの特徴をみると、器面はすべてナデ調整を施すが、整形時の指圧痕が消えきらず、残っているものが多い。器壁は6mm前後のものが主体をなすが、なかには8～9mmと相対的に厚いものがある(図29の4、図30の6)。器色は暗褐色ないし黒褐色を呈するものがほとんどで、わずかに茶褐色を呈するもの(図29の2、図30の4・5・9)がある。胎土には砂粒を含んでいるものが圧倒的である。出土層位は、1層(図29の1・2・6～8・10、図30の1～3・5・7)、2層(図30の4・8～10)、3層(図29の3～5・9、図30の6)となっている。

B類b種に属するものを図31と図32および図33の2に示した。

図33の2はD-10グリッドの2層において、潰れた状態で一括出土したものである。口縁部が内湾する深鉢形になるものと考えられる。底部は無いが、他遺跡の類似資料では乳房状尖底になっている。器面は入念なナデ調整を施すが、積み痕や整形時の指圧痕が残っている。器色は基本的に茶褐色を呈するが、表裏面の一部に黒斑がみられる。微砂粒をわりと含んでいる。

他の資料は小破片のため、全体形をうかがうことはできない。a種と同様に特徴を概観すると、器色はすべてナデ調整を施しているが、徹底しておらず、整形時の指圧痕が残っているものが多い。器壁の厚さは6mm以上の厚いものや、5mm以下の薄いものなど多様である。焼成は全体的に良好で、器色は茶褐色を呈するものが若干あり(図31の2・6・7・9、図32の3・10・16・18)、残りは暗褐色ないし黒褐色を呈している。胎土中には砂粒を含むが、それほど多くはない。出土層位は、1層(図31の1～3・5・9・10、図32の1・3・6・9～13・18・19)、2層(図31の7・11・12、図32の8・15)、3層(図31の4・8、図32の4・5・7・14・17)となっている。

〔特殊土器〕

器形などが判然としないものを本項で扱う。図34に示したものがそれで、以下、特徴などを略述する

1は傾きから壺形になると思われるが、小破片のためにはっきりしない。器面は入念なナデ調整を施している。器壁は7mmとわりと厚く、焼成は良好である。茶褐色を呈し、砂粒を若干含んでいる。G-19の1層出土。

2は口縁部に弧状の凸帯を貼付するもので、外耳状をなし、他の凸帯文土器とは異なっている。器面は丁寧なナデ調整を施し、焼成は普通である。暗褐色を呈し、砂粒を多く含む。これらの特徴より後期土器の範疇からはずれるものと思われるが、判然としないためにここで扱った。F-12の4層出土。

3も小破片のため明確ではないが、片口注口土器の一部と思われる。焼成は良好で、茶褐色を呈し、微砂粒を若干含んでいる。E-19の1層出土。

4～6は小孔を有するもので、前二者は焼成後の二次穿孔であるから、補修孔の可能性がある。6は一次穿孔であるが、胴部片のため、位置関係が不明で孔の性格が判然としない。いずれもナデ調整を施し、4と6は暗褐色、5は茶褐色を呈する。焼成は比較的良く、砂粒を含んでいる。4はE-14の1層、5と6はF-10の1層から出土したものである。

〔底部〕

今回の調査で得られた特徴的な資料を図35と図36に示した。すべてが破片で、口縁部片との関係は明確ではないが、他遺跡の資料を参考にすると、尖底は深鉢形、平底は甕形になるようである。本区では尖底が主体をなし、後述する北区が平底を主体としているのとは対称的な出土状況である。以下、これらの底部について簡記する。

図35に示したものは、いわゆる乳房状尖底と称されるもので、なかには外底面が平坦になり平底の感を抱かせるものもあるが、平底との大きな違いは、内底面(見込み)の部分が平坦になっていないことである。これらの特徴を概観すると、1は典型的な乳房状尖底で、積み痕の

部分で破損している。器面はナデ調整を施すが、徹底しておらず、整形時の指圧痕が残っている。焼成は良好で、茶褐色を呈し、砂粒を若干含んでいる。D-12の2層出土。

8~12・15・16は平底のように見えるが、整形時に底面が押し潰されたことによる結果である。いずれもナデ調整を施し、焼成は良好である。色調は茶褐色を呈するものが多く、砂粒を含んでいる。その他の資料も同様な特徴を有している。出土層位は、1層（2~8・12・15~19・21）、2層（1・9・11・14）、3層（10・13・20）となっている。

図36の1・2は尖底で、前者は比較的薄く造られ、底面と立ち上がり部の厚さが変わらない。焼成は良く、堅緻である。器外面は煤が付着し、黒褐色に変色している。砂粒を若干含み、器面はナデ調整を施している。G-8の2層出土。

後者はわりと厚みのある底部で、この時期の典型的な資料である。器内外面ともナデ調整を施し、焼成は良好である。茶褐色を呈し、砂粒をわずかに含んでいる。G-19の1層出土。

3~7は平底的な丸底をなすものである。3は内底面に刷毛目状の擦痕を有する。刷毛目は弥生土器の器面調整に良く用いられており、該土器はその影響を受けたものと思われる。焼成は良く、茶褐色を呈し、砂粒を含んでいる。E-19の1層出土。

4・5は器内外面ともナデ調整を施し、焼成は比較的良い。茶褐色を呈し、粗砂粒を多く含んでいる。4がD-8の1層、5はG-19の1層出土。6・7もナデ調整を施し、焼成も良好である。暗褐色を呈し、砂粒を若干含んでいる。7はG-13の1層、8はE-13の1層出土。

8~18はくびれ平底をなすものである。いずれも小破片であるが、底径が求められた資料があり、9が最も大きく8.6cmを測り、他は6cm前後である。いずれもナデ調整を施し、焼成は比較的良好である。茶褐色を呈し、砂粒を若干含んでいる。18のみは、かなり薄く造られ、他のものとは様相を異にしている。出土層位は11・12が3層、他は1層である。

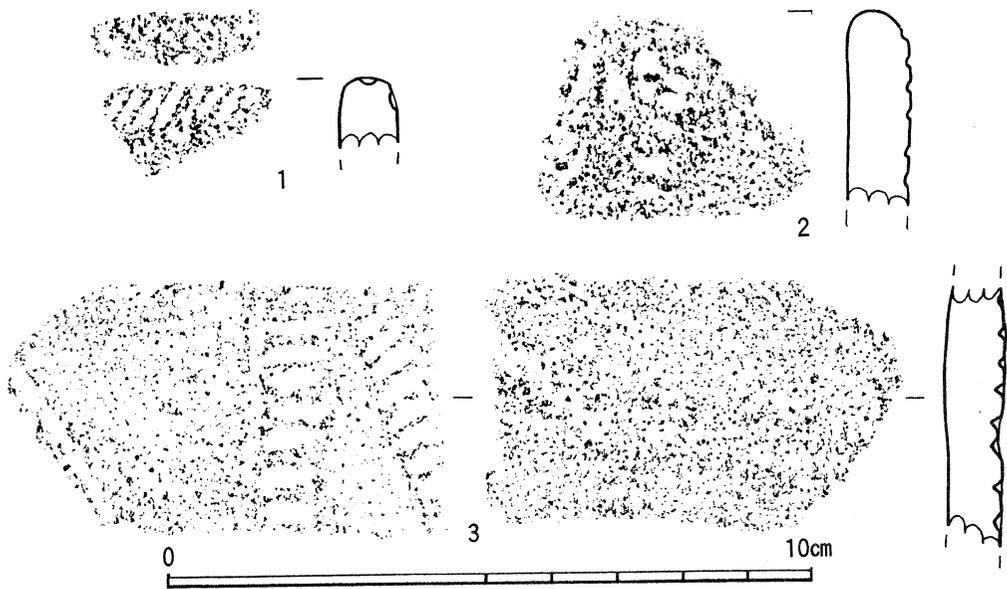


图21 室川下層式土器

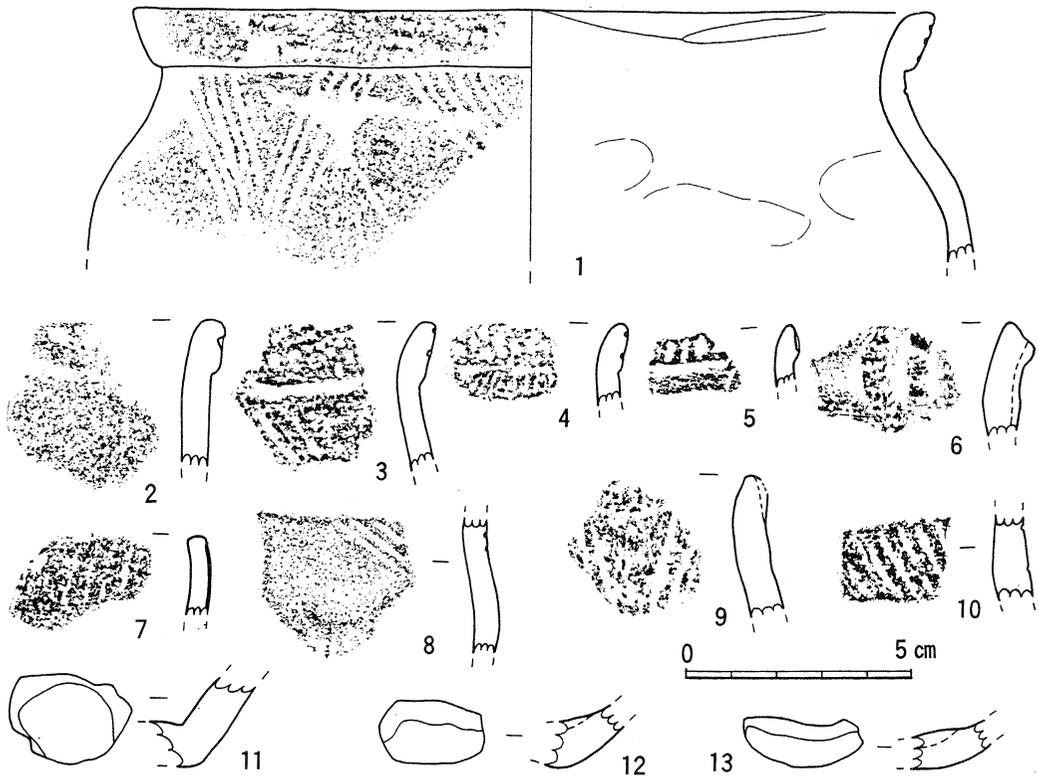


图22 仲泊式土器



图23 後期土器 (1) 有文

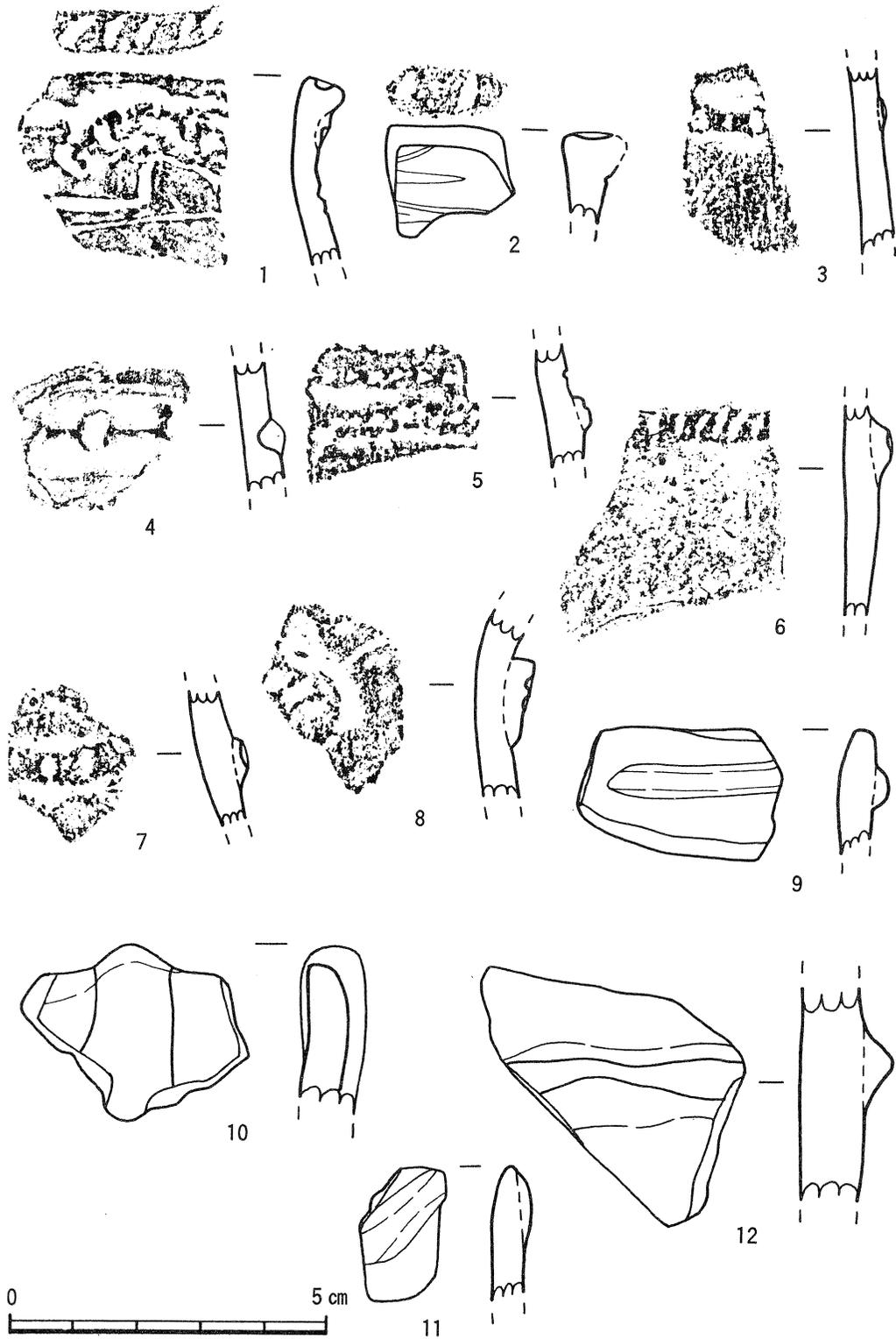


图24 後期土器 (2) 有文

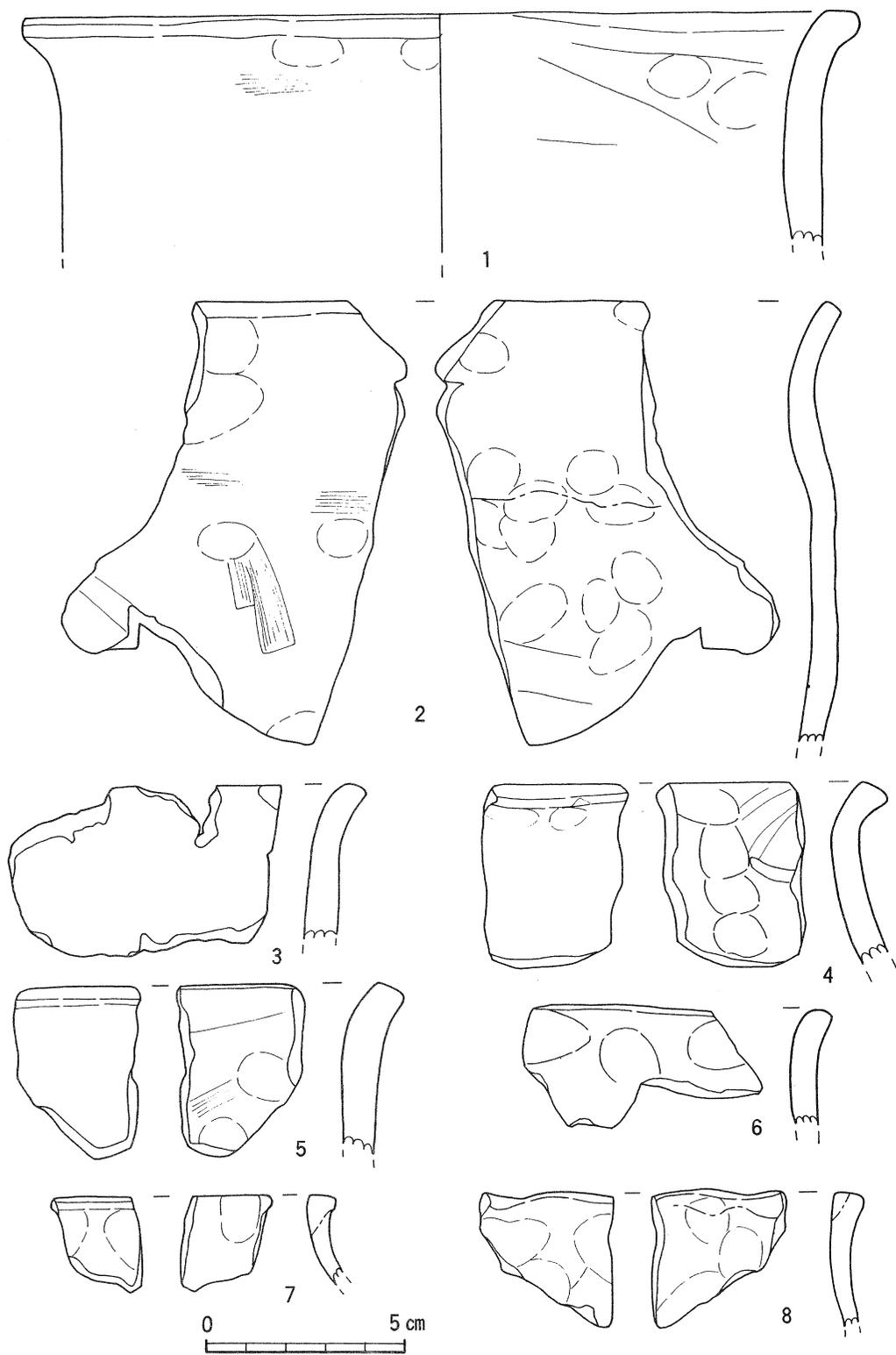


図25 後期土器 (3) 無文壘形

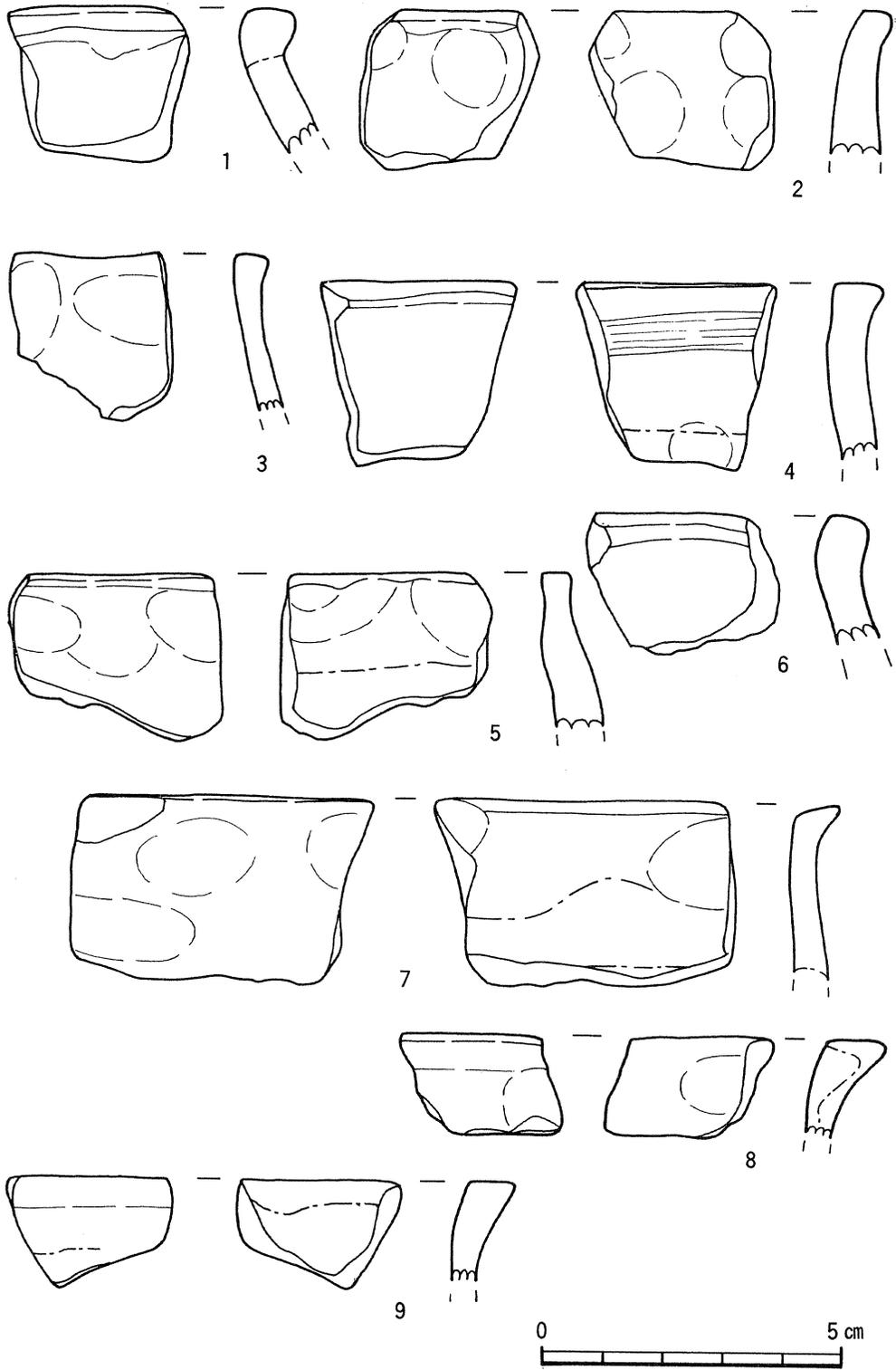


图26 後期土器 (4) 無文壘形

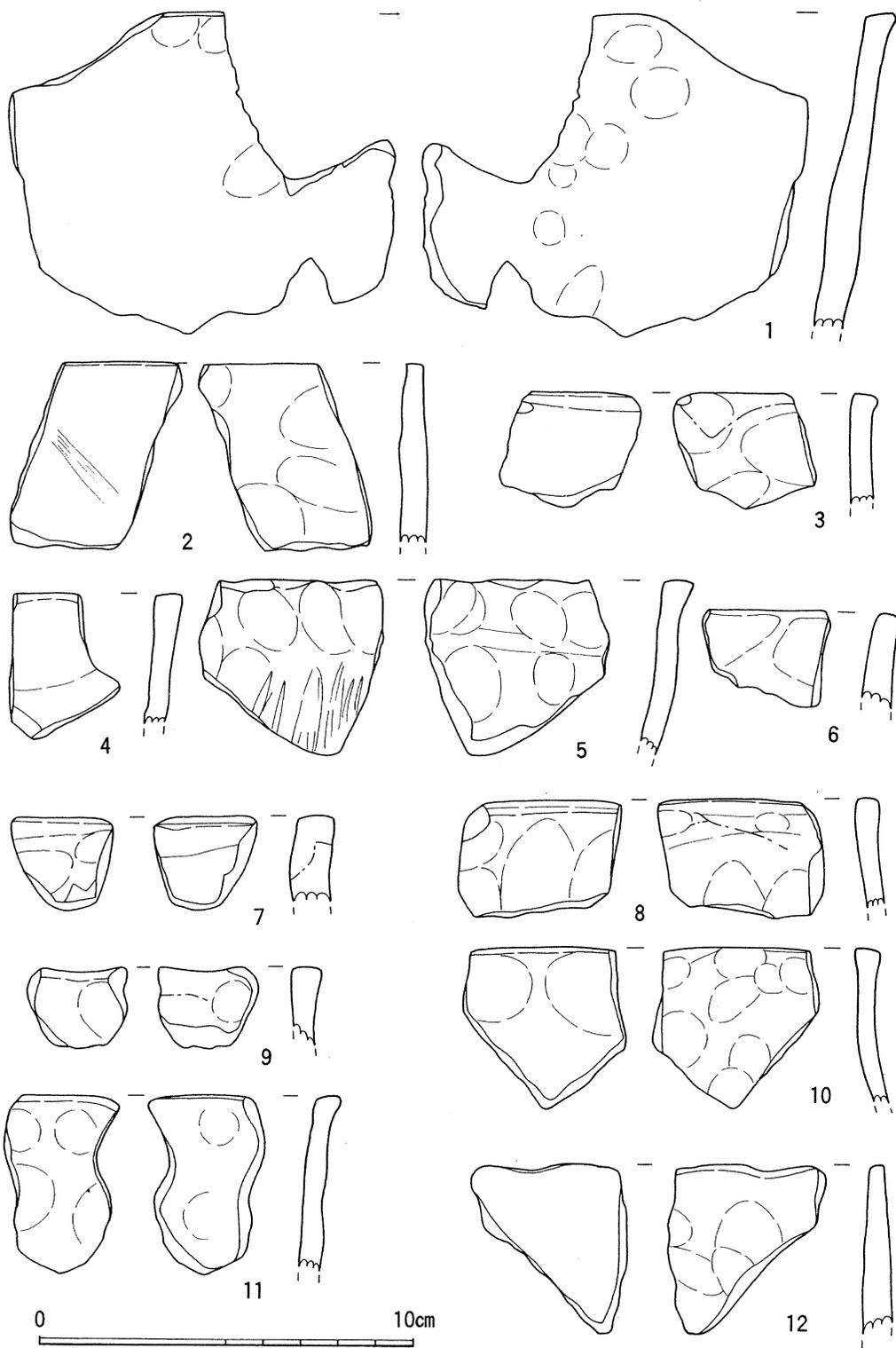


图27 後期土器 (5) 無文鉢形

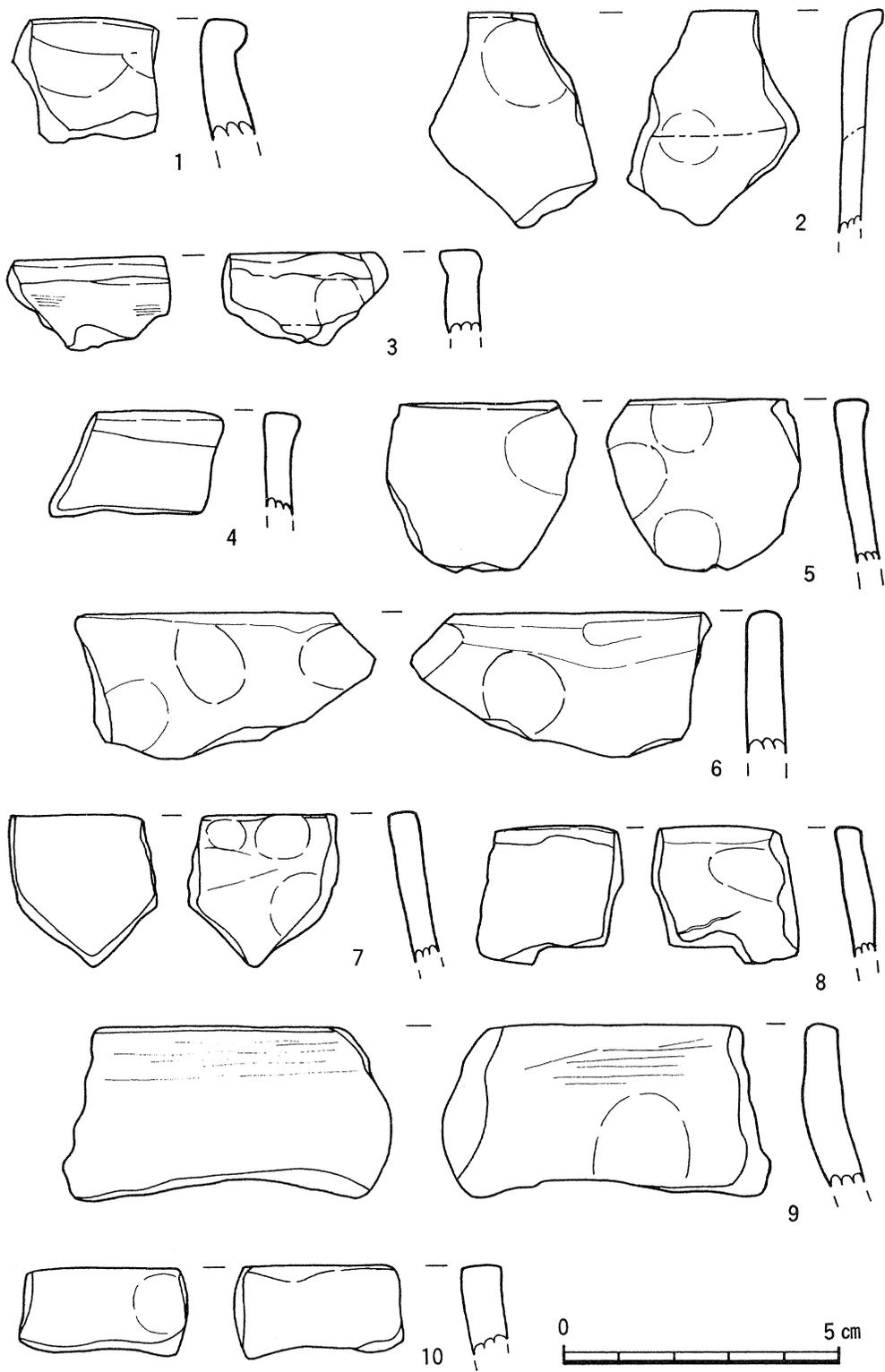


图28 後期土器(6) 無文 鉢形

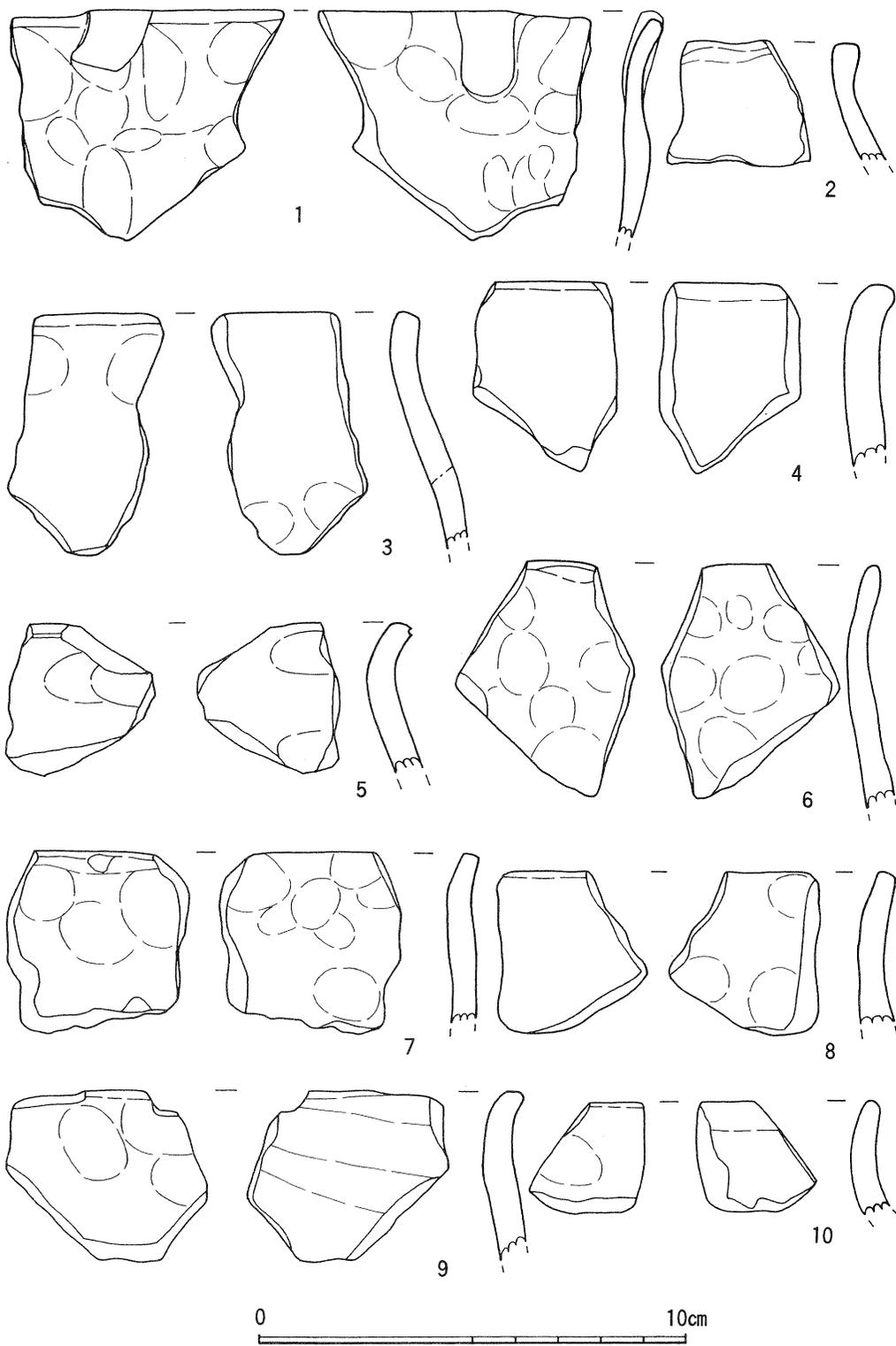


図29 後期土器(7) 無文 壺形

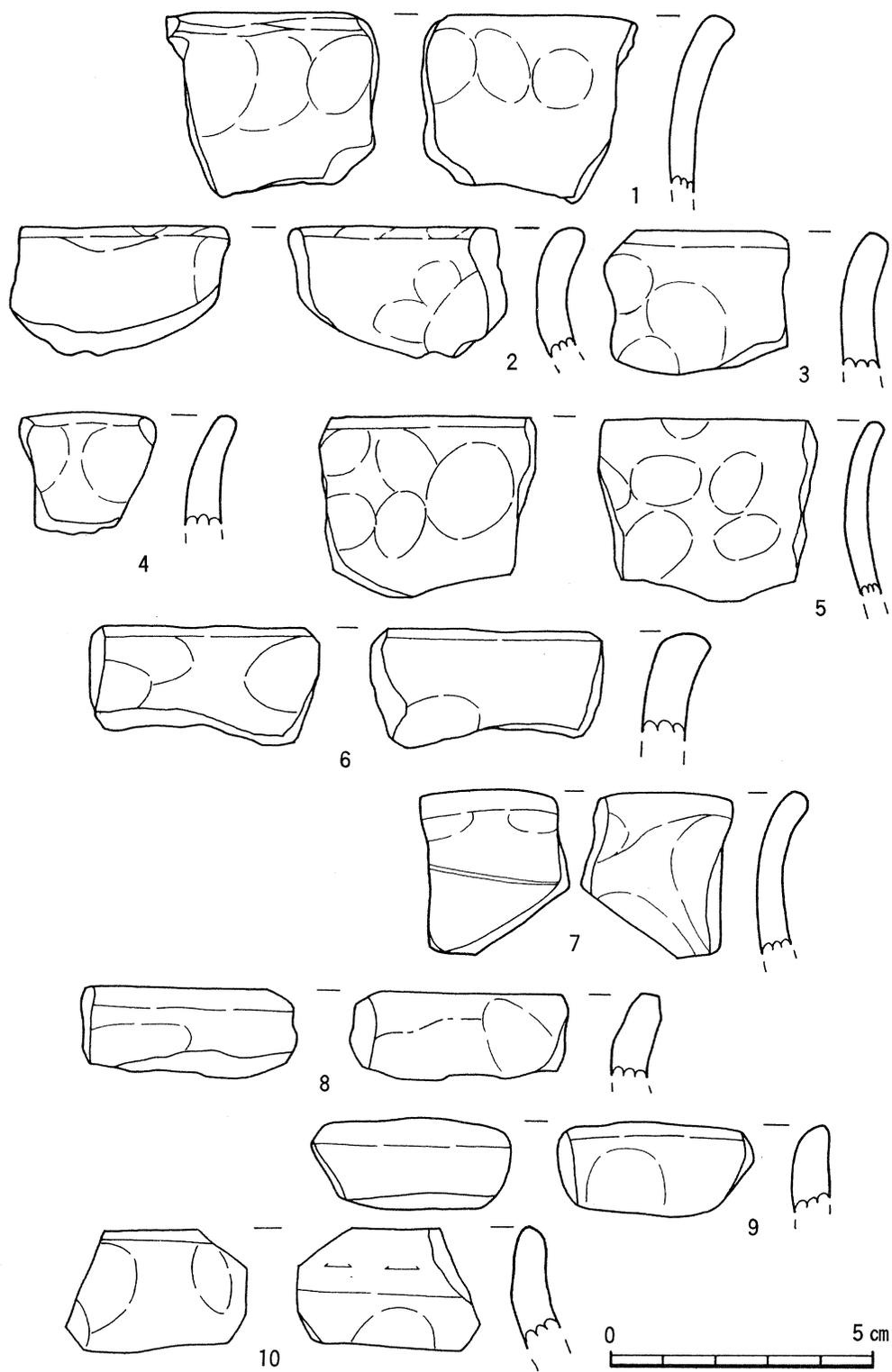


図30 後期土器(8) 無文 壺形

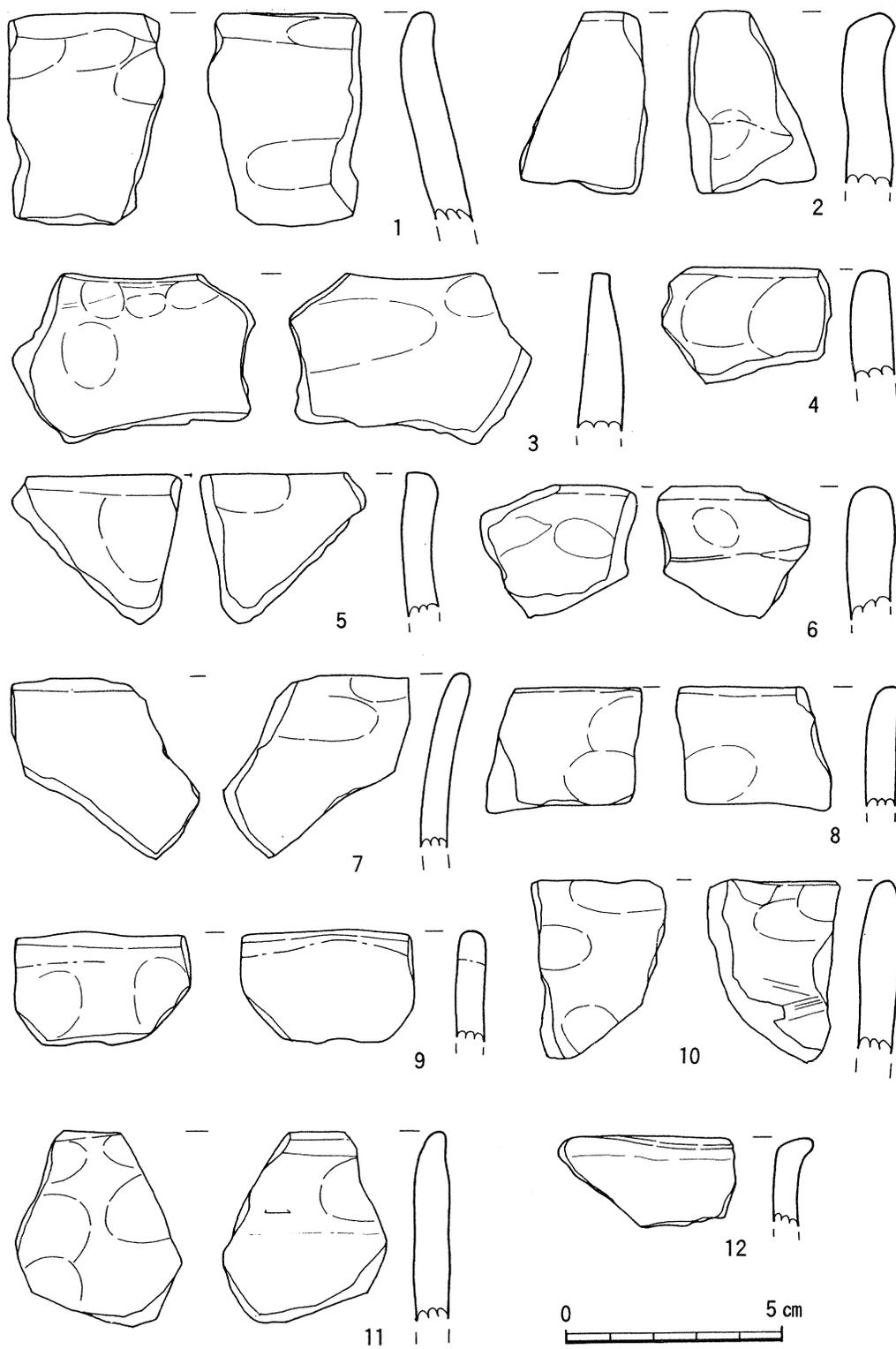


図31 後期土器(9) 無文 鉢形

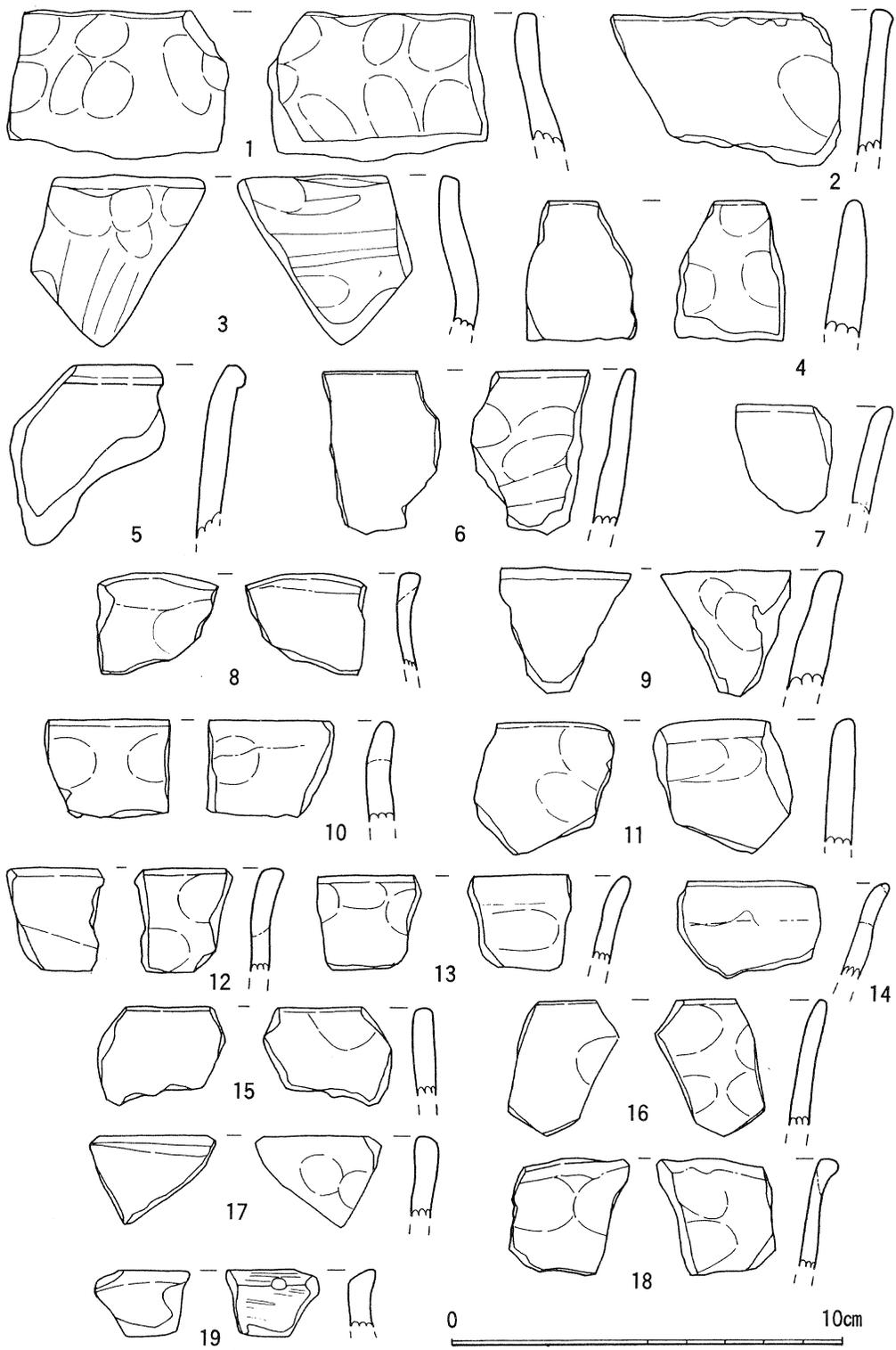
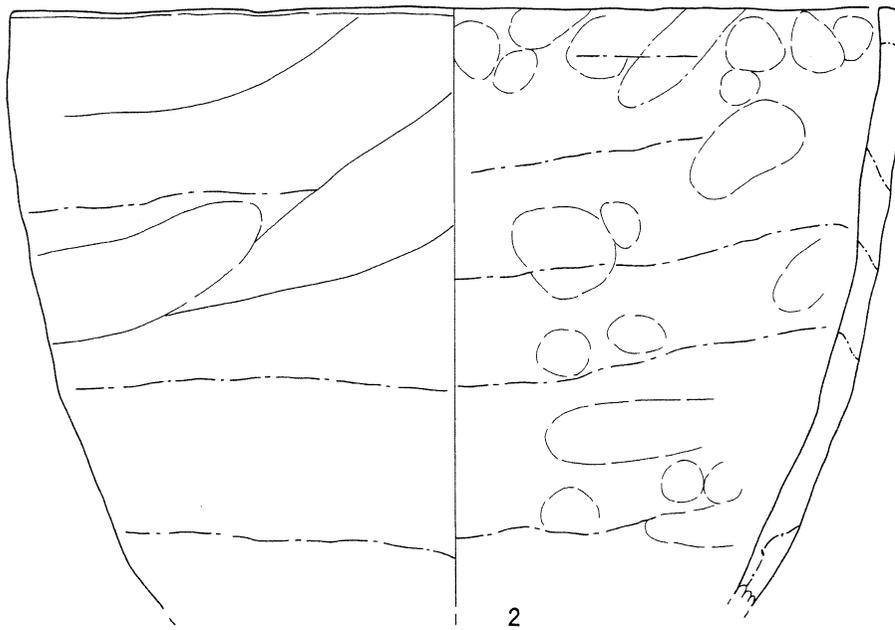
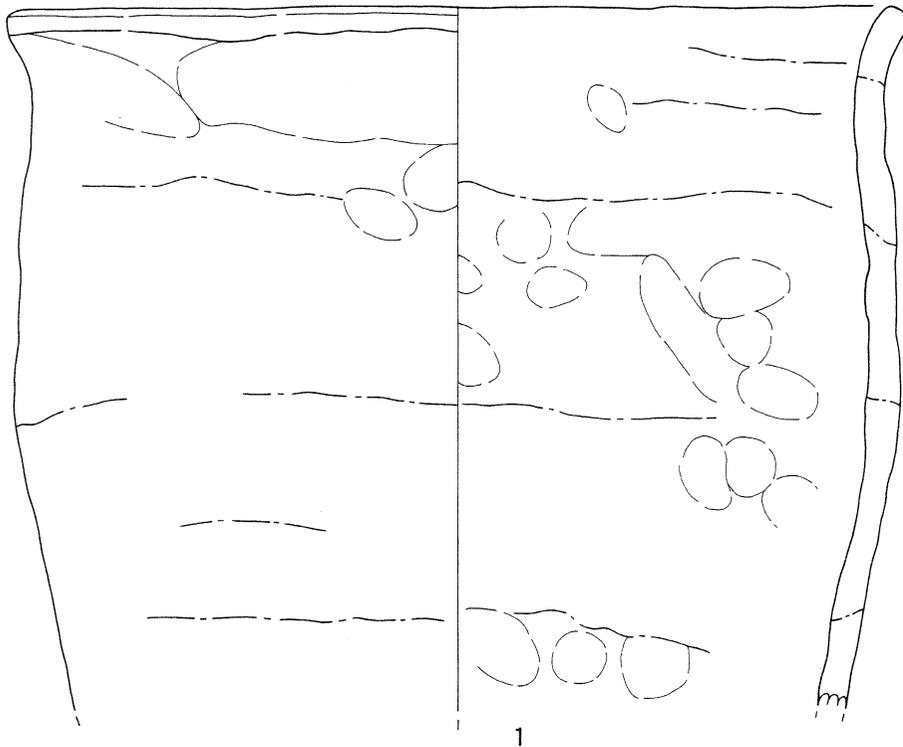


图32 後期土器(10) 無文 鉢形



0 10cm

図33 後期土器(11) 上:無文 壺形 下:無文 鉢形

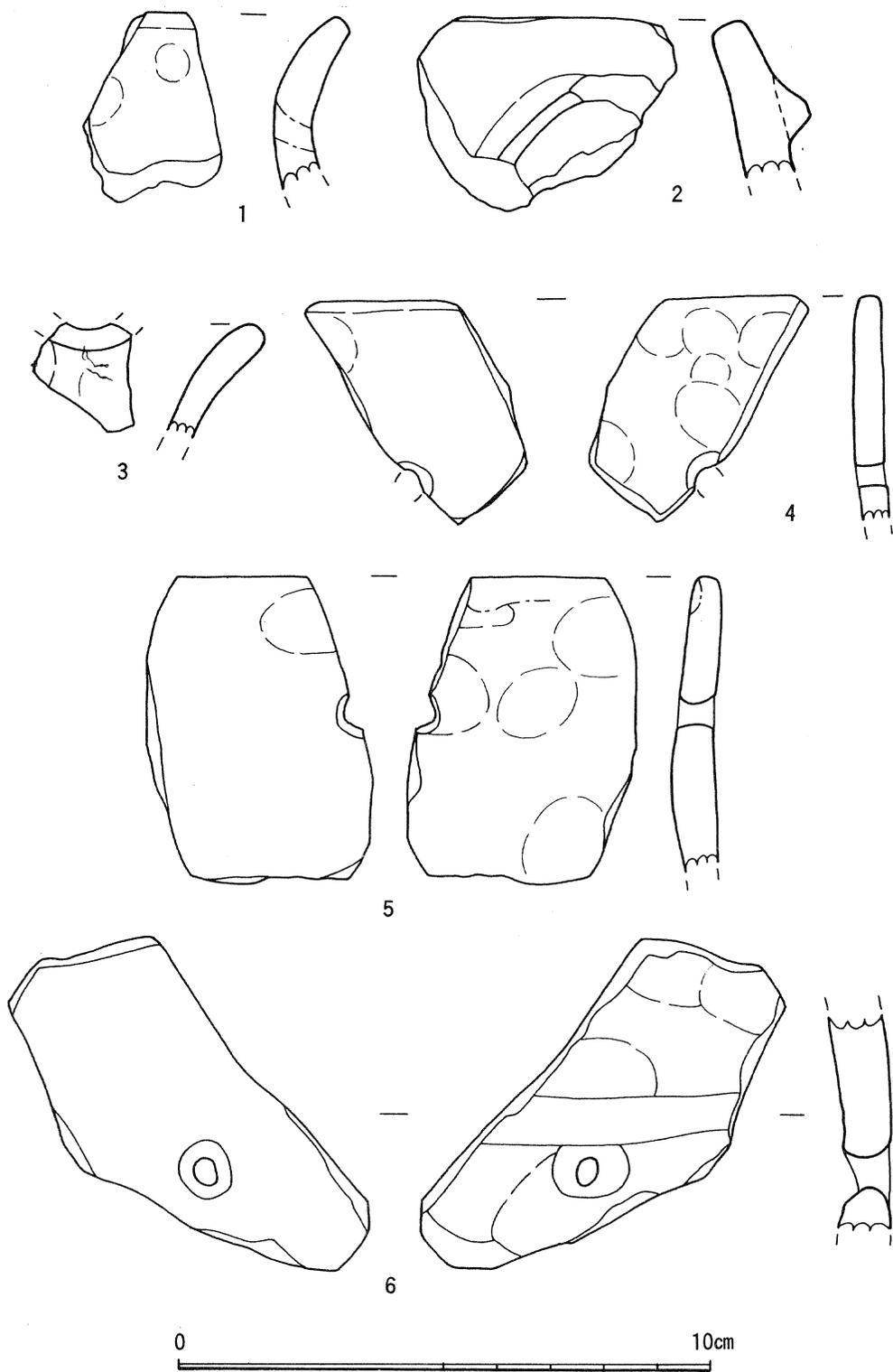


图34 後期土器(12) 特殊土器

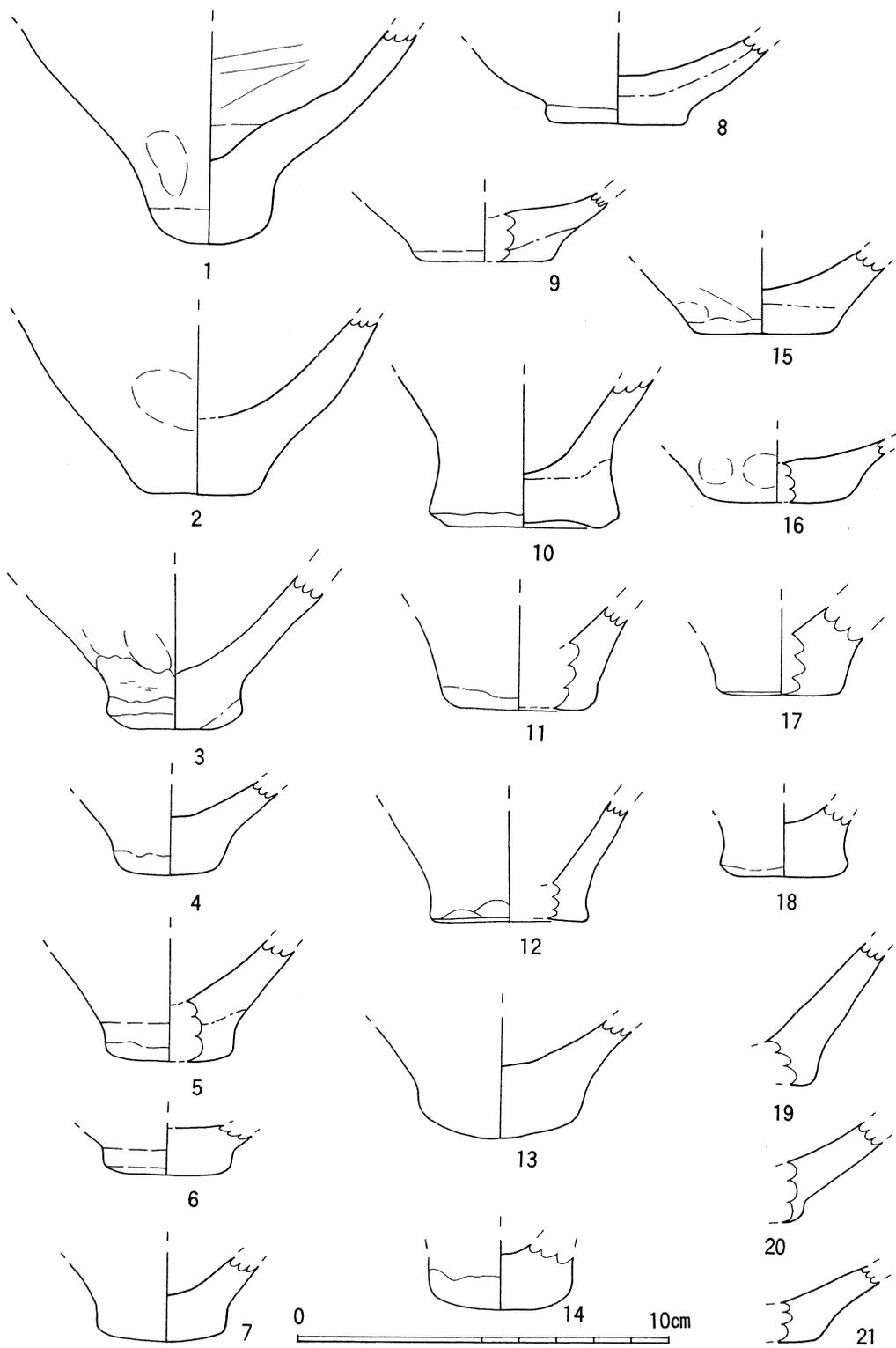


图35 后期土器(13) 尖底

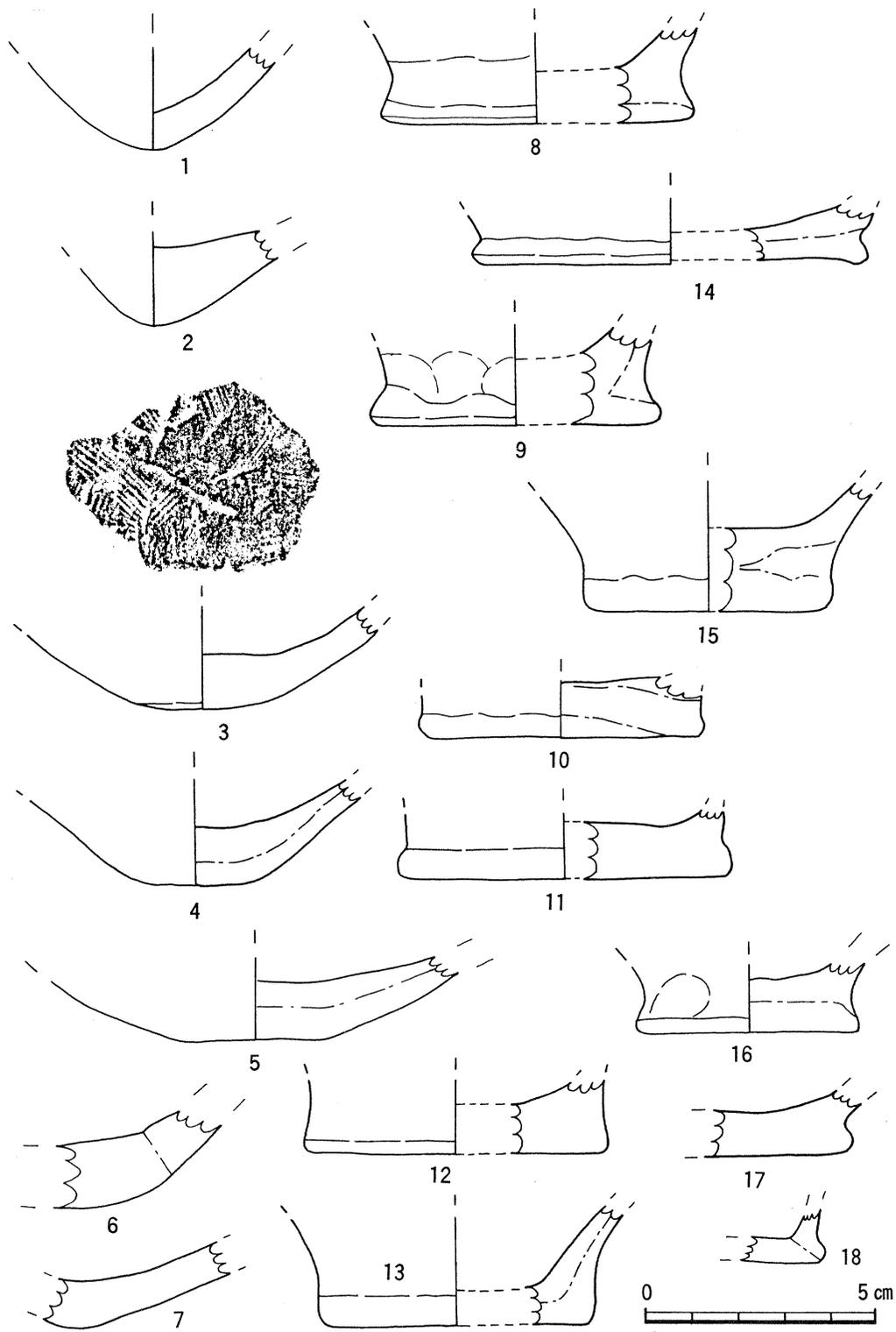


图36 後期土器(14) 尖底·平底

北区の土器

本区の出土土器は、すべて小破片のため全形の窺えるものは1点も得られていない。出土総数は6,143点で、無文口縁部425点・無文胴部5,494点・有文口縁部93点・有文胴部39点・底部79点となっている。出土土器は、高宮暫定編年の後期に位置付けられる在地土器が殆どで、前期土器や移入土器である弥生式土器は僅かな出土量であった。以下、前期土器・後期土器の順に、その概要について述べる。本地区出土の弥生式土器については、別項で記す。

1 前期土器

高宮暫定編年の前期に位置付けられる土器型式群で、3点出土している。

図37の1は、面縄前庭式土器の口縁部資料である。

口唇直下に突帯を1条めぐらし、突帯上には半裁竹管状の工具による刺突文を密に施している。突帯下に斜位の沈線が2条確認できる。胎土中には石英砂粒を多く含み、金色の雲母片もみられる。第4層出土。

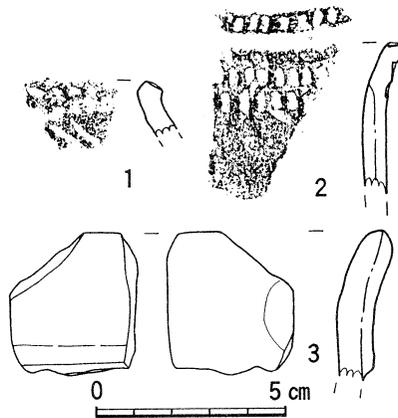


図37 前期土器

図37の2は、神野E式土器の口縁部資料かと思われるものである。やや外反する器形で、口唇部は平坦に整形されている。山形口縁の頂部へ向かう部分かと思われるが、判然としない。文様は口唇部と口唇直下に単篋工具による刺突文をそれぞれ施し、口唇直下には刺突文を2列施文している。器表面は丁寧にナデ調整が行われ、胎土中には特に目立った混入物は見受けられない。第3b層出土。

図37の3は、口縁部が花鉢状に肥厚するカヤウチバンタ式土器の口縁部資料である。口縁部が外反する器形で、胎土中にはチャート片などの砂粒を多く含む。第4層出土。

2 後期土器

高宮暫定編年の後期に位置付けられる土器である。

《無文土器》

無文土器の器種については、胴部以下の器形がわかる口縁資料が少ないため明確ではないが、甕形・鉢形のもが主体であると思われる。壺形土器については、無文土器では1点も得られていない。また、片口土器の注口部と思われるものが、6点得られている。

口縁資料は、口唇部の形状から2つに大別できる。一つは、口唇部を平坦に整形するもの(A類)。もう一つは、口唇部を平坦にしないもので、口唇部の形状が舌状のものや丸みを帯びる

第1表 後期土器出土状況

部 位 層 序	口 縁 部					胴 部			底 部			合計	
	無 文			有文	片口	無文	有文	有孔	尖底	平 底			不明
	Aa	Ab	B							第1類	第2類		
第1層	4	4	13	3	0	473	2	0	0	0	2	0	501
第2層	1	0	2	2	0	82	0	0	0	0	1	0	88
第3b層	95	87	187	81	6	4,578	36	6	13	1	47	11	5,148
第4層	13	8	11	4	1	361	1	0	1	1	2	0	403
合 計	113	99	213	90	7	5,494	39	6	14	2	52	11	6,140

ものなどである(B類)。後者のものには、部分によって口唇部の形状が異なり、全体的に不定形な様相を呈するものが多いため、ここでは一括して取り扱うことにする。A類は、以下の2種にさらに細分できる。

- a、口唇部を平坦に整形し、口唇部の内外端に稜を有し、口唇面が明瞭なもの。この種のものには、口唇部の肥厚するものが多く見られる。
- b、口唇部は平坦に整形するが、口唇部の内外端に丸みを帯び、a種ほど口唇面が明瞭でないもの。

① 甕形土器 (図38、図39の1～5、図40・41)

甕形土器の器形は、胴部がふくらみ、頸部でくびれ、そこから口縁部が角度を変えて立上がり、外反または直口するものである。

口径推算可能な口縁部資料は10点あり、口径が11cm以上16cm未満のものが6点、20cm前後のものが4点である。内訳は、図38の1 (11.2cm)・2 (13.6cm)・3 (15.5cm)・4 (21.3cm)・5 (20.2cm)・図39の1 (22.0cm)・2 (12.3cm)・3 (12.6cm)・4 (14.8cm)・5 (21.4cm)となっている。口唇部の形状は、図38の1～4・図40の1～8がA a類、図38の5・図39の3・図40の9～15がA b類、図39の1・2・4・5・図41の1～6がB類に属する。

図38の2は甕形の片口土器で、注口部はほとんど欠失している。内外面の一部には縦位の擦痕がみられる。図39の1の内面には粘土帯の接統痕が明瞭に残り、粘土帯が4段確認できる。外面にも接統痕の一部が消え切らずに残っている。図40の3・12は器外面に縦位、4・5には内面に横位の条痕がみられ、工具による器面の調整痕と思われる。図40の2・13、図41の5は口縁外面に粘土帯を貼付し、その接統痕が明瞭に残るものである。

図40の14、図41の3・4は第1層出土。図38の2・3・5、図39の2～5は第4層出土。そ

の他はすべて第3 b層出土。

② 鉢形土器 (図41の7～13、図42)

鉢形土器は、胴部から口縁部にかけて器形に変化が少なく直線的で、口縁部が外向・直口・内向するものの3つがある。ただし、鉢形土器としたものの中には甕形に近似する器形のものも含まれており、図41の7・10・11、図42の1などは胴部のふくらみの弱い甕形土器に含めることもできる。以上のように甕形土器の器形を広義にとらえれば、本地区出土の土器は甕形に属する器形のもので優勢であるように思われる。

図41の8～13は口縁部が外向するもの、図41の7、図42の1～7は直口するもの、図41の8～13は内向するものである。口唇部の形状は、図41の7～9、図42の1・2・8・13がA a類、図41の10・12、図42の3～5・9・11がA b類、図41の11・13、図42の6・7・10・12がB類に属する。

図42の1は口縁外面に縦位、内面には横位の器面調整の際の条痕が確認できる。12は内面の一部に斜位の条痕がみられる。9は口縁外面が丁寧にナデ調整され平滑であるのに対し、内面には指頭痕が明瞭に残る。器厚は比較的厚手である。7・10は口縁外面、4・5は口縁内面に粘土帯を貼付するもので、いずれもその接統痕が明瞭に残るものである。

図42の6は第1層出土。図41の7・10は第4層出土。他はすべて第3 b層出土。

③ 片口土器 (図38の2、図43の2～6)

図38の2は唯一器形がわかるもので、前述したように甕形になる資料である。その他のものは、すべて注口部のみ出土である。口唇部の形状は、図43の3・6がA b類、2・4・5がB類に属する。

図43の2～6はすべて第3 b層出土。

④ その他

図39の6は、口径推算可能な口縁部資料であるが、器形については不明である。口径は19.6cmで口唇部の形状はA a類に属する。第3 b層出土。

図43の1は、片口土器の注口部片かと思われるが、特異な形態をしており、あまり類例のない資料である。これが片口土器であれば、口縁部の一部をU字状につくり、そこに注口部を突出させた器形になるものかと思われる。口唇部の形状は不明。第3 b層出土。

図44の1・2は、口縁部が「く」字状に屈曲するもので、本地区で2点出土している。1は口唇部を舌状に仕上げ、2はやや尖る。1は第4層出土、2は第3 b層出土。

図43の7～16は、口縁部に粘土帯を貼付し、その接統痕が明瞭に残るものである。このような無文口縁部資料は、本地区では全部で19点出土している。内訳は、第1層：2点、第3 b層

: 15点、第4層: 2点である。

口唇部の形状は、7・11・12・15がA a類、9がA b類、8・10・13・14・16がB類に属する。10は第1層出土。8・11～16は第3 b層出土。7・9は第4層出土。

図44は3～9は有孔の無文土器資料で、7点出土している。3は口縁部の資料で、口唇部の形状はA a類に属する。4～9は有孔の胴部資料である。3～9の7点は、いずれも第3 b層出土。

《有文土器》

有文土器資料はすべて小破片で、器形が明確にわかるものは僅かであるため、文様の形態を中心に分類を行った。文様形態から、有文土器は以下の2つに大別できる。

第2表 有文土器分類別出土状況

分類 層序	第1群								第2群				合計	
	第1類						第2類		第3類	第1類		第2類		
	第1種		第2種		第3種									
	口縁部	胴部	口縁部	胴部	口縁部	胴部	口縁部	胴部	口縁部	口縁部	胴部	口縁部		胴部
第1層	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	5
第2層	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	2
第3 b層	35	18	11	2	0	1	2	0	25	3	10	5	5	117
第4層	2	1	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	5
合計	39	19	12	2	0	1	2	0	28	3	11	6	6	129

〈第1群〉

口縁内外面や口唇部に沈文のみで施文するものである。以下の3つに細分できる。

第1類: 口縁外面に沈文を施文するもので、さらに沈線のみで施文するもの(第1種)・刺突文のみを施文するもの(第2種)・沈線文と刺突文を組み合わせるもの(第3種)の3つに細分できる。

第2類: 口縁内面に沈線で施文するもの。

第3類: 口唇部のみに刺突文または刻目を施すもので、口縁内外面共に無文である。

〈第2群〉

口縁外面に突帯文を貼付するものである。以下の2つに細分できる。

第1類: 口縁外面に沈文と突帯文を組み合わせるもので、施文される沈文には、沈線

文と刺突文の2つがある。また、突帯上に刻目を有するものと無文のものがある。

第2類：突帯文のみを貼付するもので、突帯上に刻目を有するものと無文のものがある。

第1・2群土器のいずれにも、口唇部に刺突文を施文するものと無文のものがある。また、無文土器と同様、口唇部の形状から2類に分けることができる。ただ、口唇部に刺突文が密に施文される場合、その形状が不明瞭なものがある。第1群土器での内訳は、第1-1類（A a類：16点・A b類：10点・B類：9点・不明：4点）、第1-2類（A a類：5点・A b類：1点・B類：4点・不明：2点）、第2類（A a類：1点・A b類：1点）、第3類（A a類：15点・A b類：4点・B類：8点・不明：1点）である。第2群土器では、第1類（B類：2点・不明：1点）、第2類（A a類：2点・A b類：2点・B類：1点・不明：1点）となっている。

〈第1群〉

◆第1-1類（図45～47）

すべて小破片で、全体の文様構成のわかるものは1点もない。曲線文や直線的な沈線文などが施文されている。図45の1～5・7～10・13・15・17・18、図46の2・3・6～9・11・13～15・18～21は口唇部に刺突文を施す。口唇部の形状は、図45の1～16がA a類、図45の17・18、図46の1～8がA b類、図46の9～17がB類に属し、図46の18～21は不明。

図45の1・17、図46の9は、甕形になるものと思われる。図45の1は、口縁外面にX字状の沈線を施文する。17は、半裁竹管状の工具により幅広の凹線を横位に1条施文している。図46の12は、口唇部に沈線文が1条施文されている。図46の4は縦位に2条、その直下に横位1条の沈線が確認できる。図47の1は有孔の胴部資料で、有文土器ではこの1点のみである。外面に僅かに段を有し、その段の直上に横位1条の沈線を施文している。

図46の10は第1層出土。図46の2は第2層出土。図45の1、図46の19、図47の11は第4層出土。他はすべて第3 b層出土。

◆第1-2類（図48の1～14）

口唇部に横位1列の刺突文を施文するもの（1・3～8・11・13・14）や縦位と横位の刺突文を組み合わせるもの（2・12）がある。後者の場合、縦位2列と横位1列の組み合わせが基本形であると思われる。1～7・9～12は口唇部に刺突文を施す。口唇部の形状は、1～5がA a類、6がA b類、7～10がB類に属し、11・12は不明。

1は、半裁竹管状の工具により、口唇部及び口縁外面に施文している。

7のみ第1層出土で、他はすべて第3 b層出土。

◆第1-3類（図48の15）

胴部資料1点のみの出土である。横位1列の刺突文の上下に横位沈線を1条ずつ施文してい

る。第3 b層出土。

◆第2類 (図48の16・17)

口縁部の資料が2点得られている。口縁部の内面にのみ、沈線文の施文が確認できる。ただし、2点とも2 cm強ほどの小破片であるから、口縁外面にも施文されていた可能性も考えられる。口唇部の形状は、16がA a類、17がA b類に属す。

16の口唇部は無文。17は、横位1条の沈線の下上に山形曲線文を施す。口唇部には刺突文を施す。

16・17ともに第3 b層出土。

◆第3類 (図49～51)

口唇部の形状は、図49、図50の1～5がA a類、図50の6～9がA b類、図50の10～12、図51の1～5がB類に属し、図51の6は不明。

図50の3～5は、口縁部に粘土帯を貼付し、その接続痕が明瞭に残るものである。図50の12、図51の2～5は口縁部の上位を折り曲げるようにして外反させるもので、図51の2は口唇部に刻目を施し、図50の12、図51の3～5は口縁部の外反部分の上面に刺突文を施文している。

図51の1は第2層出土。図50の10、図51の4は第4層出土。その他はすべて第3 b層出土。

〈第2群〉

◆第1類 (図52、図53の1～8)

横位突帯を1条貼付するものが、主体を占める。口唇部の形状は、図52の1・2がB類に属し、3は不明。

図52の1は、口縁部の上位を折り曲げるようにして外反させる。横位刻目突帯の上位に縦位2条の沈線を施文。口唇部は無文。2は、横位刻目突帯の上位に山形曲線文、下位に沈線文を施文。口唇部に刺突文を施す。3は、縦位突帯を2条貼付し、その横に縦位沈線を2条施文している。縦位突帯は口縁内面にまで及ぶ。突帯上は無文。

図52の4～6、図53の1～8は胴部資料。図52の4は、甕形に属すると思われる資料である。最大胴径は10.1 cm。横位刻目突帯の上位に斜位沈線が1条確認できる。突帯の上下に浅い凹線を施すが、突帯を貼付した際の調整痕かと思われる。5は、横位刻目突帯の下位に┌状の沈線を施す。内面には、器面調整による横位の条痕がみられる。6は、横位刻目突帯の上位に横位の沈線が1条、破損部に沿って確認できる。図53の1・2は、横位刻目突帯の上位に斜位沈線が施文されている。3は、縦位1条の刻目突帯を貼付し、その下位に横位1列の刺突文を施文している。内面には、器面調整による横位の条痕がみられる。4は、横位刻目突帯の上位に横位沈線を1条施文する。5は、横位刻目突帯の上下に横位沈線を施文する。上位の沈線は、破

損部に確認できる。6は、横位突帯の下位に沈線を施文する。残存する突帯の上面には、刻目は確認できない。7・8は、横位突帯の下位に斜位沈線を2条施文する。突帯上は無文。

図53の5のみが第1層出土で、他はすべて第3b層出土。

◆第2類（図53の9、図54）

口唇部の形状は、図54の1・2がAa類、図53の9、図54の5がAb類、図54の4がB類に属し、図54の3は不明。

図53の9は、壺形になる口縁部資料である。口径8.0cm。横位刻目突帯を1条貼付する。口唇部に刺突文を施す。図54の1は、甕形になる資料である。口径10.4cm。横位刻目突帯を1条貼付する。口唇部に刺突文を施す。2は、横位突帯の上位に、X字状に突帯を貼付している。突帯は口唇部にまで及ぶ。突帯上には刺突文を施す。3は、壺形になるのではないと思われるが、小破片のため判然としない。無文の突帯を逆U字状に貼付する。口唇部への施文は不明。4は、口唇直下に貧弱な刻目突帯を横位に貼付している。口唇部は無文。5は、口唇直下に横位刻目突帯を貼付する。口唇上に刺突文を施文。

図54の6～11は胴部資料。6・9～11は、横位に刻目突帯を1条貼付する。7・8は、横位の刻目突帯を外耳状に貼付する。7は、突帯の上下に貼付の際の調整痕が残る。

図54の3・6は第1層出土で、他はすべて第3b層出土。

《底部》（図55～58）

本地区出土の後期土器の底部資料は、尖底と平底の2つがあり、平底になるものが主体を占める。尖底の底部資料は、すべて砲弾状に尖るものである。平底は、以下の2類に細分できる。

第1類：底面の縁の張り出しがなく、底面から直立ぎみに立ち上がり、そこから胴部へ向かって広がるもの。

第2類：底面の縁が張り出し、底面から立ち上がる際に一旦くびれるもの。いわゆる「くびれ平底」と呼称されるものである。

平底の底部資料は、第1類のものが図56の1・2に示した2点のみで、第2類の形態を有するものが主体を占める。第2類の底部資料には、底面の張り出しやくびれの度合いにより個体差がみられる。図56の3・4・7・9・16の5点は、底面の張り出しがかなり微弱で、第1類の底部形態に類似する。底径は、5cm以上7cm未満のものが最も多い。底面を平坦に仕上げるものが殆どであるが、図56の6、図57の2のように底面の縁に沿って粘土帯を貼付し、底面の中央を若干窪ませて上げ底状にするものもある。図57の5も、底面が上げ底状になるものがあるが、これは丸底の底部に粘土盤を貼付して平底に仕上げている。底径が小さく器壁も薄いため、小型の土器になるものと思われる。図56の1は、底面に数条の凹線がみられ、葉痕を有する資料のようにも思われるが判然としない。

第3表 平底推算底径一覧

挿 図	番号	種 類	底 径
図56	1	第1類	5.4 cm
	3	第2類	5.0 cm
	4	〃	6.2 cm
	5	〃	5.8 cm
	6	〃	6.3 cm
	7	〃	4.8 cm
	8	〃	5.1 cm
	9	〃	5.7 cm
	10	〃	6.7 cm
	11	〃	6.8 cm
	12	〃	6.6 cm
	13	〃	7.5 cm
	14	〃	7.6 cm
	15	〃	8.8 cm
	16	〃	6.8 cm
	17	〃	9.7 cm
	図57	1	〃
2		〃	7.4 cm
3		〃	5.6 cm
4		〃	6.2 cm

挿 図	番号	種 類	底 径	
図57	5	第2類	4.2 cm	
	6	〃	5.6 cm	
	7	〃	8.0 cm	
	8	〃	6.6 cm	
	9	〃	5.8 cm	
	10	〃	7.6 cm	
	11	〃	5.0 cm	
	12	〃	5.8 cm	
	13	〃	6.2 cm	
	15	〃	6.0 cm	
	16	〃	5.8 cm	
	17	〃	6.2 cm	
	18	〃	5.2 cm	
	図58	1	〃	4.2 cm
		2	〃	6.2 cm
		3	〃	5.7 cm
		4	〃	5.0 cm
		5	〃	7.0 cm
6		〃	6.2 cm	

尖底・平底の底部資料は、共に第3 b層で最も多く出土しており、出土層位では両者の形態を時期的に分離できるような状況はみられない。尖底の底部資料は、図55の1が第4層出土で、その他のものはすべて第3 b層からの出土である。平底では、図58の6・17が第1層出土、図56の17が第2層出土、図58の8が第4層出土で、その他はすべて第3 b層出土。

小 結

本地区出土の土器は、暫定編年前期から後期にかけての長期間にわたるものであり、本土から移入された弥生式土器も出土している。ただし、前期土器・弥生式土器は出土量が僅かであり、出土土器の中心は後期土器である。

後期土器の器種は、甕形・鉢形になるものが主体であり、その中でも甕形のものが優勢である。これに、壺形・片口土器が少量伴う。口縁部の資料については、その口唇部の形態により2類に分類した。無文土器では、両者がほぼ同数得られている。遺物包含層の最下層である第

4層では、出土量自体は僅少であるがA類に含まれるものが若干多く出土している。有文土器では、全体的にA類のものが多く、B類に含まれるものはやや少ない。底部はくびれ平底が主体を占め、尖底のものは量的に少ない。

有文土器の文様構成については、殆どすべてが小破片資料であり、その全体的構成のわかるものは僅かしかない。特に、第1群の第1-1類に属する資料は小片化のため、沈線の施文が確認できるだけで、その構成については不明なものが殆どである。有文土器は施文手法により2群に大別し、第1群に属するものが主体を占める。ただし、土器資料の小片化により、本来第2群の第1類に含まれるべきものが第1群に分類されている可能性も有り得る。また、第1群中において3類に分類されている土器資料についても、相互間に上述したような不適切な分類を受けている資料があることも十分考えられる。第2群中の土器資料にも、同様なことが言える。

本地区出土の後期土器の底部形態はくびれ平底を主体とし、有文土器の文様形態もアカジャンガー貝塚(註1)や喜如嘉貝塚(註2)などの出土土器にかなり近似している。これらの特徴から、本地区出土の後期土器の大部分は、「アカジャンガー式」と呼称される土器型式(註3)に概ね納まるものとする。

アカジャンガー式土器は、同時並行とされる奄美の兼久式との関連から暫定編年の後Ⅲ期(弥生後期相当)に位置付けられてきた。しかし、最近の奄美での調査状況から兼久式土器は古墳時代後期以降のものであるとの見解がだされ(註4)、アカジャンガー式の時期的位置付けについても再検討を必要としている。また、アカジャンガー式は弥生時代前期の特徴を有しているとの意見もあり(註5)、その年代観は必ずしも一定していない。ただ、出土土器の底部形態がくびれ平底を主体とする後期遺跡では、弥生式土器などの本土系遺物が殆ど出土しない傾向がみられる(註6)。この点については本地区でも状況的に類似しており、本地区よりも尖底の底部資料の出土頻度が高い南地区では移入された弥生式土器や弥生系土器がより多く出土している。この事は、今後アカジャンガー式を含むくびれ平底を底部形態とする後期土器の時期的位置付けを考えていく上で考慮すべき重要な点かと思われる。

<註>

1. 高宮廣衛 「具志川村アカジャンガー遺跡発掘調査概報」『沖縄文化財調査報告(1956~1962年)』那覇出版社 1978年
2. a 大宜味村教育委員会 『喜如嘉貝塚』 1979年
b 沖縄県教育委員会 『喜如嘉貝塚』 1994年
3. 高宮廣衛 「沖縄諸島における新石器時代の編年(試案)」『南島考古』第6号 沖縄考古学会 1978年
4. a 伊仙町教育委員会 『面縄貝塚群』 1985年

- b 笠利町教育委員会 『あやまる第2貝塚』 1984年
- 5. a 高宮廣衛 「南島考古雑録(1)」 『南島考古』第11号 沖縄考古学会 1991年
- b 高宮廣衛 「沖縄諸島の編年」 『海洋文化論』 比嘉政夫(編) 凱風社 1993年
- 6. 池田榮史 「南島と古代の日本」 『古代王権と交流』第8巻 名著出版 1995年

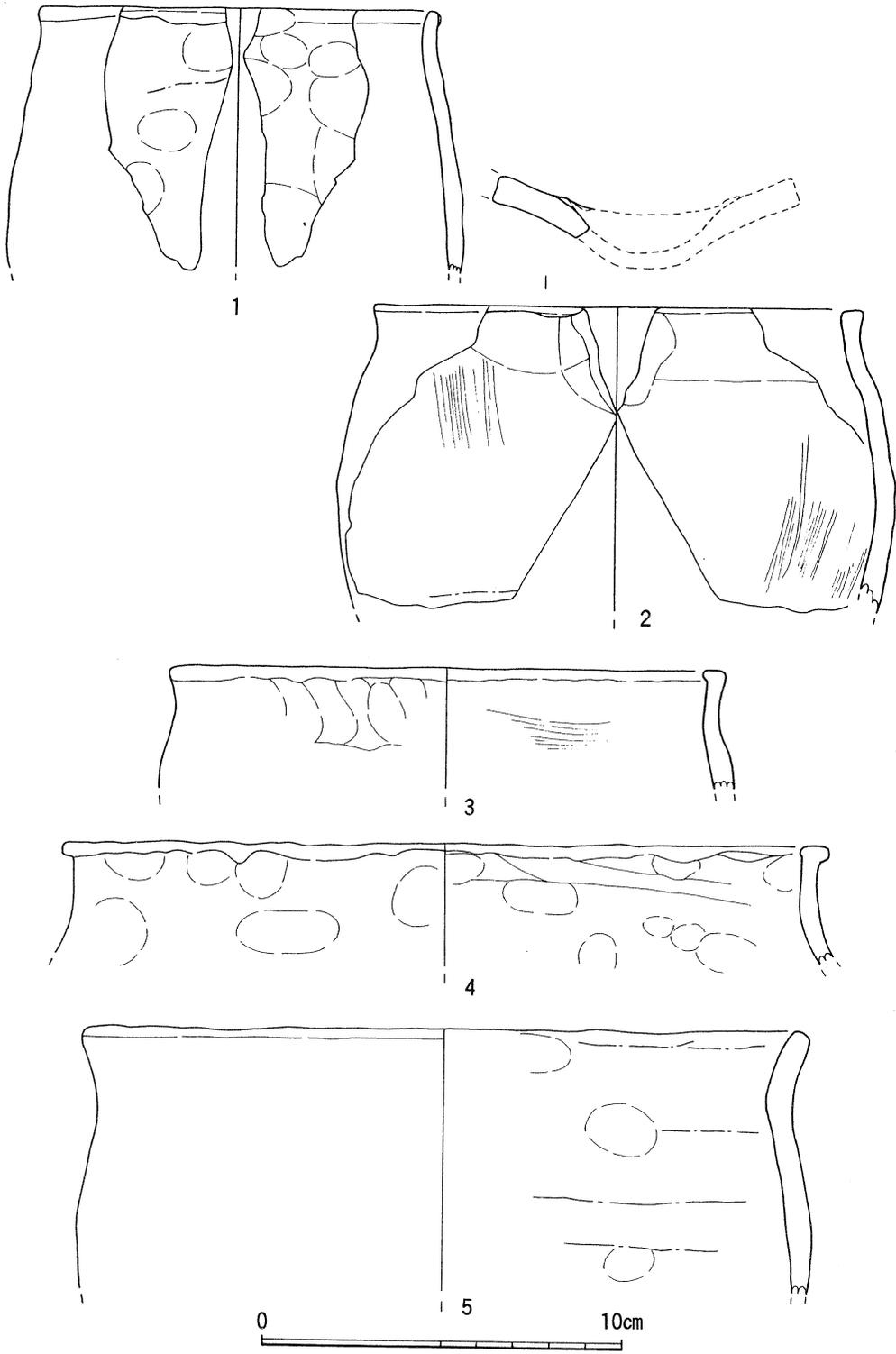


図38 後期土器(1) 無文 壺形

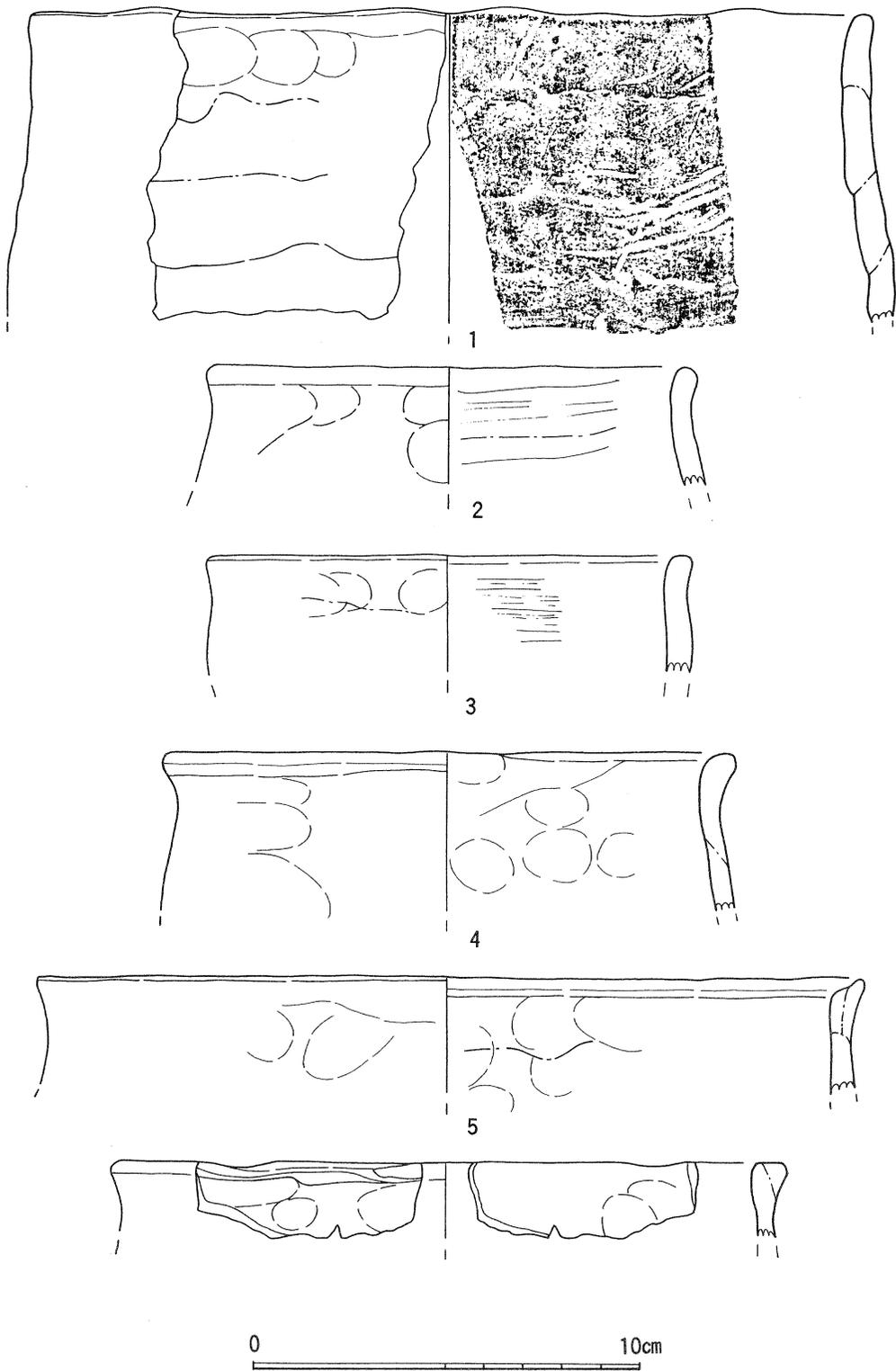


図39 後期土器(2) 無文 壘形(1~5)、器形不明(6)

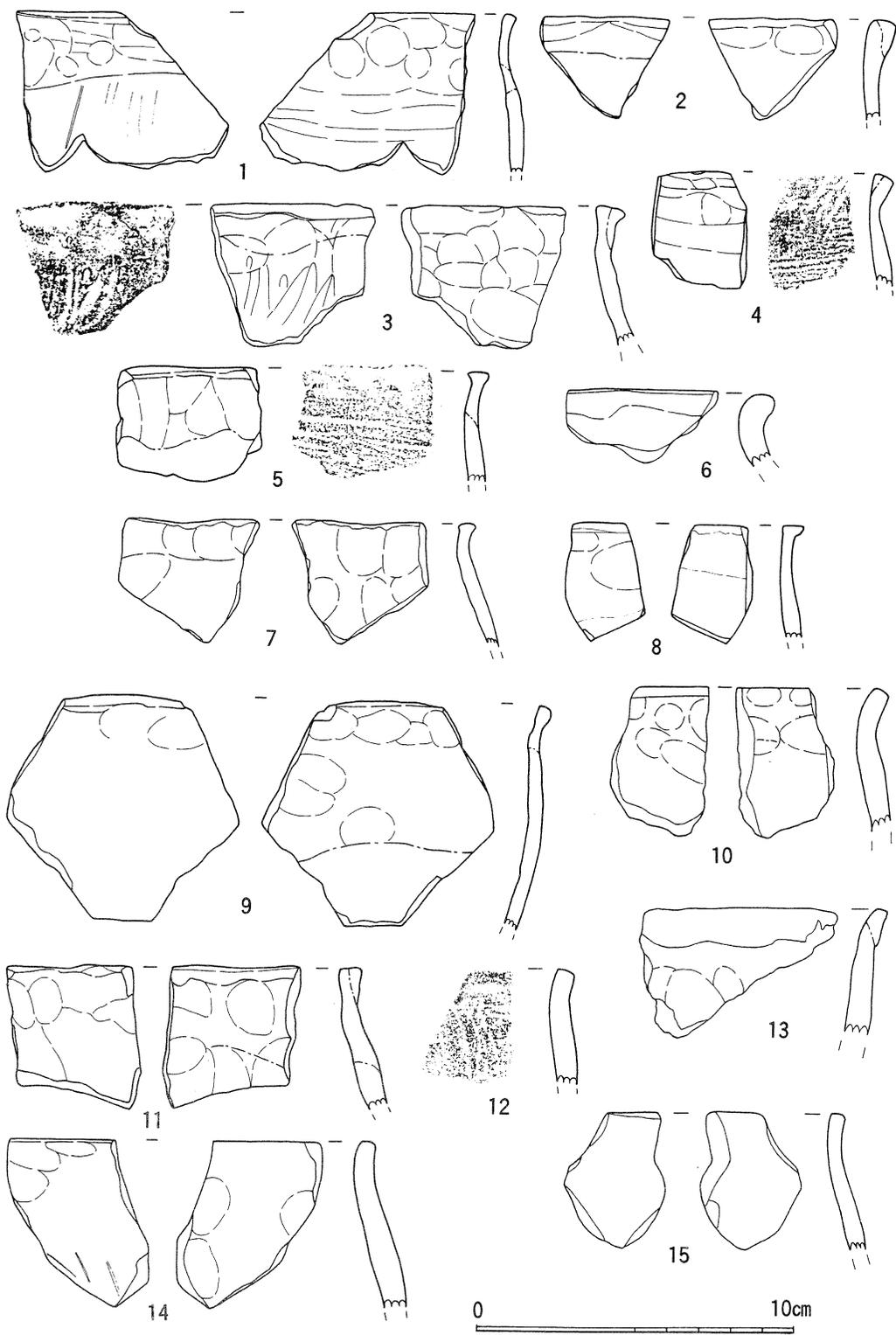


図40 後期土器(3) 無文 壺形

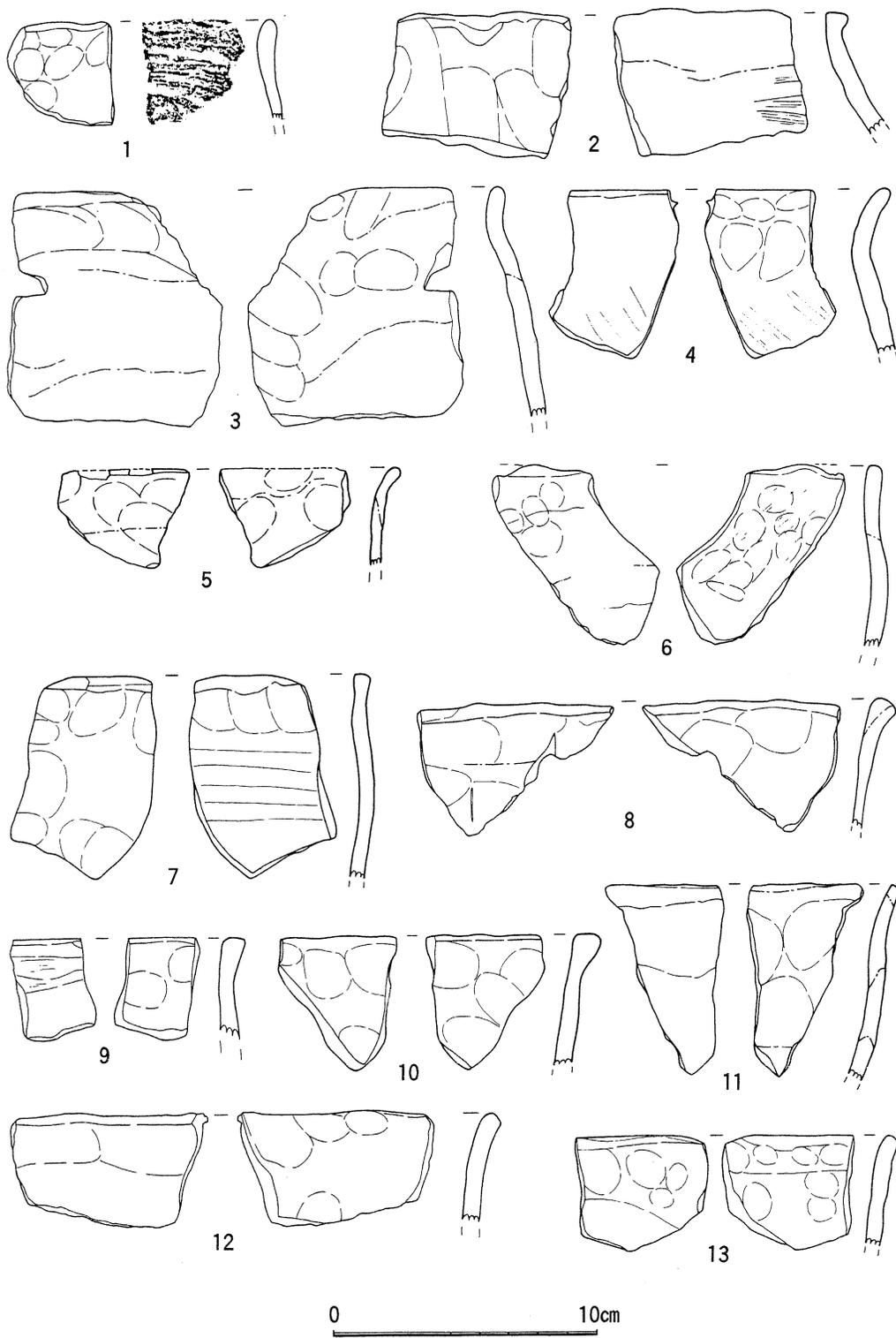


図41 後期土器(4) 無文 壺形(1~6)、鉢形(7~13)

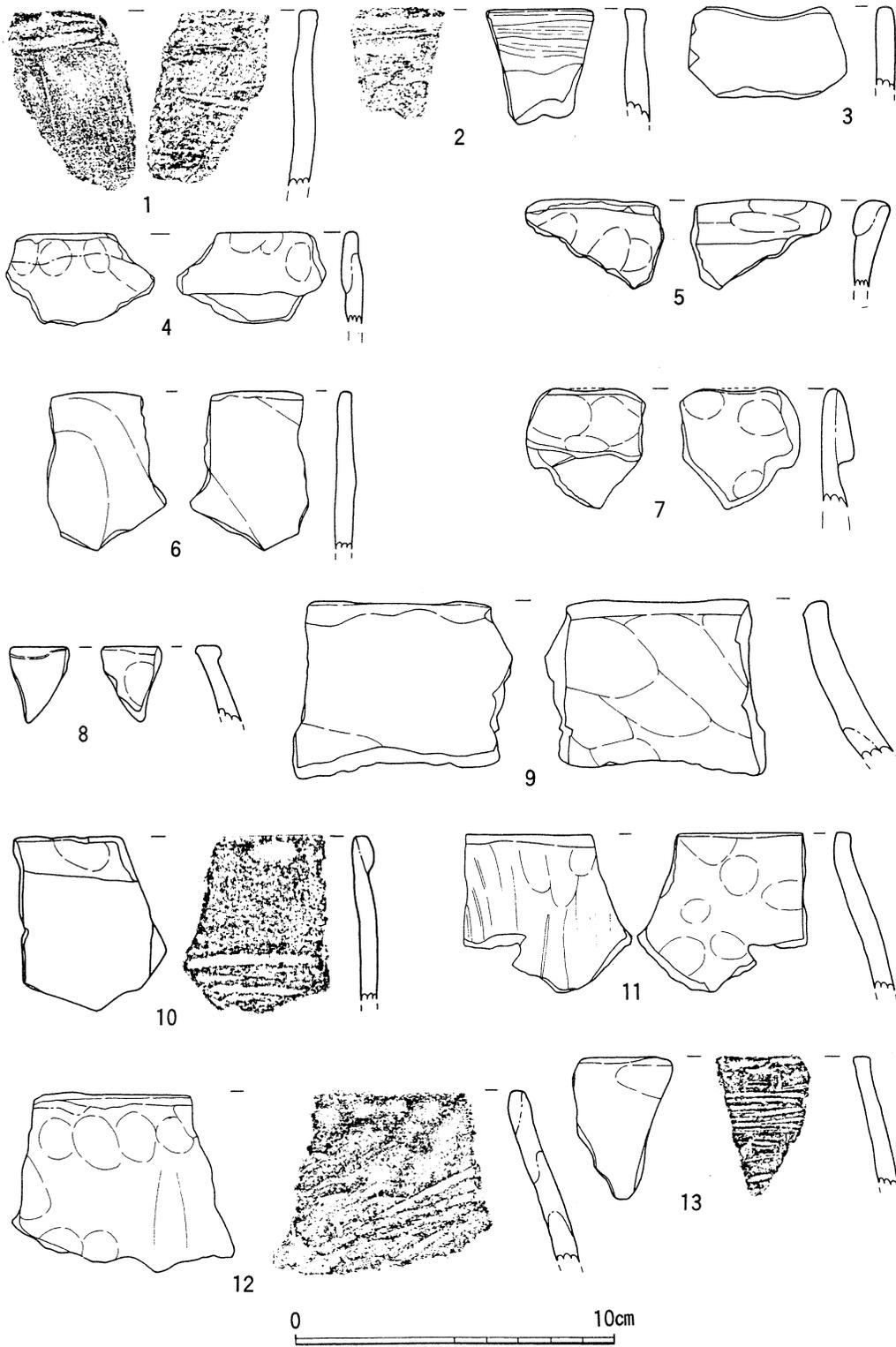


図42 後期土器(5) 無文 鉢形

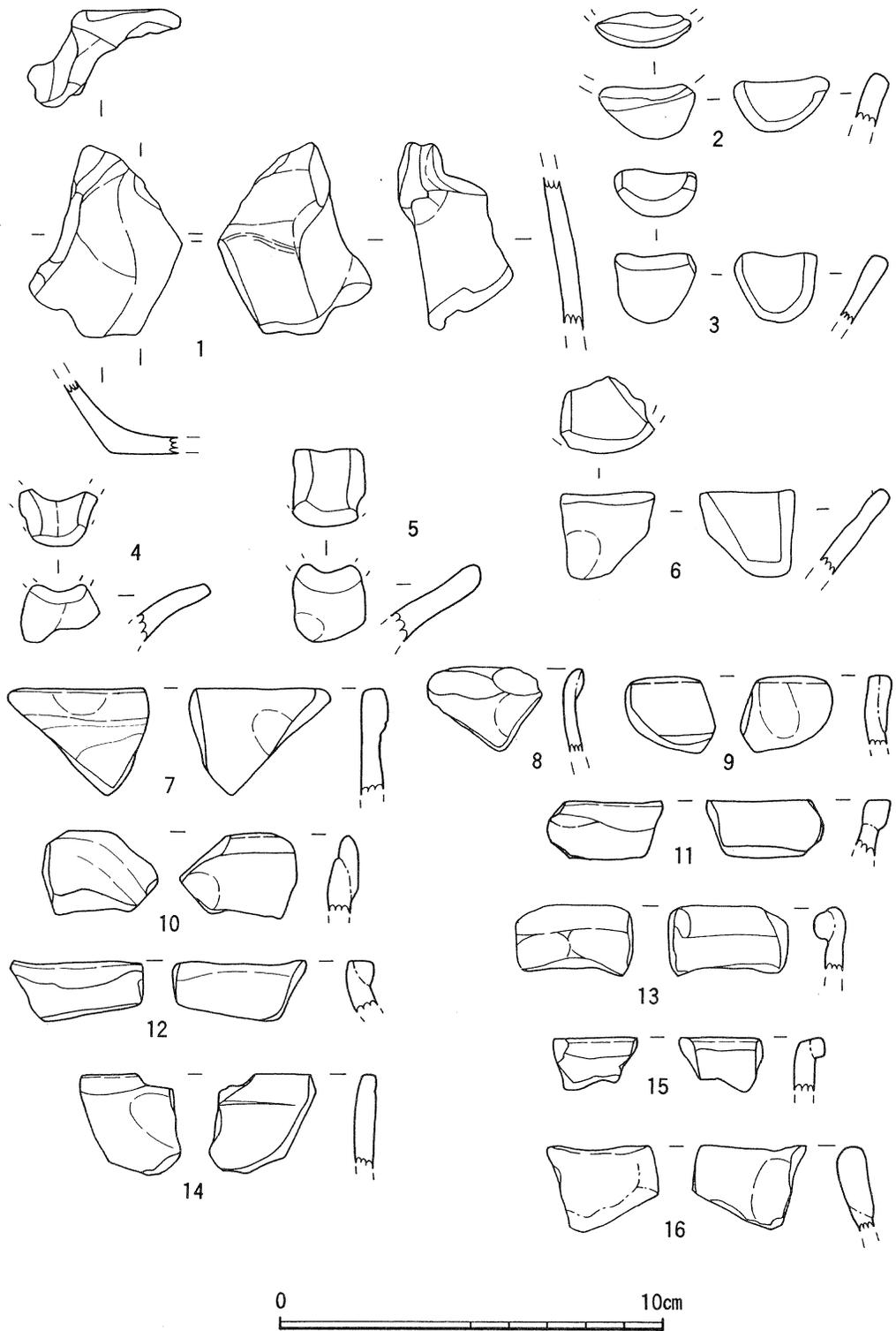


図43 後期土器(6) 無文 片口土器(2~6)、その他(1・7~16)

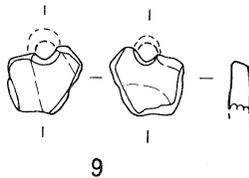
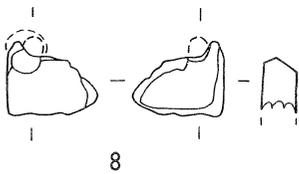
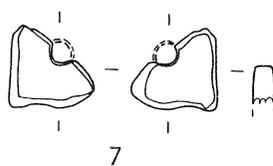
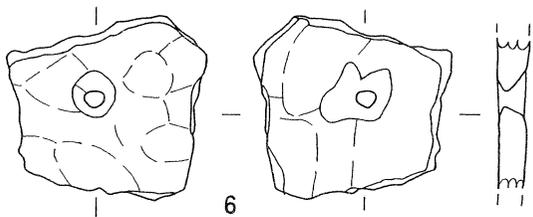
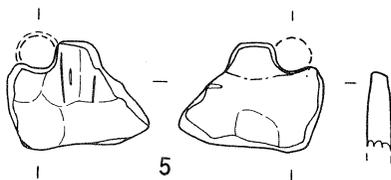
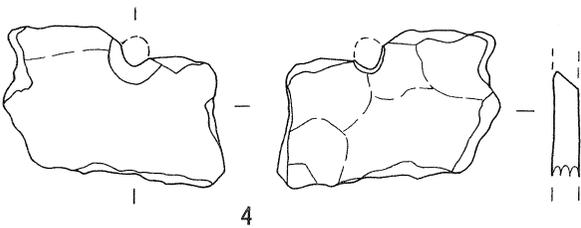
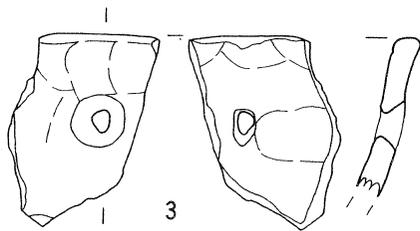
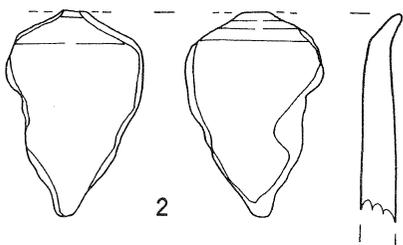
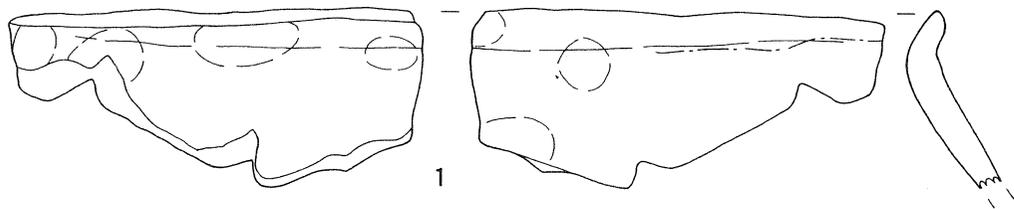


図44 後期土器(7) 無文 その他



图45 後期土器(8) 有文第1群 第1-1類



図46 後期土器(9) 有文第1群 第1-1類

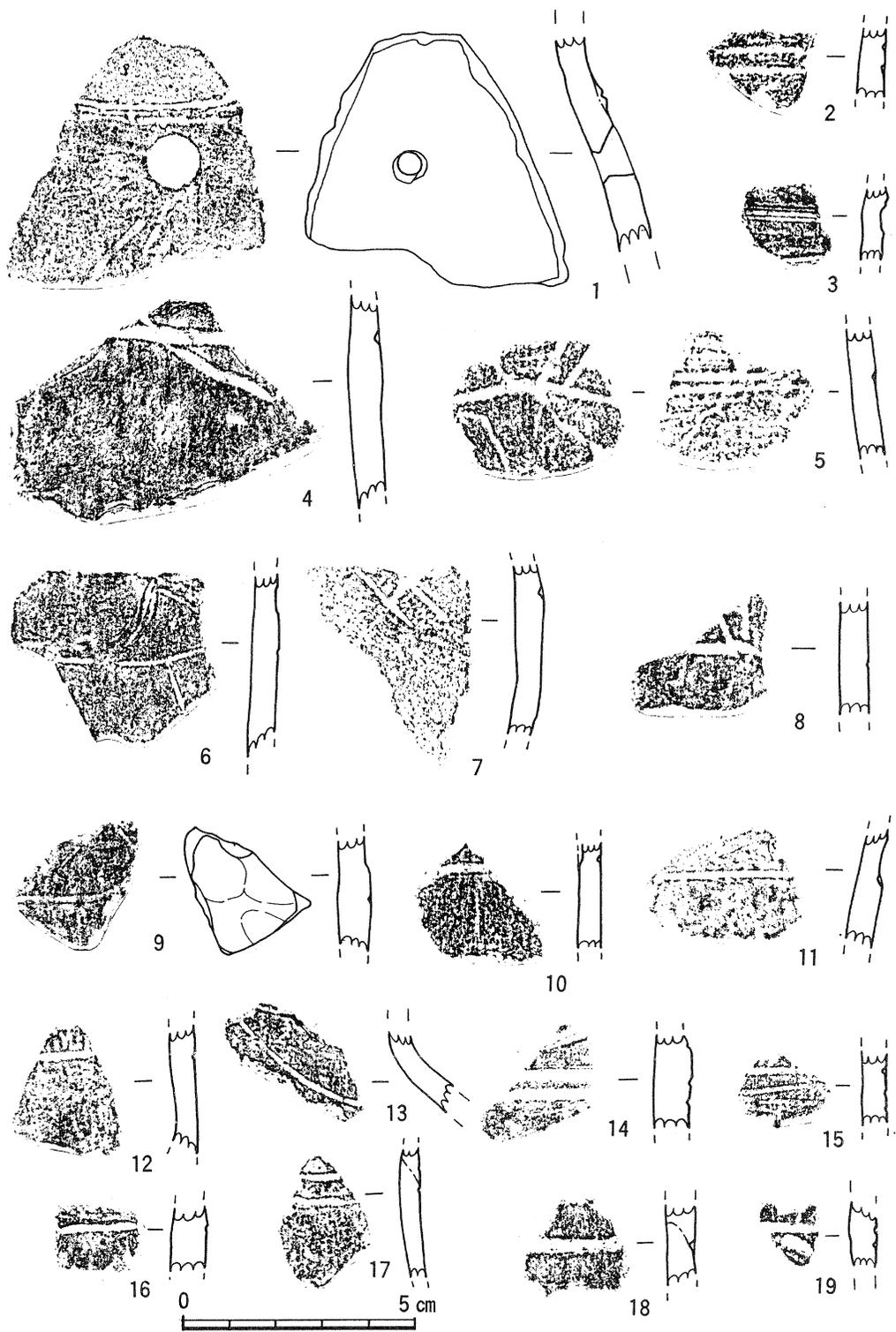


图47 後期土器(10) 有文第1群 第1-1類

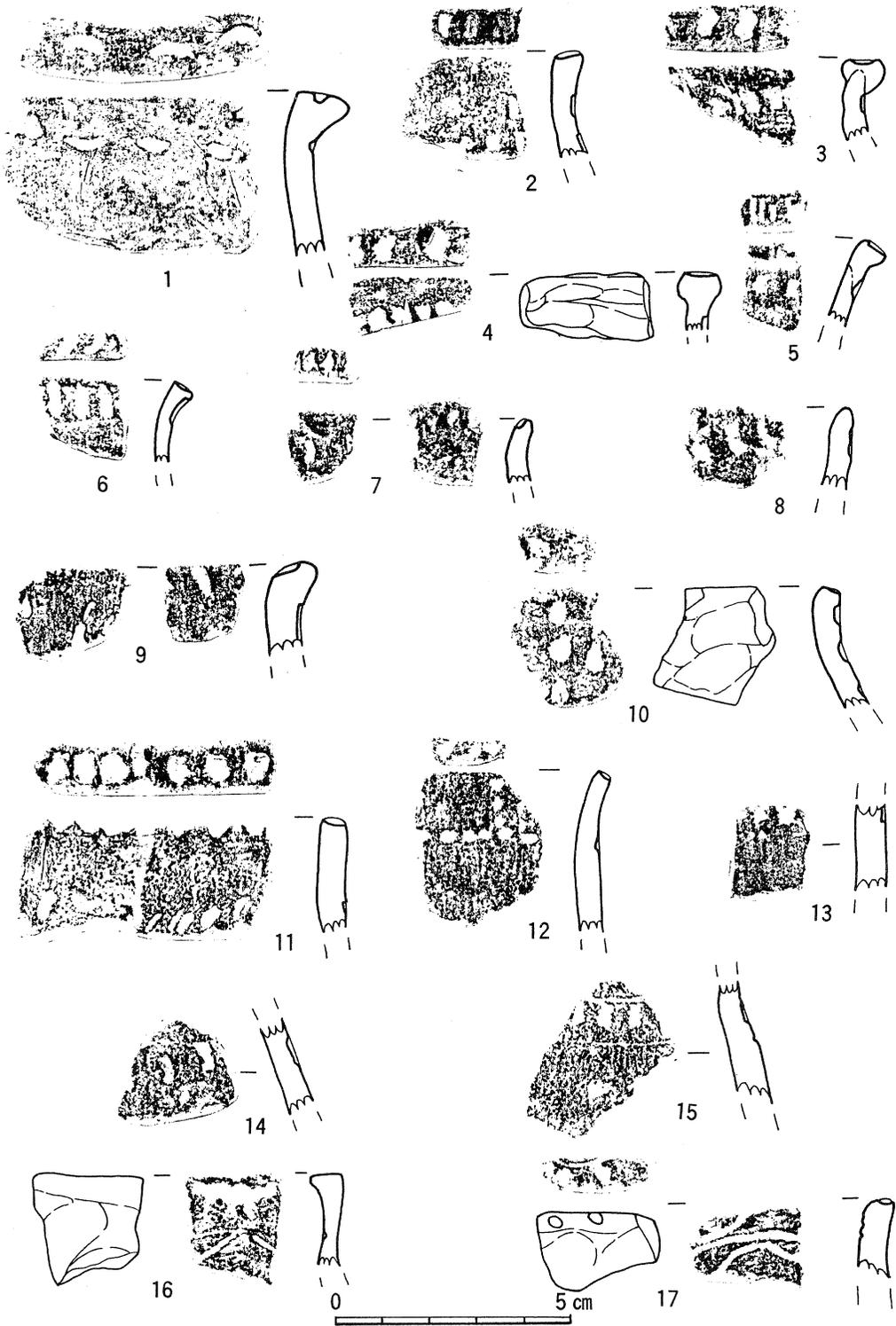


圖48 後期土器(11) 有文第1群 第1-2類(1~14)、第1-3類(15)、第2類(16·17)

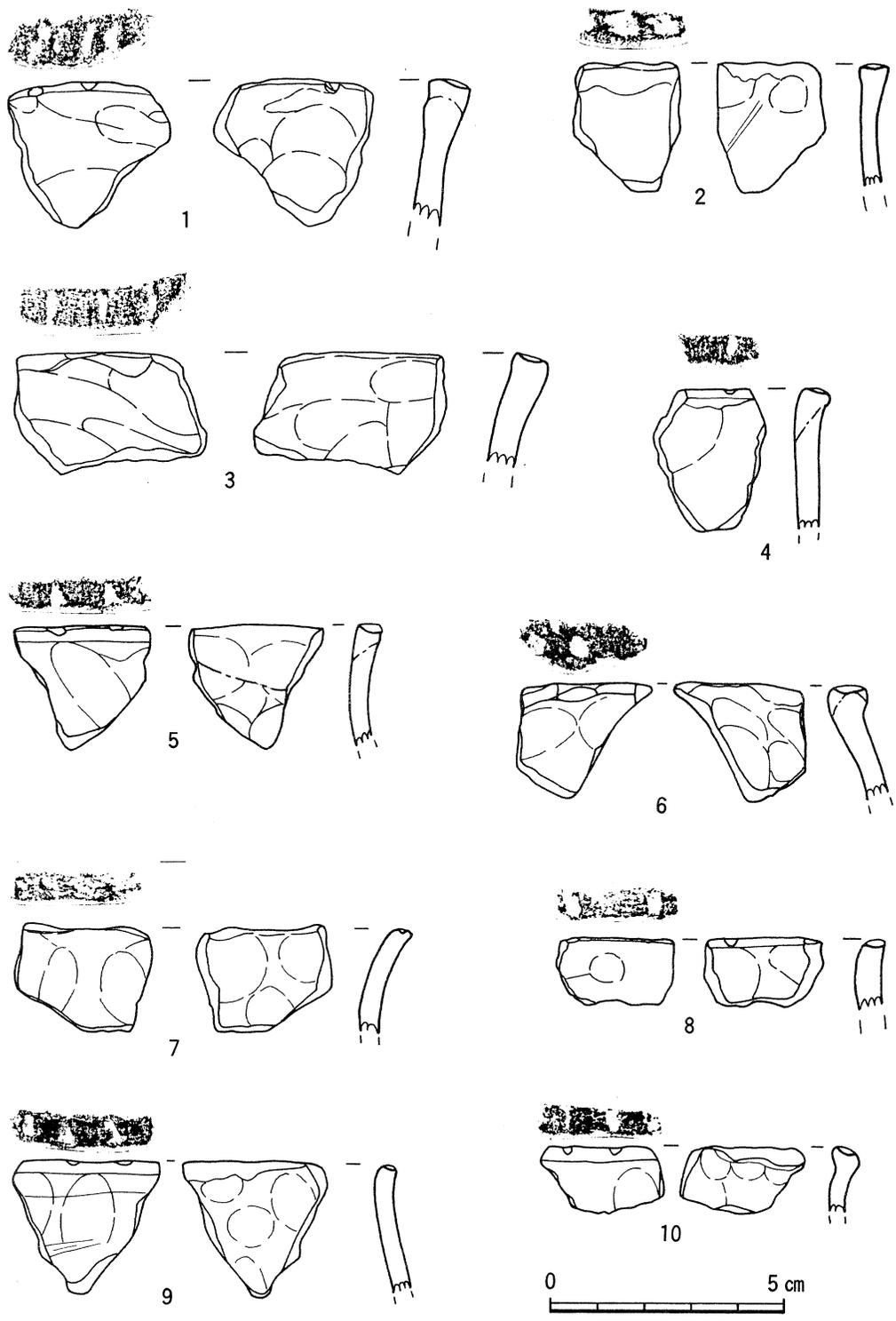


図49 後期土器(12) 有文第1群 第3類

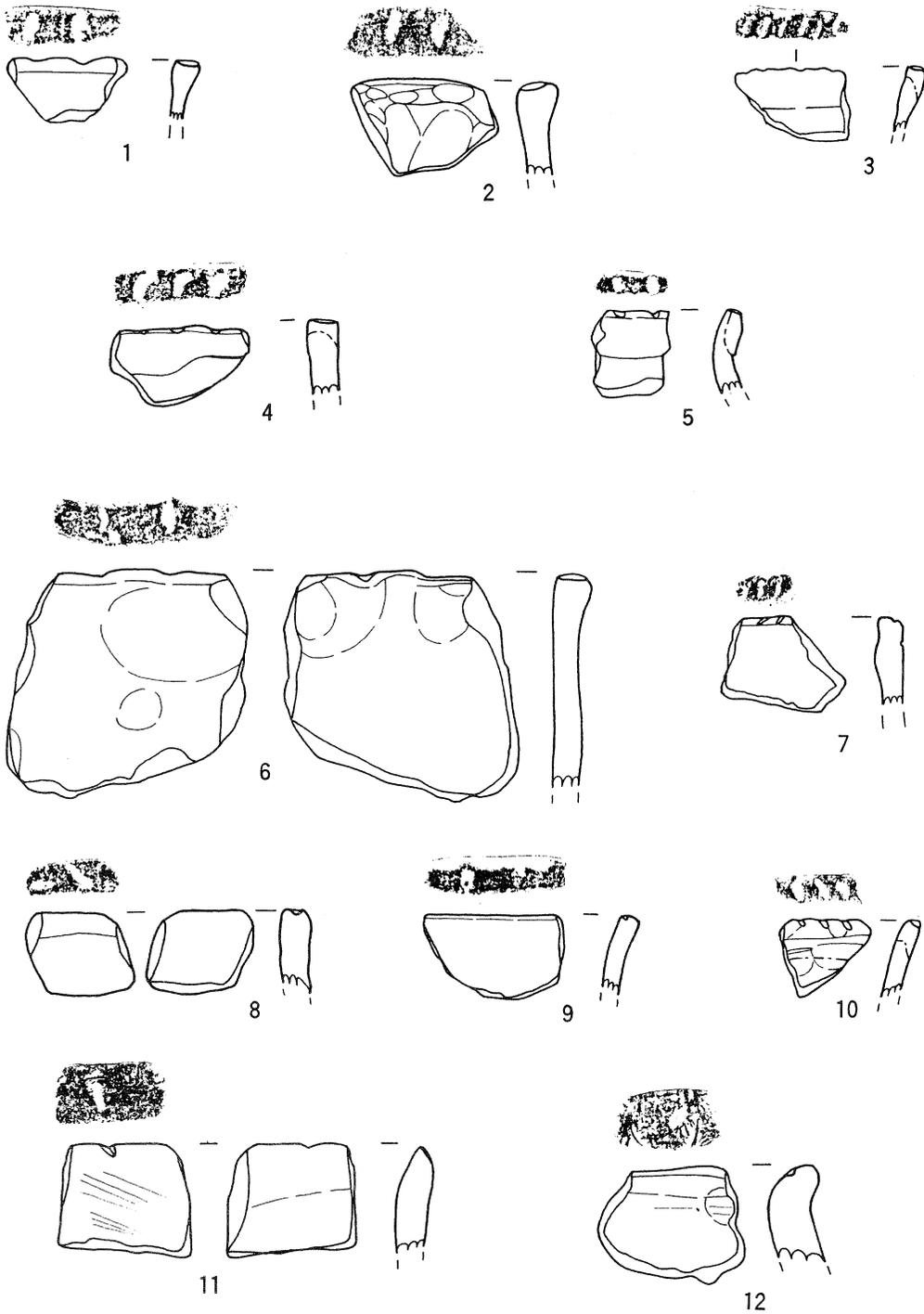


図50 後期土器(13) 有文第1群 第3類

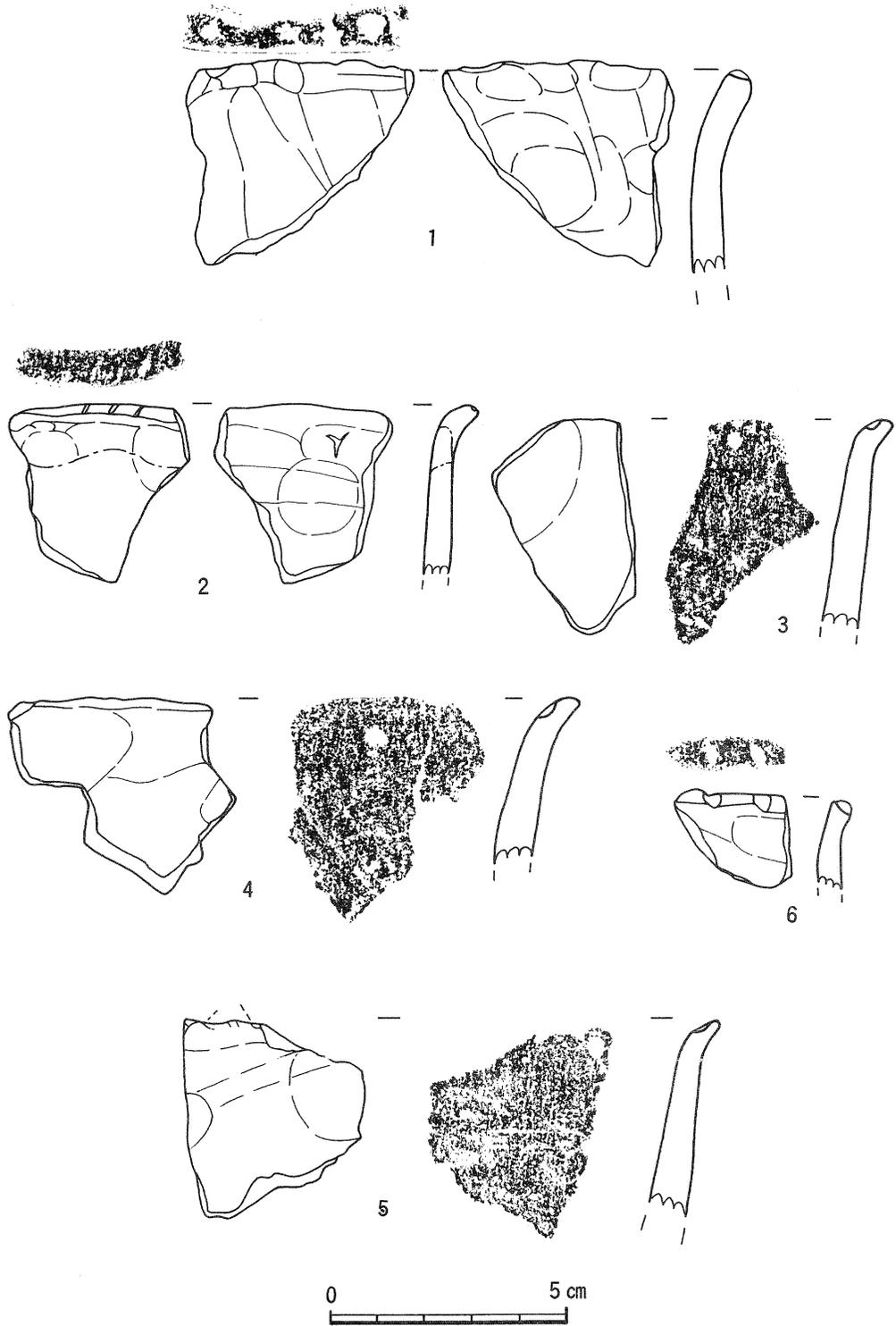


图51 後期土器(14) 有文第1群 第3類

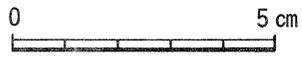
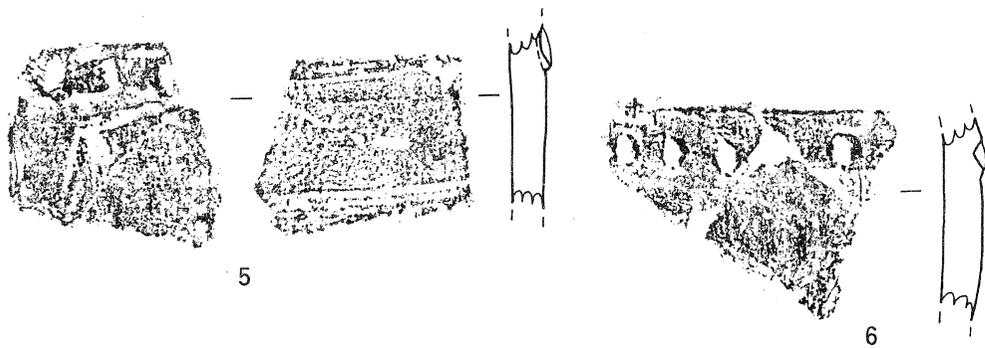
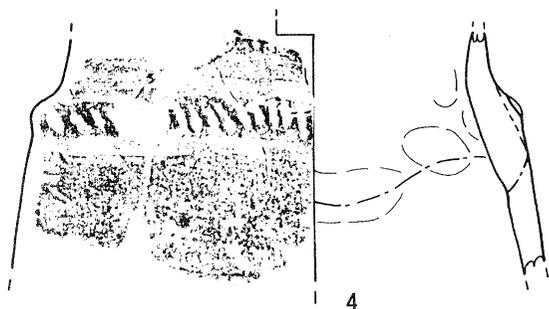
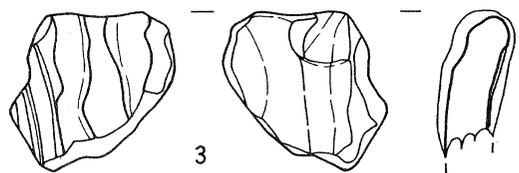
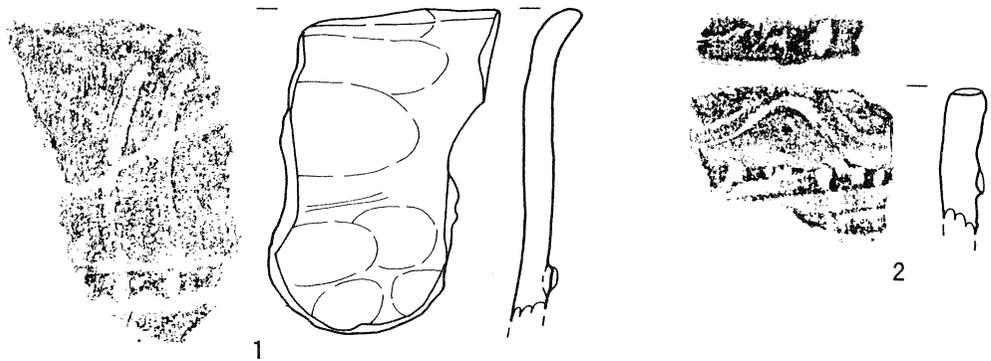


图52 後期土器(15) 有文第2群 第1類

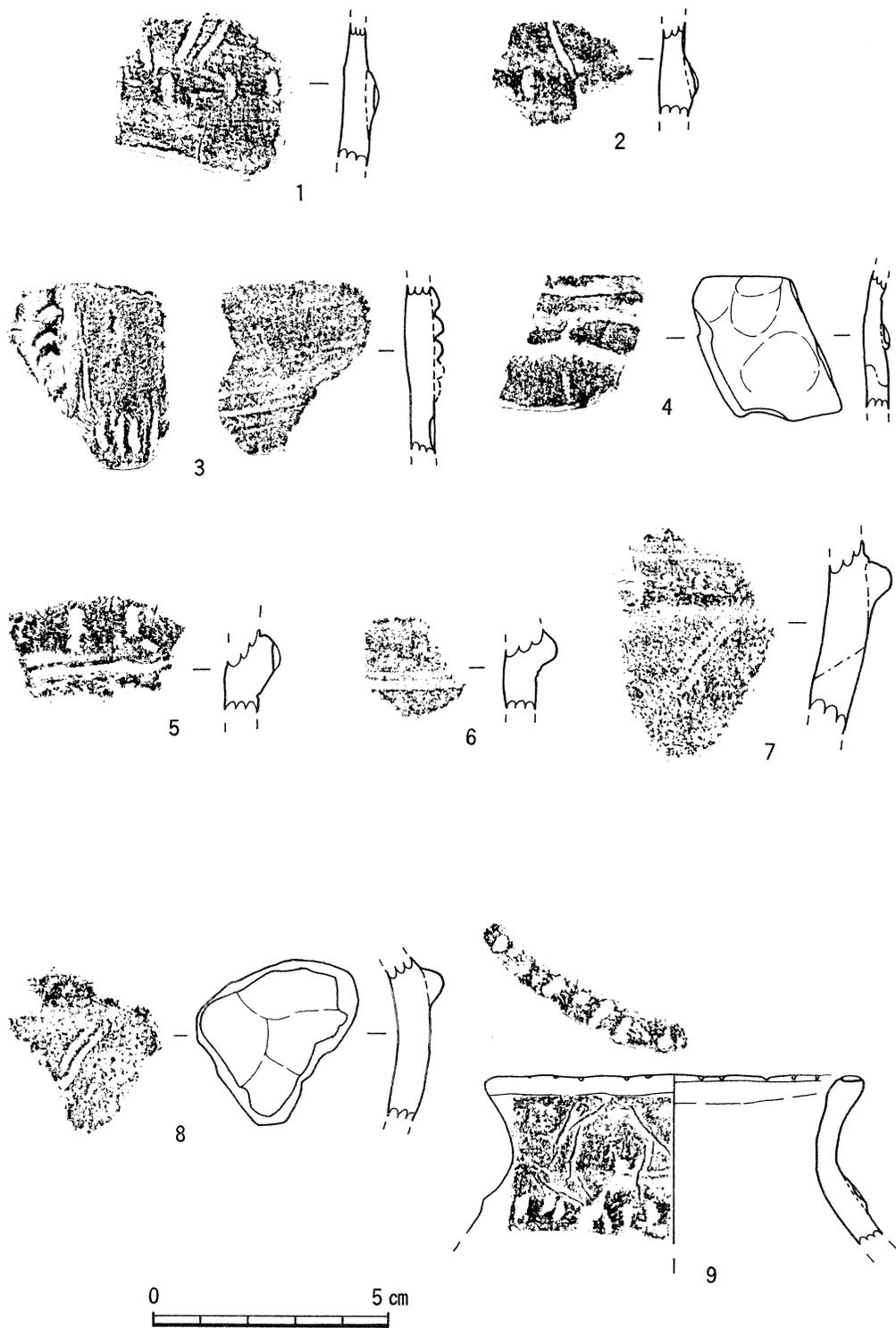


图53 後期土器(16) 有文第2群 第1類(1~8)、第2類(9)



图54 後期土器(17) 有文第2群 第2類

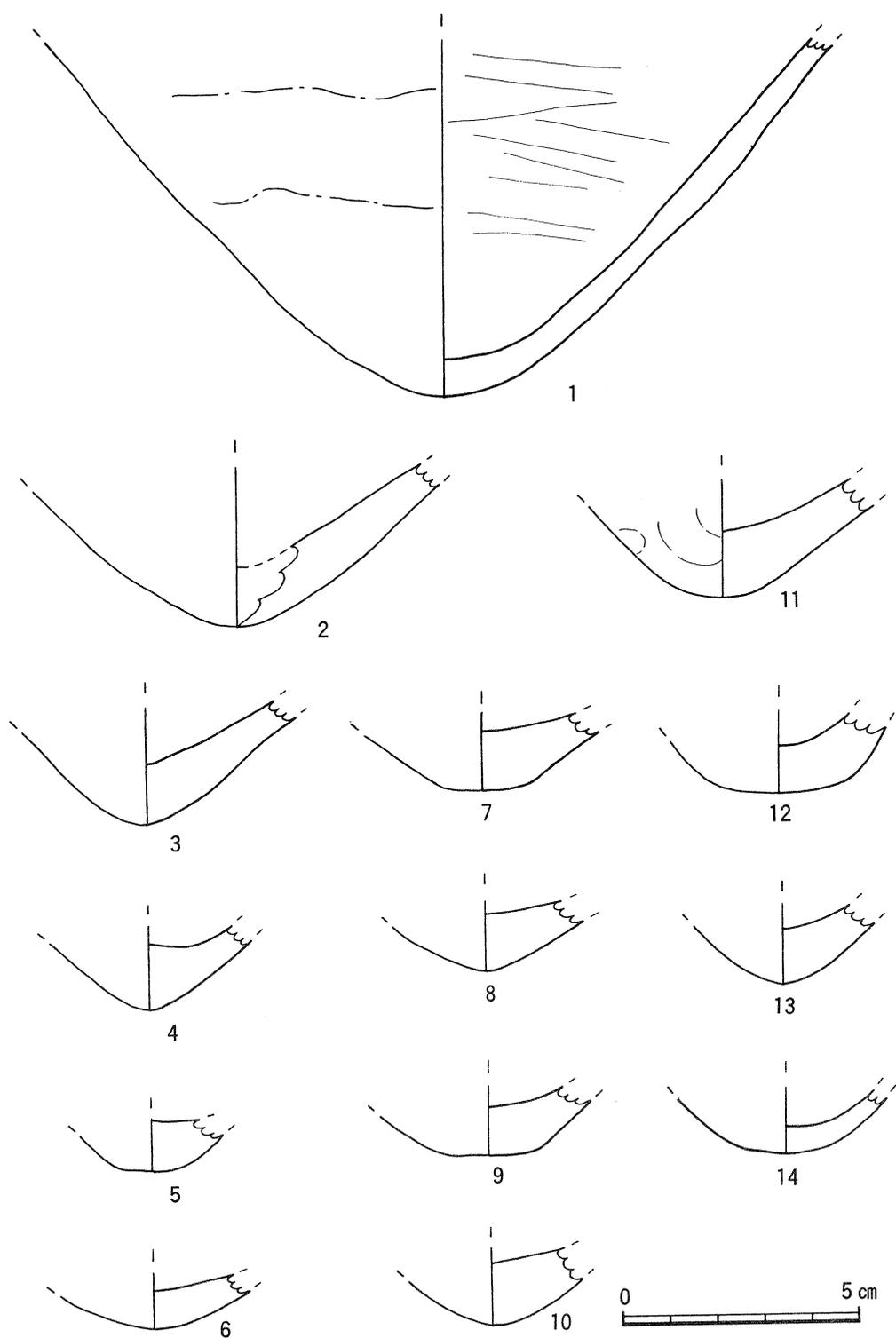


图55 後期土器(18) 尖底

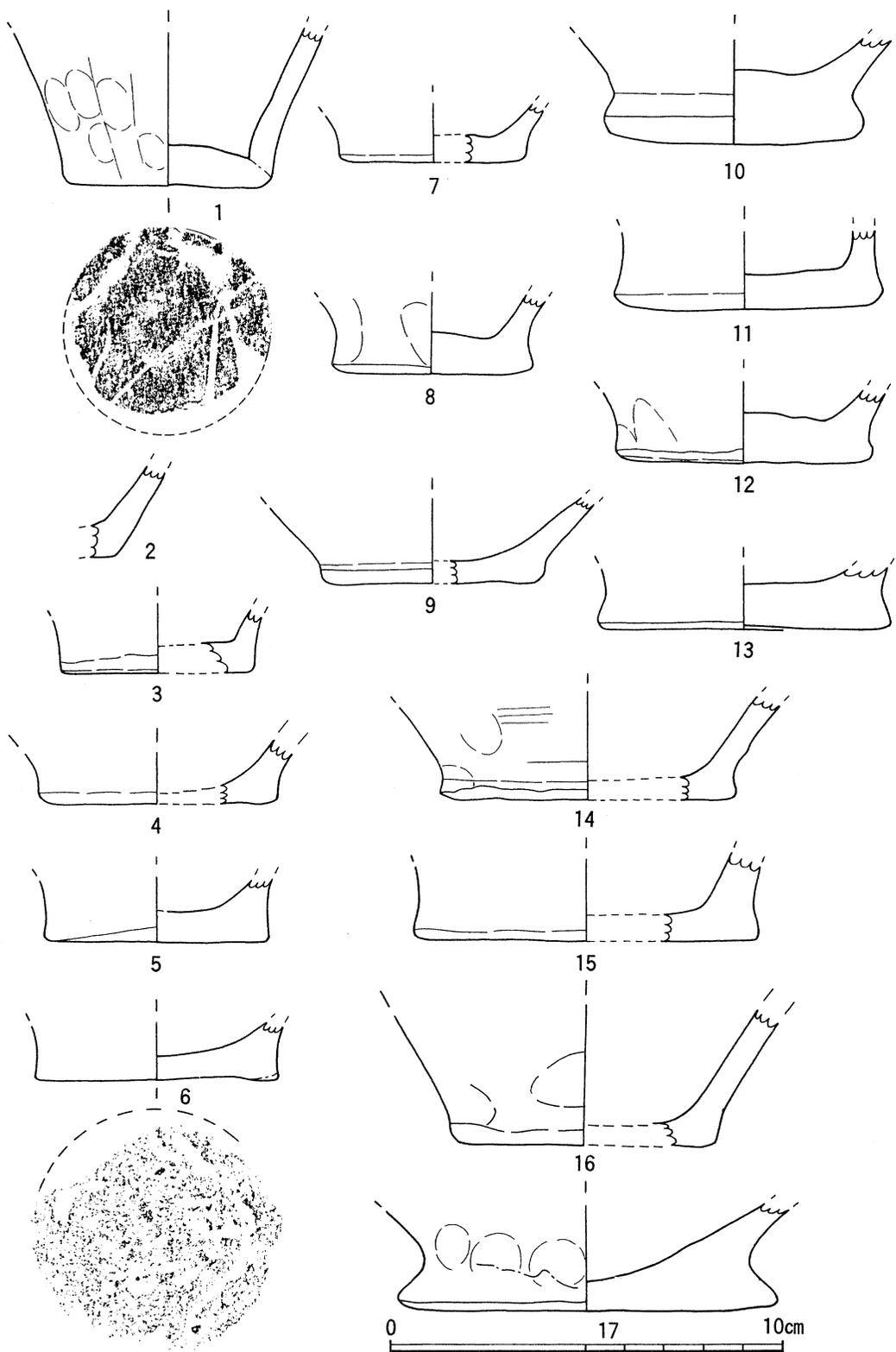


图56 後期土器(19) 平底 第1類(1・2)、第2類(3~17)

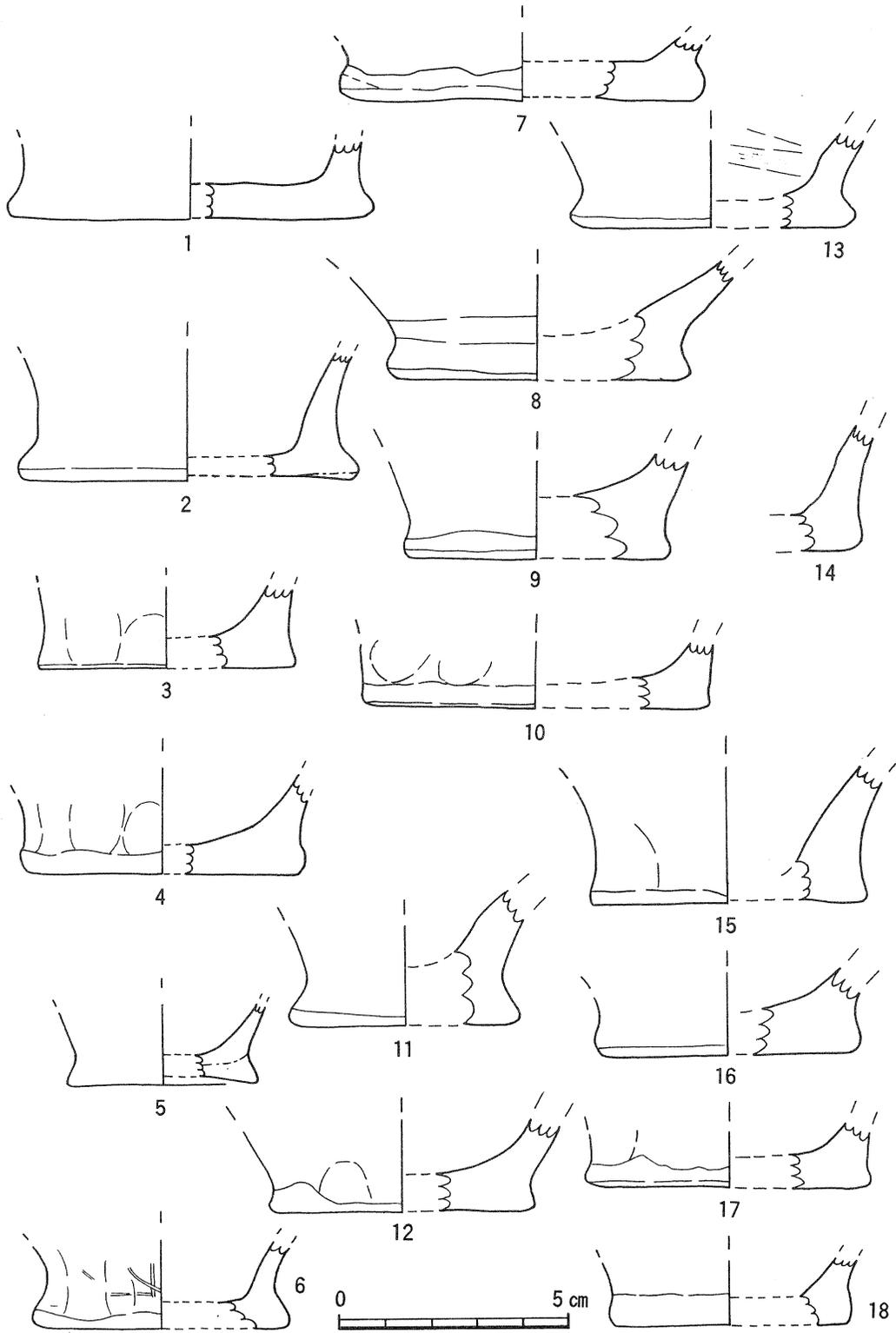


图57 後期土器(20) 平底 第2類

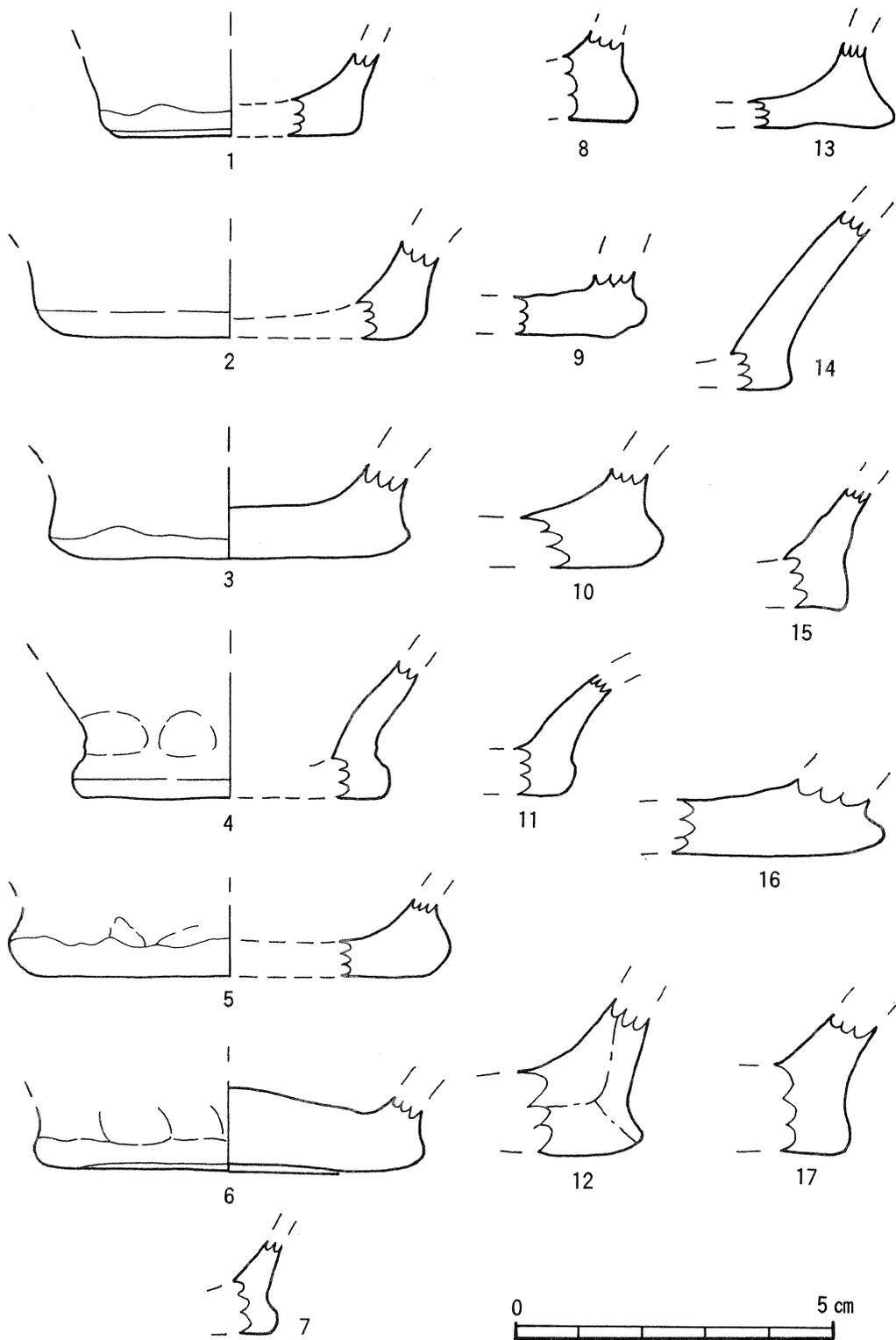


图58 後期土器(21) 平底 第2類

表 採 資 料

表面採集により、遺跡周辺からはコンテナ1箱分の後期土器資料が得られている。ここでは、口径推算可能な大型資料や有文土器などの特徴的なものから紹介することにする。なお、弥生土器等については項を別にして述べる。

図59の1は、口径7.8cm・最大胴径9.8cmを測る小型の甕形土器である。口唇部の形状は、Ab類に属す。内外面共にナデ調整が施す。胎土は泥質で、赤色の細粒を混入する。器色は、内外面共に暗赤褐色を呈する。

2は、口径12.4cm・最大胴径13.0cmを測る甕形土器である。口縁部は、逆く字状に屈曲する。口唇部の形状は、Aa類に属す。外面はナデ調整が施す。内面はやや荒れており、混入物が器面に露出している。胎土は泥質で、赤色の細粒を多量に混入する。器色は、外面が暗赤褐色、内面が赤褐色を呈する。

3は、口径22.6cmを測り、最大径が口縁部にくる。口縁部は外反し、胴部にやや膨らみをもつが、器形の変化自体は微弱である。口唇部の形状は、Ab類に属す。内外面共にナデ調整が施され、器面は平滑である。外面は、特に丁寧に調整されている。胎土は泥質で、特に目立つ混入物はみられない。わずかに黒色鉱物の微砂粒が散見される。器色は、内外面共に赤褐色を呈する。

4は、口径26.4cmを測り、口縁部の外向する鉢形土器である。口唇部の形状は、舌状を呈する。器外面は丁寧に調整が施され平滑であるのに対し、内面の調整は雑で凹凸が激しい。胎土は泥質で、赤色物質・黒色鉱物の細粒が散見される。器色は、外面が暗褐色、内面が赤褐色を呈する。

5は、口径15.4cmを測る小型の鉢形土器で、口縁部は外向する。底部の形状は、尖底の可能性が高い。口唇部の形状は、舌状を呈する。器外面は、ナデ調整を施す。内面には、刷毛目状の調整痕が横位にみられる。胎土は泥質で、赤色物質・黒色鉱物の細粒がみられる。器色は、外面が赤褐色、内面が灰褐色を呈する。

6は、片口土器の注口部片と思われるものである。口唇部の形状は、舌状を呈する。胎土は泥質で、特に目立つ混入物はみられない。器色は、内外面共に赤褐色。

図60の1～9は、有文の土器資料である。1～3・6は口縁部外面に沈文のみを施すもので、1・2は沈線文のみ、3は刺突文のみ、6は沈線文と刺突文を組み合わせで施文している。4・5・7・8は、口縁部外面に横位1条の刻目突帯を貼付するもので、4・5・7は突帯と沈線文を組み合わせで施文している。

1は、外反する口縁部の資料で、沈線を斜位に施文する。口唇部の形状は、舌状を呈する。内外面には、丁寧にナデ調整を施す。胎土は泥質で、6～7mm程の小礫をわずかに混入する。器色は、内外面共に赤褐色を呈する。

2は、頸部と思われる資料である。波状沈線文の下位に横位沈線を1条施文している。内外面共にナデ調整を施す。胎土は泥質で、白色鉱物・黒色鉱物の細粒が散見される。器色は、内外面共に赤褐色。

3は、胴部の資料である。横位2列の刺突文を施す。内外面共にナデ調整を施す。胎土は泥質で、赤色の細粒を混入する。器色は、内外面共に赤褐色。

4は、口縁部の外反する甕形土器になるものと思われる。口唇部の形状は、Ab類に属す。不明瞭な刻目突帯の上位と口唇直下のそれぞれに、横位1条の沈線を施す。その横位沈線の間には、X字状に沈線を施文している。口唇部に刻目を施す。器外面には、ナデ調整を施す。内面には、横位に不明瞭な擦痕がみられる。胎土は泥質で、赤色の細粒が混入し、黒色鉱物の細粒がわずかにみられる。器色は、内外面共に赤褐色。

5は、口縁部の外反する甕形土器と思われる。口唇部の形状は、Aa類に属す。口縁外面の突帯の上位に、縦位2条の沈線を施す。口唇部には、沈線を施文する。内外面共に丁寧なナデ調整を施す。胎土は泥質で、赤色物質・黒色鉱物の細粒がみられる。器色は、外面が淡茶褐色、内面が赤褐色を呈する。

6は、口唇部の形状がAa類に属する、口縁部資料である。口唇下に半裁竹管状工具による刺突文を横位に1条施し、その直下に沈線を横位に施文していたことが欠損部に沿って確認できる。口唇部には、同種の工具により刺突文を施す。器外面には、ナデ調整を施す。内面には、縦位に不明瞭な擦痕がみられる。胎土は泥質で、赤色物質・黒色鉱物の細粒がわずかにみられる。器色は、内外面共に赤褐色。

7は、胴部の資料である。突帯の上位に縦位・斜位の沈線が施文されるが、全体的構成については不明。内外面共に丁寧なナデ調整を施す。胎土は泥質で、赤色物質・黒色鉱物の細粒がみられる。器色は、外面が暗茶褐色、内面が淡茶褐色を呈する。

8も胴部資料で、壺形の器形になるものと思われる。横位の刻目突帯のみが確認できる。器外面は概ねナデ調整が施され、一部に縦位の擦痕がみられる。内面には指頭痕が明瞭で、凹凸が激しい。一部に横位の擦痕がみられる。胎土は泥質で、赤色の細粒を多量に混入する。器色は、外面が赤褐色、内面は暗赤褐色を呈する。

図60の9～13は底部資料で、9～11が乳房状尖底、12・13はくびれ平底となる。

9は、器外面にナデ調整を施し、内面には調整工具による条痕がみられる。胎土は泥質で、赤色物質・黒色鉱物の細粒を混入する。器色は、外面が淡茶褐色、内面は淡灰褐色を呈する。

10は、乳房状尖底の先端を平坦に整形している。平坦面の底径は、3.5cmを測る。器面は摩滅を受け、滑らかである。胎土は泥質で、赤色の細粒を混入する。器色は、外面が赤褐色、内面は茶褐色を呈する。

11は、胎土が砂質で、白色鉱物・黒色鉱物等の細粒を多量に混入する。器色は、内外面共に赤褐色。

12は、底径6.1cmを測り、底面の張り出しは微弱である。胎土は泥質で、赤色の細粒を多量に混入する。器色は、内外面共に赤褐色。

13は、底径6.6cmを測る。器外面にはナデ調整を施し、内面には工具による調整痕と思われる凹線が縦位にみられる。胎土は泥質で、赤色物質・黑色鉱物の細粒を混入する。器色は、内外面共に茶褐色を呈する。

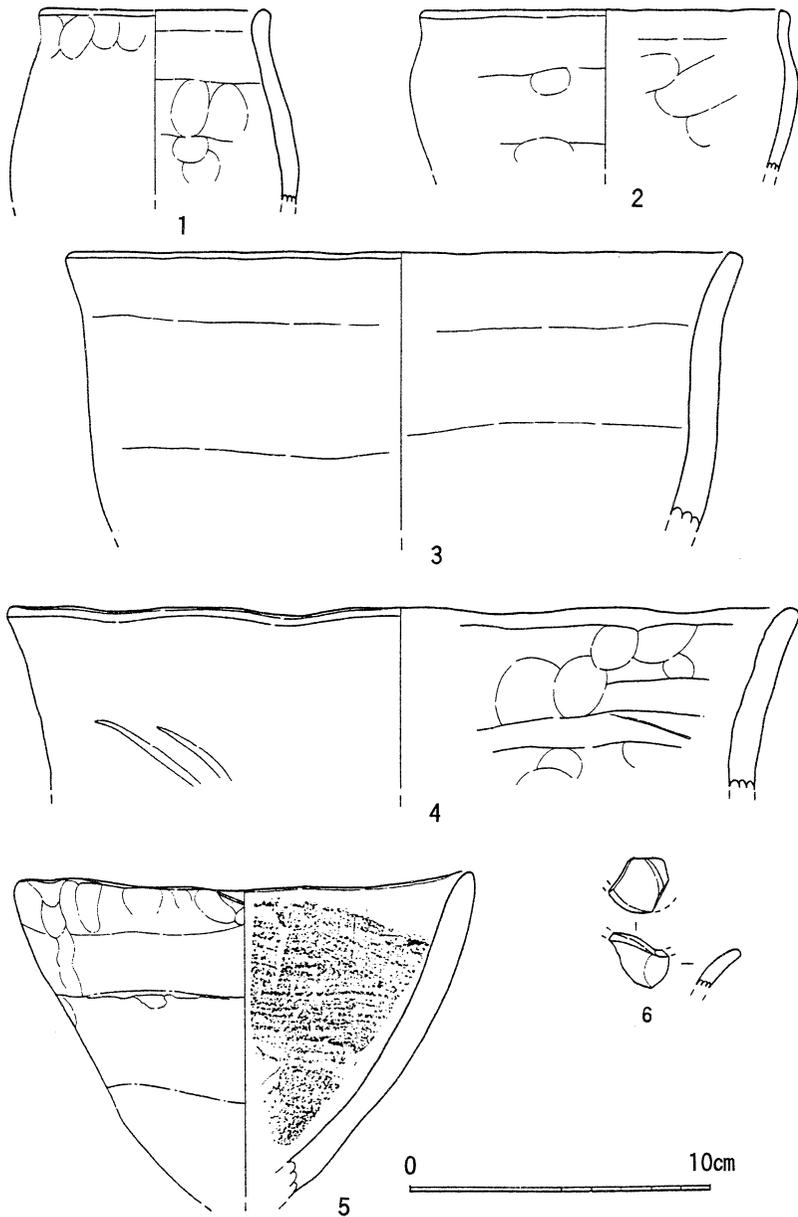


図59 表採資料(1)

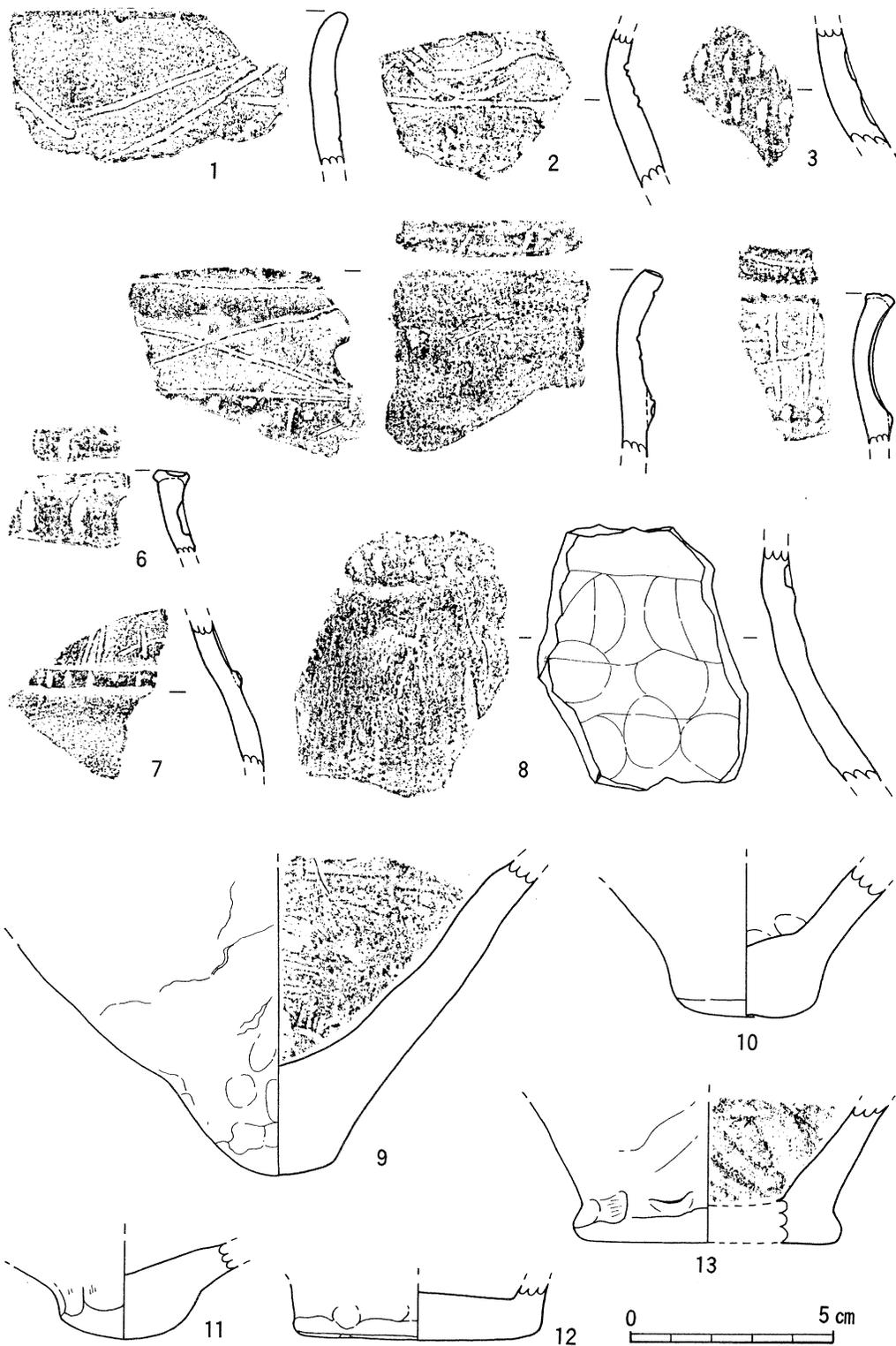


图60 表採資料(2)

弥生土器

ここで扱う資料は、土器の形態や胎土などが在地のものとなり、明らかに持ちこまれたことが判る土器で、九州地域で製作された土器と考えられるものである。今回の調査で得られた弥生土器については、すべて本項で扱うことにする。

表面採集の弥生土器

工事の際に一部破壊された遺物包含層のものと思われる盛土から得られたもので、出土層位が判然としないことより、表面採集資料として扱う、但し、破壊された場所は南区に相当する所であることから、基本的には南区出土のものとしてみなすことができる。

破片にして18点得られ、特徴的な資料を図61に示した。器種は壺形と甕形の2種が確認できた。以下、これらのものについて略述する。

1は壺形の口縁部で、推算口径は13.4cmを測る。口縁は外反し、丁寧なナデ調整を施している。淡橙色を呈し、微砂粒を含んでいる。

2は壺形の胴部片で、断面がM字状をなす凸帯を貼付している。こげ茶色を呈し、雲母や石英粒を多量含み、器面は入念なヘラ磨きを施している。これらの特徴は鹿児島県の松木菌遺跡から出土した球形の壺形土器に酷似している。

3・4は壺形の肩部片で、断面が三角形をなす凸帯を貼付している。両者とも器面は入念なヘラ磨きを施している。前者は茶褐色を呈し、雲母や粗粒石英を多く含む。後者は灰褐色を呈し、微砂粒を若干含んでいる。

5は甕形をなすもので、口縁が外側に突出し、いわゆる逆L字状を呈しているのが特徴的である。器面はナデ調整を施し、器内外面とも茶褐色を呈している。粗砂粒をわりと多く含んでいる。

6は壺形の底部で、底径は7.5cmを測る。底外面の中央部が若干窪んでいる。器外面は丁寧なナデ調整を施し、器色は茶褐色を呈する。石英などをわりと含んでいる。

7は甕形の底部で、推算底径は6.4cmを測る。底の厚さは2cmあり、わりと厚い。器面はナデ調整を施し、器色は茶褐色を呈する。微砂粒を若干含んでいる。

南区の弥生土器

破片にして50点余得られ、器種は壺形（口縁部5点、胴部2点、底部1点）甕形（口縁部1点、底部1点）、鉢形（口縁部4点）の3種が確認できた。以下、特徴的な土器について簡記する。

図62に示した13点で、1～8が壺形、9・10が甕形、11～13が鉢形である。

1は壺の口縁部で、推算口径は20cmを測る。口縁は外反し、断面が逆L字状になっている。器面の保持が悪く、調整痕は判然としない。淡橙色を呈し、粗粒石英や雲母を多量含む。E-11グリッドの2層から出土したものである。

2も壺の口縁部で、推算口径は19.4cmを測る。口唇端部に凹線を有し、口縁は1と同様のつくりである。器面の保持は悪く、調整痕は不明である。淡橙色を呈し、石英や雲母を若干含んでいる。D-12グリッドの2層から出土したものである。

3と4は小破片のため判然としないが、形状や傾きから壺形の口縁部であることがうかがえる。いずれも淡橙色を呈し、微砂粒を含んでいる。前者はE-15グリッドの2層、後者はE-12グリッドの2層から出土したものである。

5も小破片であるが、傾きなどから壺形の口縁部であることが考えられる。口唇直下に1条の凸帯を巡らしている。器面の保持が悪く、混和材が露出している。茶褐色を呈し、雲母を多く含んでいる。H-15グリッドの4層から得られた。

6と7は壺形の肩部片で、前者には4条、後者には2条の断面三角形の凸帯を貼付している。いずれも器面の保持が悪く、調整痕は判然としない。淡橙色を呈し、石英や雲母を含む。6はE-11グリッドの2層、7はF-11グリッドの3層から出土したものである。

8は底の立ち上がりの開き具合から壺形になると考えられ、推算底径は8.4cmを測る。器面はかなり荒れており、混和材が器表面に露出している。淡橙色を呈し、粗粒石英や雲母を多く含む。E-13グリッドの3層から出土したものである。

9は甕形の口縁部で、いわゆる逆T字状になる口唇部を形成している。口唇には不規則な点刻文を施している。器面の保持は良く、ナデ調整痕が確認できる。茶褐色を呈し、砂粒を若干含んでいる。E-13グリッドの3層から出土したものである。

10は充実した甕形の底部で、底面の中央部が凹面になっている。推算底径は8.6cmを測り、器面はナデ調整を施している。雲母や石英を多く含み、G-18グリッドの1層から出土したものである。

11~13は鉢形の口縁部片で、11は推算口径が17cmを測る。口縁はかなり外傾し、口唇は内側に若干とびでるように平坦に成形されている。茶褐色を呈し、ナデ調整を施している。G-13グリッド1層の出土である。12と11と同一個体になると思われる。13はかなり小破片であるが、口縁の形状より鉢形と判断した。器面はナデ調整を施し、暗褐色を呈している。E-12グリッドの2層から出土したものである。

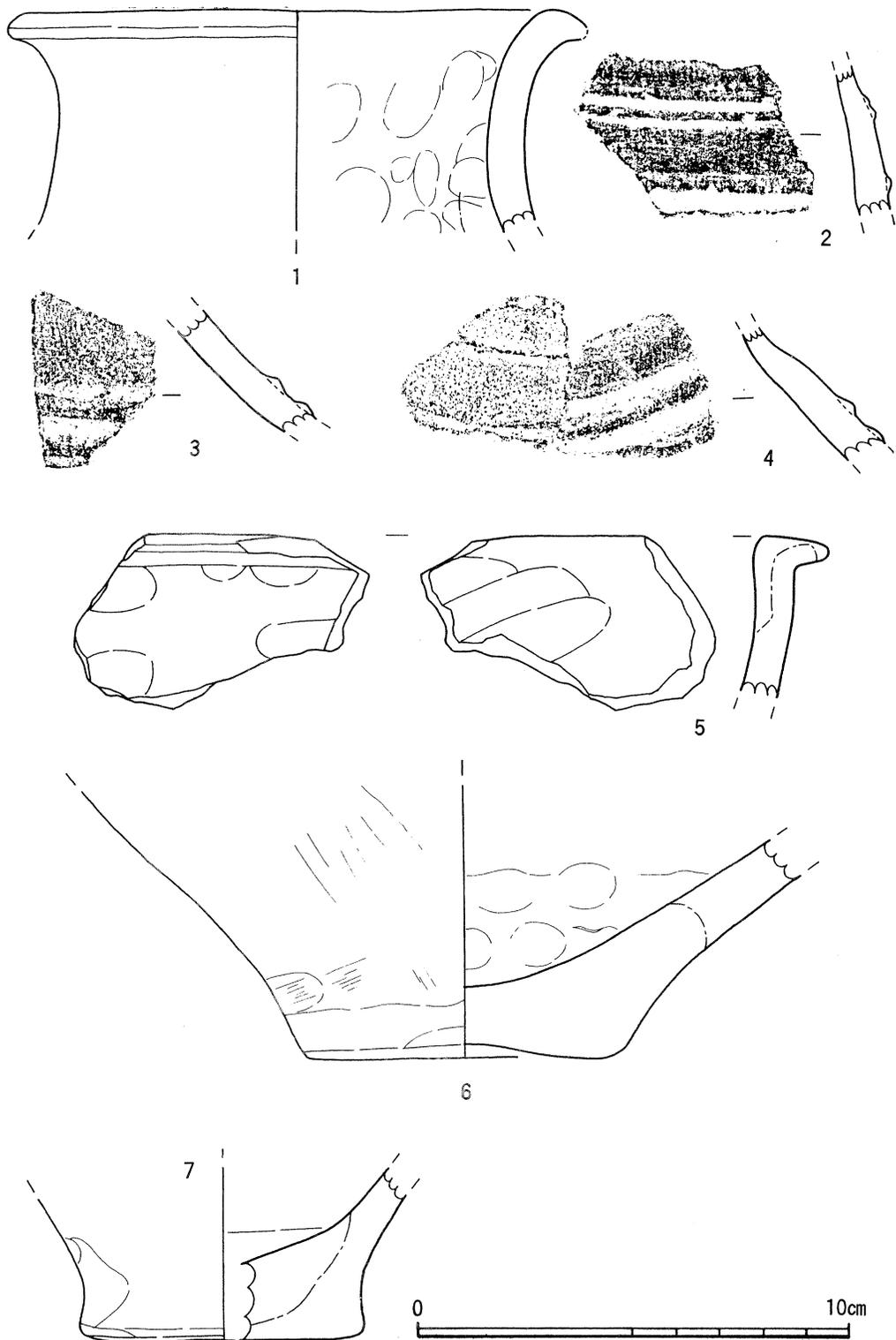


図61 表面採集の弥生土器

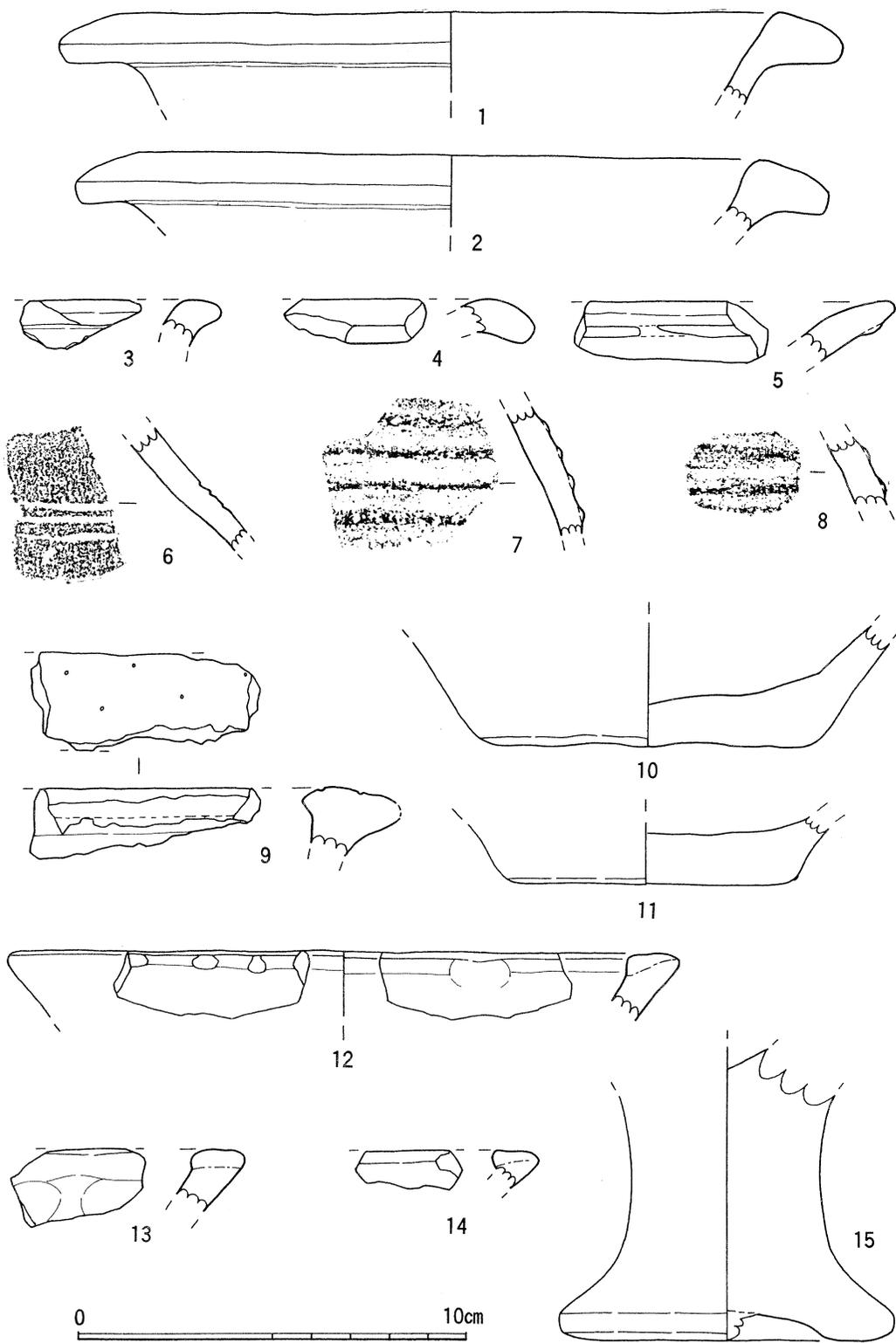


図62 南区の弥生土器

北区の弥生土器

本区から出土した弥生土器は、図63に示した僅か3点のみであるが、底部は地山への移行層である4層からの出土で、本区の時期判断のメルクマールになると思われる。以下、これらの土器について簡記する。

1と2はかなりの小片であるが、壺形土器の肩部片と考えられる。器面も磨滅しているが、断面三角形の凸帯がそれぞれ認められる。いずれも淡褐色を呈し、雲母や石英をわりと含んでいる。両者ともF-24グリッドの3b層から出土したものである。

3は壺形の底部で、底径は7.8cmを測る。立ち上がりはかなり外側に開き、器外面は丁寧なナデ調整を施している。茶褐色を呈し、石英砂粒を多量含んでいる。F-20グリッドの4層から出土したものである。

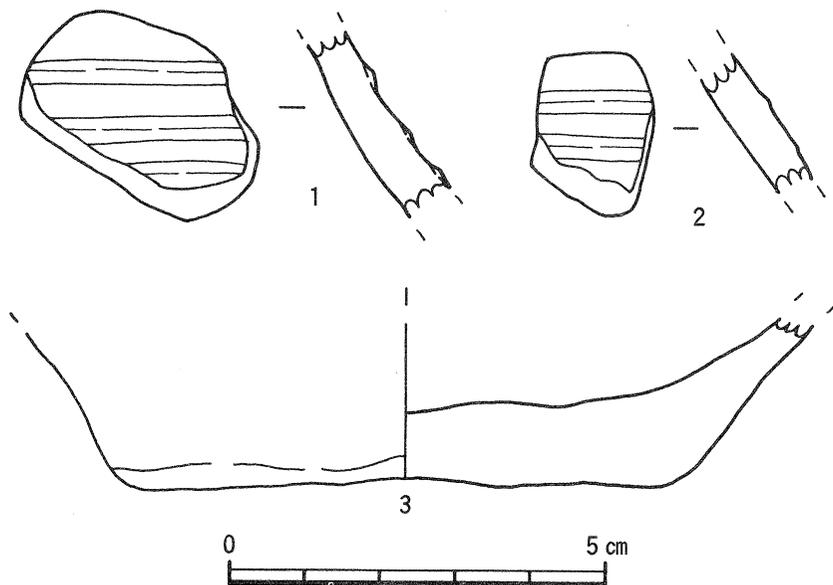


図63 北区の弥生土器

弥生系土器

ここで扱う資料は、器形や文様などの特徴が従来の沖縄後期土器とは異なるもので、また、胎土などが移入の弥生土器とも違うもので、取り敢えず弥生系土器として扱う。今後、類例資料が増加することによって一型式をなす土器になるものと思われる。

表面採集の弥生系土器

前記した弥生土器と同様に、一部破壊された遺物包含層の盛土の中から得られたもので、出土層位が不明なことより表面採集品として扱った。

特徴的なものを図64に示した。以下、これらの土器について簡記する。

1は推算口径が14.2cmを測る鉢形をなし、口縁が如意状に外反している。口唇内側に刺突文が見られる他は文様が無い。器面はラフであるが、ナデ調整を施している。焼成は堅緻で、黒褐色を呈し、微砂粒を若干含む。

2と3は口縁部の小片で、いずれも口縁がほぼ直口する鉢形をなすようである。両者とも器表面に下向きの弧状をなす沈線文を施している。器厚は比較的厚く、12mmを測る。器面はナデ調整を施し、茶褐色を呈する。

4と5は胴部片で、前者は縦位の幅広沈線文が2本確認できる。また、上端に径8mmの孔を有するが、焼成後の二次孔で、補修孔と考えられる。器面はナデ調整を施し、裏面には横位の擦痕が認められる。黒褐色を呈し、微砂粒を含んでいる。後者は口円付近の破片で、表に下向きの弧状をなす沈線文を施し、裏面には斜めの沈線がみられる。器面はナデ調整を施し、微砂粒をわりと含んでいる。暗褐色を呈する。

6は底部片で、推算底径が9.2cmを測る比較的広底をなしている。立ち上がりが若干くびれているが、いわゆる沖縄後期のくびれ平底とは異なるようである。

南区の弥生系土器

本区から得られた該土器の特徴的なものを図65に示した。以下、これらの土器について略述する。

1は比較的大きな口縁部片で、推算口径が21.6cmを測る甕形をなすものである。口縁上端を外側に折り曲げ、幅広い口唇を形成している。口唇に点刻文と鉤状の線刻文を施し、器表面には下向きの弧状をなす沈線文と、弧の内部に縦位と横位の沈線文を描いている。また、内面にも左下がりの沈線文を施している。焼成は極めて良く、器面はナデ調整を施すが、内面に擦痕がみられる。暗褐色を呈し、粗砂粒をわりと含んでいる。G-13グリッドの1層から出土。

2も1と同様に口縁上端を外側に折り曲げて成形したもので、傾きが甕形をなすものと考えられる。器外面に点刻文を施している。焼成は良好で、器面はナデ調整を施す。茶褐色を呈し、粗砂粒を含んでいる。E-13グリッドの1層出土。

3は口唇を幅広く成形した鉢形土器で、口唇に鋸歯状の細沈線文を施している。焼成は良く器面はヘラ磨きを施したように光沢を有する。黒褐色を呈し、雲母や微砂粒を含む。これらの特徴から弥生土器とも考えられる。D-9グリッドの2層出土。

4は口縁が逆L字状をなす鉢形土器で、文様はみられない。焼成は良く、器面はナデ調整を施す。器壁はわりに厚く、1cmを測る。表面は黒褐色、内面は茶褐色を呈し、粗粒石英を多く含んでいる。E-11グリッドの3層出土。

5は推算口径が18.4cmを測る鉢形をなすもので、口唇に粘土紐を貼り付けて幅広く成形している。口唇には斜めの細沈線文を施している。焼成は普通で、器面はナデ調整を施す、黒褐色を呈し、微砂粒を若干含んでいる。D-12グリッドの2層出土。

6は壺形土器の口縁部片と思われるが、小片のため判然としない。口唇は幅広く成形され、口唇に斜位の細沈線文を施している。焼成は普通で、器面はナデ調整を施す。茶褐色を呈し、微砂粒を若干含んでいる。G-13グリッドの1層出土。

7は口唇に鞍状凸帯を貼付しているが、他の文様や器形、色調、胎土などの特徴から、1と同一個体になるものと思われる。G-13グリッドの1層出土。

8は口縁上端を折り曲げて成形した鉢形をなすもので、器外面にラフな沈線文がみられる。器壁はかなり薄く、5mmを測る。焼成は良く、器面はナデ調整を施す。茶褐色を呈し、微砂粒を若干含む。F-11グリッドの1層出土。

9は口縁上端を外側に折り曲げて、逆L字状に形成した鉢形土器で、口唇に点刻文を施している。器該面には下向きの弧状をなすラフな沈線文を施す。焼成は良く、ナデ調整を施している。茶褐色を呈し、微砂粒をわずかに含む。G-13グリッドの1層出土。

10は口縁上端を折り曲げて成形した鉢形をなすもので、文様は見られない。焼成は良好で、ナデ調整を施している。黒褐色を呈し、粗砂粒を含んでいる。H-15グリッドの2層出土。

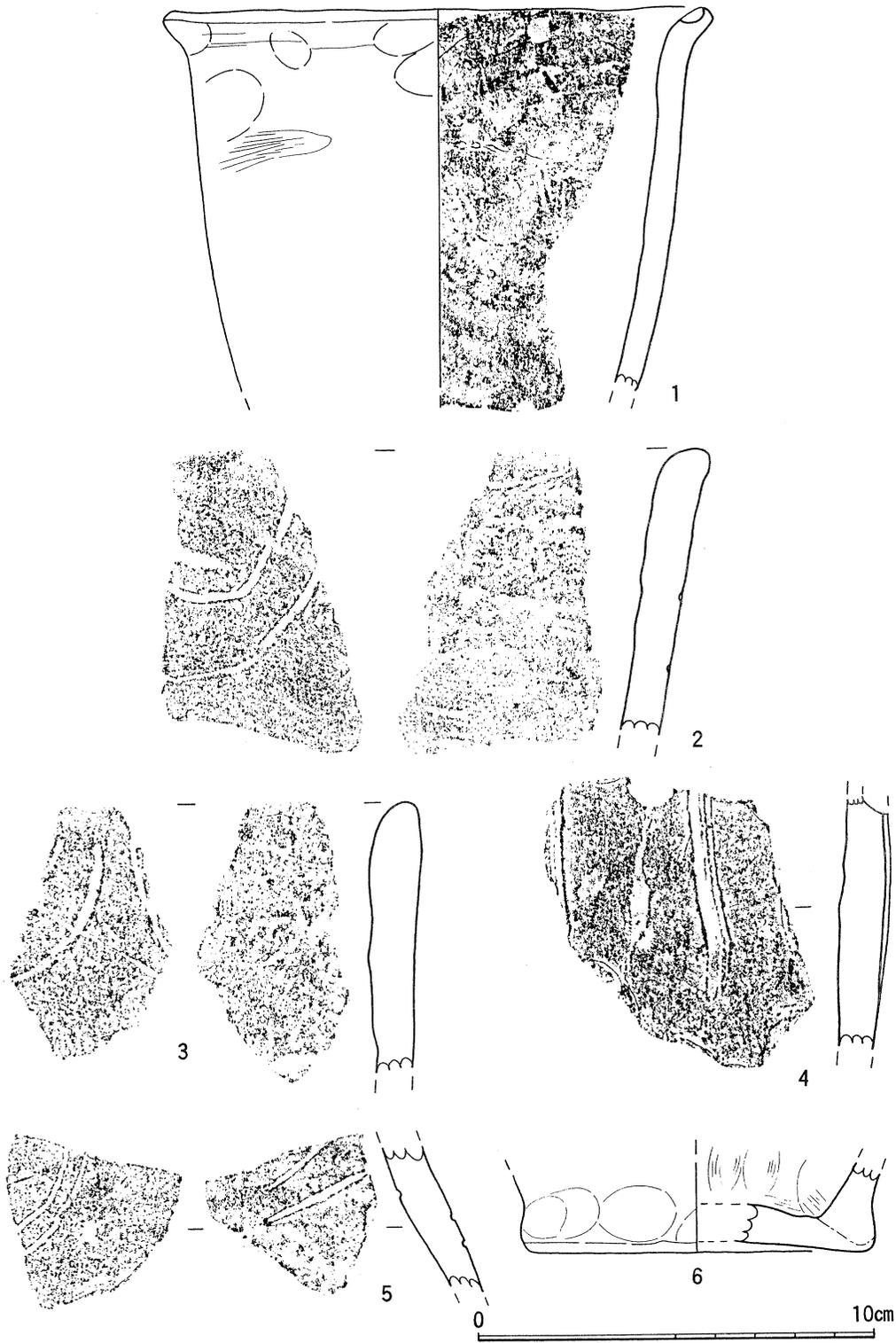


図64 表面採集の弥生系土器



図65 南区の弥生系土器

第5章 収 束

以上、具志原貝塚の調査内容等について述べてきた。ここでは若干の考察と二、三の課題について触れ、結びとしたい。

本貝塚は、1957年に多和田真淳氏によって発見された遺跡である。今回の調査区の西側に隣接する地区は、1963年に琉球大学の友寄英一郎氏によって発掘調査が行われ、沖縄で初めて弥生土器（山ノ口式土器）が発見された遺跡として著名である。また、さらに西側の区域は1984年に伊江村教育委員会が発掘調査を実施し、その際にも免田式土器などの弥生土器をはじめ、貝製品など多岐にわたる遺物が出土した。また、最下層からは縄文時代前期の条痕文土器や室川下層式土器が検出され、沖縄でも数少ない複合遺跡であることが判明した。これらの成果を踏まえて、本貝塚が沖縄の先史時代文化を解明するうえで欠くことのできない遺跡であるということから、1988年に文化財（史跡）として国指定され、現状のまま保存することになった。

今回の調査は、道路改修工事に伴う緊急発掘調査ということで、範囲も道路予定部分に限られた。また、現道部分でもあることより、上部はかなり攪乱され、プライマリーな遺物包含層は30～50cmの厚さで残っているにすぎないが、土器などの出土遺物はわりと豊富である。

遺構としては、H-12グリッドにおいて土壌が1基検出された。地山に掘りこまれた土壌は直径90cmのほぼ円形をなし、深さは地山面から40cmである。ただ、地山直上まで攪乱を受けており、本来の規模は不明である。土壌内から縄文期（前Ⅳ期）の仲泊式土器と貝殻、石材が出土し、近隣にこの時期の遺跡が存在することが予想される。他には南区の3層面において焼土遺構が4基検出されたが、特に施設を伴わないことから焼き火跡であることが考えられる。

路線との関わりで調査区は南北に細長いトレンチになったが、北側と南側では遺物の組成、特に土器の特徴が異なっており、時期差があることが考えられることから、出土遺物を北区と南区に分けて扱った。その結果、南区では沖縄後期でも古手とみられている尖底の深鉢形土器が主体をなし、それに伴って南九州から持ちこまれた弥生土器（弥生中期前半）がわりと出土している。それに対して、北区ではくびれ平底の甕形土器が主流をなし、地山への移行層から弥生土器（弥生中期後半）が若干得られた。両区の間地点が地山まで大きく攪乱を受けており、層位的な先後関係は把握できないが、土器の特徴や伴出遺物から南区のほうが時期的に古くなるようである。また、両区とも最下層から縄文前期の条痕文土器や室川下層式土器が断片的に出土している。西側に隣接した地区でも以前の調査で出土しており、この時期の遺跡の主体部が近くにあることを示唆している。

土器以外の遺物では石器、貝製品、骨製品が得られた。石器は沖縄後期の遺跡としては比較的多く、石斧・たたき石・すり石・砥石・円盤形石器などがある。これらの石器に使われている岩石は伊江島に産しないものがほとんどで、島外からの持ち込みが考えられ、産地が確定す

れば具志原貝塚人の行動範囲も把握することが可能である。貝製品はスイジガイ製利器やゴホウラの貝輪製作途上品などがある。後者は九州地域から持ちこまれた弥生土器などの見返り品である公算が大きく、他の遺跡ではストックされたゴホウラ・イモガイの集積遺構が多く検出されている。骨製品は少なく、骨針などが若干出土しているにすぎない。

以上、調査の内容について述べた。発掘調査は道路拡幅工事予定区域という限られた範囲にも関わらず、多岐にわたる成果が得られた。特に、次の3点に集約されると考えられる。

1. 出土土器の内容が南区と北区では異なっている。遺物包含層の層準としては両区とも地山直上で同レベルにあるが、南区では尖底の深鉢形が主体をなし、移入された弥生土器がわりと伴出している。それに対して北区ではくびれ平底の甕形が主流をなしている。これらの土器は沖縄後期を代表するもので、これまでの調査研究から尖底がくびれ平底に先行することが知られている。このことから南区が時期的に古くなることがうかがえる。ただ、両区とも貝塚部であり、居住地域は西側に隣接する区域（国指定史跡）になることが考えられる。

2. 持ちこまれた弥生土器。南区から九州弥生中期前半に位置づけられる弥生土器がわりと出土している。器種も壺、甕、鉢があり、壺ではかなり大型の底部や鹿児島県の松木菌遺跡から出土した断面M字状の凸帯を貼付したものに酷似した資料などがある。甕では沖縄であまり出土例のない充実した底部が得られた。具志原貝塚は沖縄で初めて弥生土器が出土した遺跡でもあり、今では30数カ所の遺跡で弥生土器の出土が確認されている。時期的には弥生期全般に及んでいるが、特に中期の時期に集中しているようである。このことは、前記したように、九州地域で流行する貝輪の原材料であるゴホウラ・イモガイを求めて来島した人たちがもたらしたものと考えられている。いわゆる見返り品として弥生土器や鉄製品、ガラス製小玉などが沖縄に持ちこまれたわけである。このように、伊江島をはじめ、弥生中期における彼我の文化的、経済的交流は予想以上のものがあつたと思われる。

3. 仲泊式土器の発見。南区において地山に掘り込まれた土壌が検出され、その中から伊江島では初めての仲泊式土器が出土した。該土器は沖縄編年前Ⅳ期前半（縄文後期前半）に位置づけられているもので、伊江島における土器編年の空白部が埋められる貴重な資料である。今回の調査ではこの時期の遺跡を確認することはできなかったが、出土状況等から近隣に遺跡が存在することが予想される。また、地山への移行層から沖縄編年前Ⅱ期（縄文前期）に位置づけられる室川下層式土器も出土しており、この地において、約5,000年前から生活を営んでいたことがうかがえ、貝塚人達にとって恰好の生活拠点であつたことがわかる。

最後に、沖縄後期における土器編年の細分化の必要性が唱えられて久しくなるが、未だに実現していないのが現状である。その要因として、遺跡のほとんどが単純文化層で、層位的な研究が困難であること、また、出土する土器が小破片のため全体形がうかがえないという点などが考えられる。さらに、約1,000年の期間を持つ後期社会における土器の変化がかなり緩やかでそのことも細分化のネックになっているようである。そのような状況下でも調査研究は着実

に進んでおり、近い将来に土器編年が確立すると思われる。

今回の調査において、これからの土器研究に一石を投じる成果が得られたのは重要である。前述したように、調査区で土器の内容が異なり、伴出する弥生土器などから、南区出土の尖底土器が古く、北区のくびれ平底土器がそれに後続するものと考えられる。このことは従来から言われていることで、本遺跡でも尖底とくびれ平底の先後関係を把握することができたのは特筆に値するものである。

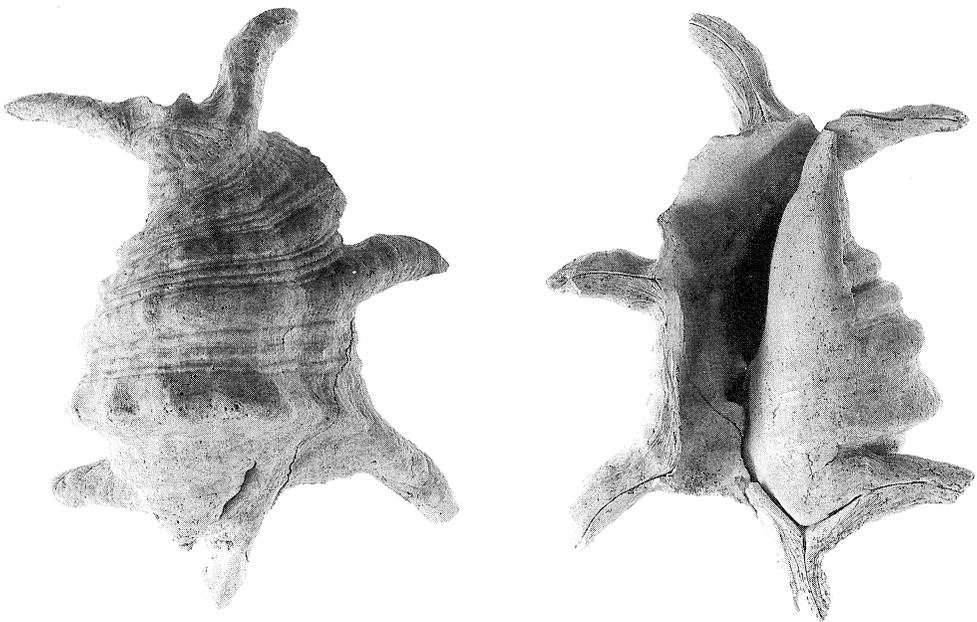
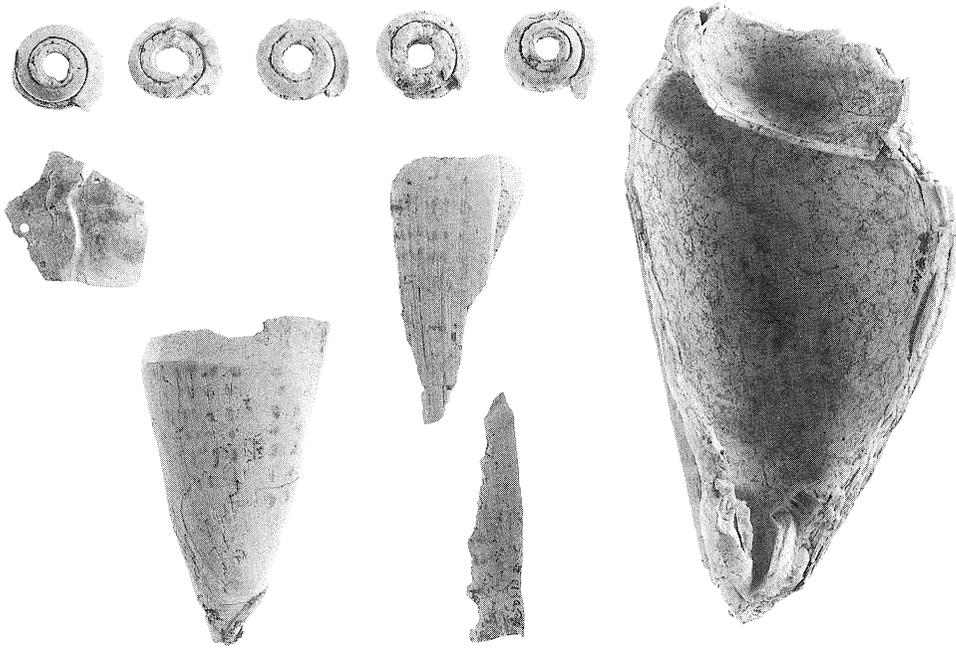
〔参考文献〕

- 友寄英一郎 「伊江島具志原貝塚調査概報」『琉球大学法文学部紀要』
社会篇第12号 1968
- 高宮 廣衛
友寄英一郎 「沖縄出土の弥生式土器」『琉球大学法文学部紀要』
社会篇第14号 1970
- 友寄英一郎ほか 「具志原貝塚のはなし」『伊江島具志原貝塚』
伊江村教育委員会 1978
- 安里 嗣淳 「伊江島具志原貝塚の概要」『沖縄県文化財調査報告書』第61集
岸本 義彦 沖縄県教育委員会 1985
- 岸本 義彦 「沖縄出土の弥生土器瞥見〔I〕」『南島考古』第8号
沖縄考古学会 1983
- 岸本 義彦 「沖縄における貝の集積遺構—ゴホウラ・イモガイを中心に—」
島 弘 『紀要』第2号 沖縄県教育委員会文化課 1985

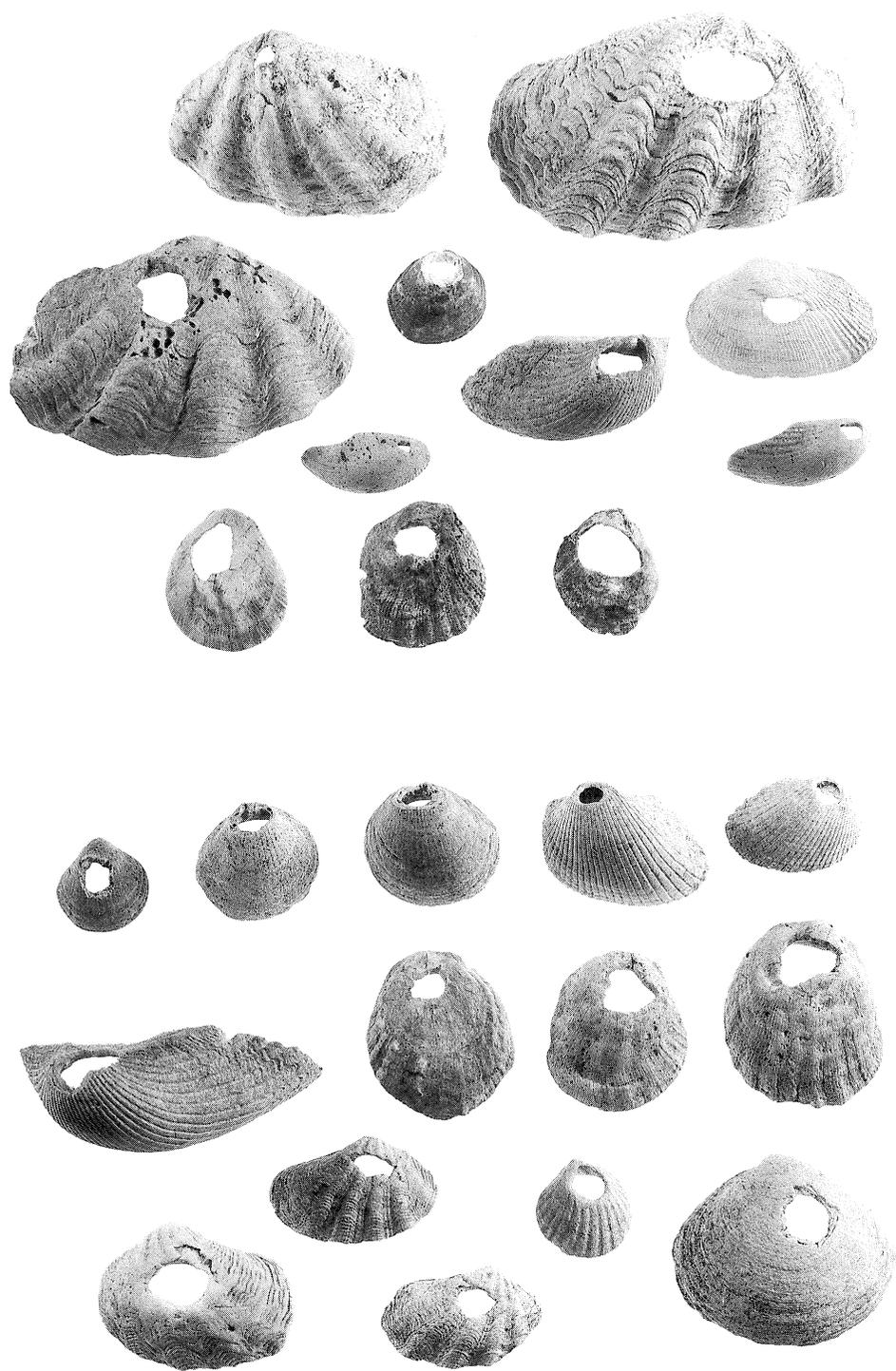
版 圖



図版15 上：貝輪（オオベッコウガサ製、オオツタノハ製、シロナルトボラ製）
下：貝輪（ゴホウラ製）



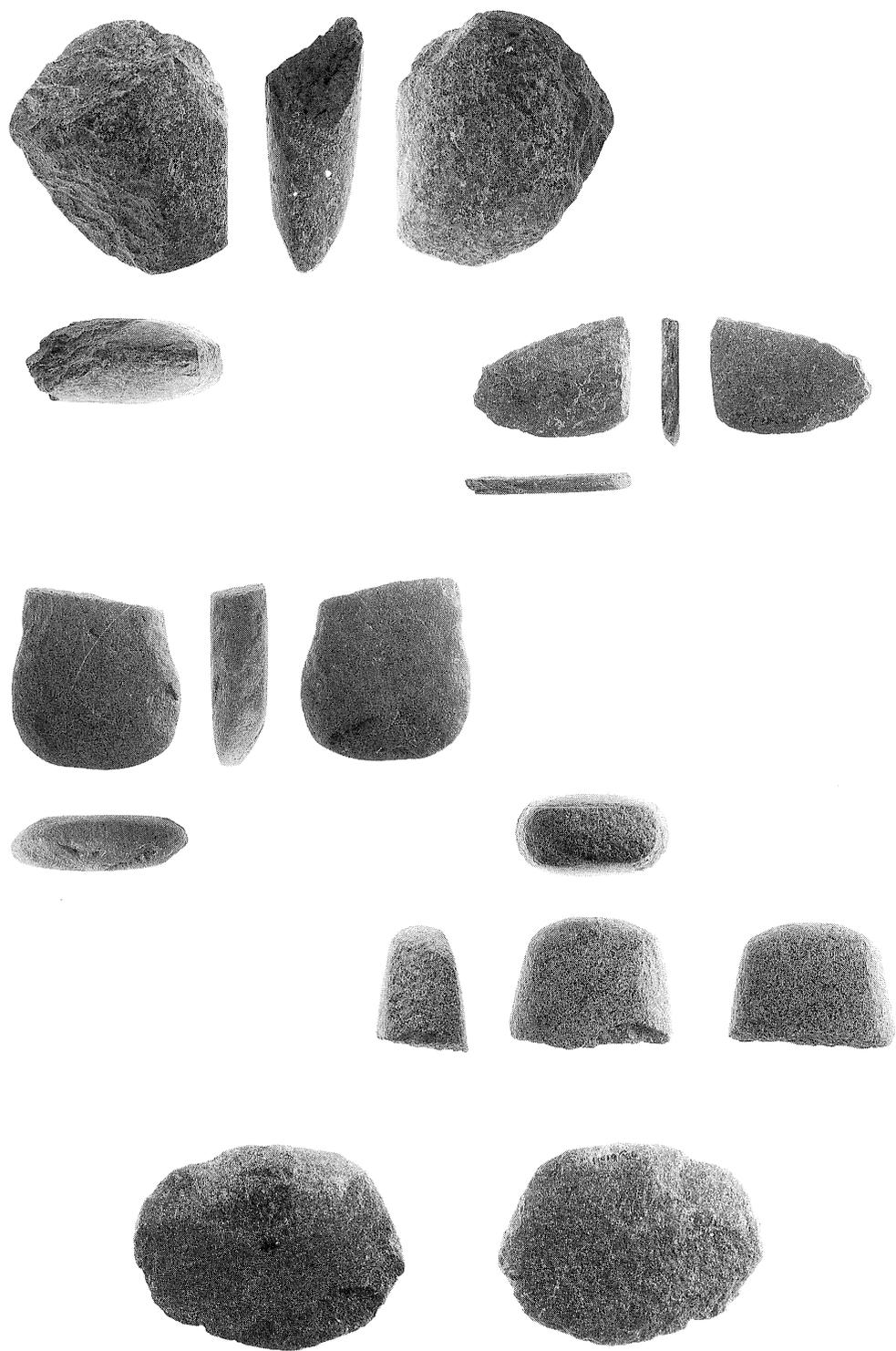
図版16 上：玉（マガキガイ製）、ヤコウガイ製有孔製品、イモガイ製品
ラクダガイ製品 下：スিজガイ製利器



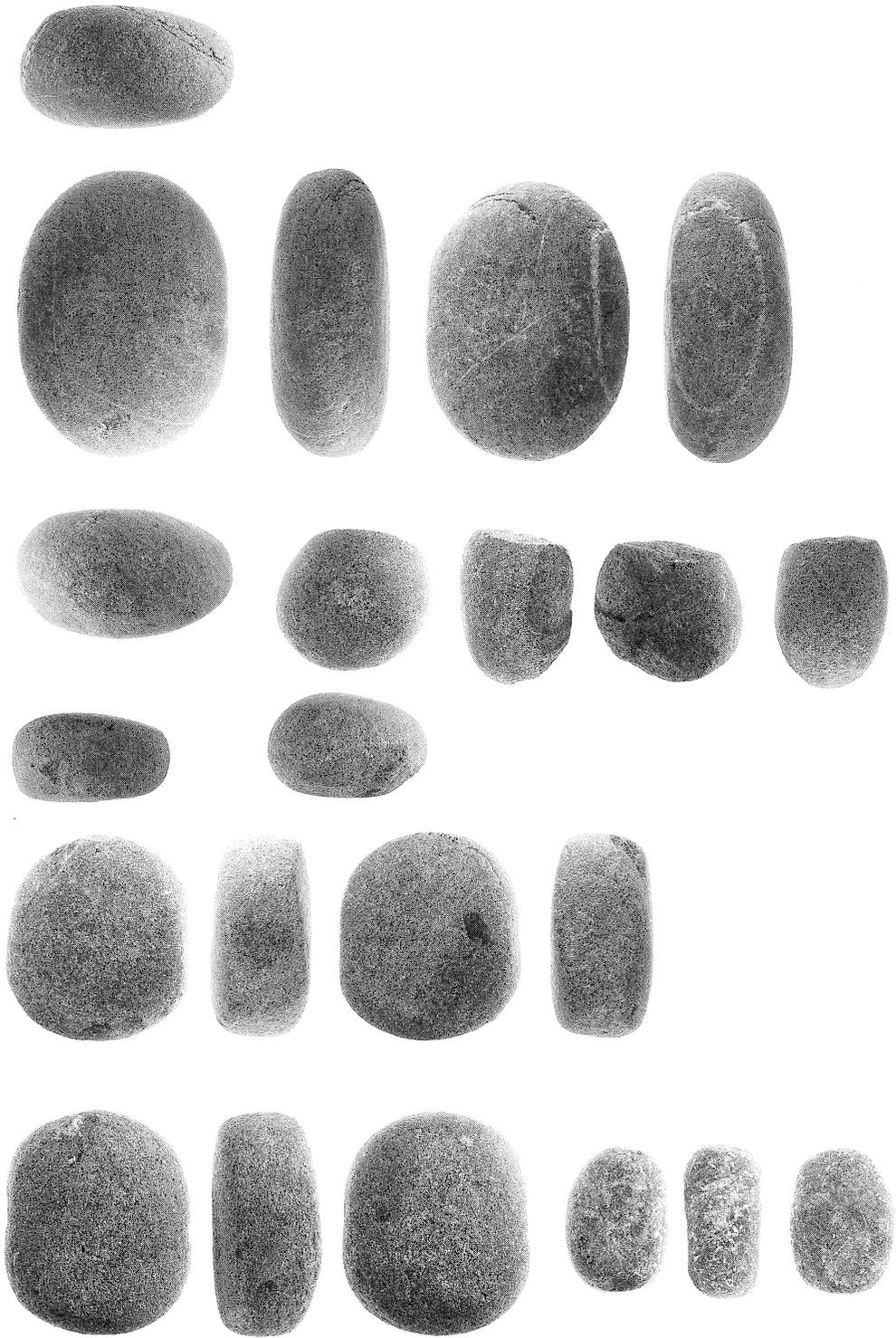
図版17 貝製漁網錘



図版18 上：ヤコウガイ製匙状製品、螺蓋製敲打器
 貝刃（シレナシジミ製）
 下：骨製品（骨針）



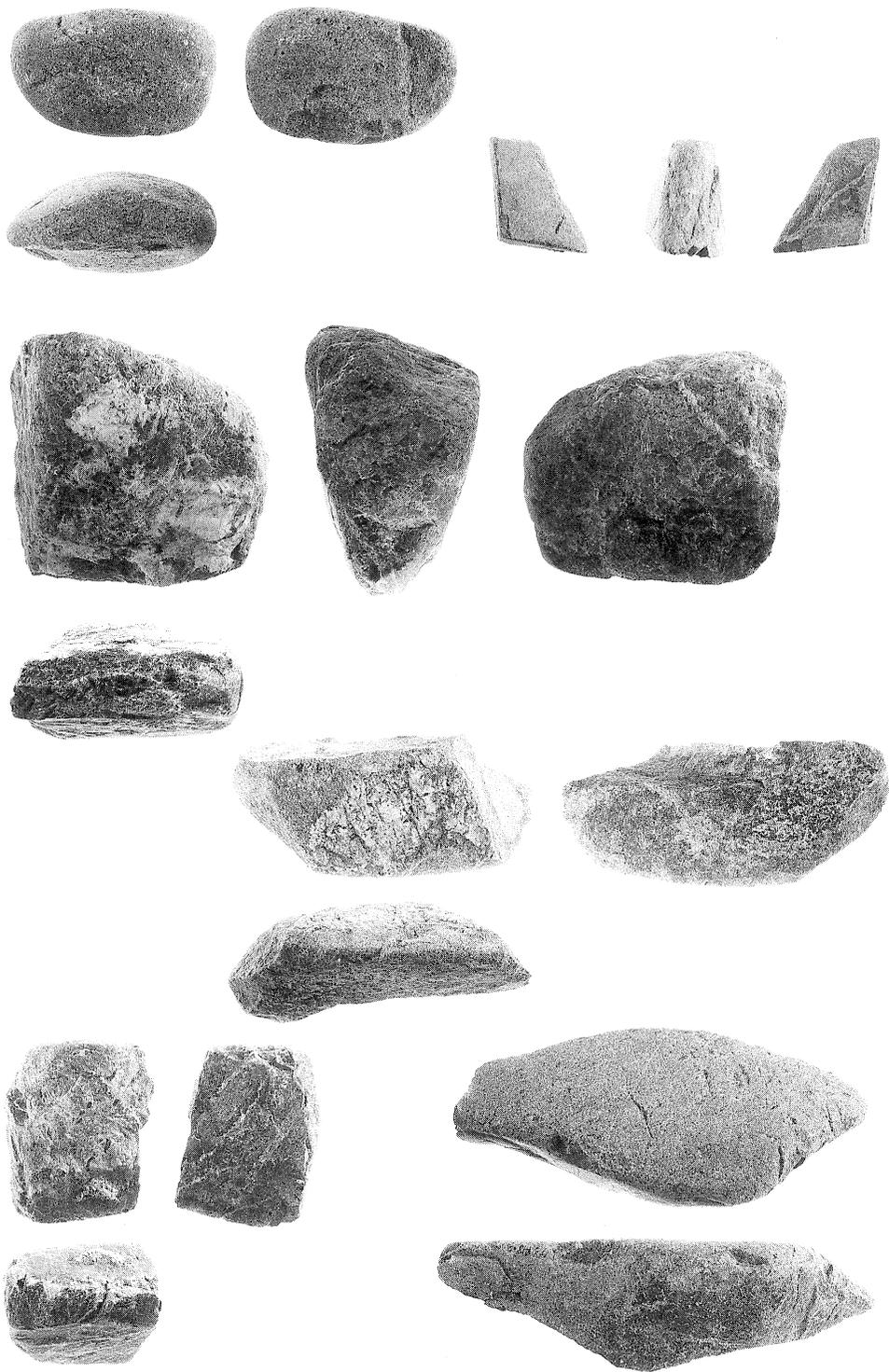
図版19 石斧、円盤形石器



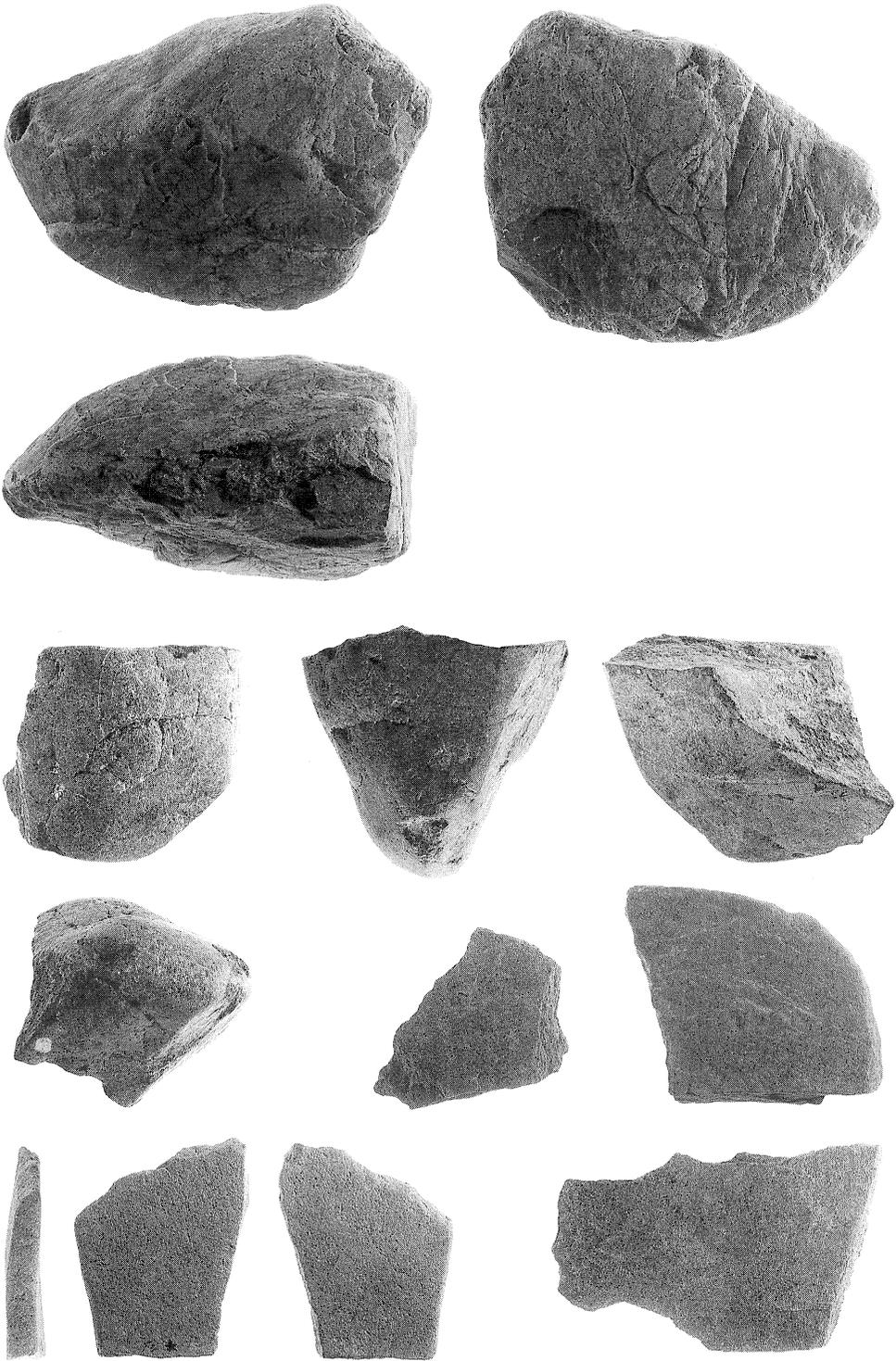
図版20 たたき石 (A類)



図版21 たたき石 (B類)



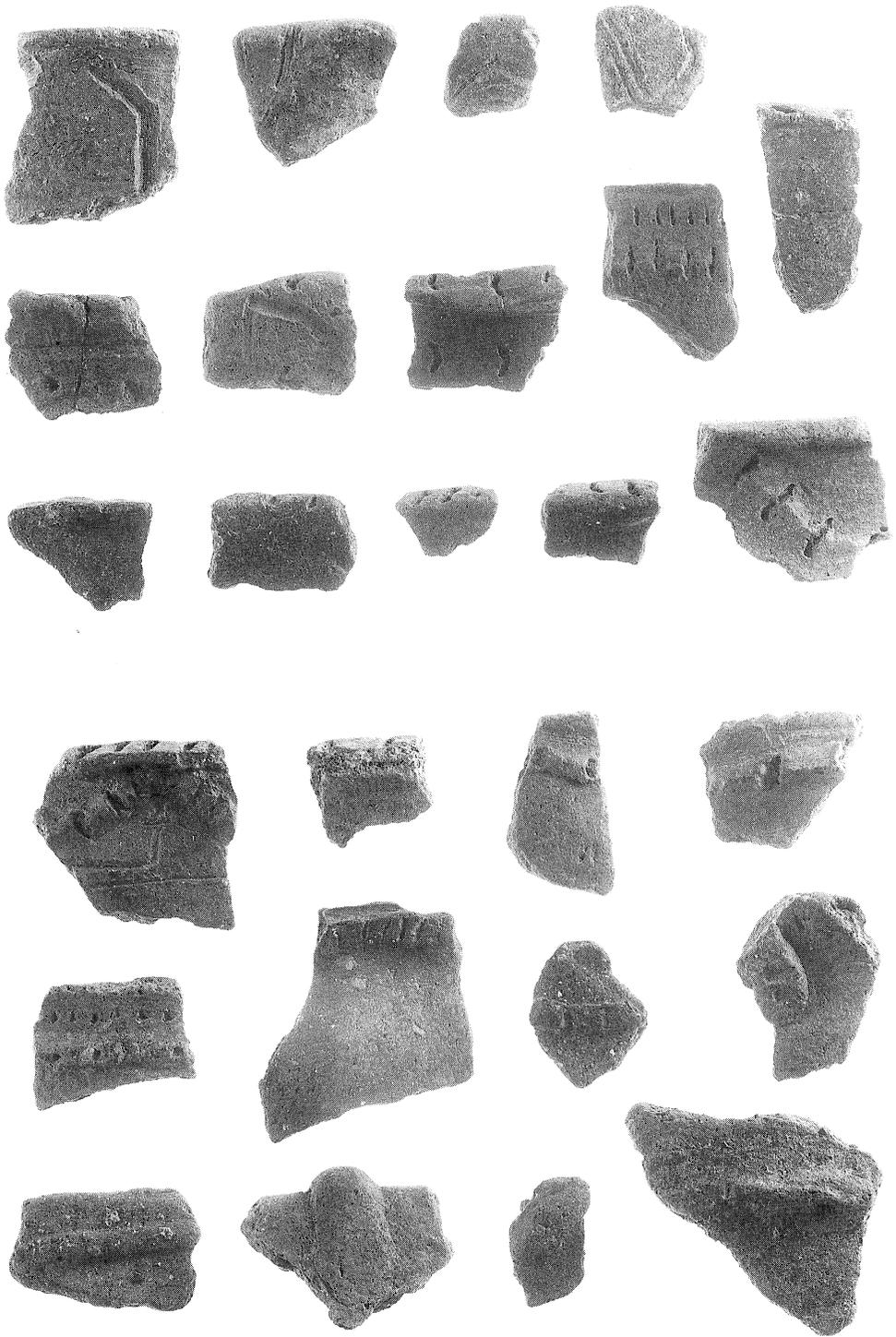
図版22 たたぎ石 (B類)



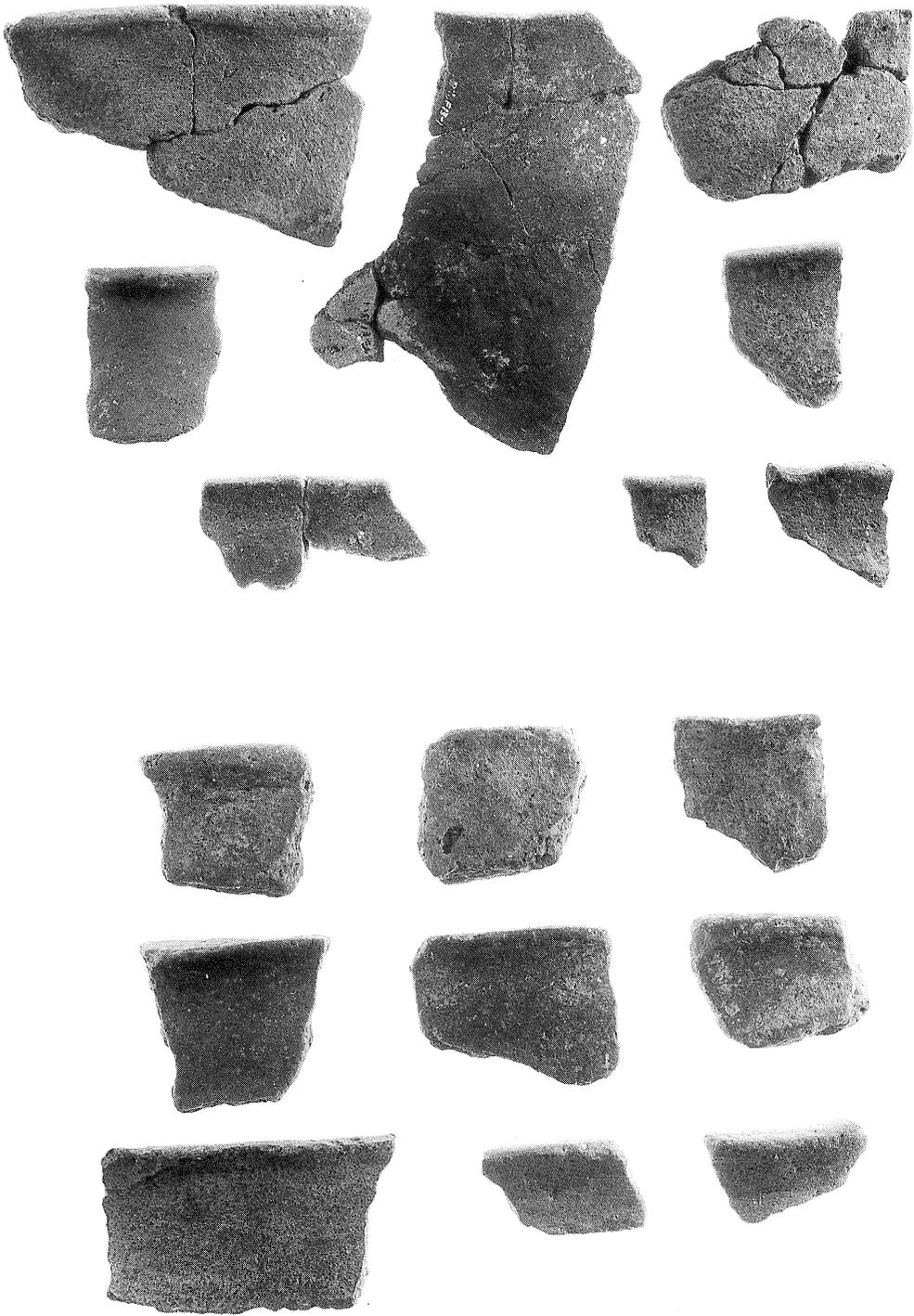
図版24 すり石、砥石



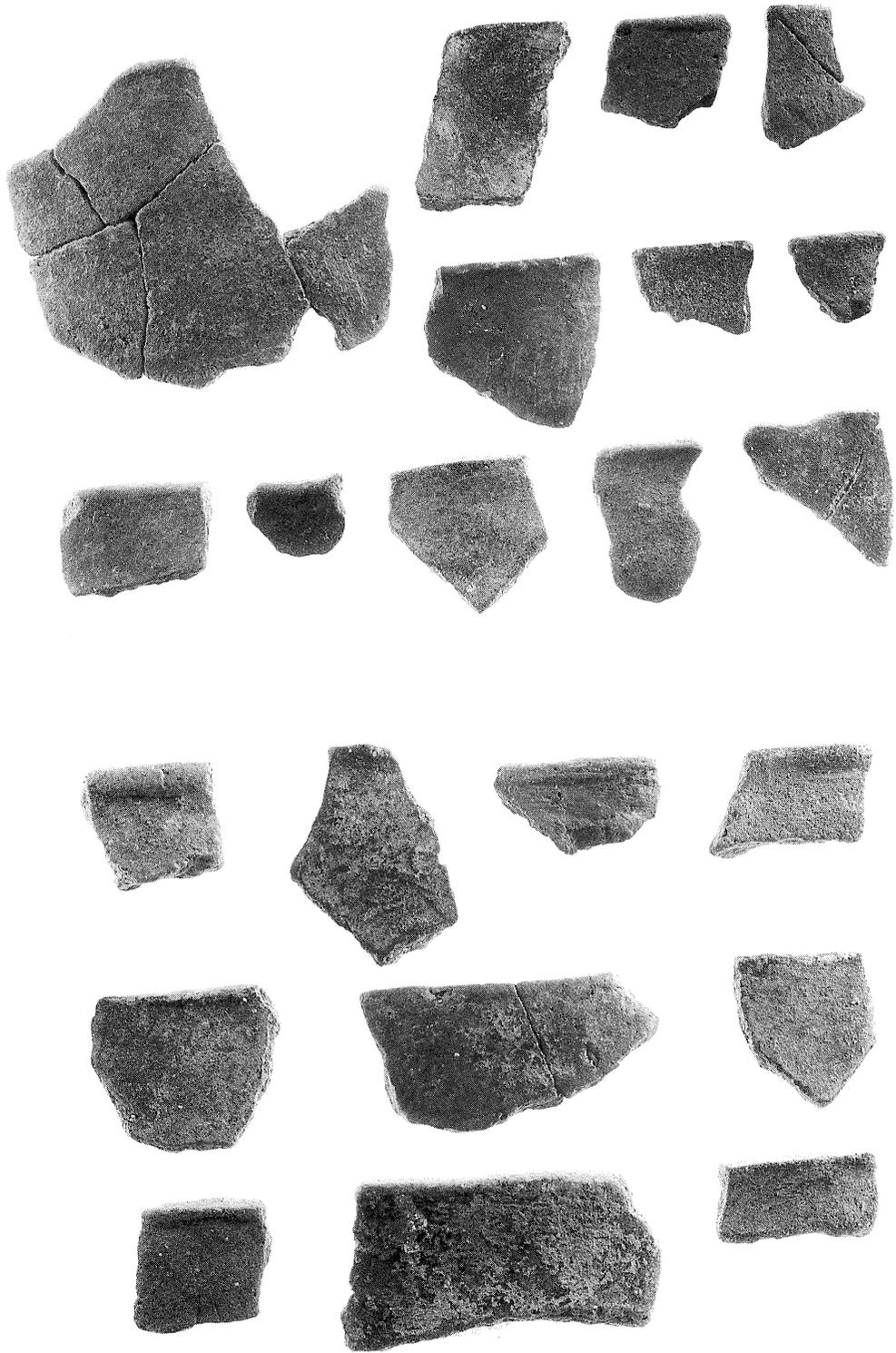
図版25 上：室川下層式土器
下：仲泊式土器



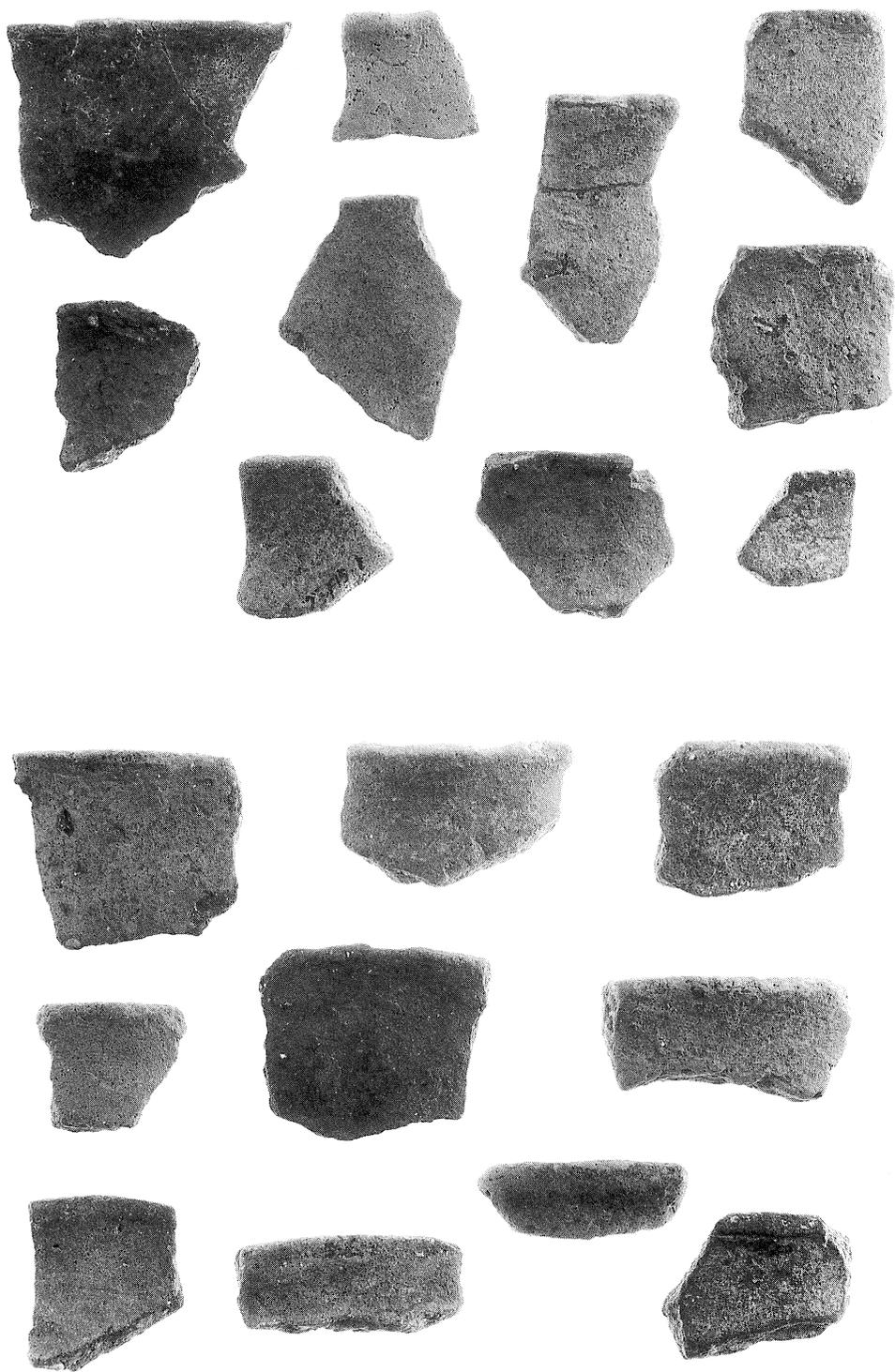
図版26 上：後期土器(1) 有文
下：後期土器(2) 有文



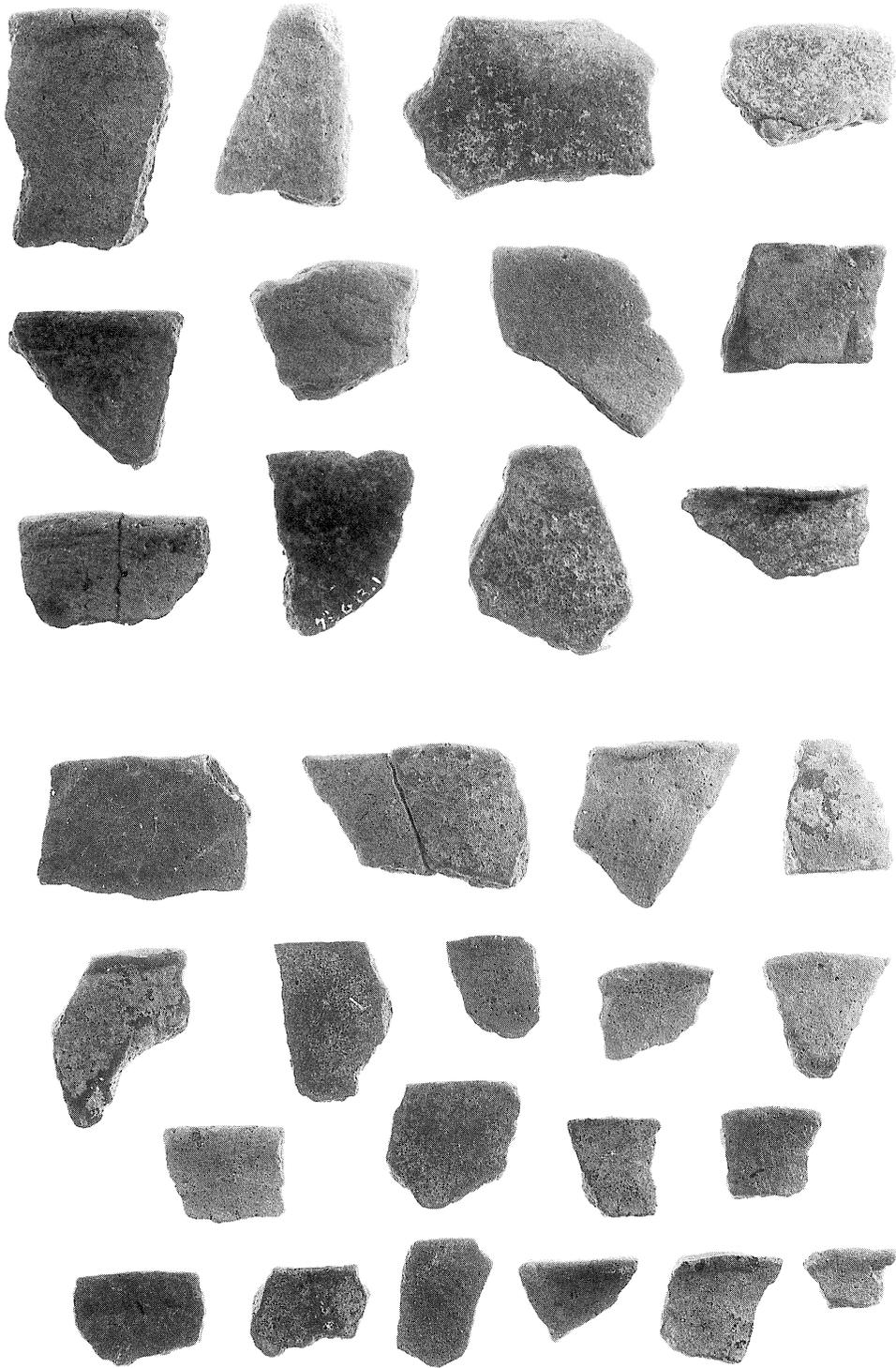
図版27 上：後期土器(3) 無文 壺形
下：後期土器(4) 無文 壺形



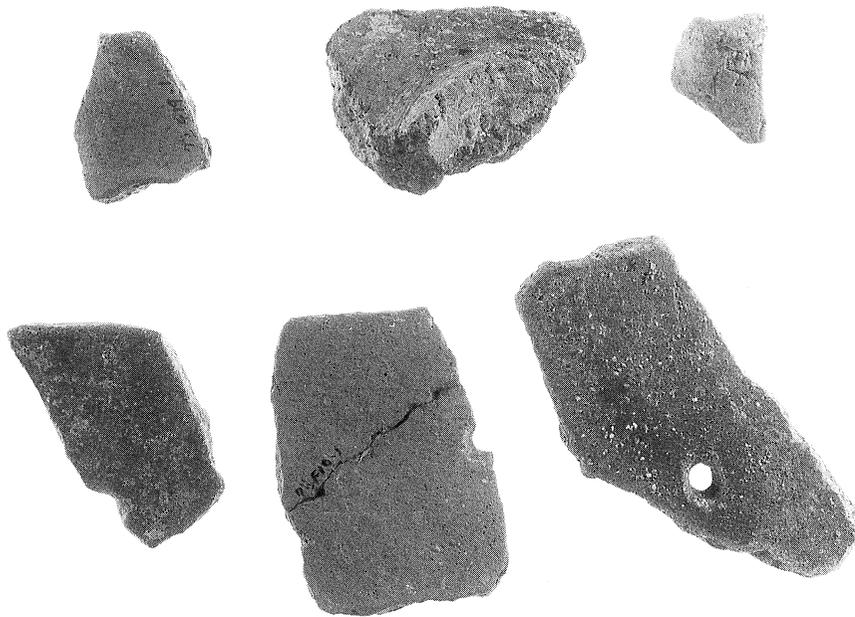
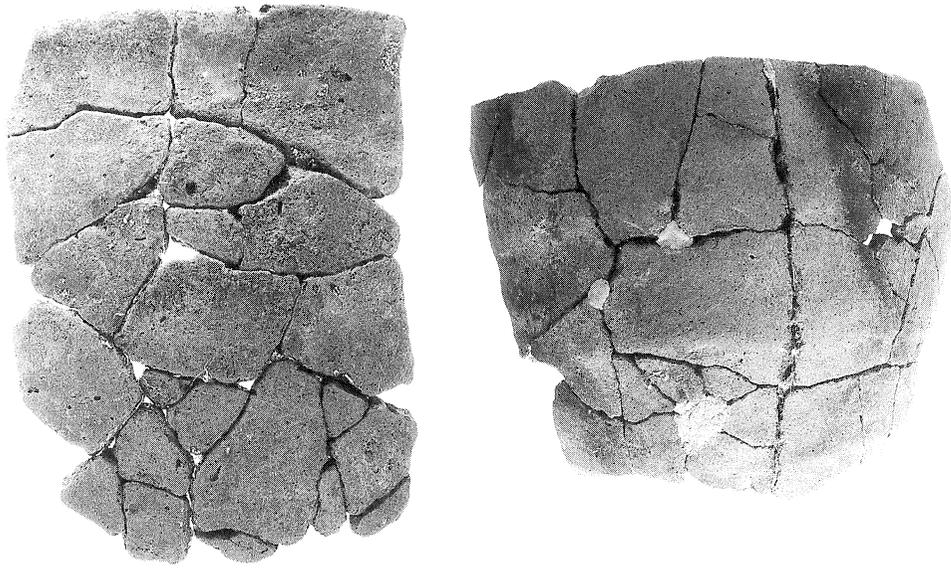
図版28 上：後期土器(5) 無文 鉢形
 下：後期土器(6) 無文 鉢形



図版29 上：後期土器(7) 無文 壺形
下：後期土器(8) 無文 壺形



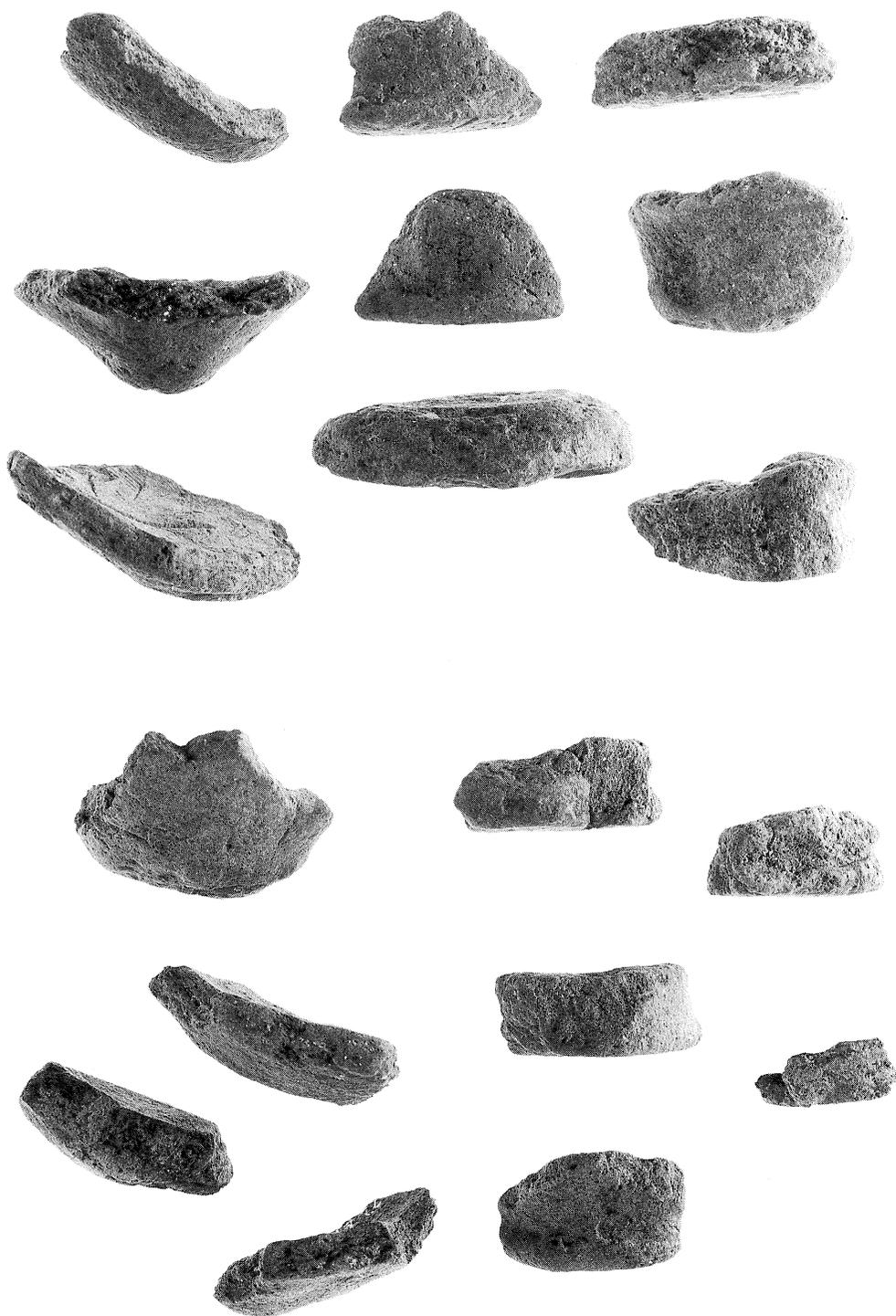
図版30 上：後期土器(9) 無文 鉢形
 下：後期土器(10) 無文 鉢形



図版31 上：後期土器(11) 左、無文壺形・右、無文鉢形
下：後期土器(12) 特殊土器



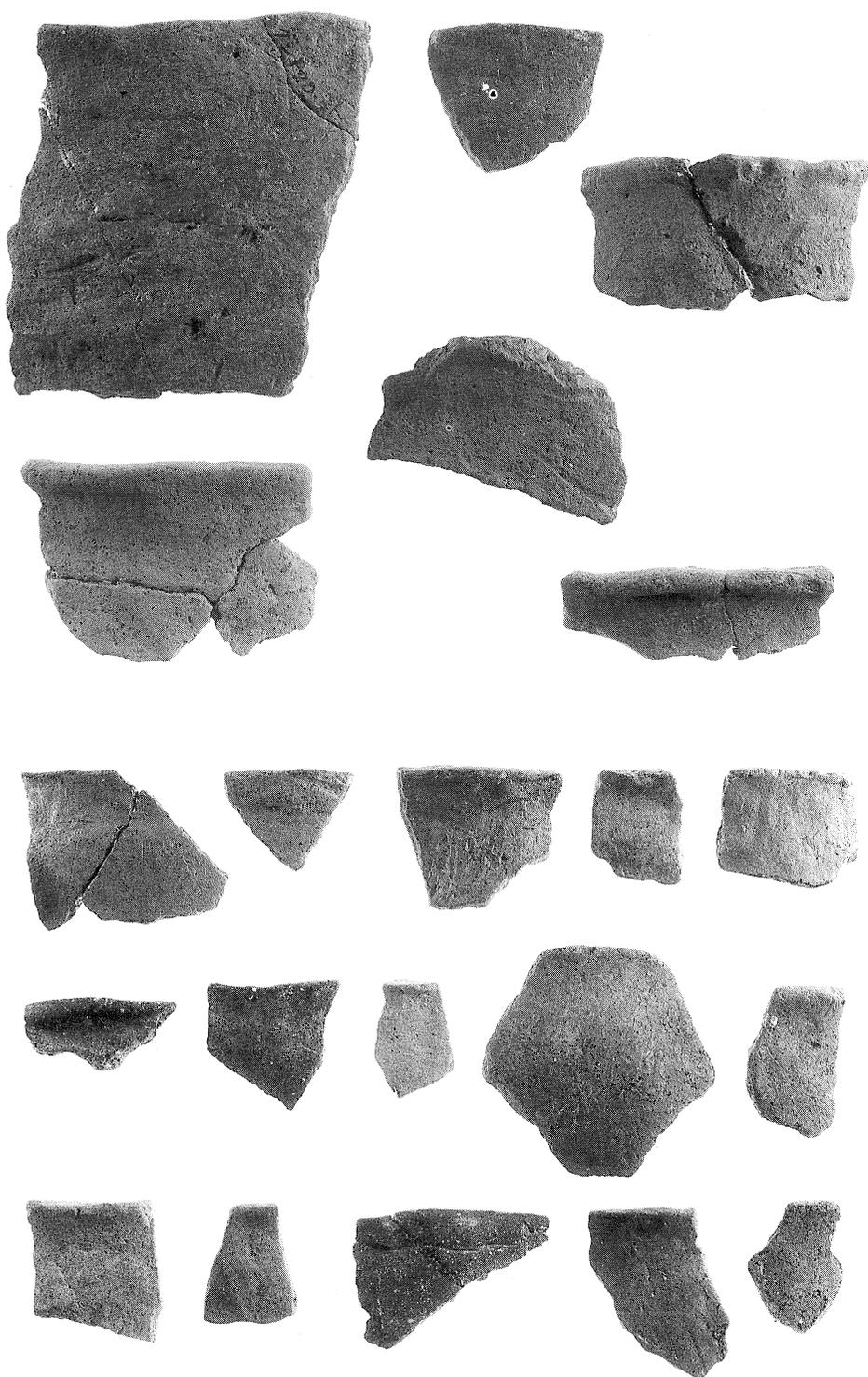
図版32 上：後期土器(13) 尖底



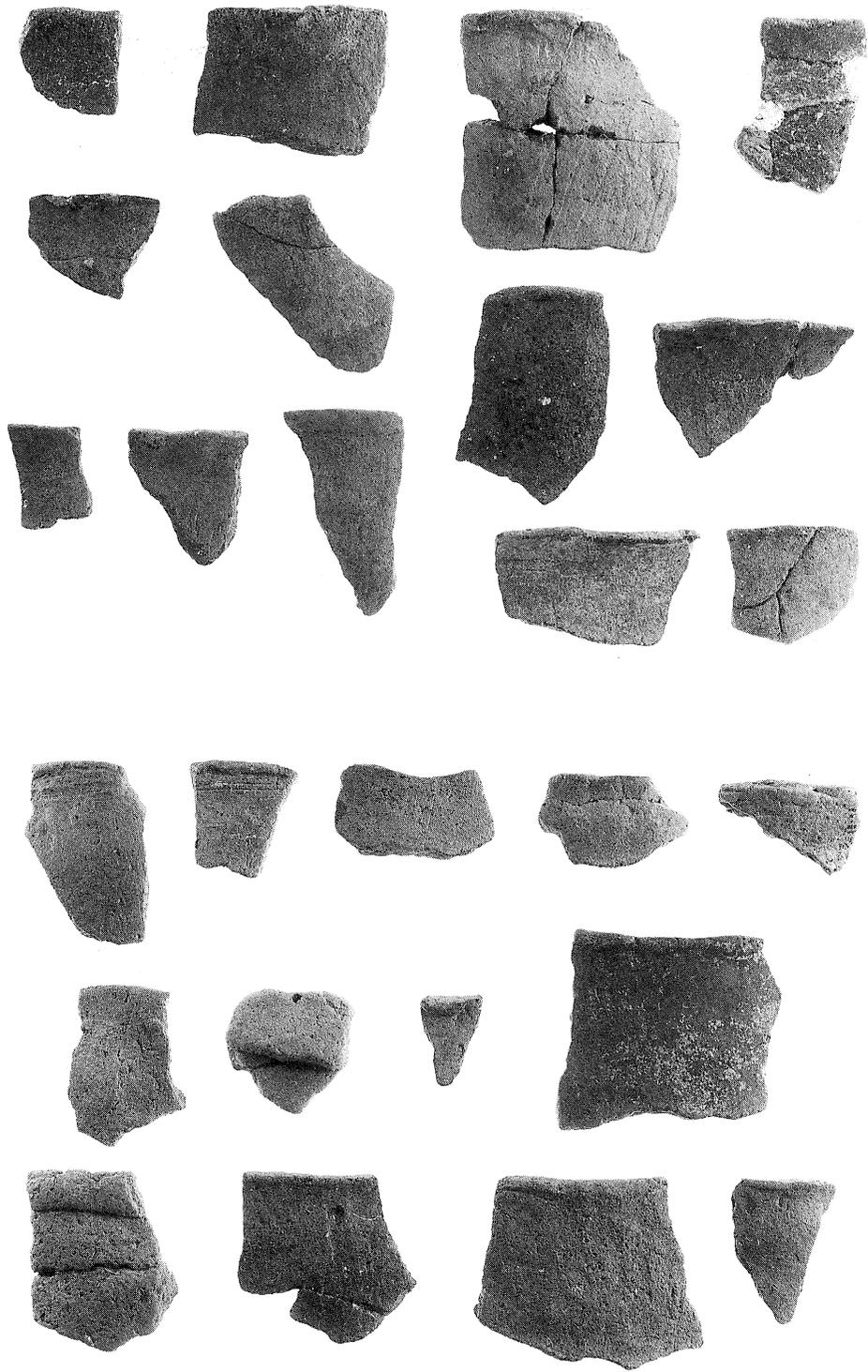
図版33 後期土器(14) 尖底・平底



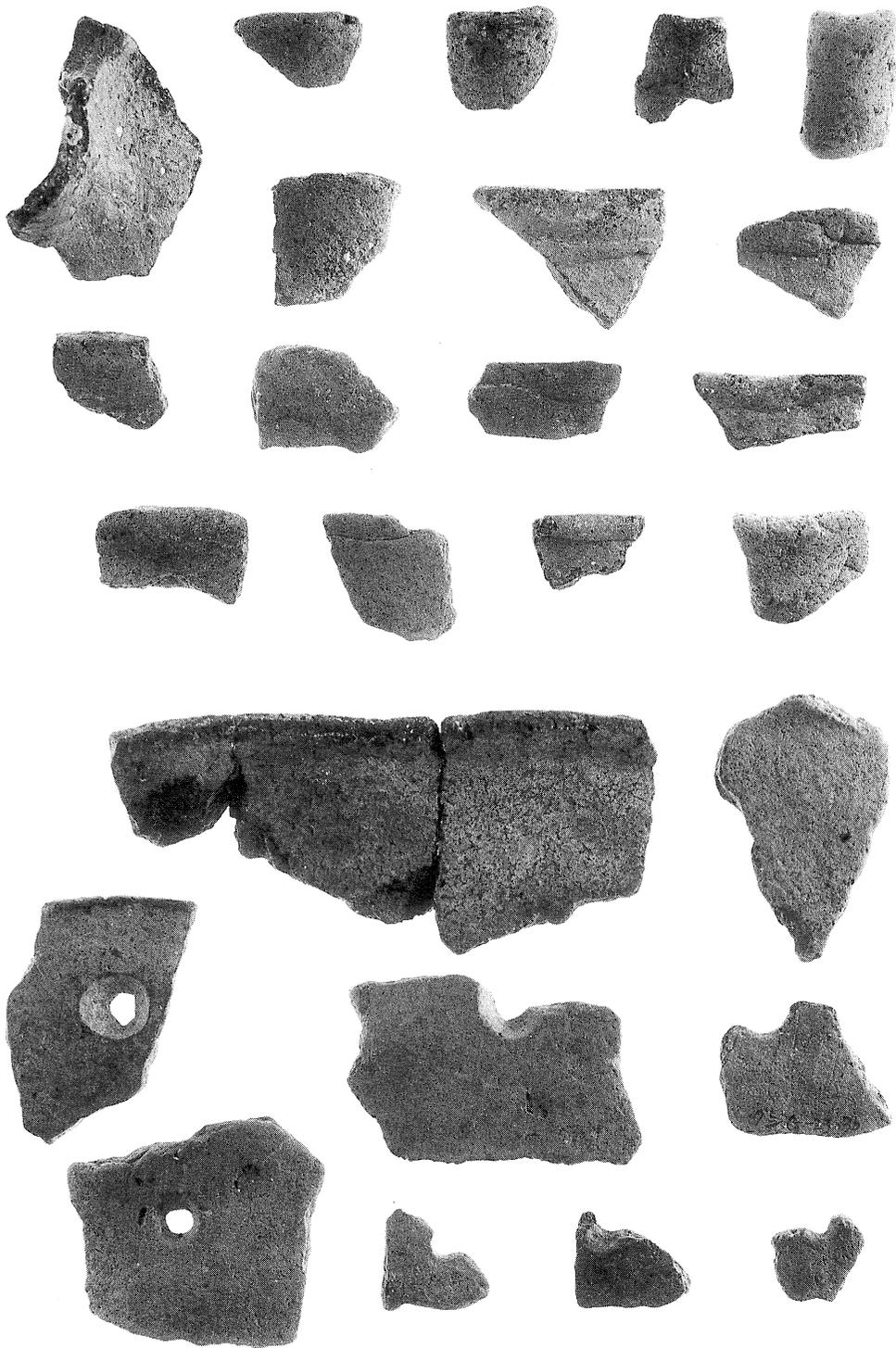
図版34 上：前期土器
下：後期土器(1) 無文 壺形



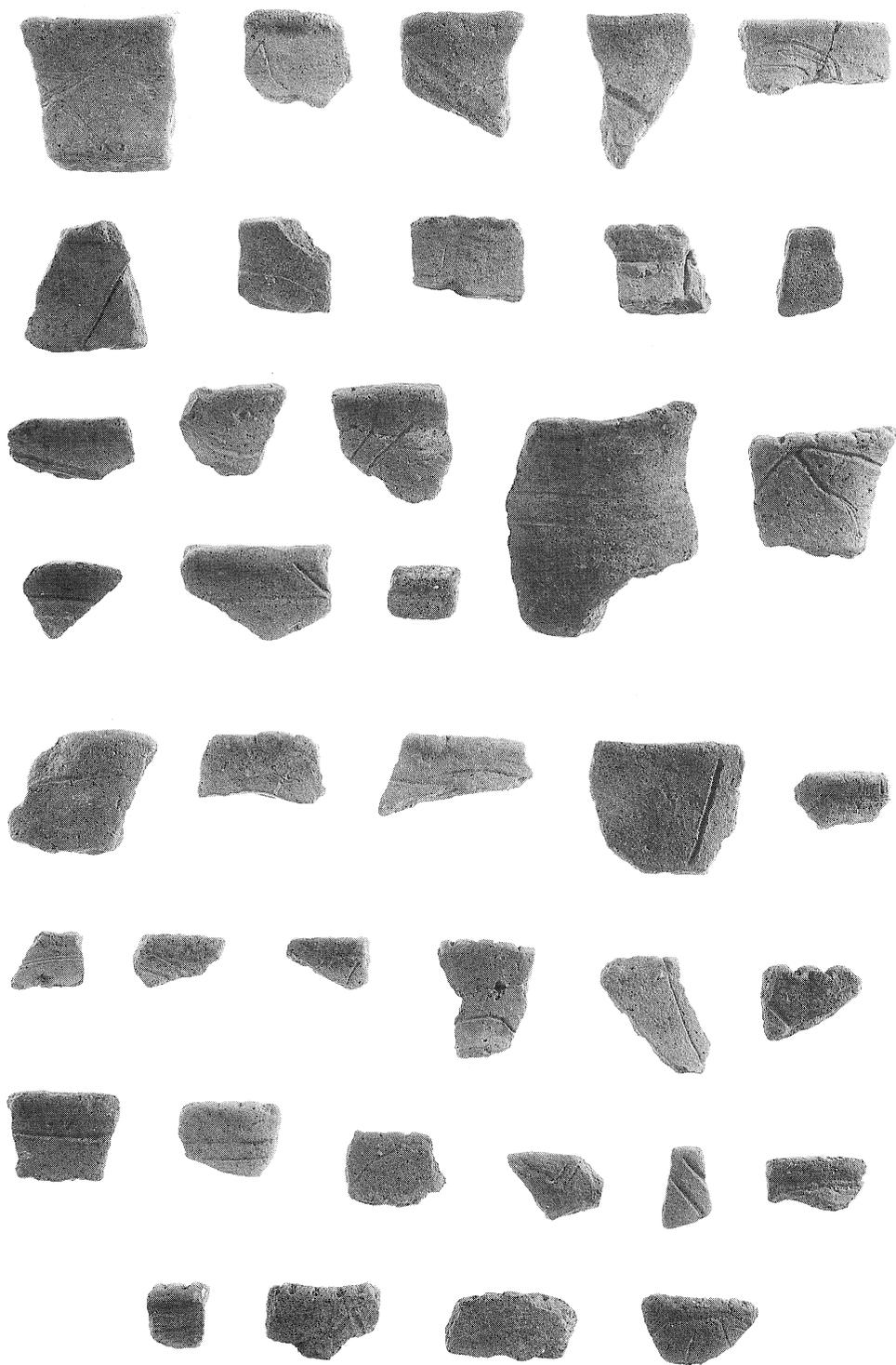
図版35 上：後期土器(2) 無文 壑形、器形不明
 下：後期土器(3) 無文 壑形



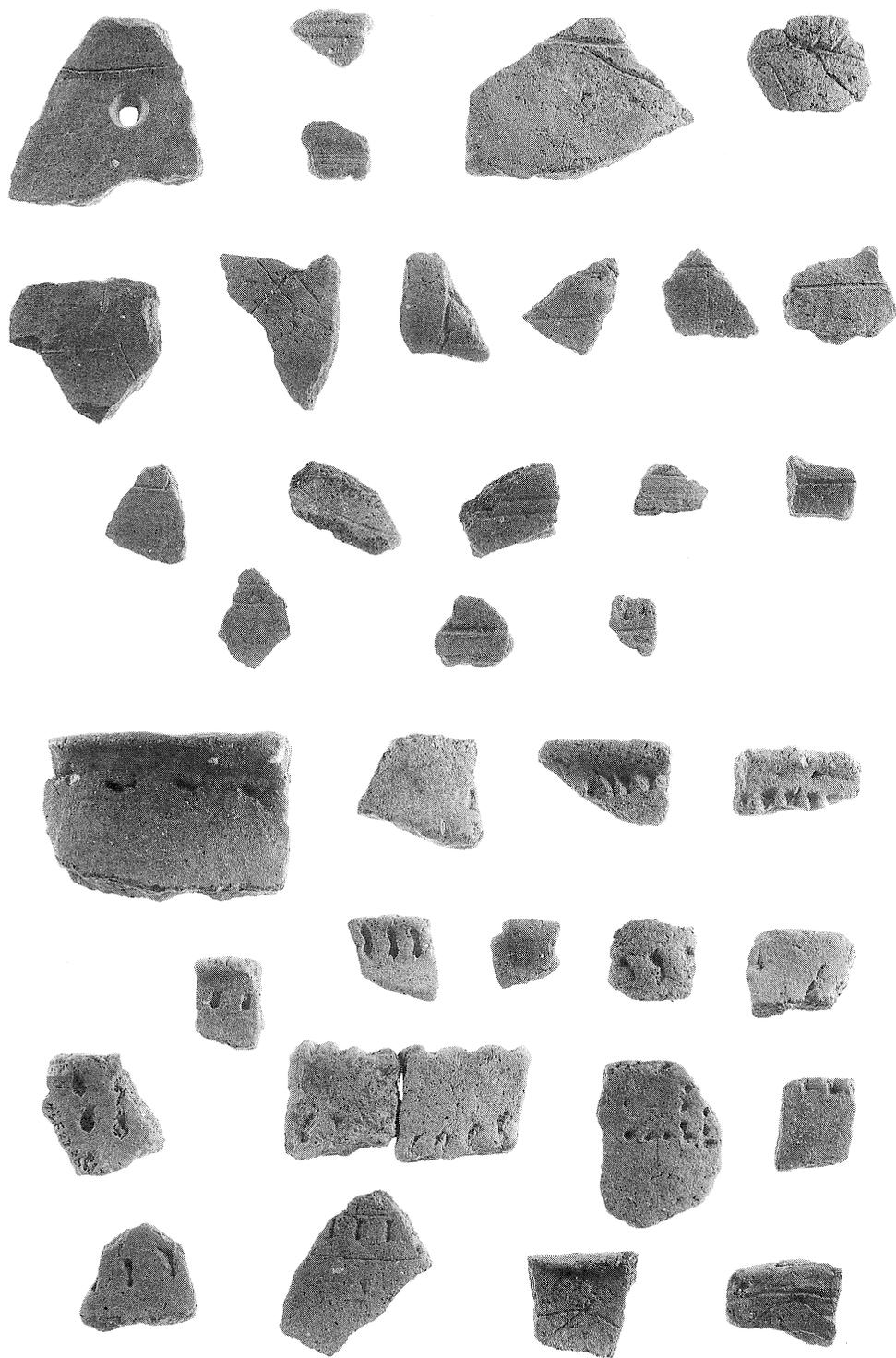
図版36 上：後期土器(4) 無文 壺形、鉢形
 下：後期土器(5) 無文 鉢形



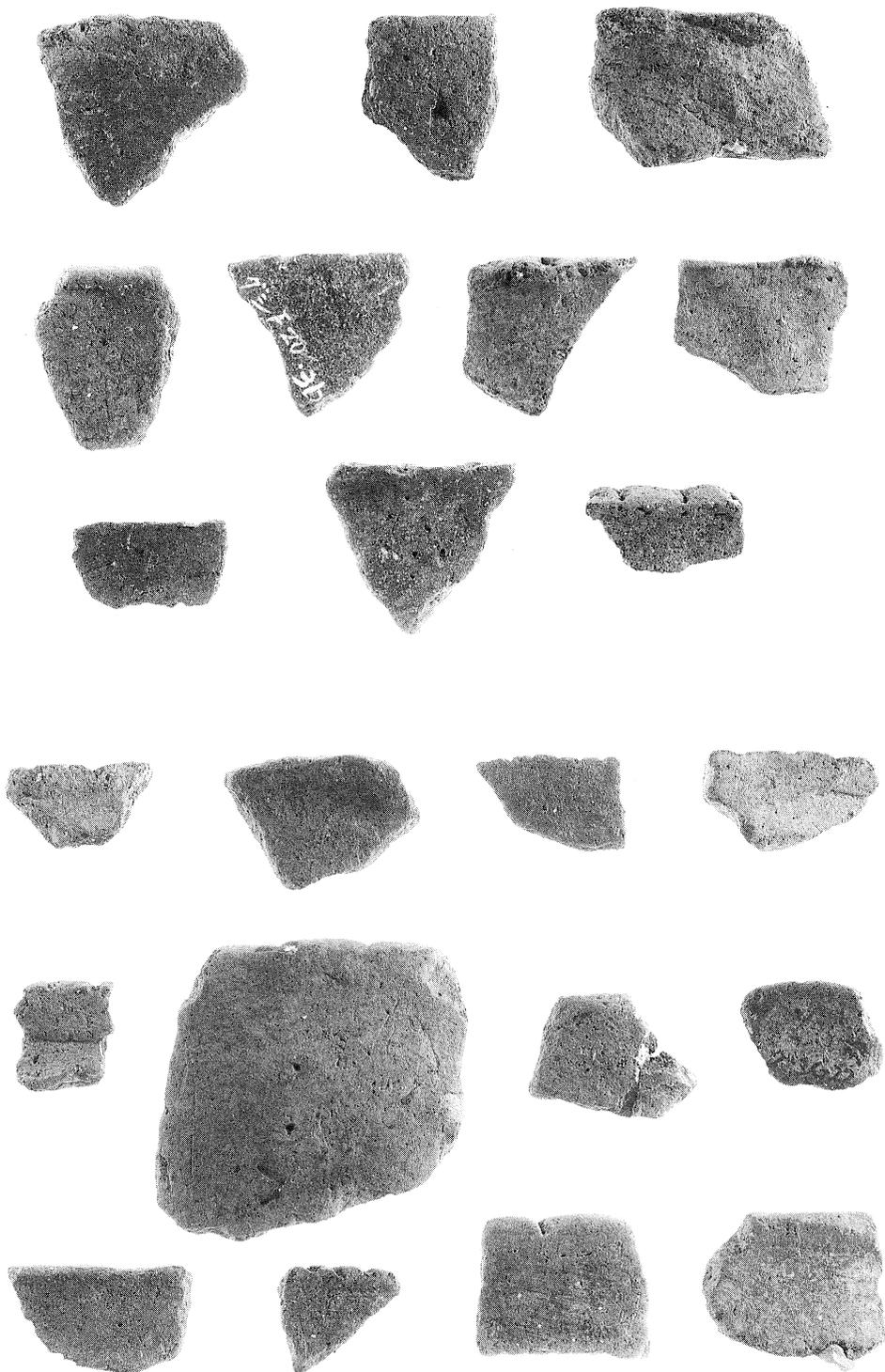
図版37 上：後期土器(6) 無文片口土器、その他
下：後期土器(7) 無文 その他



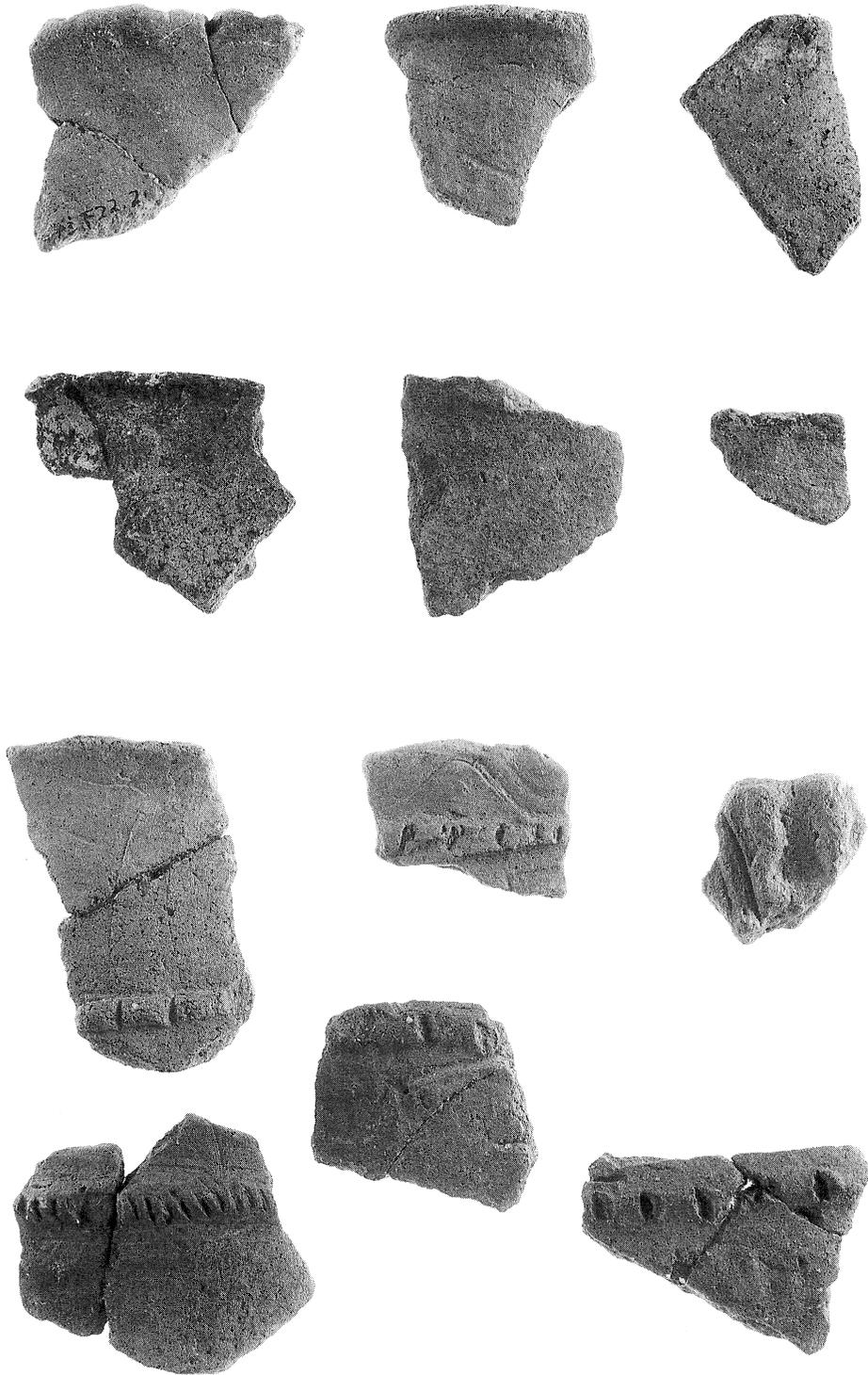
図版38 上：後期土器(8) 有文第1群 第1-1類
下：後期土器(9) 有文第1群 第1-1類



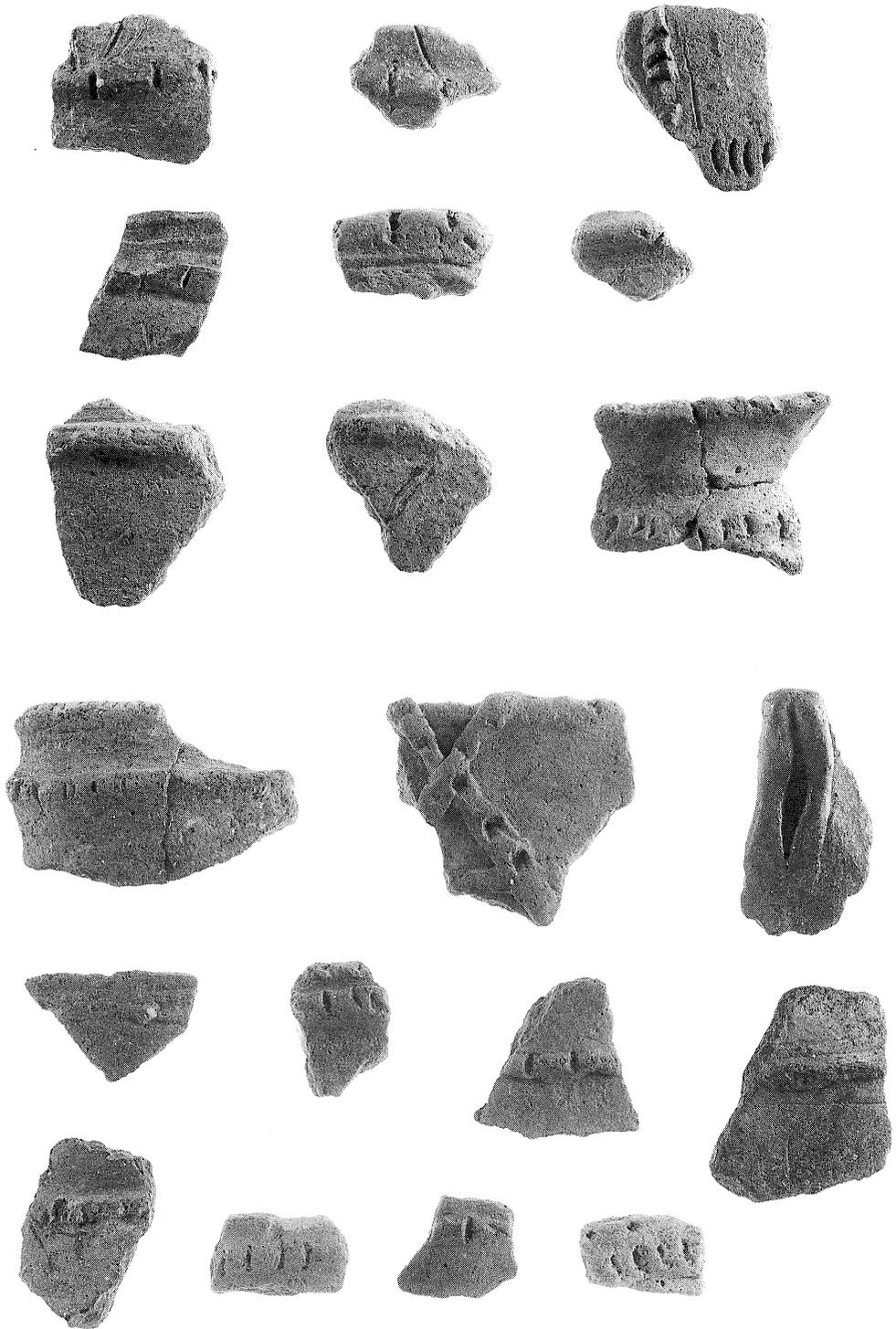
図版39 上：後期土器(10) 有文第1群 第1-1類
 下：後期土器(11) 有文第1群 第1-2類、第1-3類、第2類



図版40 上：後期土器(12) 有文第1群 第3類
 下：後期土器(13) 有文第1群 第3類



図版41 上：後期土器(14) 有文第1群 第3類
下：後期土器(15) 有文第2群 第1類

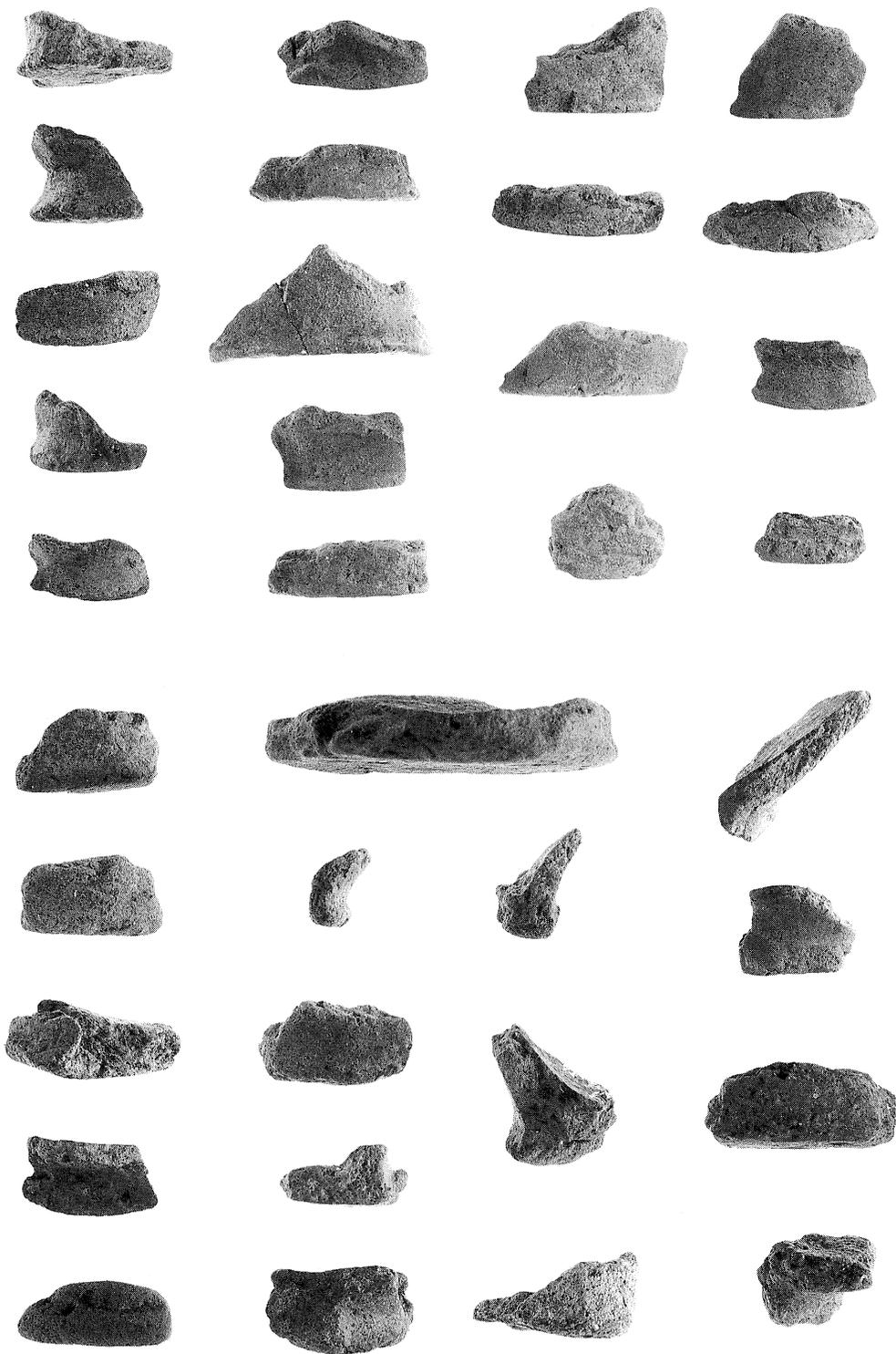


図版42 上：後期土器(16) 有文第2群 第1類、第2類
 下：後期土器(17) 有文第2群 第2類



図版43 上：後期土器(18) 尖底

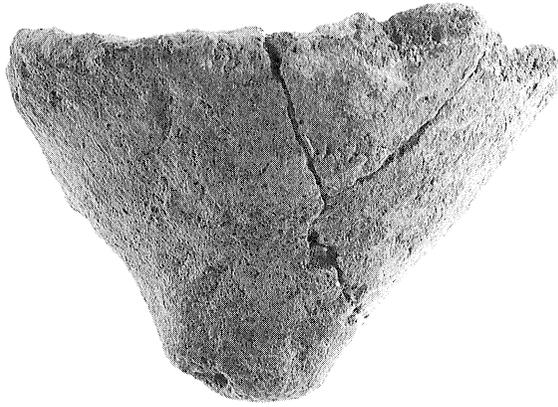
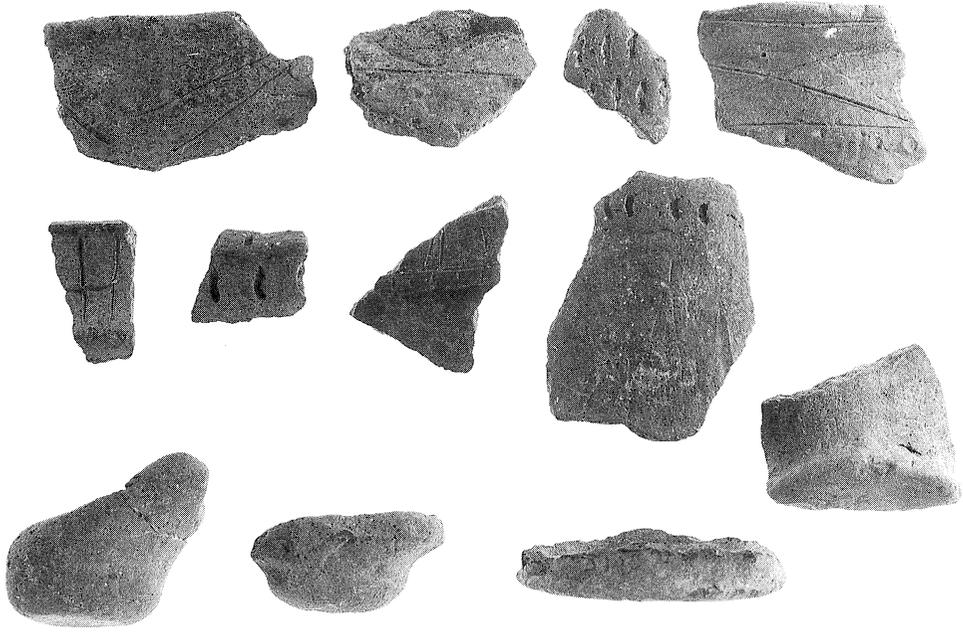
下：後期土器(19) 平底 第1類、第2類



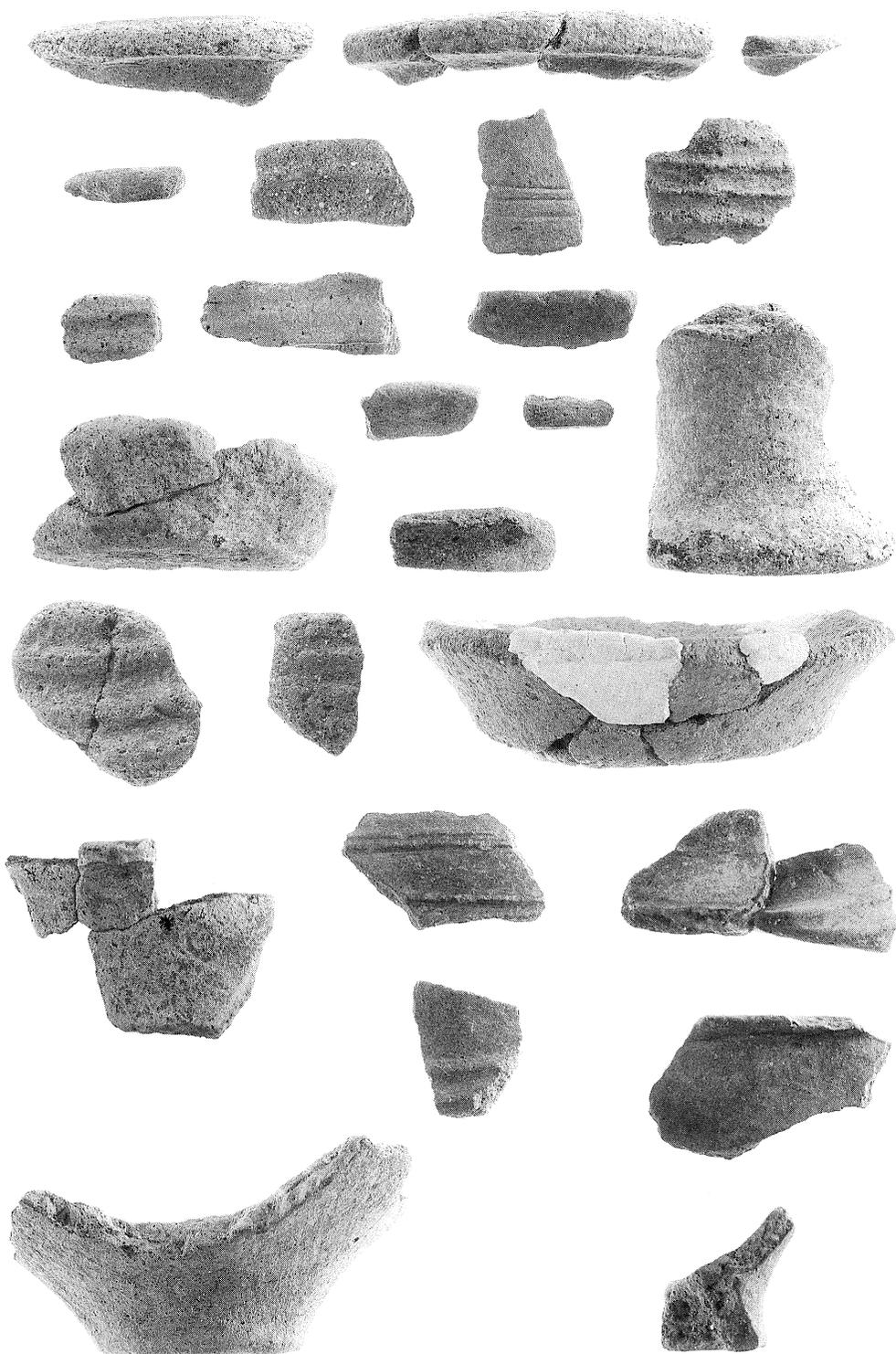
図版44 上：後期土器(20) 平底 第2類
 下：後期土器(21) 平底 第2類



図版45 表採資料(1)



図版46 表採資料(2)



図版47 弥生土器 上：南区の弥生土器
中：北区の弥生土器
下：表面採集の弥生土器



図版48 弥生系土器 上：南区の弥生系土器
下：表面採集の弥生系土器

具志原貝塚出土の動物遺存体

松井 章

奈良国立文化財研究所
埋蔵文化財センター

1. 出土した動物種 (表1)

甲殻類では、カニの甲羅、爪 (可動指) が出土している。軟体類ではイカの甲が出土している。魚類は、軟骨魚類と硬骨魚類とに分かれ、軟骨魚類では、サメ目の椎骨、硬骨魚類では、少なくとも9科15種の各部位が出土している。爬虫類では、ウミガメ、リクガメがある。哺乳類ではリュウキュウイノシシ、ウシ、ジュゴンと後述する、リュウキュウイノシシより大きく、本土イノシシ¹に相当する大きさのブタと考えられる個体がある。

動物遺存体には、層位的にみると表採と各層位から出土したものがある。第1層は攪乱を受けており、2層、3層、4層出土のものが未攪乱層からの出土となる。原則として2層以下の資料をもとに記述を進めるが、一部、必要によっては表採、第1層から出土したのも資料に含める場合がある。

出土したリュウキュウイノシシは700点ほどで、他に部位の判別もできなかった細片が多数存在する。骨の残りは大変よい。

2. 種ごとの概要

a) 魚類 (表2)

伊江島という島嶼に立地しながら、魚骨はさほど多くない。出土した種類は、沖縄の海に現在も生息し、盛んに漁獲され賞味されている魚種である。

出土した魚種の中で破片数が多いのは、ブダイ科の咽頭骨、歯骨、前上顎骨で、ハリセンボンの咽頭骨も目に付く。これらは大きく頑丈で、ヒトはむろんのこと、イヌ、ブタなども食べることをためらった結果、貝塚に残存したものであろう。わずかに残った魚骨は以下のものであった。

サメの椎骨がわずかに出土しているが、鋭い歯は見られない。

カツオは黒潮に乗って北上するが、沖縄では珍しい魚種であらう。珊瑚礁の外部まで出かけて捕獲したものであろう。

¹ 沖縄諸島、本州列島という呼称の方がより適切かと思うが、本稿では沖縄県での一般化している呼称として、琉球列島と本土を用いる。

表1 出土動物種名表

軟骨魚類綱 Chondrichthyes

板鰓亜綱 Elasmobranchii

ネズミザメ目の一種 Lamniformes fam. et Gen. indet.

硬骨魚類綱 Osteichthyes

ウツボ科 Family Muraenidae

ウツボ属の一種 Genus *Gymnothorax* sp. indet.

サバ科 Family Scombridae

カツオ *Katsuwonus pelamis*

イサキ科 Family pomadasyidae

コシヨウダイ属の一種 Genus *Plectorhinchus* sp. indet.

フエフキダイ科 Family Lethrinidae

ヨコシマクロダイ *Monotaxis grandoculis*

ハマフエフキ *Lethrinus nebulosus*

ベラ科 Family Labridae

タキベラ *Bodianus perditio*

ベラ科の一種 Family Labridae gen. et sp. indet.

ブダイ科 Family Scaridae

ナンヨウブダイ *Scrus gibbus*

イロブダイ *Bolbomeotopon bicolor*

ナガブダイ *Scarus rubroviolaceus*

ハタ科 Serranidae

ハタ科の一種 Family Serranidae gen. et sp. indet.

マハタ属の一種 Genus *Epinephelus* sp. indet.

モンガラカワハギ科 Family Balistidae

モンガラカワハギ *Balistoides conspicillum*

ハリセンボン科 Family Diodontidae

ハリセンボン科の一種 Family Diodontidae gen. et sp. indet.

ウニ綱 Class Echinodea

パイプウニ *Heterocentrotus mamillatus* (Linne')

甲殻綱 Class Crustacea

イカ類 Order Cephalopoda

カニ類 Crustacea Fam. et gen. indet.

爬虫綱 Class Reptilia

ウミガメ科 Family Cheloniidae

ウミガメ科の一種 Family Cheloniidae gen. et sp. indet.

リクガメ科 Family Testudinidae

リュウキュウヤマガメ *Geoemyda spengleri Japonica*

哺乳類綱 Class Mammalia

ジュゴン科 Family Dugongidae

ジュゴン *Dugon Dugon*

イノシシ科 Suidae

イノシシ *Sus scrofa leucomystax*

ブタ *Sus scrofa domesticus*

ウシ科 Bovidae

ウシ *Bos taurus var. domesticus*

この調査では、さまざまな種名不明の魚類の各部位まで丹念に採集されているにもかかわらず、発掘面積に対して出土した魚骨の絶対量が少ない。これは伊江島という島嶼に立地するという環境から考えて奇異に感じられる。このように珊瑚礁を伴う島では、干潮時の潜水刺突漁法、あるいは簡単な網を併用した手掴み漁法で多くの魚類を捕獲することが出来るはずであるし、最も効率の良い生業であったはずである。しかし、この魚骨の出土量の少なさは、魚撈活動の成果が、そのまま貝塚に廃棄されたものではなく、調理から賞味、または交易のための搬出などを経て貝塚部に廃棄されるプロセスの中で、大部分の魚骨、特に小型魚類の骨が消えたと考えたい。その理由として、魚類が人々に賞味されたあと、家畜の餌になったり、貝塚と異なる部分に捨てられたからと考えたい。

b) 爬虫類 (表3)

ウミガメ、リクガメ²の両方が出土している。いずれも少量ずつではあるが、沖縄の貝塚から出土することが多い種類である。

c) 哺乳類

ジュゴン (表4)

沖縄貝塚時代前期 (縄文時代後期併行期まで) から貝塚時代後期 (弥生時代～古墳・奈良～平安時代併行期) にかけての遺物を出土する勝連町平敷屋トウバル遺跡からは、多くのジュゴンの骨が出土しているが³、他の遺跡では、断片が出土するだけの例が多い。現在では絶滅の危機に瀕するジュゴンは、貝塚時代から生息数はさほど多くなく、珊瑚礁内や内湾内に迷い込んだものを捕獲したものであろう。肋骨は、硬く分厚い素材を取れるので骨角器の素材として他地域から搬入されることもあったろう。

リュウキュウイノシシ (表5-1、5-2、表6、表7、表8、表9)

出土量からすると、この貝塚に居住した人々にとって、もっとも重要な栄養資源であった。具志原貝塚の立地する伊江島は、面積23km²で東西8.4km、南北3kmの細長い島である。すでに発掘されたナガラ原西貝塚でも大量のイノシシが出土しており⁴、このような小さな島に多数のイノシシが生息できたとは考えにくい。これらのイノシシの多くは沖縄本島から運ばれてきたのではないだろうか。イノシシの出土は各層からまんべんなく出ているようであるが、II層、III層に多い傾向がうかがえる。リュウキュウイノシシはイノシシの島嶼型矮小亜種で大陸、お

2 リクガメについては附篇2において詳しく述べている。

3 金子浩昌1996「動物遺体 (軟体動物を除く)」『平敷屋トウバル遺跡』沖縄県教委 pp. 168-183

4 長谷川善和・野刈家宏1979「ナガラ原西貝塚の哺乳類遺骸」『伊江島ナガラ原西貝塚緊急発掘調査報告書-自然遺物編』伊江村教育委員会 pp.175-180。

よび日本列島のイノシシとは大きさが異なることから区別が可能である。かつて、リュウキュウイノシシ自体が、人間が運んできた再野生種であるとする見方もあったが、港川洞穴の更新世の層序から多数のイノシシの化石が出土したことから、大陸と陸続きの時に渡ってきた沖縄諸島の在来種である可能性が高くなった⁵。

ウシ

ウシの歯と椎骨が表採で四肢骨片と下顎側の前臼歯が各1点、3層から椎骨が断片的に出土している。

3. 考察

a) 魚撈・海獣狩猟活動

出土した魚類は、沖縄貝塚時代では一般的なものである。ウミガメは砂浜の発達する琉球列島では、産卵のために上陸した折りに普通に捕獲できたものであろう。

ジュゴンは他の大部分の遺跡と同様に、断片的に小破片が出土するのみである。肉は美味で薬用として琉球王朝に献上された記録があるが、この貝塚に居住した人々も特別視していたものであろうか。ジュゴンの骨は肋骨をはじめとして硬く、分厚い素材を取ることができるので、石材の乏しい琉球列島では、骨角器の素材として貴重であった。

b) リュウキュウイノシシの狩猟

リュウキュウイノシシタイプの資料は、破片数で約700点、層毎の最小個体数では、18個体を数える。本貝塚の西に立地する同じ沖縄貝塚時代後期のナガラ原西貝塚の調査で出土したリュウキュウイノシシは、層毎の最小個体数推定では179個体を数え、さらに未整理の資料も同量あるという⁶。このような狭い面積の島でこれだけの頭数を捕獲できるとは考えにくく、本部半島経由で肉として持ってきたものと考えたい。

c) ブタの存在

リュウキュウイノシシ (*Sus scrofa leucomystax riukiuanus*) は、東アジアに分布するイノシシ (*Sus scrofa leucomystax*) のなかでも島嶼型の矮小化傾向の著しい亜種として分離さ

5 大山盛保(談話)1980「イノシシの祖先はブタか」『青い海』No.94 青い海出版社 那覇pp.66-67。

6 長谷川善和・野刈家宏1979前掲書

7 直良信夫1944『日本哺乳動物史』pp.125-238。

8 仙波輝彦1960「長崎県壱岐島中期乃至後期弥生時代遺跡出土哺乳動物骨の研究」『人類学研究』第7巻1, 2号 九州大学医学部解剖学教室

9 林田重幸1960「奄美群島出土の猪と犬について」『人類学雑誌』第68巻2号 日本人類学会 pp.96-118。

れている。かつては、リュウキュウイノシシ全体が人為的に移入せられたものであると考えられたこともあったが（直良信夫1944⁷、仙波輝彦1960⁸、林田重幸1960⁹）、港川洞穴の更新世の時期の堆積層からリュウキュウイノシシが出土したことから否定された。その後、議論は下火になり、近世には盛んに食べられた沖縄のブタがいつ普及したのかは、謎のままであった。

近年、金子浩昌は、沖縄ブタの起源のひとつを13世紀後半～18世紀の糸満市阿波根古島遺跡に求めているが、そこからは上腕骨遠位部が48個体分（骨端部癒着済みは5個体のみ）が出土し、その年齢はM1崩出済みとM2崩出直前から直後にかけての生後半年から1歳の夏から秋にかけて殺された個体が多いという¹⁰。この遺跡では、幼獣、若獣の時期に盛んに屠殺しているのが特徴で、この傾向は現代でも同じである。

ところが、それをはるかに遡る本土の弥生時代後期に併行する具志原貝塚から出土したリュウキュウイノシシと分類されていた資料を実見する機会に恵まれた時、真っ先に従来のリュウキュウイノシシの大きさの範疇をはるかに越える大きさの部位が存在することに気がついた。西本豊弘は大分市下郡桑畑遺跡や佐賀県唐津市菜畑遺跡などの弥生時代の遺跡から出土した従来イノシシと考えられてきた資料の中に、大陸から伝わったと考えられるブタが存在し、ブタが稲作農耕とともに日本に移入せられたと考えている¹¹。筆者も基本的には、弥生ブタの存在を認めるものである。

本遺跡は琉球列島ではじめて弥生土器が発見された遺跡として著名である。この報文において、筆者は同時に本土からブタを持ってきていた可能性を挙げたい。出土した資料には、家畜化の特徴が顕著にあらわれる頭蓋骨が良好な状態では出土せず、総て細片で、単独では明確にブタと同定することのできる資料はない。しかし、資料中にはリュウキュウイノシシよりもはるかに大きく、本土のイノシシに相当、あるいはそれを凌駕する資料が存在することを根拠に、本遺跡でブタが飼われていた可能性を挙げたい。

本土のイノシシと考え難い理由として、弥生時代の人々がわざわざ困難を押して大きな野生イノシシを骨付きで本土から船に積んで持ってきたとは考えがたく、イノシシ、またはブタの幼獣を船に積んで伊江島まで運んできて、具志原貝塚で飼っていたものと考えられよう。そしてすでにブタを飼う技術を持っていた弥生人にとって野生イノシシを持つてくるよりはブタの幼獣を搬入したと考える方が理にかなっているからである。

観察表をもとにブタと判断した資料のうち、特記すべき事項の記載を行う。

標本番号 No.1～7（図版1の1～7）

10 金子浩昌1990「自然遺物」『阿波根古島—沖縄県文化財調査報告書 第96集』沖縄県教委pp.123-153。

11 西本1993「弥生時代のブタの形質について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第50集 国立歴史民俗博物館 pp.49-70。

いずれも臼歯、あるいは臼歯のうわった下顎、上顎骨である。上顎第三後臼歯は、小丘が消滅し、外部のエナメル質と内側の象牙質が残る老齢のものである。大きさは本土イノシシのメス成獣のものに類似する。

No. 8、9 (図版1の9、10)

オスの犬歯破片である。リュウキュウイノシシと本土イノシシの中間の大きさである。

No.10~15 (図版1の14・12・8・11・16・18)

いずれも側頭骨の関節突起、乳様突起である。側頭骨の乳様突起と関節突起の下顎との関節面は大きさを比較しやすいためである。No.10の乳様突起は巨大である。この値は本土イノシシよりも大きく、現生ブタに酷似する。もうひとつの現生ブタ標本No. 2では、17.8×16.2mmをはかる形態も、野生イノシシに見られるような凹凸、小孔に乏しく、平坦でずんぐりした印象を与える。吻部の短縮化に対して、後頭部のこの部分が肥大するのは、家畜ブタ一般に言えるものか、今後の類例の検討を待たねばならないが、イノシシのブタ化への形態変化のひとつの兆候として挙げることができ、今後この部位に関してイノシシとブタとの形態学的比較を行う必要がある。

No.17 (図版1の15)

肩甲骨の体部、棘突起の部分で本土イノシシと同等の大きさである。

No.18 (図版1の19)

尺骨の滑車状切痕部で、本土イノシシと同大である。

以上のほか、観察表に含めた資料は、現生のリュウキュウイノシシ、本土イノシシと比較して、明かに本土イノシシの範疇に含められる個体である。その他にもリュウキュウイノシシよりも大きい個体が、各部位について存在するが、比較するための適切な部分が無く集計しなかった。

1970年に行われた具志原貝塚第一次調査¹²の報文のp.57の図9にイノシシと報告されているなかに、巨大なオスの下顎骨の写真が掲載されている。これほど大きいオスの個体は本土でも珍しいもので、やはりこの個体も種オスとして飼われていたブタであった可能性を挙げたい¹³。

具志原貝塚では、以前の発掘からゴホウラをはじめとする本土、または大陸との交易のためと考えられる貝の集積が見つかっており、特に弥生土器の出土と考えあわせて本土との交易の拠点になっていたとも考えられており、見返りに弥生ブタを得ていたと考えることもできよう。今回の資料の中のイノシシまたはブタの出土量は、700点あまりで、そのうちブタと思われる資料は20点あまりであった。しかし、リュウキュウイノシシとした資料の中にも現生リュウキュウ

12 友寄英一郎1978「具志原貝塚のはなし」『伊江島具志原貝塚』PP.47-88。

13 資料の実見には、琉球大学法文学部池田氏のご教示により、また琉球大学農学部川島氏の助言を得ることが出来た。

ウイノシシと比べると大きいながら、本土ウイノシシよりも小さいため、どちらとも判断できなかったものが含まれ実際にはもっと多くのブタが存在していたと思われる。

d) ウシ

ウシの歯がG-22-1から出土している。臼歯のエナメル質破片である。G-23-1, G-24-3b, H-18-3からはウシ相当の大きさの椎体破片が出土している。

弥生時代のウシの出土例は多くなく、東京都伊皿子貝塚の弥生時代後期の方形周溝墓の側から出土した例が唯一といって良い。河内平野では、弥生時代の遺跡が多く発掘され、多くの動物遺存体が報告されているが、ウシやウマの出土例は皆無である。弥生時代にウシが存在したかどうかは大きな問題であり、ウマを必要とする社会的背景などと考えあわせねばならないだろう。今後、理化学的年代測定を行う必要がある。

e) イヌ

イヌの骨は見られなかったが、骨の表面に噛み痕が多数見られることからその存在は明かである。また、近い時期に営まれたナガラ原西貝塚では、実際にイヌが最小個体数で9個体が出土している。

f) 骨角器

刺突具とおもわれる骨角器の破片が1点出土している。内側に海綿質が残り外面を研く。材質は鹿角と思えるが、沖縄諸島の先史時代にはシカはおらず、本土からの搬入品の可能性がある。

4. まとめ

具志原貝塚から出土した以上の資料は、沖縄貝塚時代後期、本土弥生時代併行期の伊江島における人々の生活を知る上で貴重な知見をもたらせた。それは、琉球列島の先史文化特有の珊瑚礁、島嶼に適応した漁業、ウミガメ、ジュゴンなどの魚撈、海獣狩猟と、リュウキュウウイノシシの島嶼部、あるいは沖縄本島での狩猟活動に加えて、本土の弥生ブタを持ち込んで飼育していた可能性が挙げられるからである。従来、沖縄でのブタの起源は漠然とグスク時代と聞いていたが、本土の弥生時代併行期に、すでにさほどの時期をおかずしてブタが搬入されていたことを指摘できたことは、沖縄先史文化が本土の弥生文化との緊密な関係を持っていたことを示すだろう。今後、各時期の貝塚出土資料を再検討し、このような大きな個体が出現する時期と、その比率を明かにしたい。リュウキュウウイノシシの現生骨格標本については、国立科学博物館、遠藤氏のご厚意で館蔵標本を実見させて頂いた。貴重な機会を提供いただいた、沖縄県文化課、岸本義彦氏と観察の便宜を図っていただいた、沖縄県教育委員会文化課首里資料室の皆様へ感謝したい。

表2 出土魚類部位別層位別出土量表

部位			層位		表採	1層	2層	3層	3b層	4層	5層	不明	合計		
			R	L											
サメ目			脊椎							2			2		
ウナギ目	カボ科	種不明	顎骨	R	L										
				R	L			2						2	
スズキ目	サバ科	カツオ	脊椎				1						1		
	イサキ科	コシヨウ	顎骨	R	L		1							1	
		タイ	顎骨	R	L										
	フェエキダイ科	ヨコシマ	顎骨	R	L	1	1		1					2	
		クログイ	顎骨	R	L									1	
		ハマ	顎骨	R	L		1	3	1	2	2	①		5①	
	ベラ科	タキベラ	咽頭骨	R	L			1	1					1	
				R	L			1						②	
		A	咽頭骨	R	L		1	1	1					③	
	ブダイ科	イロ	顎骨	R	L		1				2			3	
		ブダイ	顎骨	R	L	1	<1>		1		<1>			1<2>	
		ブダイ	顎骨	R	L	1	7	1<1>	4	②4	③2	⑤1	1	1	10<3>
		ブダイ	顎骨	R	L	1	1	4	4	1	1	1	1	1	13<9>
		ナンヨウ	顎骨	R	L	2	2	2	3	1	1	1	4	7	
		ブダイ	顎骨	R	L		6	5	7	3	2	1	①	24①	
		イロ	咽頭骨	R	L	1	1			①	1			1①	
		ブダイ	咽頭骨	R	L		1		1			1	①	3①	
		ナガ	顎骨	R	L				1		1	1		1	
		ブダイ	顎骨	R	L		1	1	1					3	
	ブダイ科尾部棘状の鱗							1						1	
ハタ科	マハタ属	顎骨	R	L			1						1		
			R	L			1	1	1				3		
	A	顎骨	R	L			1			1			1		
フグ目	モンガラ	モンガラ	顎骨	R	L										
	カワハギ科	カワハギ	顎骨	R	L		1						1		
	モンガラカワハギ科の棘								1	1			2		
	ハリセンボ科	ハリセンボ	顎骨	上	下	<1>			1	1	1		3		
	ハリセンボ科の棘							1				2	3		
種不明	主上顎骨				2	1	1	2	1				7		
	口蓋骨						1						1		
	舌顎骨			R				1					1		
	主鰓蓋骨			R					1				1		
	鎖骨							1			1		2		
	関節骨			R							1		1		
	方骨 A			R		1		1					2		
	" B			L				1					1		
	背鰭棘						2	5	1		1		1	10	
	腎鰭血管間棘						1	1						2	
	脊椎骨					1	1①	5	3	7	①		1	18②	
	尾椎骨					1		1	1	2	1		1	7	
	A							1						1	
	B							1						1	
合計					37<2>	18<2>①	65<2>	28<8>①	33<1>	13④	4<1>	3	201⑥<16>		

凡例：<> 破片 ○印北区

表3 ウミガメ科部位別層位別出土量表

部位	層位		1 層		2 層		3 層		3 b 層		不 明		合 計
	表	採											
鳥 口 骨			1										1
上 腕 骨(左)									①				①
橈 骨									①				①
尺 骨									②				②
剣 状 突 起			1				1		①				2①
指 骨	1		1	1	1								3
背 甲 板 板	1				1		2		①		1		5①
腹 甲 板							1		①		1		2①
緑 甲 板			4	1					①				5①
合 計	2		7	3	3		4		⑧		2		18⑧

凡例：○印北区

表4 ウニ綱・甲殻類・哺乳類(ジュゴン)部位別層位別出土量表

部位	層位		1 層		2 層		3 層		3 b 層		4 層	
	表	採	完存	破片	完存	破片	完存	破片	完存	破片	完存	破片
	完存	破片	完存	破片	完存	破片	完存	破片	完存	破片	完存	破片
パイプウニ	62	65	39	61	8	21	14	11	2	4	2	11
			①	②					⑤	⑥	③	③
ウニ甲羅片						2						
カニ可動指						1						1
ジュゴン肋骨		1		1								
イ カ										①		

凡例：○印北区

表5-1 リュウキュウイノシシ部位別層位別出土量表(その1)

※○印は北地区

部位	出土地 層位	表 採			1 層			2 層			3 層			3 b層			4 層			5 層			不 明			
		右	左	不	右	左	不	右	左	不	右	左	不	右	左	不	右	左	不	右	左	不	右	左	不	
頭蓋骨	前頭骨	1			1			1																		
	頭頂骨							1																	1	
	頭頂骨+後頭骨	1																								
	側頭骨								3		1							1								
	側頭骨・後位								1																	
	側頭骨類骨突起	1	1		1	2					2															
	頬骨											1														
	眼窩口								1																	
	後頭類		1					1																		
	岩様部骨胞		1																							
	後頭骨類静脈突起			2			2			2																
	前上顎骨片		1																							
	上顎骨								4		1															
	上顎骨(犬歯欠)						1 [△]		2 [△]	1 [△]	1 [△]														1	
	下顎骨片	3	4		3	①		2	5		1	2		①	②										1	
	筋突起				幼				幼	2																
	下顎骨関節突起				1			1	2			2			①											
連合部	2	2		1	1																					
椎 体	頸椎 破片			1							3															
	環椎									1幼																
	胸椎 未欠骨									5																
	腰椎																									
	腰椎 未欠骨										2															
	腰椎 破片			1		1					6															
	仙椎																									
	仙椎 未欠骨			1							1															
	棘突起片			4		4					14															4
	破片					6					13															
肋 骨	第1 肋骨					2		3	1				①													
	肋骨	2			1			2			2	1														
	破片			13			17				47				16					2					7	
肩甲骨	体部	3			3			2		1																1
	遠位	1	3					1			1															
上腕骨	近位 内位片		1																							
	体部	4	6		1	1		2	2		1			①	①											1①
	体部 前位片							1																		
	体部 後位片							4	1		6															
	体部片																									①
	遠位		1		1									①												
	遠位端未欠骨欠	3	1																							
	両骨端未欠骨										1幼															
	遠位端	2						1																		
	遠位 内位片	1																								
	遠位 骨端のみ				1																					
	遠位 骨端片				1						2				①											
	遠位 内位片										1															
	遠位 側位片	1																								
	遠位 破片						1																			
桡 骨	近位	2	4		4	2		1		1																2
	近位 破片		1		1			1		1					②											①
	体部	1	1	1		1																				
	遠位 未欠骨	1																								
尺 骨	近位端		1																							1
	近位	3	4		1			1																		
	体部	4	4		2	2		3	4		4			③		①				2	1					
	体部片																									
遠位未欠骨骨端欠									1																	

表5-2 リュウキュウイノシシ部位別層位別出土量表(その2)

部位	出土地 層位	表 採			1 層			2 層			3 層			3 b層			4 層			5 層			不明		
		右	左	不	右	左	不	右	左	不	右	左	不	右	左	不	右	左	不	右	左	不	右	左	不
中手骨	II					1		1			1														
	III完存					1																			
	III近位	4						2	2					1①											
	III遠位未欠骨骨端欠													1											
	IV遠位未欠骨骨端欠		1																						
	IV近位	1				1	1		1															1	
寛骨	V	1						1	2																
	腸骨	3						3			1		①幼		2										
	腸骨 白部	1						1			1														
	恥骨 座骨		1			1		1幼	5		1		①		1								1		
大腿骨	近位端骨端	1																							
	体部					1		1			1		①	①	1										
	体部 内位										1		①												
	体部 側位	1														1									
	体部 後位		1					1																	
	遠位端								1																
脛骨	近位端欠							1																	
	近位未欠骨骨端欠	1	1																						
	体部	1									2	1										1			
	体部 前位	1	1								1		②	①											
	体部 内位・後位					1					1														
	体部 後位						1																		
	遠位骨端部未欠骨							1			1														
	遠位 前位	2	2			1		1		1			②												
腓骨	体部			1		1	1	1	2						2							1			
	遠位		1							1			1												
距骨	完存		2		1	2		1幼		2	1														
	破片												①												
踵骨	完存	1			1			1	1																
	近位		1		1																				
	体部				2								①												
	遠位	1	1					2	3		2											1			
	破片											2										1			
膝蓋骨							1			1		①													
足根骨 第4		1						1																	
中足骨	II					1																			
	II近位					1		1																	
	III遠位未欠骨骨端欠	1																							
	III近位	1			1	1		3	1		1														
	IV近位	1	1		1						2														
	IV体部		1																			1			
	V完存	1						1																	
	V近位								2																
V遠位						1																			
中手・中足骨	II or V								2																
	II or V 遠位											2										1			
	III or IV 遠位			2					1		1		①												
基節骨	完存	1			1	1					1												1		
	近位	1									1														
	兩骨端未欠骨	1																							
	破片					1																1			
中節骨	完存	2						2														①			
	近位												①									①			
末節骨					1					1												1			

表6 イノシシ属 頭蓋骨・歯牙部位別層位別出土量表

出土地層位	部位	右												左												合計	個体数
		I1	I2	I3	C	P1	P2	P3	P4	M1	M2	M3	I1	I2	I3	C	P1	P2	P3	P4	M1	M2	M3				
		i1	i2	i3	c	m2	m3	m4	i1	i2	i3	c	m2	m3	m4												
上顎骨	表採			/1					1			1	2	1	1								2	2			
	1層	1												1					1	1	1	1					
	2層	4							1	1			1	1	2	(1)	1			1	2	1	1	(1)			
	3層											1	1	3								1					
	3b層																										
	4層											1	1		1						1	1					
	北區	3b層												1										(1)			
下顎骨	表採	1		3/1									(1)	2	1/			1						1			
	1層	1		3/2									(1)					1						1			
	2層	2	3	/2					1	1	3	(2)	1		1/								1				
	3層	1							1		1	2			/1						1						
	3b層	1																									
	4層													1	1	1/						1					
	北區	1層																								1	
	3b層											(1)											2				
	4層	1													1/												

凡例：雄/雌 <> 未明出

表7 イノシシ属 頭蓋骨・歯牙部位別層位別出土量表

出土地層位	部位	右												左												合計	個体数
		I1	I2	I3	C	P1	P2	P3	P4	M1	M2	M3	I1	I2	I3	C	P1	P2	P3	P4	M1	M2	M3				
		i1	i2	i3	c	m2	m3	m4	i1	i2	i3	c	m2	m3	m4												
上顎骨	表採			1(♂)								1								1	1						
	2層			1(♂)																		1	2				
	3層																					1		1			
	4層											1		1													
下顎骨	表採			2(♂)																							
	1層			2(♂)																							

凡例：♂雄、♀雌

表8 ブタ部位別層位別出土量表

部位 \ 層位		表 採		1 層		2 層		3 層		3 b 層		4 層	
		R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L
下顎骨関節突起								1					
頭蓋骨	側頭骨							2					
	側頭骨突起			2		1		1					
	岩様部							1					
椎体棘突起										△			
肩甲骨体部					1								
上腕骨体部								1		①			
尺骨・体部													1
寛骨・腸骨						1							
大腿骨	近位・後位	1											
	体部		1								1		
	体部・後位				1								
	遠位端						1						
脛骨近位端			1(骨折)										
踵骨		1											
中手・中足(体部)													①

△：左右不明：○印北区

表9 イノシシ・ブタ? 中間型部位別層位別出土量表

部位 \ 層位		表 採		1 層		2 層			3 層		3 b 層		4 層		
		右	左	右	左	右	左	不明	右	左	右	左	右	左	不明
筋突起				1				2							
下顎関節突起				1		1									
環 椎								幼1							
肩甲骨 体部						1				1					
上腕骨 体部		幼1		胎児1		幼1									
寛骨 腸骨											幼1				
寛骨 座骨						幼①									
脛骨 体部															1

凡例：○印北区

表10 リュウキュウイノシシ上顎骨計測表

注 花井(1976)に従う

グリット	左右	C	P 3	P 4	M 1	M 2	M 3	備考			
表 採	右				14.1	10.4					
表 採	右					17.3	13.0				
表 採	右					17.6	14.0	花井 7 *			
表 採	右	10.7	5.6								
表 採	左					17.3	11.8				
表 採	左					25.7	15.4				
表 採	左					17.4	11.6	28.6	13.4	花井 6 *	
南	F-18-3	右						26.4	15.8		
	E-15-4	右				18.5	15.1				
	E-18-3	右			12.1	15.8					
	E-15-4	右			15.1	13.1					
	G-13-1	右						24.3	14.8	花井 6 *	
	D-11-2	右					18.0	12.9	23.2	15.0	花井 6 **
	D-11-2	左						27.7	13.1	花井 7 **	
	D-12-2	左				17.2	12.3				
	F-13-3	左				13.2	10.3				
	F-19-1	左					18.2	13.9			
区	D-13-2	左					17.1	12.6			
	E-15-1	左				18.0	13.4				
	F-11-2	左						-	12.5	未朋出	
	E-14-3	左				11.4	9.3				
	D-11-2	左	-	15.0							
	G-15-2	左		8.9	7.1	8.4	9.1				
北区	F-20-3 b層	左					19.6	14.4			

表11 リュウキュウイノシシ下顎骨計測表

グリット	左右	C	P 3	P 4	M 1	M 2	M 3	備考	
表 採	右					17.7	11.4		
表 採	右	12.3	6.3						
表 採	右	11.1	6.5					⊕	
表 採	右	14.7	8.8						
表 採	左						27.9	13.1	花井 7 ⊕
表 採	左	15.1	8.4						
南	E-12-2	右			11.7	8.1			
	D-7-2	右				17.3	11.1		
	D-12-3	右					27.0	12.7	花井 8
	F-15-3	右			13.1	8.3			
	F-14-2	右			13.4	8.6			
	D-9-2	右			12.6	8.5			
	F-14-2	右					17.7	10.8	未朋出
	F-15-3	右					27.8	17.2	未朋出
	F-18-3	右					27.3	13.4	花井 6
	F-13-1	右	13.5	8.0					
	D-7-1	右				28.7	12.6		花井 6
	D-8-2	右					18.4	12.2	未朋出
	F-15-2	右						12.3	花井 7
	E-17-2	右			10.1	6.6			
区	E-14-3	左			13.4	8.6			花井 2
	D-13-2	左				16.2	10.8		
	G-17-4	左			12.5	8.5			
	G-18-1	左					26.9	12.2	花井 8
	F-18-3	左	15.6	8.0					⊕
	G-17-4	左	13.2	7.5					⊕
北区	G-23-1	右					25.7	12.0	花井 5
	E-20-3 b層	左			14.6	11.2			
	G-23-3 b層	左			13.9	9.2			
	E-20-4	左	14.7	8.0					⊕

花井正光1976「リュウキュウイノシシ」『追われる「けもの」たち』四手井網英・川村俊蔵編 pp.114-129.

表12 リュウキュウイノシシ四肢骨計測表

*計測法はDriesch (1975)による

地区	層位	部	位	左右	ネック	Bd1	Bd2	Bmin	BT	BD	BP	W	DPT	LAR	GLI	GLM	GL	GB	
表	採	肩甲骨		左	20.3														
表	採	肩甲骨		右	17.4														
表	採	上腕骨	遠位	左				12.0											
表	採	上腕骨	遠位	右					21.1	31.9									
表	採	橈骨	近位端	左							21.9	14.5							
表	採	橈骨	近位	右							22.5	17.6							
表	採	橈骨	近位端	左							22.6	16.1							
表	採	橈骨	近位	左							25.2	17.6							
表	採	尺骨	近位	右							15.6	18.7							
表	採	尺骨	近位	右							18.6	22.4							
表	採	尺骨	近位	右							14.8	21.1							
表	採	尺骨	近位	左							16.3	20.1							
表	採	尺骨	近位	左							14.3	21.0							
表	採	尺骨	近位	左							15.7	21.0							
表	採	尺骨	体部	右							19.9	—							
表	採	尺骨	体部	左							14.9	—							
表	採	尺骨	体部	右							15.0	—							
表	採	尺骨	体部	左							—	—	21.3						
表	採	寛骨	腸骨~白部	右										24.3					
表	採	脛骨	遠位	右		22.1	18.5												
表	採	脛骨	遠位	左		23.9	21.5												
表	採	脛骨	遠位	左		25.7	20.9												
表	採	距骨		左											40.1	37.5			
表	採	距骨		左											38.6	35.8			
表	採	踵骨		右													67.9	16.4	
表	採	踵骨		右														15.8	
表	採	踵骨		左														17.6	
南	2層	肩甲骨		右	16.0														
	2層	肩甲骨	遠位	左	18.8	22.0	—					18.4							
	2層	上腕骨	遠位端	右					23.4										
	2層	上腕骨	遠位端	右					22.9										
	1層	橈骨	近位	左							27.4	17.9							
	1層	橈骨	近位	左							23.1	15.8							
	4層	橈骨	近位	左							27.6	18.4							
	3層	橈骨	近位	左							27.4	16.9							
	4層	橈骨	近位	右							25.4	17.6							
	1層	橈骨	近位	右							25.5	—							
	2層	橈骨	近位端	左							23.1	15.6							
	1層	橈骨	近位	右							25.1	17.4							
	1層	尺骨	近位	左							16.6	22.0							
	2層	尺骨	近位	左							13.2	23.3							
	2層	尺骨	体部	左							14.5	—							
	2層	尺骨	体部	左							11.0	—							
	3層	尺骨	体部	右							13.5	—							
	1層	尺骨	体部	左							18.3	—							
	2層	尺骨	体部	右							13.0	—							
	4層	尺骨	体部	右							—	19.6							
	2層	尺骨	体部	左							—	19.3							
	3層	寛骨	腸骨~白部	左											24.3				
	2層	寛骨	腸骨~白部	右											25.7				
	2層	脛骨	近位端欠	右			23.4	19.5											
	2層	脛骨	遠位	左			22.4	19.1											
	1層	脛骨	遠位	左			20.2	16.2											
	3層	脛骨	遠位	右			25.1	21.3											
2層	距骨		左											27.5	25.3				
3層	距骨		右											35.3	32.5				
3層	距骨		左											34.6	32.3				
3層	距骨		右											33.4	30.5				
2層	距骨		右											37.3	34.5				
1層	距骨		左											36.8	33.5				
1層	距骨		左											35.4	32.7				
2層	距骨		右											36.1	33.5				
2層	踵骨		左													68.2	17.6		
2層	踵骨		左													—	16.8		
1層	踵骨		右													67.4	17.2		
3層	踵骨		右													—	16.5		
2層	踵骨	未欠骨	左														17.7		
2層	踵骨		左														16.2		
2層	踵骨		左														15.8		
2層	踵骨		右														16.9		
北	1層	橈骨	近位	左								17.6							
	4層	橈骨	近位	右							24.1	15.2							
	4層	橈骨	近位	右							24.1	—							
	3 b層	脛骨	遠位	左		27.7	21.3												
区	3 b層	脛骨	遠位端	左		27.4	23.2												
	4層	踵骨		左														17.4	

Driesch, A. 1975 "A Guide to the Mesurement of Animal Bones from Archaeological Sites" Peabody Museum Bolletiu 1 Harvard Univ.

表13 リュウキュウイノシシに見られるイヌの噛み跡、人間の髓食痕

地区	層位	部	位	左右	備考
表	採	上腕骨	体部	左	犬の噛みあとあり
表	採	上腕骨	遠位未欠骨欠	右	犬の噛みあとあり
表	採	上腕骨	遠位	左	犬の噛みあとあり (カットマークあり)
表	採	上腕骨	遠位	左	犬の噛みあとあり
表	採	尺骨	近位	左	犬の噛みあとあり
表	採	尺骨	近位	右	犬の噛みあとあり
表	採	尺骨	近位	右	犬の噛みあとあり
表	採	尺骨	近位	左	(カットマークあり)
表	採	尺骨	近位	左	犬の噛みあとあり
表	採	脛骨	遠位	右	(カットマークあり)
表	採	距骨		左	犬の噛みあとあり
表	採	距骨		左	犬の噛みあとあり
南 区	4層	上腕骨	体部	左	犬の噛みあとあり
	2層	上腕骨	体部	左	犬の噛みあとあり
	4層	上腕骨	体部	左	犬の噛みあとあり
	3層	上腕骨	体部	左	犬の噛みあとあり
	2層	上腕骨	遠位	右	犬の噛みあとあり
	4層	橈骨	体部	右	犬の噛みあとあり
	1層	橈骨	近位	左	犬の噛みあとあり
	1層	尺骨	近位	左	犬の噛みあとあり
	4層	尺骨	体部	右	犬の噛みあとあり
	2層	尺骨	体部	左	犬の噛みあとあり
	3層	脛骨	近位	右	犬の噛みあとあり (骨髓食孔あり)
	3層	脛骨	前位破片	左	犬の噛みあとあり
	3層	脛骨	遠位	右	(骨髓食孔あり)
	1層	距骨		右	犬の噛みあとあり
2層	踵骨		右	犬の噛みあとあり	
北 区	3 b層	脛骨	体部	右	(骨髓食孔あり)
	3 b層	脛骨	遠位	左	犬の噛みあとあり

表14 火熱痕の見られる
リュウキュウイノシシー覧

地区	層位	部	位	左右
表	採	橈骨	近位	左
表	採	踵骨		左
表	採	中手・中足骨	遠位	
南 区	2層	側頭骨		左
	2層	肋骨	破片	不明
	2層	頭蓋骨	眼窩口	右
	2層	橈骨	近位	左
	3層	橈骨	近位	右
	3 b層	腓骨	遠位	左
	3層	距骨		右
	1層	踵骨		左
	2層	踵骨		不明
	2層	膝蓋骨		右
北 区	4層	中手・中足骨	遠位	
	3層	基節骨		左
	3 b層	下顎骨関節突起		左
	3 b層	橈骨	近位	左
	3 b層	中手・中足骨	遠位	
北 区	4層	中節骨		左
	4層	中節骨		右
	3 b層	中節骨		左

表15-1 哺乳類その他、リュウキュウイノシシ・ブタの中間型

1	E-15-2	イノシシ	脛骨	左	遠位	リュウキュウイノシシ
2	F-19-2	イノシシ	P4	左		リュウキュウイノシシ
3	F-20-4	イノシシ	中手・足骨	?	体部	リュウキュウイノシシ
4	表採	イノシシ	犬歯上	右		リュウキュウイノシシ
5	D-11-2	イノシシ	犬歯上	右		
6	表採	不明	不明	不明	不明	リュウキュウイノシシでは無い。
7	E-15-2	不明	不明	不明	不明	基底後頭骨、仙骨ではない。
8	D-11-2	イルカ	肋骨	不明	不明	多分、イルカ肋骨だが実物と対照できなかった
9	表採	シカ?	鹿角?	不明	不明	沖縄で鹿角は珍しい。搬入品か?
10	表採	ウシ	大腿骨	左	後位	
11	表採	不明	不明	不明	不明	イノシシ頬骨?ぴったりとは一致しない。
12	G-21-4	イノシシ	椎骨		下部	黒色炭化
13	G-24-3b	炭				骨でない
14	F-20-4	不明	不明	不明	不明	平坦骨
15	G-22-1	ウシ	P4 下	左		黒毛和牛より大 20.8×11.8mm
16	G-21-1	不明	白歯	不明	基部	歯根部のみ
17	G-19-2	不明	白歯	不明	基部	歯根部のみ
18	G-18-3	ウシ	胸椎	中位	椎体	
19	F-24-3b	ウシ	椎骨	中位	椎体	破片
20	E-12-1	不明	不明			
21	E-12-1	ウシ	下顎枝	右		
22	G-23-1	ウシ	椎骨	中位	椎体	
23	F-24-3b	ウシ	椎骨	中位	椎体	
24	F-23-1	ウシ	椎骨	中位	椎体	
25	F-12-4	不明	海獣?イルカ?	不明	不明	海綿質のみ
26	F-12-4	不明	海獣?イルカ?	不明	不明	海綿質と外面を一部残す

表15-2 哺乳類その他、リュウキュウイノシシ・ブタの中間型

27	G-17-4	イノシ	犬歯下	左	先端	リュウキュウイノシシ相当
28	G-18-1	イノシ	大腿骨	右	体部	リュウキュウイノシシ相当
29	表採	イノシ	大腿骨	左	体部	リュウキュウイノシシ相当
30	F-21-3b	イノシ	上腕骨	右	体部	リュウキュウイノシシ相当
31	F-13-4	イノシ	P2 下	右		リュウキュウイノシシ相当
32	F-12-4	イノシ	I2 上	左		リュウキュウイノシシ相当
33	表採	イノシ	C 下	右	破片	リュウキュウイノシシ相当
34	E-14-1	イノシ	C 下	右	先端	リュウキュウイノシシ相当
35	F-23-3b	イノシ	大腿骨	左	後位	リュウキュウイノシシ相当
36	F-18-3	イノシ	側頭骨	右	頬骨突起	リュウキュウイノシシ相当
37	D-11-2	イノシ	寛骨	右	破片	リュウキュウイノシシ相当

表16-1 ブタ観察、計測表

※丸数字：写真番号(図版1)

部位	部位	発掘区・層位	計測値 ¹	現生標本 ²	所見
1	上顎第3後臼歯 左	F-18-3	28.2×15.5mm	り23.0×12.1mm ホ32.0×19.2mm	咬頭丘がすべて磨耗して咬合面は平坦である。老齢。 ①
2	上顎第2、第3後臼歯 左	F-13-2	第2後臼歯16.2×13.8mm 第3後臼歯計測不能× ³ 15.8mm	ホ：30.0×19.0(オス) 29.0×17.0(メス) り：M2:14.8×11.8mm	エナメル質の磨耗がすすみ、小丘は連続し、象牙質の窪みが見られる。 ③
3	上顎第3後臼歯 左	D-11-2	幅15.4mm	り：13.6mm,ホ：19.2mm	小丘が独立する段階である。一部欠損しているため、さらに大きい。 ④
4	上顎第2後臼歯 左	E-18-3	幅14.4mm	り：11.9mm,ホ：17.2mm	小丘がすべて連結。老齢である。 ②
5	上顎第3前臼歯、第4前臼歯 右	表採	P3:10.6 8.7mm P4:10.8×9.7mm	り：P38.8×6.1mm P4:8.0×9.0mm ホ：P3:13.0×8.8mm P4:11.1×12.8mm	小丘の咬耗が進む。 ⑤
6	下顎第2後臼歯 右	表採	M2:16.0×11.5mm	り：14.3×9.4mm ホ：21.3×12.5mm	M2の小丘は独立 ⑥
7	下顎第3後臼歯 右	D-11-4	幅14.3mm	り：10.6mm ホ：14.5mm	小丘にわずかに磨耗が始まる ⑦
8	犬歯♂下顎側 右	F-10-1	最大幅×厚：17.7×10.6mm	り：15.5×9.5mm ホ：適切な標本無し	♂先端、基部を欠く。 ⑨
9	犬歯♂下顎側 右	表採	最大幅×厚：20.4×10.5mm	り：15.5×9.5mm ホ：適切な標本無し	♂下顎犬歯の先端、No.8に酷似する ⑩

¹計測法は、Driesch, Angela Von 1976 "A Guide to the Measurement of animal bones from archaeological sites" Peabody Museum, Harvard University, Bulletin 1に準じる。

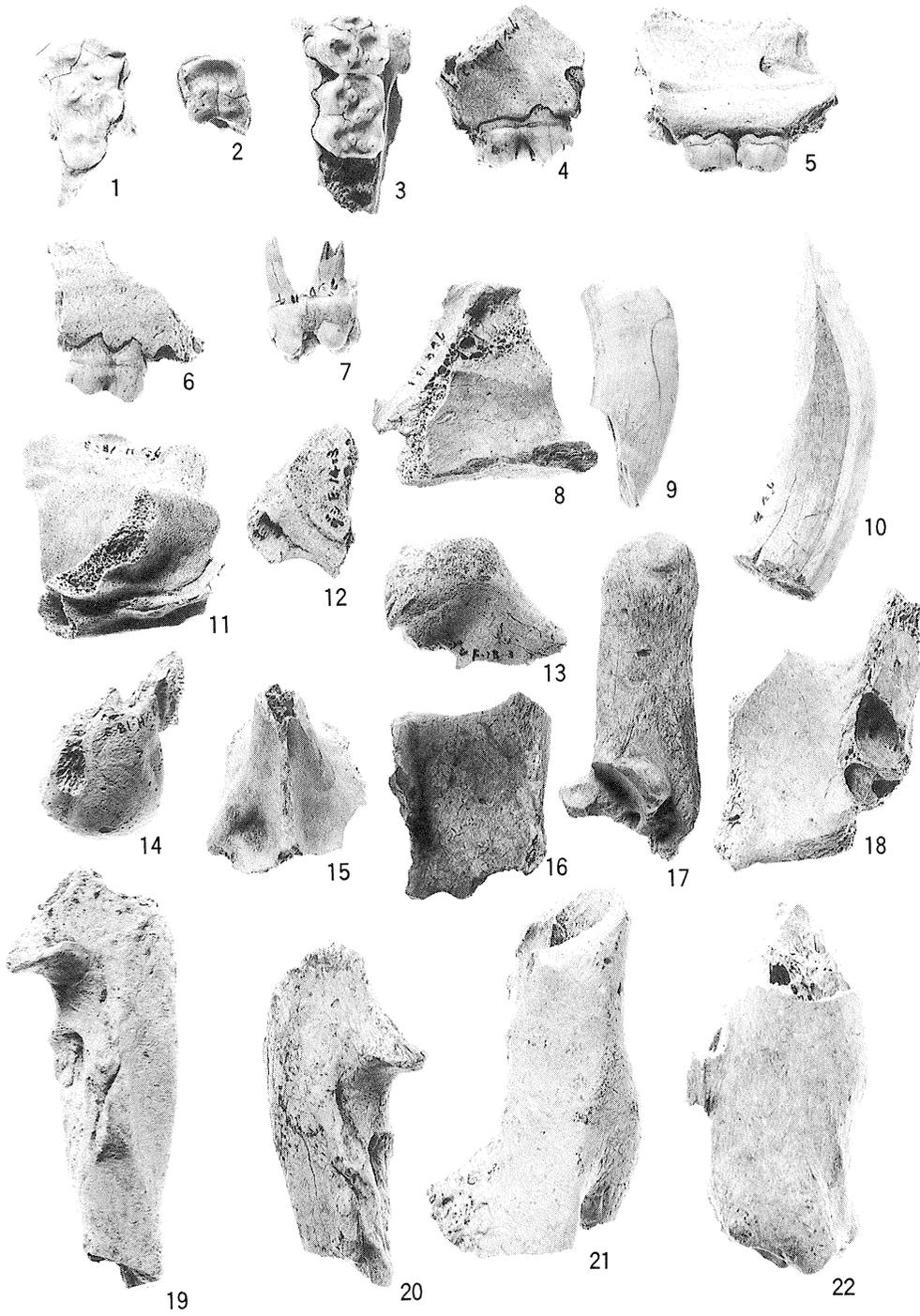
²本州産のイノシシを本土イノシシと称し、西表産のイノシシをリュウキウイノシシと称す。略称として「ホ：」「り：」をそれぞれ用いる。現生比較標本に持ちいたものは、兵庫県丹波篠山町、(株)大見屋で入手した本土イノシシ♀と西表産のリュウキウイノシシ♂で、共に4歳以上の成獣である。本土イノシシの四肢骨は適切なものがなかったため、計測は行わなかった。

³一部欠損のため、この数値よりも大きいことを示す。

表16-2 ブタ観察、計測表

10	側頭骨 右、乳様突起	H-18-3	縦25.2×横17.0mm	リ：16.6×14.3mm、ホ：17.8×16.0mm、ブ ⁴ ：25.8×18.4mm	本土イノシシよりも大きく、現生ブタ標本に酷似する。イノシシの家畜化にともない乳様突起が肥大することは文献では未見である。 ^⑭
11	側頭骨 右 後位	E-14-3	外耳部の最大径は5.5mm	リ：3.5mm、ホ：6.3mm、ブ：5.7mm	後頭骨の縫合面は未癒着である ^⑫
12	側頭骨右、関節突起	G-13-1			下顎との関節面がリュウキウイノシシよりやや大きく分厚い ^⑧
13	側頭骨右、関節突起	H-18-3	外耳部の最大径は5.6mm	リ：3.5mm、ホ：6.3mm、ブ：5.7mm	多孔質。骨質が疎。No.10と同一個体の可能性がある。 ^⑪
14	側頭骨右、関節突起	F-12-1	外耳部の最大径は4.3mm	リ：3.5mm、ホ：6.3mm、ブ：5.7mm	
15	側頭骨右、関節突起	D-11-2	外耳部の最大径は4.9mm	リ：3.5mm、ホ：6.3mm、ブ：5.7mm	下顎との関節面がリュウキウイノシシよりやや大きく分厚い ^⑮
16	下顎骨 右 関節突起	F-18-3			リュウキウイノシシよりも大。 ^⑬
17	肩甲骨 右 体部	F-12-1			棘突起は大きく、リュウキウイノシシの範疇を越える ^⑮
18	尺骨 左	H-17-4	滑車状切痕部での最大幅(DPA)×BPC：36.1×22.2mm	リ：31.0×18.1	本土イノシシと同大
19	尺骨 右 表採		滑車状切痕部での最大幅(DPA)×BPC：34.0×18.8	リ：31.0×18.1	No.18よりやや小さい ^⑮
20	上腕骨 右	F-18-3	最大幅×最小幅：26.5×18.2	リ：21.0×13.0	遠位部で斜めに切断されている ^⑮
21	脛骨 左 遠位部 表採		Bd×Da:29.5×28.0	リ：23.1×21.5	治癒した骨折痕がある ^⑰
22	踵骨 表採		Gb:21.0	リ：	
23	椎骨 F-23-3b				棘突起の基部のみ。本土イノシシと同大 ^⑮

⁴現生ブタ、品種不明、ジェネラルサイエンス社より1995年に購入M3未萌出



図版1 ブタと考えられる本土イノシシ相当の資料

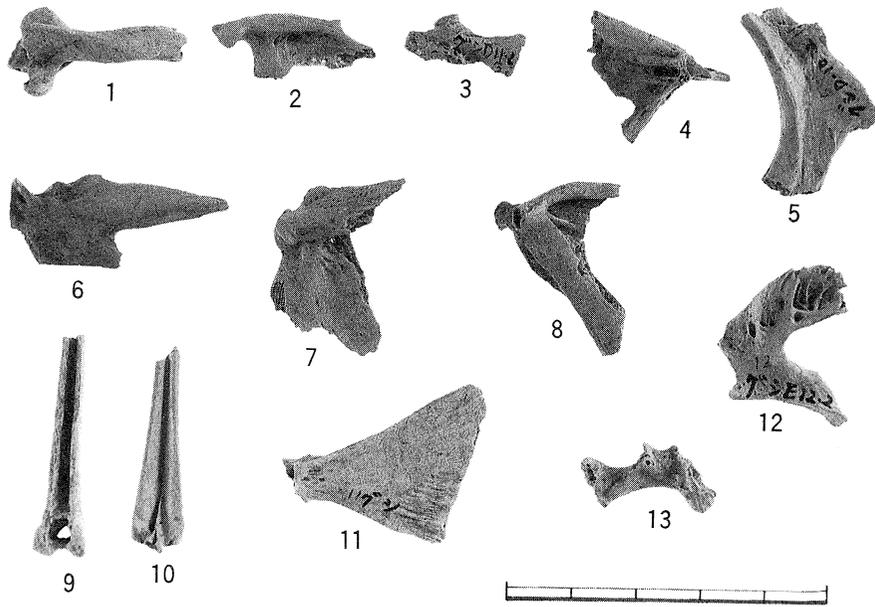
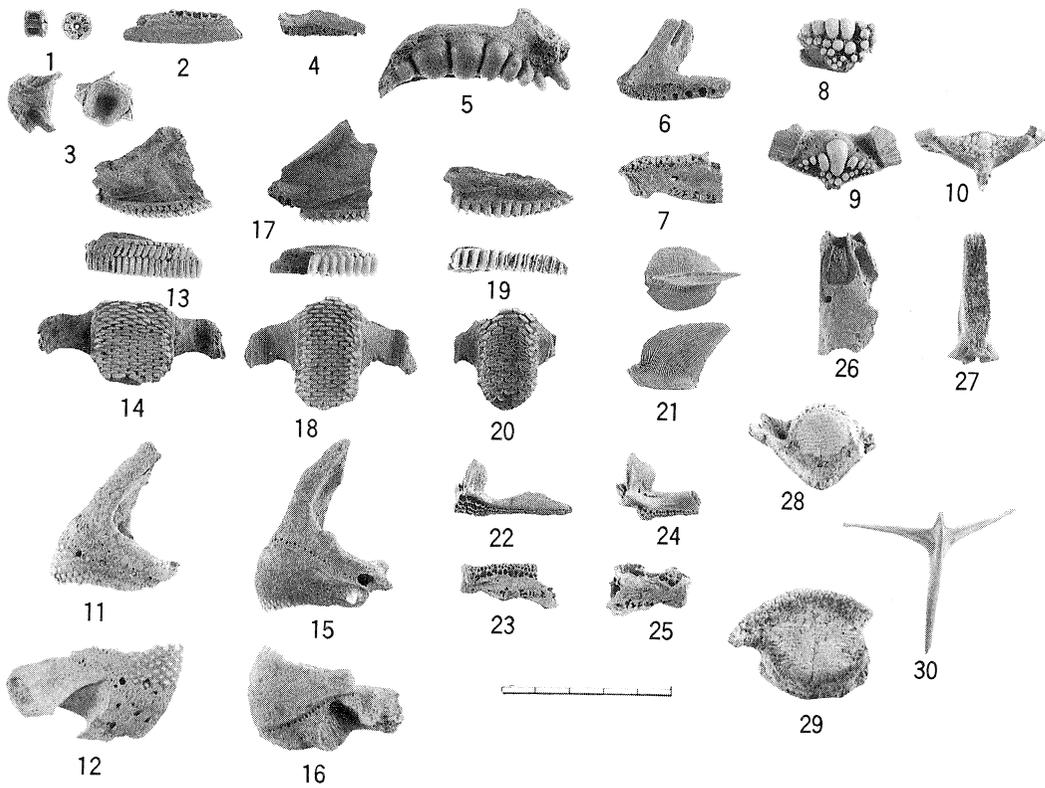
魚類

上

1. サメ 脊椎骨
2. ウナギ目ウツボ科種不明 左歯骨
3. スズキ目サバ科カツオ 脊椎骨
4. ♪ イサキ科コショウダイ型 R前上顎骨
5. フエフキダイ科ヨコシマクロダイ L前上顎骨
6. ♪ ハマフエフキ R前上顎骨
7. ♪ ♪ R歯骨
8. ベラ科タキベラ L上咽頭骨
9. ♪ ♪ 下咽頭骨
10. ♪ ♪ 下咽頭骨
11. イロブダイ L前上顎骨
12. ♪ L歯骨
13. ♪ R上咽頭骨
14. ♪ 下咽頭骨
15. ブダイ科 L前上顎骨
16. ♪ L歯骨
17. ナンヨウブダイ L上咽頭骨
18. ♪ 下咽頭骨
19. ナガブダイ L上咽頭骨
20. ♪ 下咽頭骨
21. ニザダイ科 鱗
22. マハタ属ハタ科 R前上顎骨
23. ♪ ♪ R歯骨
24. ハタ科 R前上顎骨
25. ♪ L歯骨
26. モンガラカワハギ 下顎骨
27. ♪ 棘
28. ハリセンボン 上顎骨
29. ♪ 下顎骨
30. ♪ 棘

下

1. 主上顎骨
2. 口蓋
3. 右 下顎骨
4. 主鰓蓋骨
5. 鎖骨
6. 右 関節骨
7. 右 方骨
8. 左 ♪
9. 背鱗棘
10. 臀鱗血管間棘
11. 尾椎骨
12. 種不明 A
13. ♪ B



図版2 魚類

上

ジュゴン

1. 肋骨

カニ

2. 可動指

3. 可動指

4. ウニ殻

5. イカ殻

下

ウミガメ

1. 鳥口骨

2. 上腕骨 (左)

3. 橈骨

4. 尺骨

5. 剣状突起片

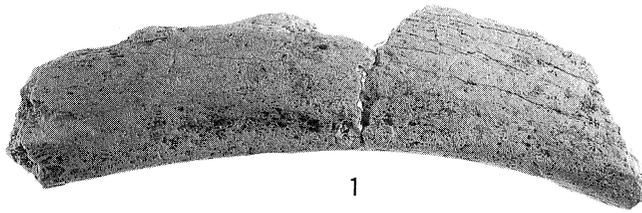
6. 指骨

7. 指骨

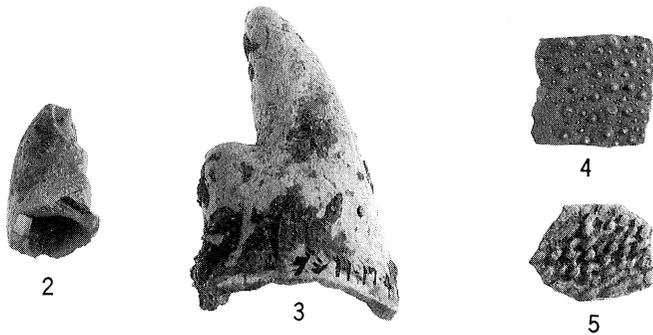
8. 背甲板片

9. 腹甲板片

10. 緑甲板片



1

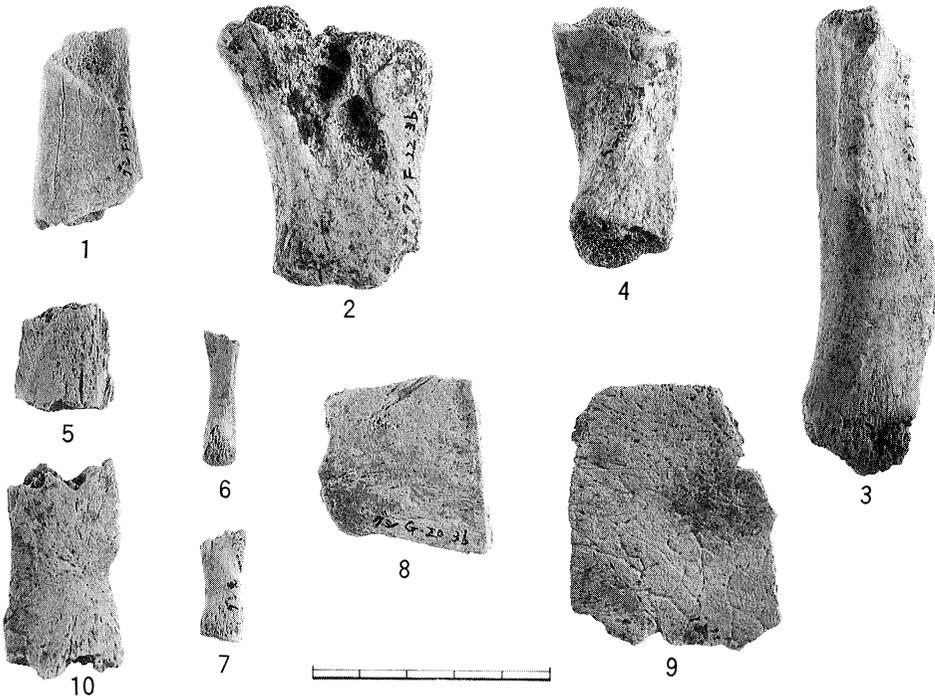


2

3

4

5



1

2

4

3

5

6

8

9

10

7



図版3 上：ジュゴン・カニ・ウニ・イカ
下：ウミガメ

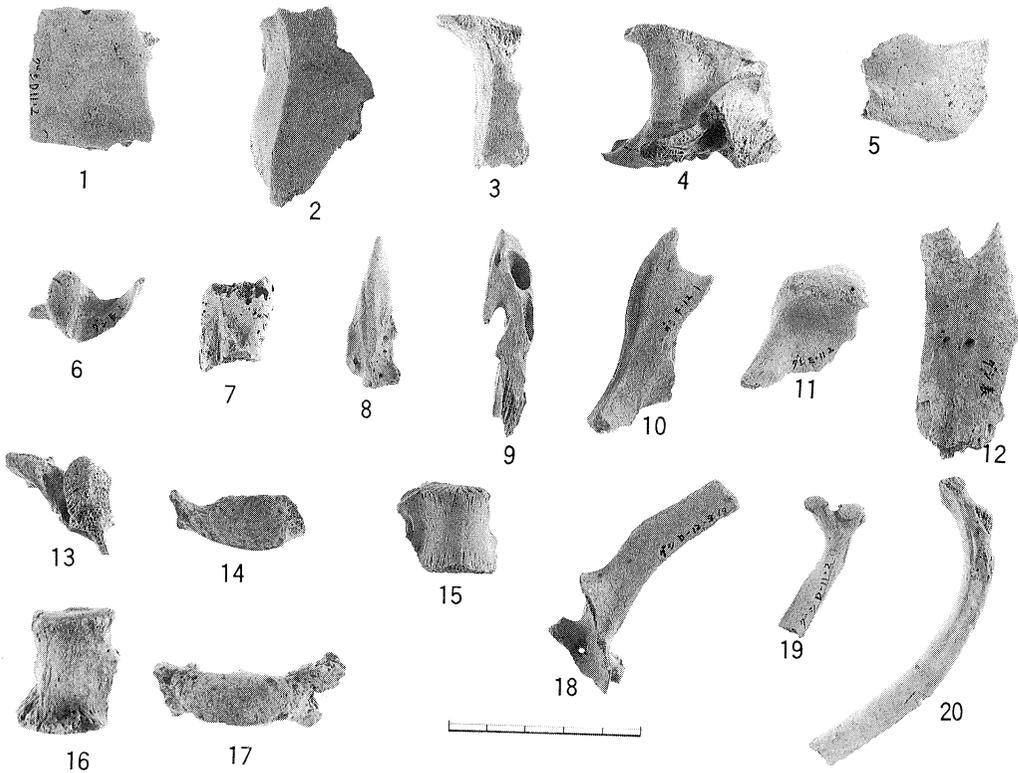
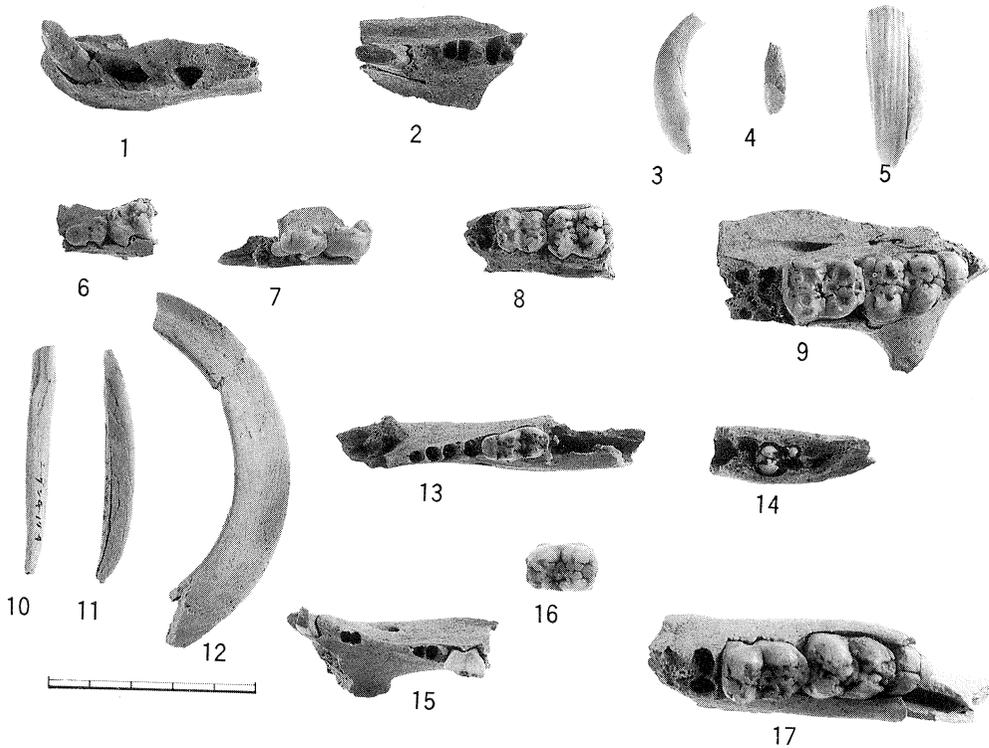
イノシシ(1)

上

1. 右 上顎骨 I¹
2. 右 上顎骨犬歯♀
3. 左 上顎骨 I¹
4. 左 上顎骨 I²
5. 左 上顎骨犬歯♂
6. 右 上顎骨 d m^{3·4}
7. 右 上顎骨 P^{2·3}
8. 左 上顎骨 P⁴M¹
9. 右 上顎骨 M^{2·3}
10. 左 下顎骨 I₁
11. 左 下顎骨 I₂
12. 左 下顎骨犬歯♂
13. 右 d m₄
14. 左 M₁萌出途中
15. 右 C P₃♀
16. 左 M₂
17. 左 下顎骨 M_{2·3}

下

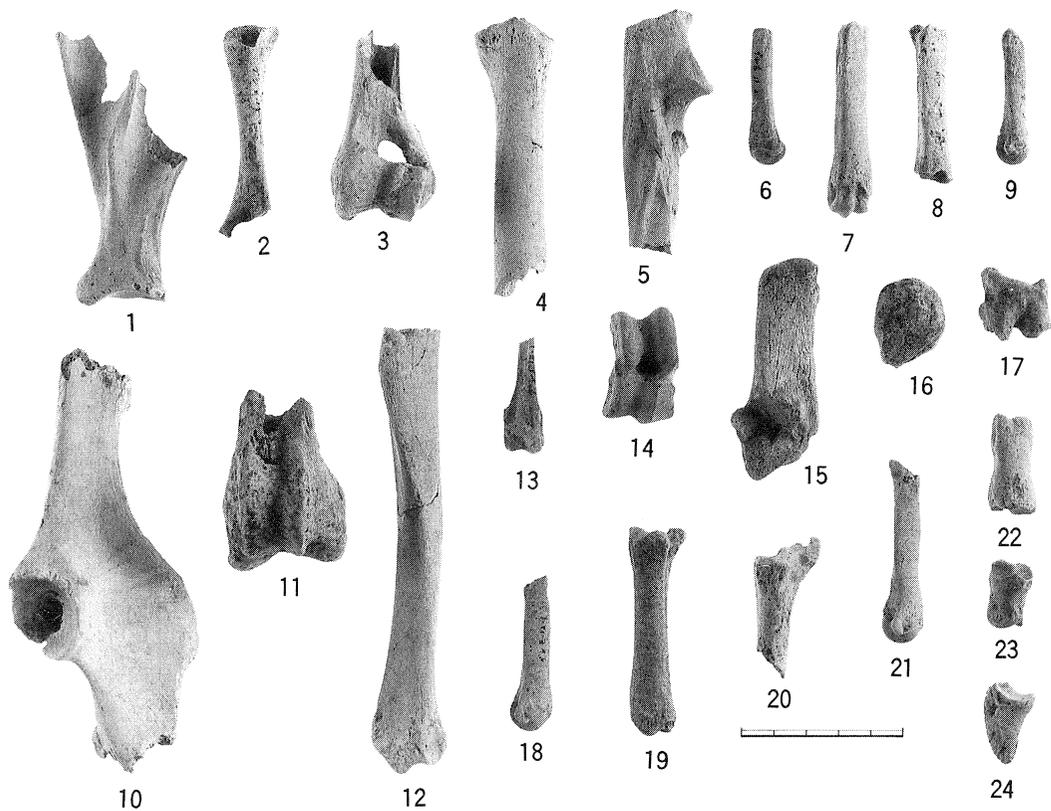
1. 右 前頭骨
2. 右 頭頂骨
3. 右 頭頂骨+後頭骨
4. 左 側頭骨頬骨突起
5. 左 頬骨
6. 左 後頭顆
7. 左 岩様部骨胞
8. 後頭骨頸静脈突起
9. 左 前上顎骨片
10. 右 筋突起(幼)
11. 左 下顎骨関節突起
12. 下顎骨連合部片
13. 頸椎片
14. 環椎片
15. 胸椎片
16. 腰椎片
17. 仙椎
18. 椎骨棘突起片
19. 右 第1肋骨
20. 右 肋骨



図版4 イノシシ(1)

イノシシ(2)

1. 左 肩甲骨 遠位
2. 右 上腕骨 (幼)
3. 左 上腕骨 遠位
4. 右 橈骨 近位
5. 右 尺骨
6. 右 中手骨 II
7. 右 中手骨 III
8. 左 中手骨 IV
9. 右 中手骨 V
10. 左 寛骨
11. 左 大腿骨 遠位
12. 右 脛骨
13. 左 腓骨
14. 左 距骨
15. 右 踵骨
16. 右 膝蓋骨
17. 左 第4足根骨
18. 右 中足骨 II
19. 右 中足骨 III
20. 左 中足骨 IV
21. 右 中足骨 V
22. 右 基節骨
23. 中節骨
24. 末節骨



図版5 イノシシ(2)

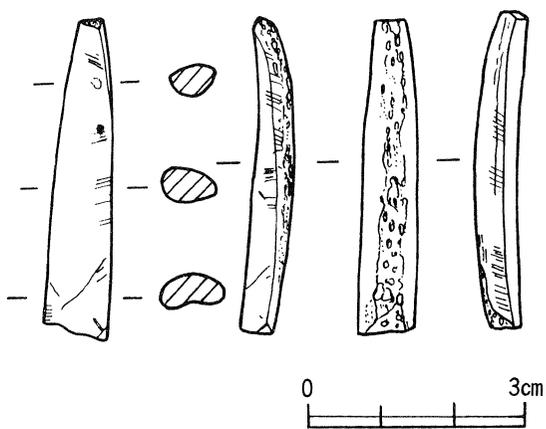


図1 骨角器
実測：田辺由美子

具志原貝塚から出土したリュウキュウヤマガメについて

当山 昌直 (沖縄県文化振興会)

リュウキュウヤマガメ *Geoemyda japonica* は、沖縄島 (恩納村と石川市以北)、渡嘉敷島、久米島にだけ分布する琉球列島の固有種である (Yasukawa et al, 1992; 当山, 1995)。沖縄諸島における本種の分布は、不連続的になっており、沖縄島と久米島の間にある渡名喜島や阿嘉島などの他の島には分布していない。しかし、化石としては沖縄島の南部 (大城, 1987) や伊江島 (長谷川ほか, 1978) でも見つかったことから、昔は沖縄島内や近隣の離島などに、現在よりも広範囲に分布していたことが予想される。したがって、本種が分布していない地域からの出土はきわめて興味深いものであり、特に伊江島から出土されることは重要な意味をもつものと思われる。このようななかで、伊江島出土のリュウキュウヤマガメの骨片を調べることができたので、若干の検討を加えて報告する。

本報をまとめるにあたり、調査の機会を与えていただいた沖縄県教育庁文化課岸本義彦氏、ならびに資料の整理に協力された方々、またリュウキュウヤマガメについてご教示いただいた京都大学大学院理学研究科安川雄一郎氏に感謝する。

材料と方法

具志原貝塚から出土した骨片について、あらかじめ陸生カメ類と思われるのを選別してもらい、それを調査した。調査は現生のリュウキュウヤマガメの骨格標本と対比する方法で行なった。骨格標本は、琉球大学にあったラベル無しの標本 (天然記念物指定前に沖縄島で採集されたと思われる標本) から作成された研究用の標本 (背甲と腹甲は別個体) を用いた (図1~3を参照)。まず、現生の骨格標本 (ここでは便宜的に基標本と呼んでおく) と骨片を対比することで、骨片がリュウキュウヤマガメであるかどうかを確認した。次に、骨片がどの部分であるかを調べた。その結果を表1に示す。

結果

骨片を表層から順に1層から4層までの順序で並べ、便宜的に整理番号を付した (図版1~2を参照)。骨片の部位については、矢部 (1992) を参考にして分類した。また、骨格の左右の位置を確認し、縁骨板や肋骨板は何番目の位置のものかを番号で示した。次に、それぞれの骨片の同一部分を集めて、基標本を参考にしながら大きさのグループ分けを行なった。比較的

大型のグループを「L」とし、中型を「M」、小型を「S」とした。

調査の結果、出土した33の骨片のうち、28骨片はリュウキュウヤマガメの基標本と一致したのでリュウキュウヤマガメの骨片と同定された。また、残る5骨片は骨格部位の特定はできないが、骨の厚さや形状からリュウキュウヤマガメのものであることが推定された。

表1 具志原貝塚出土のリュウキュウヤマガメの骨片

整理番号	グリッド	層	骨片	左右	位置	大きさ(推定)
1	表採		剣腹骨板	左		L
2	Iライン		下腹骨板	左		S
3	F10	1	縁骨板	右	7	M
4	D11	1	(不明)			不明
5	G13	1	上腹骨板	左		S
6	F14	1	縁骨板	左	5	L
7	E14	1	剣腹骨板	左		M
8	D11	2	縁骨板	右	7	L
9	D11	2	縁骨板	右	10	S
10	D11	2	下腹骨板	右		L
11	D11	2	下腹骨板	左		M
12	D11	2	中腹骨板	右		L
13	D11	2	中腹骨板	左		S
14	D12	2	(不明)			不明
15	D12	2	(不明)			不明
16	D12	2	上腹骨板	右		L
17	D12	2	中腹骨板	左		L
18	D12	2	下腹骨板	右		M
19	D12	2	剣腹骨板	右		M
20	D12	2	剣腹骨板	左		S
21	D13	2	中腹骨板	右		M
22	E14	2	助骨板	左	6	M
23	F14	2	剣腹骨板	右		S
24	D11	3	下腹骨板	右		L
25	F13	3	下腹骨板	右		S
26	F13	3	縁骨板	左	8	M
27	G14	3	(不明)			不明
28	F20	3b	縁骨板	左	11	M
29	F23	3b	上腹骨板	左		M
30	G23	3b	中腹骨板	左		M
31	G12	4	(不明)			不明
32	F12	4	縁骨板	左	9	M
33	D13	4	中腹骨板	左		M

考察

出土した骨片から個体数を推定した。骨片の中に別個体と思われる左部分の中腹骨板が4個(整理番号13、17、29、32)確認されたことから、少なくとも4個体分の骨が出土したことに

なる。また、大きさでグループ分けした「L」「M」「S」が別個体、層別に出土するのも別個体として仮定すると、1層で3個体、2層で3個体、3層で3個体、3b層で1個体、4層で1個体の合計11個体分の骨片としてみる事ができる。したがって、本貝塚から出土したリュウキュウヤマガメの個体数は少なく見積もって4個体、多くて11個体と推定される。

整理番号2、5、16、18、28の骨片は比較的形が残っており、大きさを計測して生時の腹甲長を推定した。市販のノギスを用いて、整理番号5、16、28の上腹骨板は咽甲板の突起部の長径を、整理番号2、18の下腹骨板は縫合線までの横幅を測定した。次に基標本の腹甲長を基準に、対応する部位を測定し、それから骨片個体の推定される腹甲長を算出した(表2)。基標本の腹甲長は103.2mmであり、本種の大きさとしては小型といえる。骨片から推定される生時の腹甲長については、102.8から119.6mmの大きさが算出されているが、これは現生の変異幅に含まれるものであり(Yasukawa et al, 1992)、貝塚出土の本種の大きさは現生のものとはほぼ同じであると考えられる。

表2 具志原貝塚出土の骨片の計測値(単位mm)

整理番号	部位	計測値(基標本計測値)		推定される腹甲長
2	下腹骨板	28.3	(28.4)	102.8
5	上腹骨板	10.1	(10.1)	103.2
16	上腹骨板	11.7	(10.1)	119.6
18	下腹骨板	27.1	(24.3)	115.1
29	上腹骨板	11.3	(10.1)	115.5

伊江島にはリュウキュウヤマガメは分布していないが、過去に本種が分布していたという証拠が、ゴヘズ洞からシカ化石とともに本種の化石が報告されており(長谷川ほか, 1978)、ナガラ原貝塚(長谷川・小野, 1979)からも報告されている。伊江島の現生爬虫類は、マダラトカゲモドキ *Goniurosaurus kuroiwae orientalis*、ハイ *Calliophis japonicus boettgeri*、ハブ *Trimeresurus flavoviridis* などが確認されている(当山, 1981)。これらのハイとハブは沖縄島、渡嘉敷島、久米島にも分布し、トカゲモドキは別亜種が久米島・沖縄島に、同種が渡嘉敷島に分布しており、リュウキュウヤマガメの分布と重なることが注目される。このような動物の分布は、リュウキュウヤマガメが伊江島に分布していたことを示唆する一例としてあげることができよう。いずれにせよ、貝塚から出土することは、過去の伊江島にはリュウキュウヤマガメが自然分布していたことを裏付けるものであり、動物地理学的にも興味深いところである。

伊江島に生息していた本種が、どのように絶滅していったか興味深いところであり、貝塚からリュウキュウヤマガメの骨片が出土することは、本種が当該貝塚の時代まで生息していたことを示唆するものである。このような意味から、具志原貝塚で本種の骨片が確認されたことは

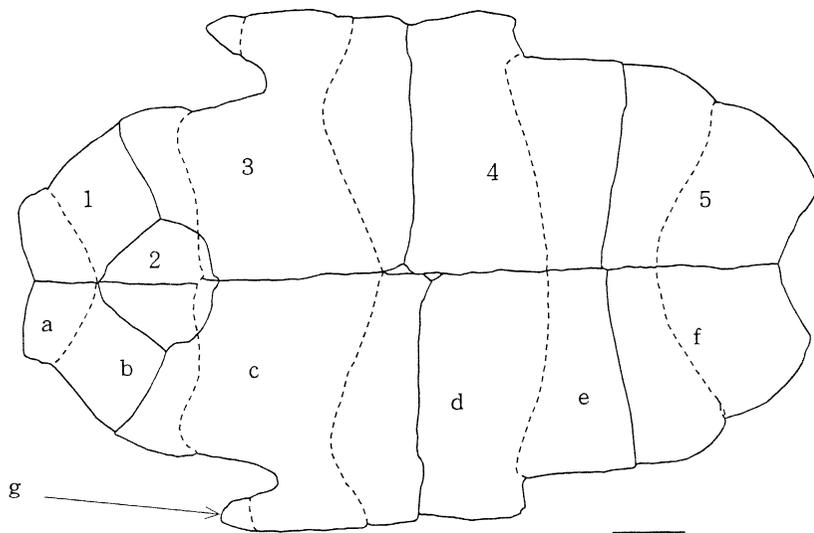


図2 リュウキュウヤマガメの外側からみた腹甲の骨板と甲板

実線が縫合線。破線が甲板の境界線。図右下のスケールは1 cm。

1：上腹骨板 2：内腹骨板 3：中腹骨板 4：下腹骨板 5：剣腹骨板

a：咽甲板 b：肩甲板 c：胸甲板 d：腹甲板 e：股甲板 f：肛甲板 g：腑下甲板

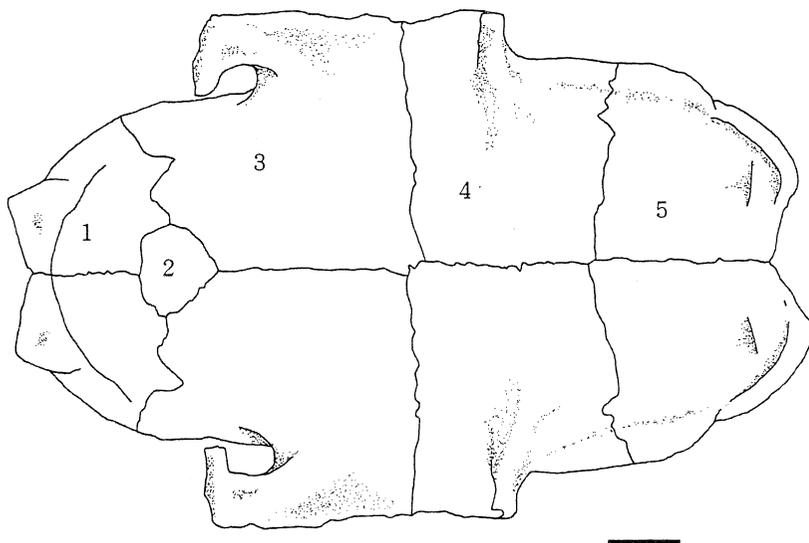
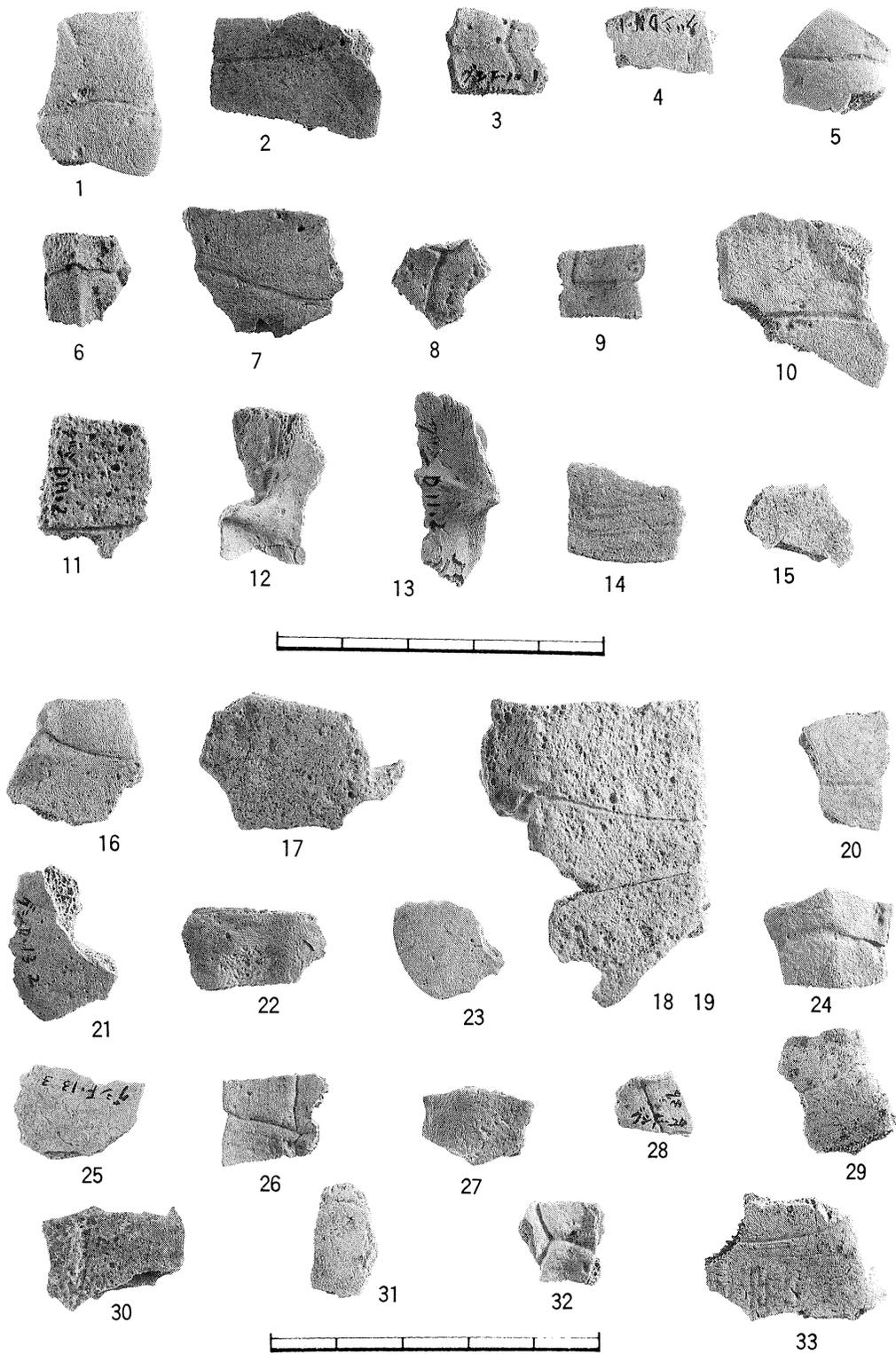


図3 リュウキュウヤマガメの内側からみた腹甲

実線が縫合線。図右下のスケールは1 cm。

1：上腹骨板 2：内腹骨板 3：中腹骨板 4：下腹骨板 5：剣腹骨板



図版1 リュウキュウヤマガメ (番号は表1の整理番号と同じ)

沖縄県伊江村具志原貝塚出土の貝類遺存体

黒住耐二

(千葉県立中央博物館)

具志原（ぐしばる）貝塚は、沖縄島の北西に位置する伊江島の南東部の砂丘上に立地する沖縄貝塚時代後期（暫定編年後Ⅱ期：弥生時代後期併行期）の遺跡であり、この貝塚の一部は国の史跡に指定されている。これまでの発掘調査から、具志原貝塚を含む伊江島南岸の砂丘上に存在する貝塚時代後期の遺跡では、多量の大型貝類を食料として利用していたことや貝輪等の貝製品、ゴホウラ等の九州等との交易に用いる貝類が豊富に出土したことが報告されている（例えば安里・名嘉真、1979；安里他、1983；木下、1989等）。

今回、この遺跡から発掘された貝類遺存体について検討することができたので、ここに報告したい。報告に先立ち、貴重な資料の検討の機会を与えて戴き、有益な御教示を戴いた沖縄県教育委員会の安里嗣淳・岸本義彦の両氏、資料整理に御協力戴いた津波古好子・当山慶子の両氏に御礼申し上げる。

1. 調査地の概要

今回の発掘調査地は、くびれ平底の土器を主体とする北区と、尖底の土器を主体とする南区に大きく区分される。土器形式から、くびれ平底の土器を主体とする北区の方が南区より僅かに新しいことが分かっている。また、遺跡の一部には沖縄貝塚時代前期（暫定編年前Ⅳ期：縄文時代後期併行期）の落ち込みがあり、ここからも僅かながら貝類が出土した。

これらの調査地全域より、現地で発見された貝類を採集するピックアップ法によって得られたものを今回の対象とした。

2. 全体的な傾向

今回の調査で得られた貝類（僅かに他の動物を含む）を、出土地区の北区、南区、および落ち込みに分けて表1から表3に示した。巻貝類37科126種、二枚貝類16科32種、ヒザラガイ類1科1種、節足動物1科1種及び棘皮動物1科1種と多くの種類が出土した。これらの中には、オカヤドカリ類の宿貝、水磨を受けていた死殻、殻内に他の生物の付着等のある死殻等の食料でない個体も含まれ、小型種を中心に約20種が非食用と考えられ、表中に示した。これらを除いた個体数は北区で約6,500個体、南区で約2,200個体であった。

時代の古い落ち込みからは、僅かな個体のみ出土した。チョウセンサザエが多く、僅かにサ

ラサバテイラ等の中・大型種が少量出土している。その組成は、後述する貝塚時代後期の組成と著しい相違はないようであった。

まず、図1には、本遺跡から出土した主体貝の種組成及び生息場所類系組成を示した。主体となっていた貝類は、マガキガイ、シラナミ、チョウセンサザエ、サラサバテイラの4種で、北・南区ともこの4種で全体の半数以上を占めていた。ただ、時代的に新しい北区でマガキガイが28.5%と多かったのに対し、南区では13.1%と比較的少なかつた。この主体貝の組成を反映して、貝類の生息場所としては、北区で約60%がイノー内の種で占められていたのに対し、南区ではイノー内の割合が低くなっていた。北・南区とも、イノー内、干瀬、礁斜面の3つの場所で全体の85%以上を占めていた。

この遺跡では、ヤコウガイの35mm程度の幼貝のフタが比較的多く出土していたり、マガキガイの幼貝の割合が高い等の特徴があった。

これまでの調査により、貝塚時代後期では大型貝類の採集の卓越することが示されてきた。特に伊江島の同時代のナガラ原西貝塚では大型貝類の出土が顕著である(安里・名嘉真、1979)。今回はピックアップ法により小型の種も得られ、詳細に検討した結果でも、やはり図1に示したような中・大型種が多いことが改めて示された。今回の組成は、近接する尖底土器を中心とする阿良貝塚から報告された貝類の組成(安里他、1983)とほぼ一致する。砂丘上に存在するという遺跡の立地と関連させても、砂浜海岸の潮間帯に多いイソハマグリの出土個体数は極端に少なく(表2、3)、小型種の採集をあまり意識していないことは前述の阿良貝塚の結果(安里他、1983)と同様に明かであった。しかし、同時代で伊江島の対岸の本部半島に存在する具志堅貝塚では、イソハマグリやスダレハマグリが海産貝類の主体となり、小型種の利用も顕著である(上地、1986)。基本的には遺跡の立地環境に起因するのであろうが、このような差異の生ずる要因に関しても詳細な検討が必要であろう。

3. 生息場所ごとの利用様式

この貝塚からは、僅かな個体数ながらクルマガサ、ベッコウガサ、カモガイ等の著しく波当たりの強い岩礁潮間帯に生息するカサガイ類が出土している。同様な生息場所に見られる種には、オオベッコウガサやハチジョウダカラがある。これらのカサガイ類は遺跡周辺に生息場所がなく、打ち上げられた貝殻が砂丘の堆積物に混入した可能性は全くなく、明らかに採集されて遺跡に持ち込まれたものである。阿良貝塚でもクルマガサとオオベッコウガサが数十個体出土している(安里他、1983)。そして、これらの種の他遺跡での出土確認は極端に少なく、本遺跡を特徴づけるものである。その採集場所は、リーフの発達しない伊江島の北岸と考えられる。食料を得るために肉量の少ない中型のカサガイ類を島の北岸にまで採集しに行くとは考え難く、食料とは別な意図の元に北岸に赴き、同時にカサガイ類を採集したものと想定される。もしかすると、本遺跡の南区から比較的多く出土し、ナガラ原貝塚から製品が豊富に出土して

いるオオベッコウガサを採集したのかも知れない。これらの種の出土は北・南の両地区で確認されているが、南区での比率が高い。

また、僅かにアラスジケマン、シレナシジミ等の河口干潟-マングローブ域の種も出土している。これらの種は、伊江島に生息可能な環境が存在しないことから、沖縄島等で採集されたものと考えられる。ほとんどの種が小型であることから、交換等の方法で貝殻自体が持ち込まれたとは考えがたい。すなわち、この遺跡の人々が沖縄島等に自ら渡った折に採集され、持ち込まれたものといえよう。これらの種の出土は北・南の両地区で確認されており、北区での比率が高いようである。一方、伊江島では貝塚時代前期の浜崎貝塚や後期の阿良貝塚からアラスジケマンやマドモチウミニナの僅かなの出土が報告されており（金武・大城、1980；安里他、1983）、長い時代にわたっての渡島を裏付けている。

この遺跡から陸産貝類は、北区で全体の2.5%、南区で3.5%と僅かしか出土していない。しかし、後期の阿良貝塚（安里他、1983）や具志堅貝塚（上地、1986）からは海産貝類の出土個体数を上回る陸産貝類が出土している。食料としての陸産貝類の可否には議論があるが、この貝塚では陸産貝類はほとんど利用されていないことは明かである。この両地区ともその大半は、林内から林縁部に生息するオキナワヤマタニシであった。その他の種も同じ環境に生息し、貝塚の後背地には現在のアダン林とは異なって、人手は加わっているものの何らかの林が存在したものと考えられる。

また、現在の伊江島では大型の陸産貝類としてイエジマイマイが知られている。この貝は、殻の周縁が丸みを帯びることによって、沖縄島のシュリマイマイの亜種とされており、これまでの観察から伊江島内ではほぼ同一の形質をもつことが確認されている。しかし、今回出土した個体は、周縁に弱いながら明かな角を持つことからシュリマイマイとして報告した。このような相違から、殻形態の変化は僅か二千年程度で生じることが明らかになった。

4. シャコガイ類の殻長組成

この貝塚から多く出土したシャコガイ類について、その殻長組成を示した（図2）。今回は、破損がなく完全な状態で得られた右殻のみを計測の対象とした。いずれの種でも、上部に北区の結果を、下部に南区のものを示した。最も個体数の多かったシラナミのサイズでは、北区で8cmにピークを持ち、15cm以上の大型個体の割合は著しく少なくなっていた。一方、同種の南区からの出土個体は、10cmにピークを持ち、大型の個体も比較的高い割合を占めていた。ヒメジャコでは、最大の殻長が13cmまでで、北・南区でサイズの相違は認められないようであった。ヒレジャコとシャゴウでは、30cm程度の個体まで確認され、明瞭な殻長のピークを示さなかった。しかし、シラナミと同様、この両種ではいずれも南区のサイズが大きい傾向にあった。

北区と南区で今回対象にした貝類の出土数は、前者が後者の約3倍であった。同様な関係を

シャコガイ類4種についてみると、シラナミとヒレジャコではほぼ全体の出土数と同じく北区が南区の3倍程度であった。一方、ヒメジャコでは北区で約5倍と著しく増加し、逆にシャゴウでは北区が1.4倍とその差が小さかった。前述したサイズと出土数から、古い南区の時代から新しい北区の時代にかけて、ヒメジャコを除く3種では捕獲サイズが小さくなり、特にシャゴウでは採集可能な個体数自体が減少したことも考えられる。シャゴウは、他のシャコガイ類と異なり足糸で岩に固着することなく、砂底上に転がった状態で生息し、採集が著しく簡単である。また、近年の観察でも沖縄諸島ではその生息はほとんど見られず、八重山諸島では比較的多くみられ、捕獲による減少があったものと考えられる。

前述したヤコウガイやマガキガイの幼貝の多いことも、貝類の捕獲圧の高かったことを示しているのかも知れない。

引用文献

- 安里嗣淳・名嘉真武夫. 1979. 概報編. In 伊江島ナガラ原西貝塚緊急発掘調査報告書(伊江村文化財調査報告書第8集), pp.1-117. 伊江村教育委員会, 沖縄.
- 安里嗣淳・大城秀子・花城潤子. 1983. 伊江島阿良貝塚発掘調査報告書(沖縄県文化財調査報告書第48集), 119pp. 沖縄県教育委員会, 沖縄.
- 金武正紀・大城慧. 1980. 浜崎貝塚(伊江村文化財調査報告書第9集), pp.1-64. 伊江村教育委員会, 沖縄.
- 木下尚子. 1989. 南島産貝輪交易考. In 生産と流通の考古学. 横山浩一先生退官記念論文集, I, pp.203-249. 横山浩一先生退官記念事業会, 福岡.
- 上地千賀子. 1986. 貝類遺存体. In 具志堅貝塚発掘調査報告書(本部町文化財調査報告書第3集), pp.25-34. 本部町教育委員会, 沖縄.

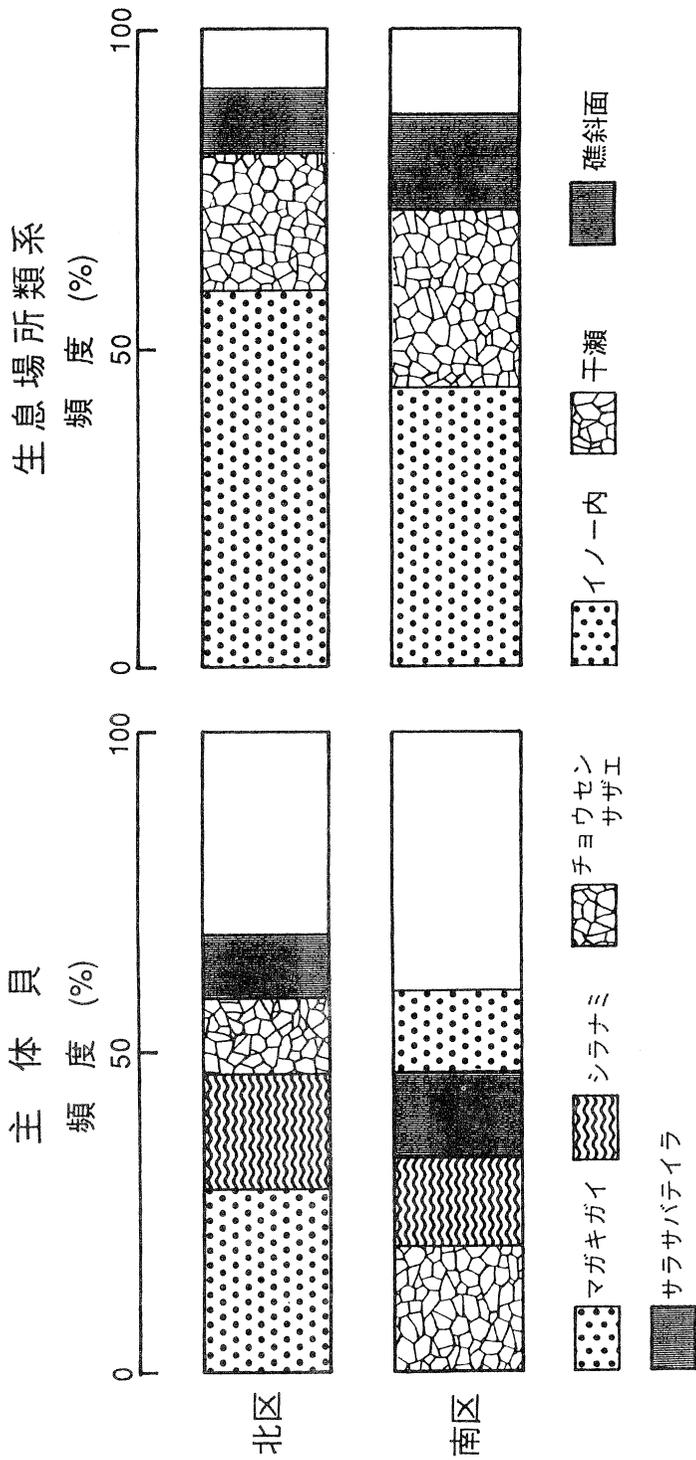


図1 具志原貝塚から出土した貝類遺存体の組成

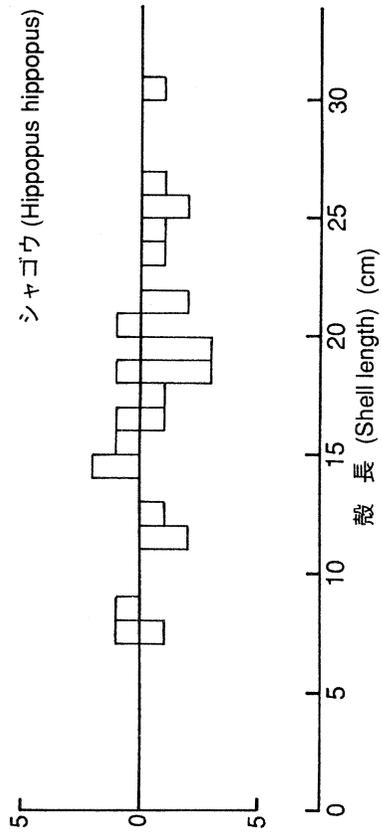
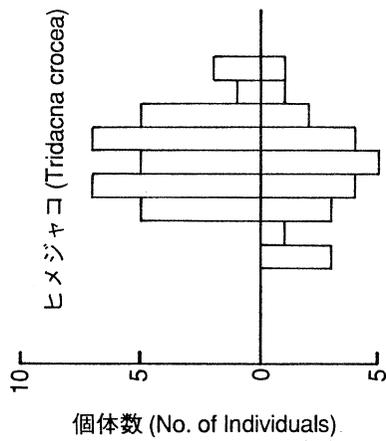
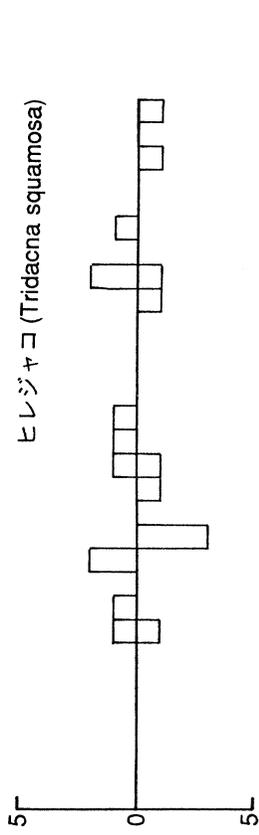
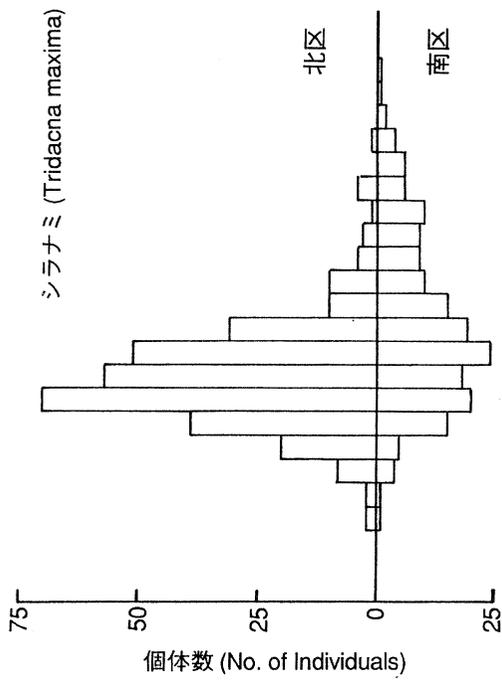


図2 具志原貝塚から出土したシヤコガイ類の殻長組成

表1 沖縄県伊江島具志原貝塚出土土状況(巻貝類等-5)

層序(layer) グリッド番号	北 区			南 区			MNI*	北 区			南 区			MNI	V層 落込み 完 頂			
	I層	II層	III層	III b層	IV層	I層		II層	III層	IV層	V層	VI層	10-11			12-13	14-15	18-19
	完 頂	完 頂	完 頂	完 頂	完 頂	完 頂		完 頂	完 頂	完 頂	完 頂	完 頂	完 頂			完 頂	完 頂	完 頂
114 アカミナシ	I-2-c			2	1	1	1	1	6							1		
115 コノマシ	I-2-c		3					1	3			1	1	1		5		
116 **カボシ	I-2-c			2					2							0		
117 アンボシ	I-2-c	1	3	2	1	12	11	2	11	3	4	5	11	3	1	1		
118 カロシ	I-2-c	1			1		2		1	1	6		1			1		
119 アシ	I-2-c								0	1	1	1	1	3		8		
120 カサシ	I-2-c								0			1				1		
121 ニギミナシ	I-2-c								0	1						1		
122 **カシ	I-2-c			1														
123 ナツミ	I-2-c																	
124 オキナ	V-8	1	1	1	33	12	65	8	11	1	1	134	10	14	1	15		
125 ツギ	V-8	1	1	3	4	2	1	12						9	1	2		
126 オカ	V-8								1	1	2	1	5					
127 シュ	V-8								1	1	1	4		3	3	2		
128 ハシ	V-8	1							1	2	1	7	1			1		
129 オキ	V-9								1	1	1	2	1			1		
130 同科	I-1-a								5					1		1		
131 カロ	I-1-a													2	1	3		
132 ハシ	I-3-a													5	1	2		

表2 沖繩県伊江島具志原貝塚出土貝類遺存体出土状況(二枚貝類-北区)

科名	種名	学名	生息地	I 層		II 層		III 層		IV 層		MINI
				完形	殻頂	完形	殻頂	完形	殻頂	完形	殻頂	
軟体動物門	Mollusca	二枚貝綱	Bivalvia (Marine)									
1	ツバガイ科	ツバガイ	Barbatia lima	2/1	1/3							
2	Arctidae	リュウキョウカサホウ	Anadara scapha	1/1		1						
3	ツバガイ科	ツバガイ	Glycymeris reevei									
4	ツバガイ科	リュウキョウカサホウ	Modiolus auriculatus									
5	ツバガイ科	クワチヨウガイ	P. margaritifera									
6	Pteridae	ミトノリツアリガイ	Pinctada panasesae	1/1								
7	ツバガイ科	カインツアリSP.	I. isognomon sp.									
8	ツバガイ科	シユウツアリガイ	I. isognomon									
9	ツバガイ科	チサウガイ	Glorpallium pallium									
10	ツバガイ科	メノガイ	S. squamosus	1/1	2							
11	Spondyliidae	**メノガイ	Spondylus sp.									
12	ツバガイ科	ケイトウガイ	Chama dunkeri	2/1	2/1	1						
13	Chamidae	ケツガ	Chama japonica									
14		**ケツガ	Chama sp.									
15	ツバガイ科	カネツガ	Chama iostoma									
16	ツバガイ科	リュウキョウカサ	Acrosterigma flavum									
17	Caroliidae	カワウガイ	Fragum unedo									
18	ツバガイ科	シヤコウ	Hippopus hippopus	1	4/3	1	3/5	2	10/5	7/18	7/10	17/39
19	Tridacnidae	ツバガイ	Tridacna maxima	28/38	47/57	9/5	18/22	13/12	14/12	152/164	127/120	232/381
20		ヒメツバコ	Tridacna squamosa									
21		ヒメツバコ	Tridacna crocea	3/1	6/5	3/1	5/4	6	3/2	18/10	20/22	46/49
22	ツバガイ科	ツバガイ	Atactodea striata									
23	ツバガイ科	リュウキョウカサ	Quidnypagus palatam									
24	ツバガイ科	リュウキョウカサ	Asaphis violaceus									
25	ツバガイ科	ツバガイ	Tarape. bicarinatum									
26	ツバガイ科	ツバガイ	Geloina erosa	1/1								
27	ツバガイ科	ツバガイ	Periglypta reticulata									
28	Veneridae	ツバガイ	Periglypta puerpera									
29		ツバガイ	Gafrarium pectinatum									
30		ツバガイ	Gafrarium tumidum	1/1	2/2	1	1/1	2/2	2/2	4/3	7/3	32/20
31		ツバガイ	Lioconcha castrensis									
32		ツバガイ	Pitar sulfureum									

記号等は表1に同じ。個体数は左殻/右殻である。

表3 沖繩県伊江島具志原貝塚出土貝類遺存体出土状況(二枚貝類-南区)

科名	種名	学名	I 層		II 層		10-11		12-13		14-15		18-19		IV 層	
			完形	殻頂	完形	殻頂	完形	殻頂	完形	殻頂	完形	殻頂	完形	殻頂	完形	殻頂
軟体動物門	イカ	Mollusca ; 二枚貝綱 Bivalvia (Marine)														
1 扇貝科	リュウキュウカサハ	Barbatia lima	1/3	1												7
2 Arcidae	リュウキュウカサハ	Anadara scapha	4/2	1/2	/1											5
3 扇貝科	シロカガ	Glycymeris reevei	2	/1	/1	/2										4
4 扇貝科	リュウキュウカサハ	Modiolus auriculatus	2	/1												2
5 カガイ科	クロチヨウカ	Pinctada margaritifera	1/2	1/2	/1	/1	/1									5
6 Pteriidae	ミドリカガ	Pinctada panasesae	3/1	2/1		/1										3
7 シェツカ科	カインアリ	Isognomon sp.														1
8	シェツカ	Isognomon isognomon														1
12 牡蠣科	ケイトウ	Chama dunkeri	11/5	4/2	1/1											12
15	カサハ	Chama iostoma	/1													1
16 扇貝科	リュウキュウカサハ	Acrosterigma flavum	/1													1
17 Cardidae	カワカ	Fragum unedo	1													1
18 シロカガ科	シロカ	Hippopus hippopus	9/10	19/28	8/6	3/2	/1	3	1							52
19 Tridacnidae	シロカ	Tridacna maxima	125/107	117/128	27/20	13/16	6/2	1/1	2/2	2/3	2/2	1/1	1/1	1/1	1/1	305
20	ヒシ	Tridacna squamosa	2/1	8/3	1/1	4/2										9
21	ヒシ	Tridacna crocea	13/12	12/19	3/3	3/3										39
22 トリカガ科	イノカ	Atactodea striata	3/2	1	2/1		/1									5
23 トリカガ科	リュウキュウカサハ	Quidripagus palatam														1
24 トリカガ科	リュウキュウカサハ	Asaphis violacens	/2	1/3	3/1	1/2		1	2							11
25 トリカガ科	フナカ	Tarapezium bicarinatum	1/3	5/7	/2	/1		1								15
26 シロカガ科	シロカ	Geloina erosa	/1													1
27 トリカガ科	フナカ	Periglypta reticulata		/1	/1											2
28 Veneridae	フナカ	Periglypta puerpera			/1											1
30	フナカ	Gafrarium tumidum	4/3	2	1/2											6
31	フナカ	Lioconcha castrensis			1											1

記号等は表1, 2に同じ。

生息地：生息場所類系

- I：外洋-サンゴ礁域
- II：内湾-転石域
- III：河口干潟-マングローブ域
- V：陸域

- 0：潮間帯上部
- 1：潮間帯中・下部
- 2：曲潮間帯上部
- 3：干瀬
- 4：礁斜面

- 8：林内・林縁部
- 9：林縁部
- a：岩盤
- b：転石
- c：泥、砂、礫底

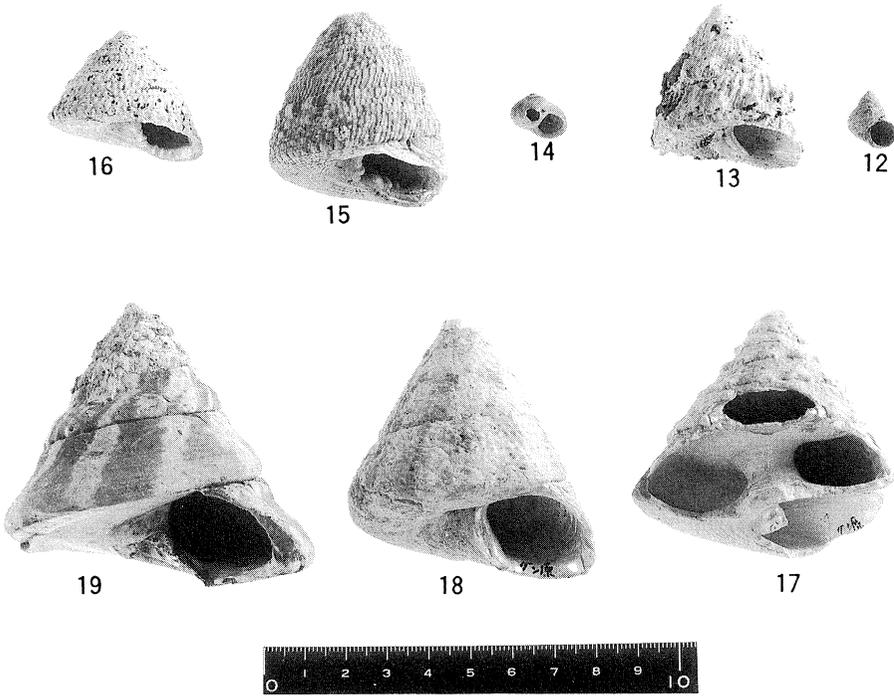
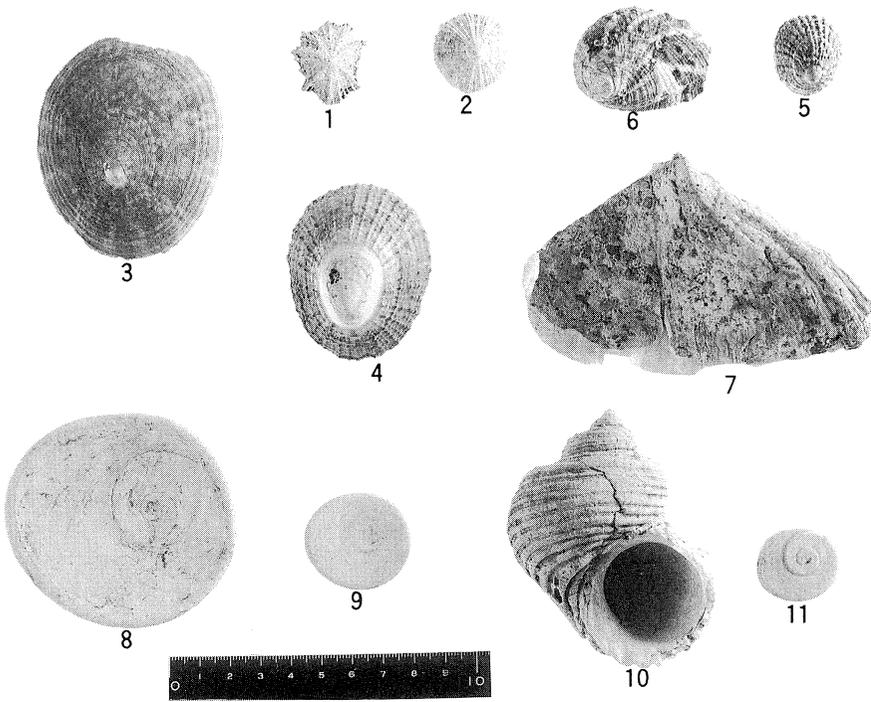
巻貝類等 (1)

上

1. ツタノハ
2. クルマガサ
3. オオベッコウガサ
4. ベッコウガサ
5. カモガイ
6. イボアナゴウ
7. ヤコウガイ
8. ヤコウガイの蓋
9. ヤコウガイの蓋 (幼貝)
10. チョウセンサザエ
11. チョウセンサザエの蓋

下

12. コシダカサザエ
13. オオウラウズ
14. サラサダマ
15. ニシキウズ
16. ムラサキウズ
17. ギンタカハマ
18. ベニシリダカ
19. サラサバテイラ



図版1 巻貝類等(1)

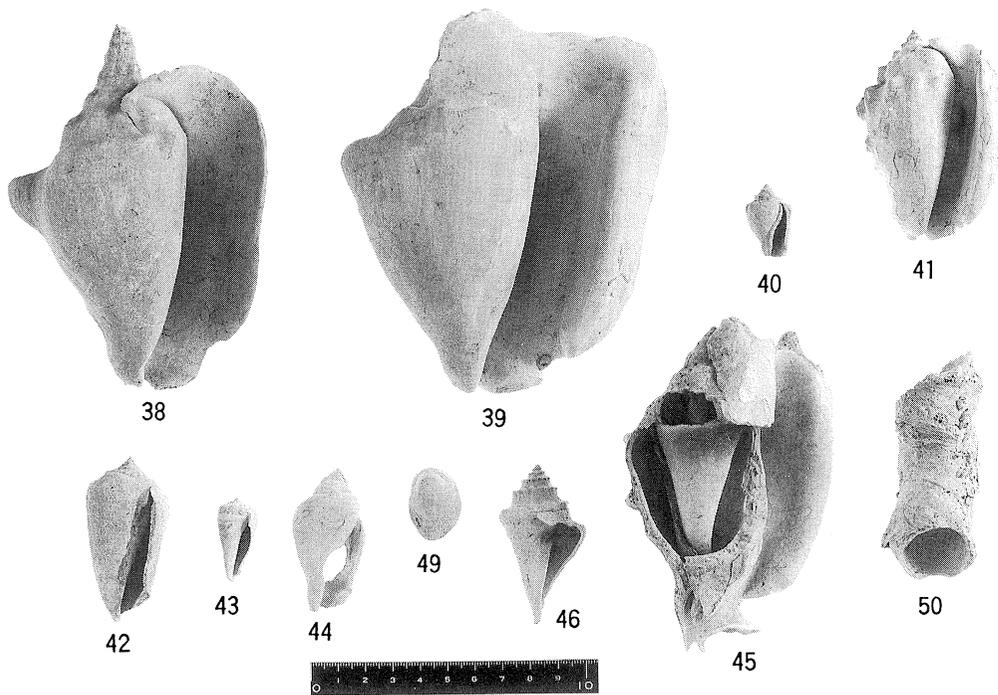
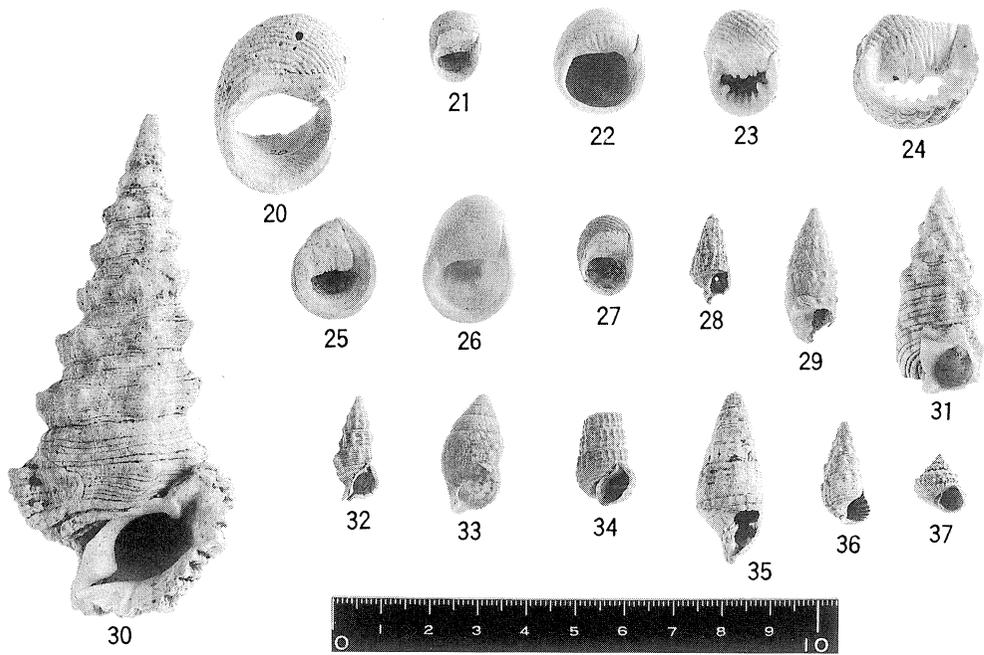
巻貝類等 (2)

上

20. アマガイモドキ
21. イシダタミアマオブネ
22. コシダカアマガイ
23. キバアマガイ
24. フトスジアマガイ
25. アマネブネ
26. ニシキアマオブネ
27. リュウキュウアマガイ
28. ヨコワカニモリ
29. ヒメトウガタカニモリ
30. オニノツノガイ
31. メオニノツノガイ
32. コオニノツノガイ
33. クワノミカニモリ
34. カワアイ
35. マドモチウミニナ
36. リュウキュウウミニナ
37. コンベイトウガイ

下

38. アツソデガイ
39. ゴホウラ
40. ムカシタモトガイ
41. イボソデガイ
42. マガキガイ
43. マガキガイ (幼貝)
44. ネジマガキガイ
45. クモガイ
46. クモガイ (幼貝)
49. スズメガイ
50. フタモチヘビガイ



図版 2 巻貝類等 (2)

巻貝類等 (3)

上

47. ラクダガイ

48. スイジガイ

下

51. ヤナギシボリダカラ

52. ナツメダカラモドキ

53. ハチジョウダカラ

54. ハチジョウダカラ (幼貝)

55. ヤクシマダカラ

56. ヤクシマダカラ (幼貝)

57. ハナマルユキ

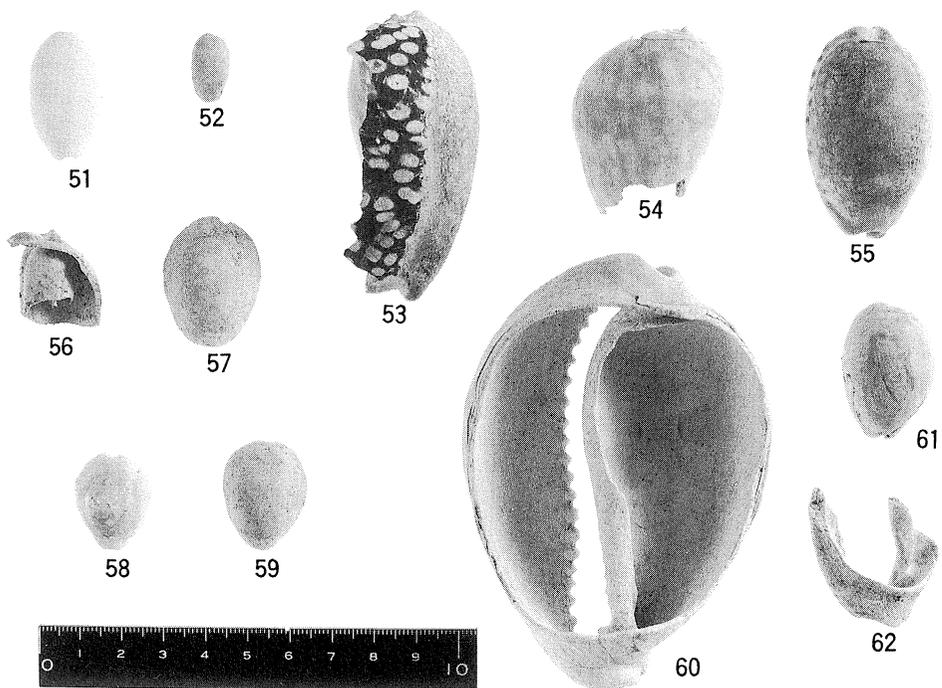
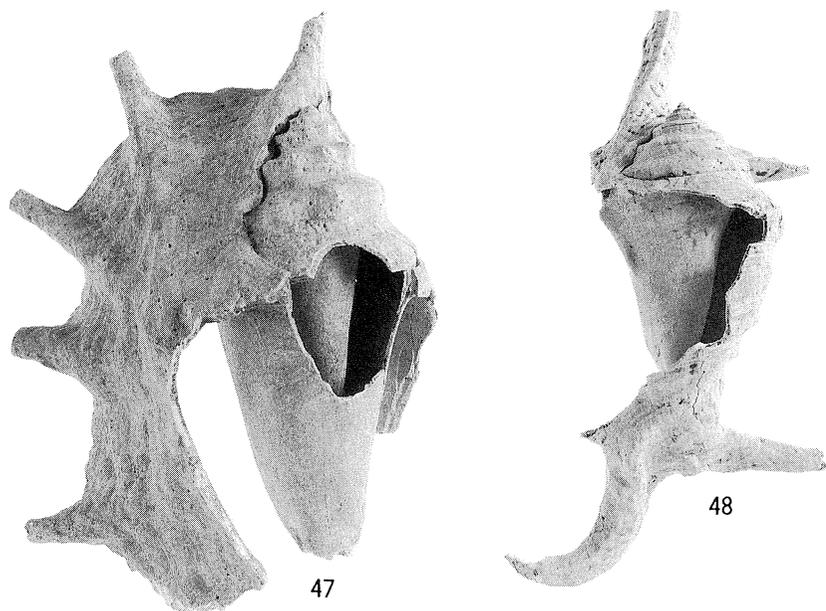
58. キイロダカラ

59. ハナビラダカラ

60. ホシダカラ

61. ホシキヌタ

62. ウミウサギ



図版3 巻貝類等 (3)

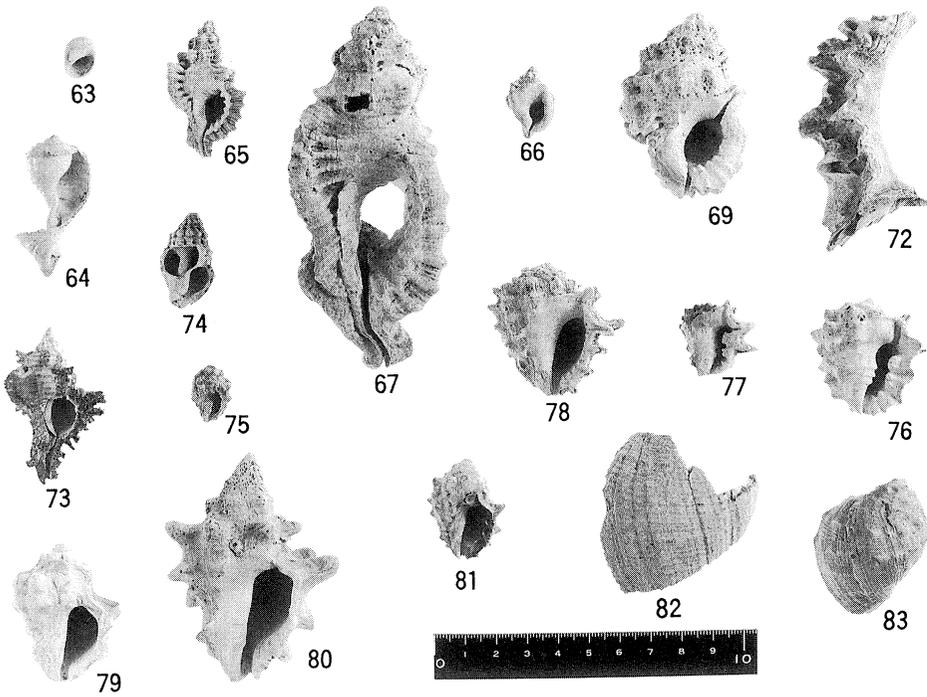
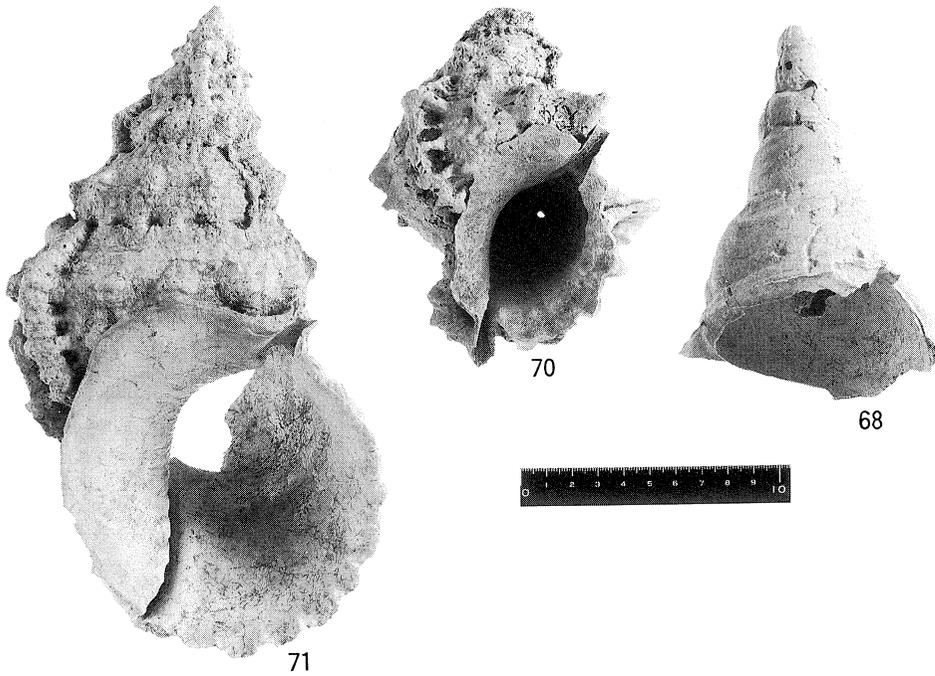
巻貝類等 (4)

上

- 68. ホラガイ
- 70. オオナルトボラ
- 71. シロナルトボラ

下

- 63. トミガイ
- 64. イワカワトキワガイ
- 65. ミツカドボラ
- 66. シオボラ
- 67. フジツガイ
- 69. オキニシ
- 72. テングガイ
- 73. ガンゼキボラ
- 74. コマドボラ
- 75. レイシダマシ
- 76. ムラサキイガレイシ
- 77. シロイガレイシ
- 78. アカイガレイシ
- 79. ツノレイシ
- 80. シラクモ
- 81. テツレイシ
- 82. ホソスジテツボラ
- 83. テツボラ



図版 4 巻貝類等 (4)

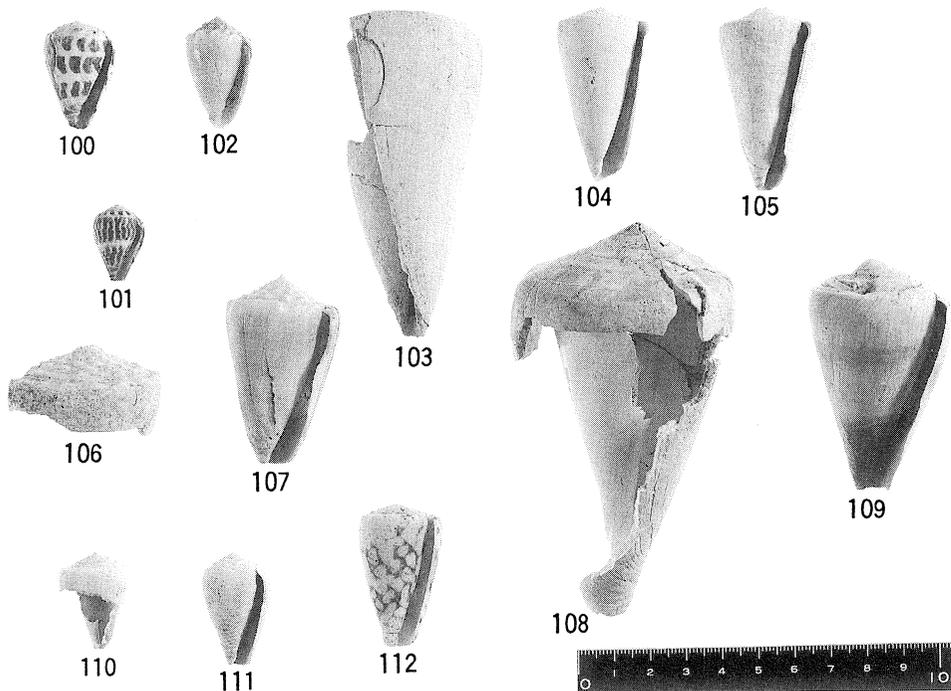
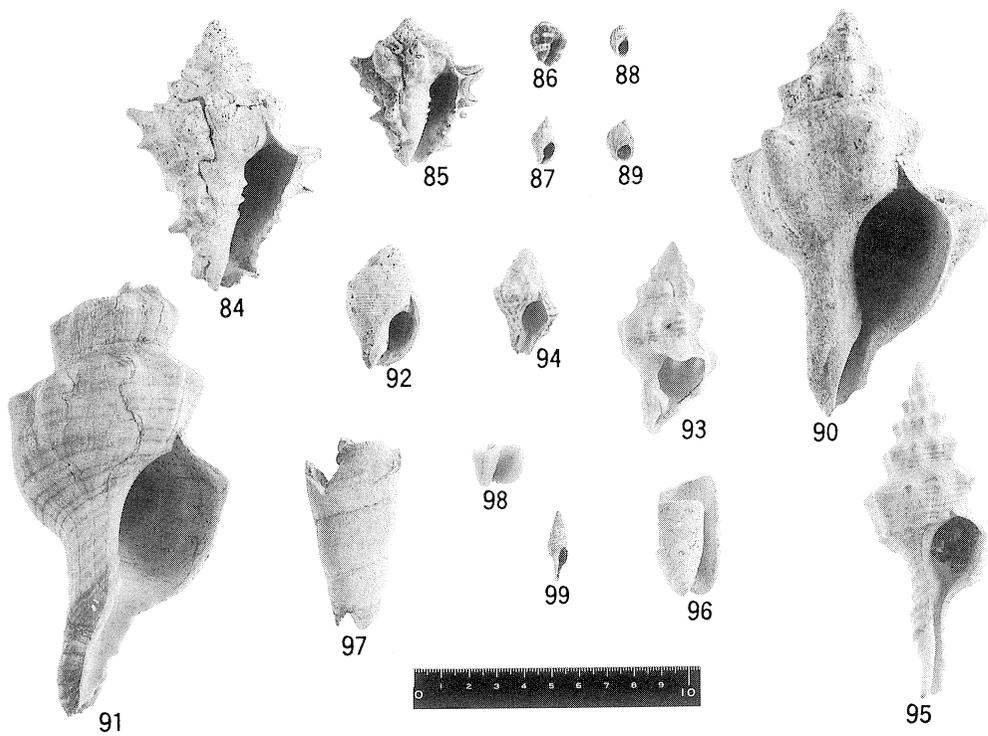
巻貝類等 (5)

上

84. オニコブシ
85. コオニコブシ
86. ノシガイ
87. ホラダマシ
88. アワムシロ
89. アツムシロ
90. イトマキボラ
91. ナガイトマキボラ
92. マルニシ
93. リュウキュウツノマタ
94. ツノマタモドキ
95. チトセボラ
96. ジュドウマクラ
97. チョウセンフデ
98. マルフデ
99. クダボラ

下

100. マダライモ
101. コマダライモ
102. サヤガタイモ
103. オトメイモ
104. キヌカツギイモ
105. ヤセイモ
106. イボカバイモ
107. イボシマイモ
108. カバミナシ
109. ヤナギシボリイモ
110. ハイイロミナシ
111. アラレイモ
112. クロミナシ



図版5 巻貝類等(5)

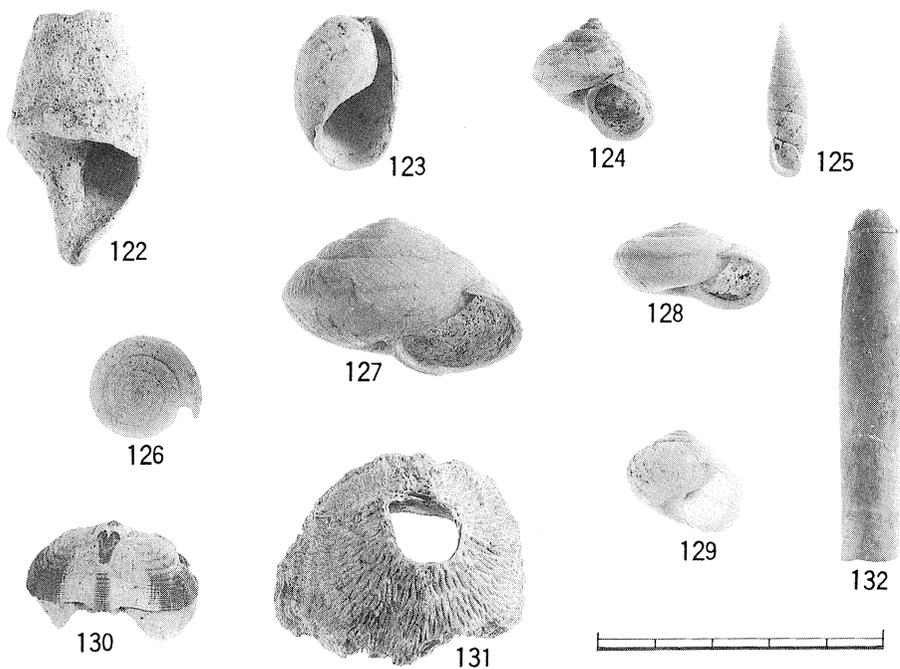
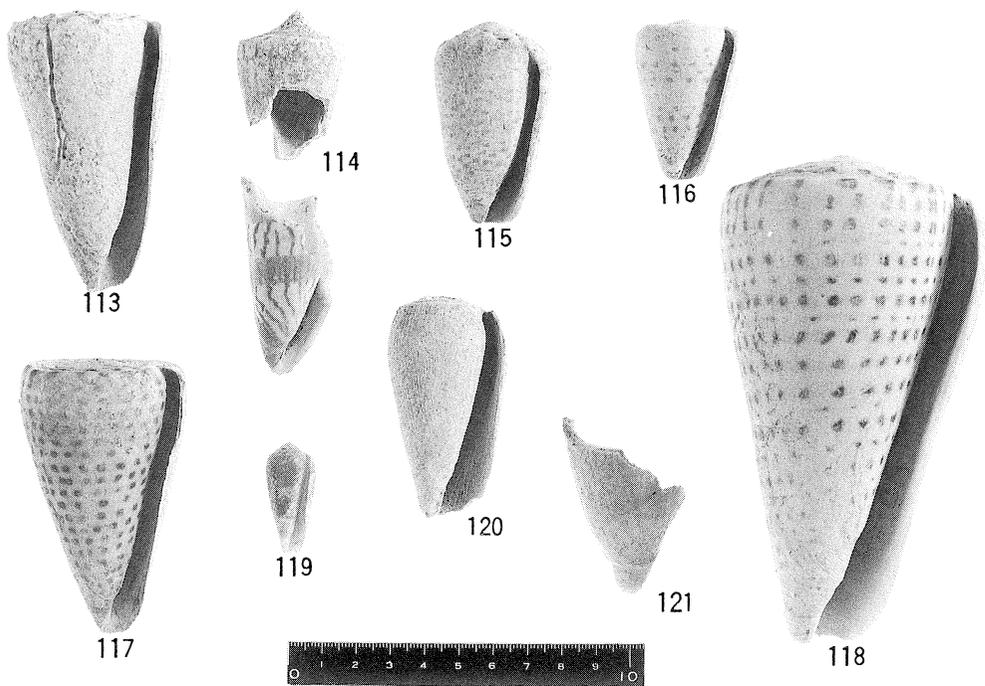
巻貝類等 (6)

上

- 113. ミカドミナシ
- 114. アカシマミナシ
- 115. ゴマファイモ
- 116. クロザメモドキ
- 117. アンボンクロザメ
- 118. クロフモドキ
- 119. アジロイモ
- 120. タガヤサンミナシ
- 121. ニシキミナシ

下

- 122. ウシノツノ
- 123. ナツメガイ
- 124. オキナワヤマトニシ
- 125. ツヤギセル
- 126. オオカサマイマイ
- 127. シュリマイマイ
- 128. パンダナマイマイ
- 129. オキナワウスカワマイマイ
- 130. ヒザラガイ科の一種
- 131. クロフジツボの一種
- 132. パイプウニ



図版6 巻貝類等 (6)

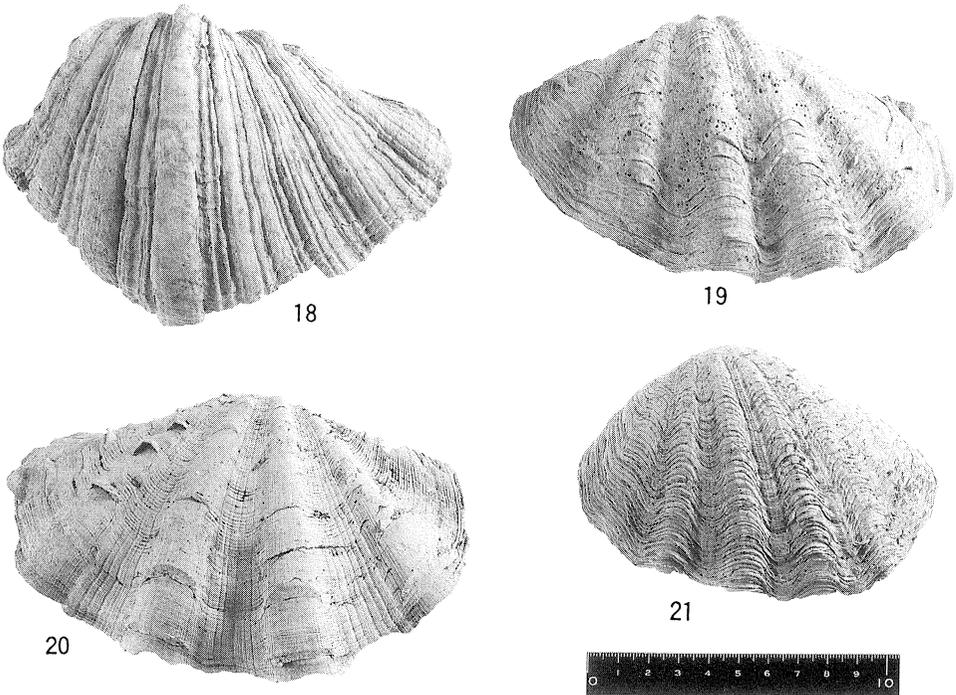
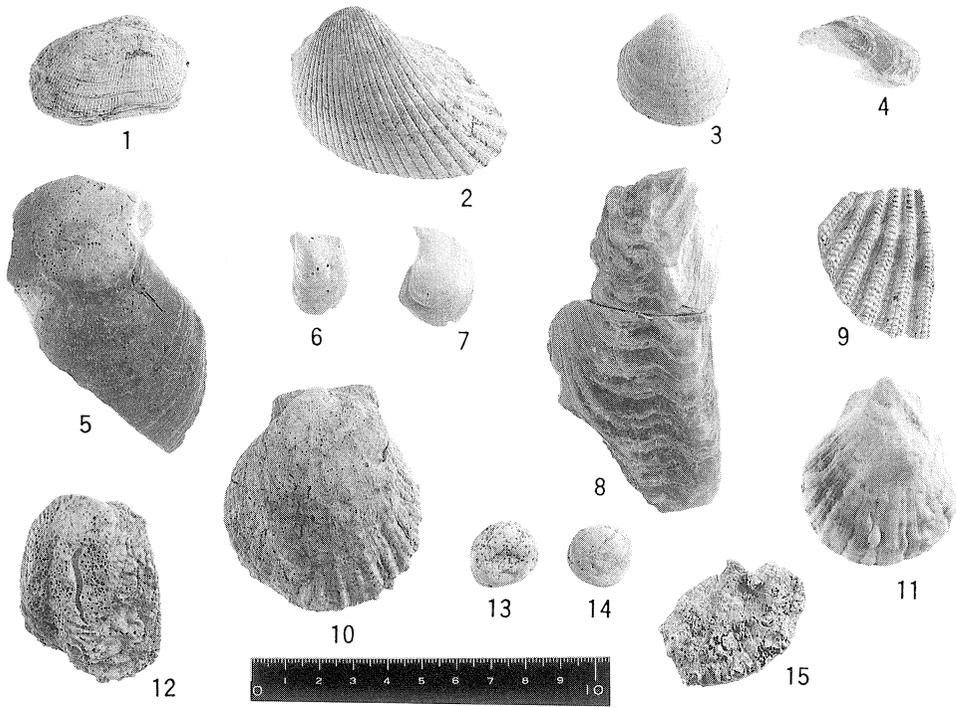
二枚貝類 (1)

上

1. エガイ
2. リュウキュウサルボウ
3. ソメワケグリ
4. リュウキュウヒバリガイ
5. クロチョウガイ
6. ミドリアオリガイ
7. カイシアオリの一種
8. シュモクアオリガイ
9. チサラガイ
10. メンガイ
11. メンガイの一種
12. ケイトウガイ
13. キクザル
14. キクザルの一種
15. カネツケザル

下

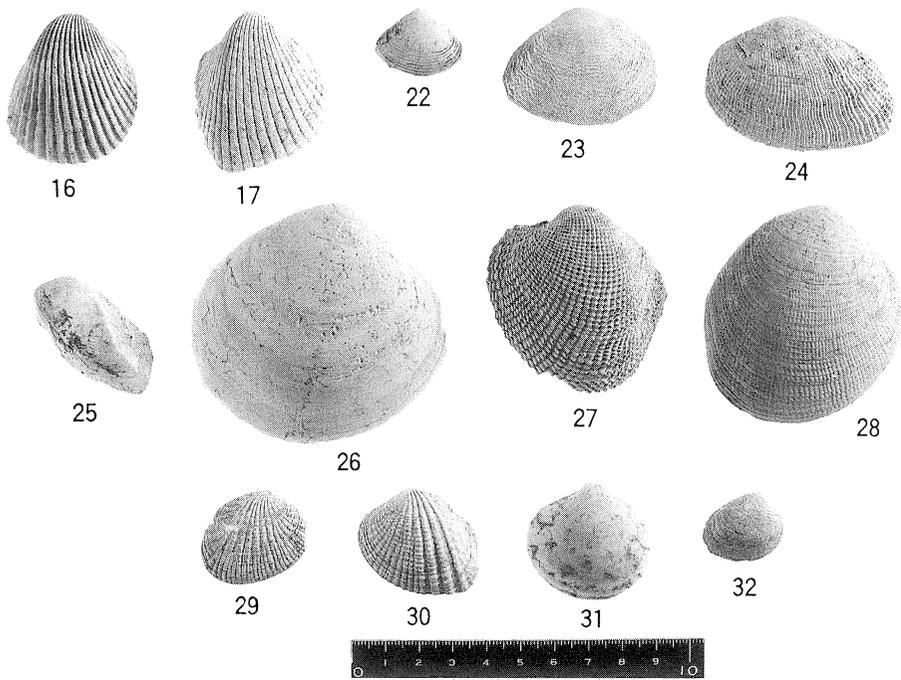
18. シャゴウ
19. シラナミ
20. ヒレジャコ
21. ヒメジャコ



図版7 二枚貝類 (1)

二枚貝類 (2)

16. リュウキュウザルガイ
17. カワラガイ
22. イソハマグリ
23. リュウキュウシラトリガイ
24. リュウキュウマスオ
25. フナガタガイ
26. シレナシジミ
27. アラヌノメガイ
28. ヌノメガイ
29. ホソスジイナミ
30. アラスジケマンガイ
31. マルオミナエシ
32. イオウハマグリ



图版 8 二枚貝類 (2)

